

平成 21 年度

浜松市試掘調査概要

2 0 1 1

浜松市教育委員会

平成 21 年度 浜松市試掘調査概要

目 次

例 言

第 1 部 試掘調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第 2 部 試掘調査報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

第 3 部 試掘・立会調査詳細報告・・・・・・・・・・・・95

- 1 浜名惣社神主屋敷跡・・・・・・・・・・・・96
- 2 岡の平遺跡 3 次調査・・・・・・・・・・・・100
- 3 風呂ノ入古墳群・・・・・・・・・・・・108
- 4 石岡遺跡・・・・・・・・・・・・113
- 5 八反田遺跡・・・・・・・・・・・・121
- 6 田組遺跡・・・・・・・・・・・・124
- 7 里原遺跡・・・・・・・・・・・・132
- 8 半場遺跡・・・・・・・・・・・・138
- 9 田見合遺跡・・・・・・・・・・・・144
- 10 天白遺跡 1 次調査・・・・・・・・・・・・151
- 11 楠木遺跡 1 次調査・・・・・・・・・・・・156

第 4 部 文化財年報・・・・・・・・・・・・・・・・175

例 言

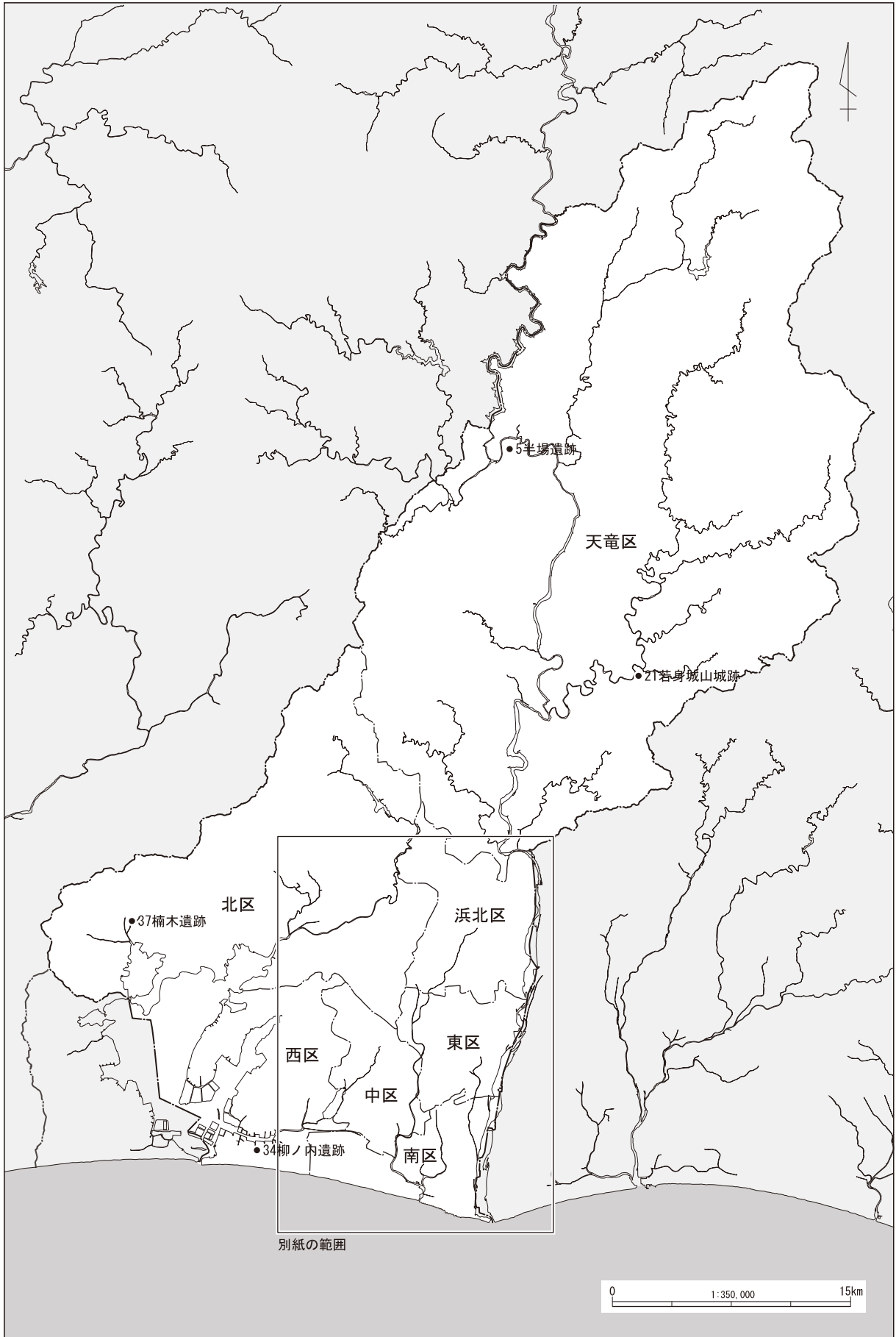
1. 本書は、浜松市教育委員会(平成 19 年度から浜松市文化財課が補助執行)が平成 20 年(2008 年)度から平成 21 年(2009 年)度を実施した市内遺跡試掘調査の概要集である。
2. 試掘調査は、国及び静岡県補助金を得て実施した調査、市単独費で実施した調査、原因者負担で実施した調査があり、本書には工事立会に伴う成果も含めた。
3. 本書は、第 1 部に試掘調査概要、第 2 部に試掘調査報告、第 3 部に試掘・立会調査詳細報告、第 4 部に文化財年報を掲載した。第 1 部の概要は、平成 21 年(2009 年)度を実施した試掘調査、第 2 部の報告は、平成 20 年(2008 年)度から 21 年(2009 年)度を実施した試掘調査の内、報告されていない遺跡についてその概略を掲載した。第 3 部の詳細報告は平成 17 年(2005 年)度から 21 年(2009 年)度を実施した試掘調査や工事立会のうち、特に重要な成果があがっている遺跡について報告を掲載した。第 4 部の文化財年報は、平成 21 年(2009 年)度における浜松市の文化財保護事業の概要を掲載した。
4. 本書の執筆と編集は、浜松市文化財課が行い、文責は文末に記した。
5. 詳細を報告する必要がある試掘調査については、今後出土品等の整理作業を進め、正式報告書を作成する予定である。
6. 本書にかかわる遺跡の調査記録と出土品は、浜松市埋蔵文化財調査事務所で保管している。

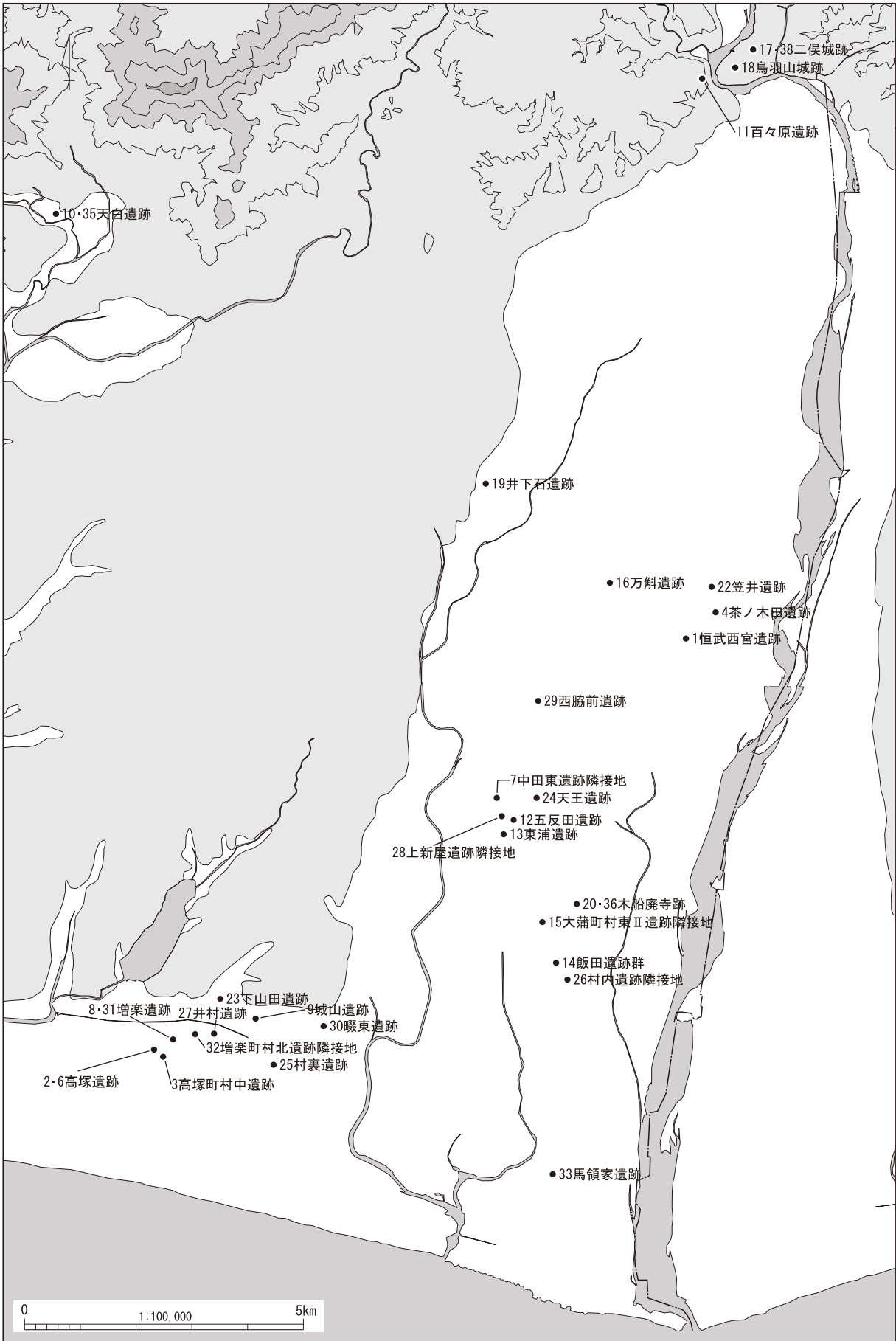
第1部

試掘調査概要

(平成21年度)

1 遺跡位置図





2 試掘調査一覧

年度	No.	遺跡名	所在地		調査面積	掲載ページ	
						概要	位置図
平成 21 年度	21-1	井下石遺跡	浜北区	内野	6 m ²	5	7
	21-2	木船廃寺跡	東区	和田町	6.75 m ²	5	7
	21-3	貴見寺東遺跡	北区	都田町	40 m ²	5	7
	21-4	若身城山城跡	天竜区	春野町	20 m ²	5	7
	21-5	笠井遺跡	東区	笠井町	3 m ²	5	7
	21-6	下山田遺跡	中区	西伊場町	8 m ²	5	7
	21-7	堤町村東遺跡	南区	堤町	4.5 m ²	5	8
	21-8	天王遺跡	東区	天王町	7.5 m ²	5	8
	21-9	村裏遺跡	南区	東若林町	16 m ²	5	8
	21-10	若林町村西遺跡	南区	若林町	25 m ²	5	8
	21-11	村内遺跡隣接地	南区	三和町	20 m ²	5	8
	21-12	井村遺跡	南区	若林町	34 m ²	5	8
	21-13	上新屋遺跡隣接地	東区	中田町	4 m ²	5	9
	21-14	八ツ面遺跡	東区	豊町	4 m ²	5	9
	21-15	尾奈居館跡	北区	三ヶ日町	2 m ²	5	9
	21-16	増楽遺跡	南区	増楽町	32.25 m ²	5	9
	21-17	恒武遺跡群(山の花遺跡)	東区	恒武町	16 m ²	5	9
	21-18	森遺跡	北区	細江町	12 m ²	6	9
	21-19	西脇前遺跡	東区	市野町	6 m ²	6	10
	21-20	御殿山遺跡	東区	笠井町	24 m ²	6	10
	21-21	畷東遺跡	中区	西浅田	8 m ²	6	10
	21-22	増楽遺跡	南区	増楽町	16 m ²	6	10
	21-23	増楽町村北遺跡隣接地	南区	増楽町	92 m ²	6	10
	21-24	馬領家遺跡	中区	領家	12 m ²	6	10
	21-25	柳ノ内遺跡	西区	馬郡町	16 m ²	6	11
	21-26	百々原遺跡	浜北区	於呂	12 m ²	6	11
	21-27	天白遺跡	北区	引佐町	108 m ²	6	11
	21-28	増楽遺跡	南区	増楽町	20 m ²	6	11
	21-29	川久保遺跡	北区	細江町	4 m ²	6	11
	21-30	木船廃寺跡	東区	和田町	12 m ²	6	11
	21-31	楠木遺跡	北区	三ヶ日町	337 m ²	6	12
	21-32	二俣城跡	天竜区	二俣町	60 m ²	6	12
	21-33	新屋遺跡	浜北区	宮口	44 m ²	6	12
	21-34	芝本遺跡	浜北区	於呂	116 m ²	6	12
	21-35	殿道東遺跡	西区	馬郡町	25 m ²	6	12

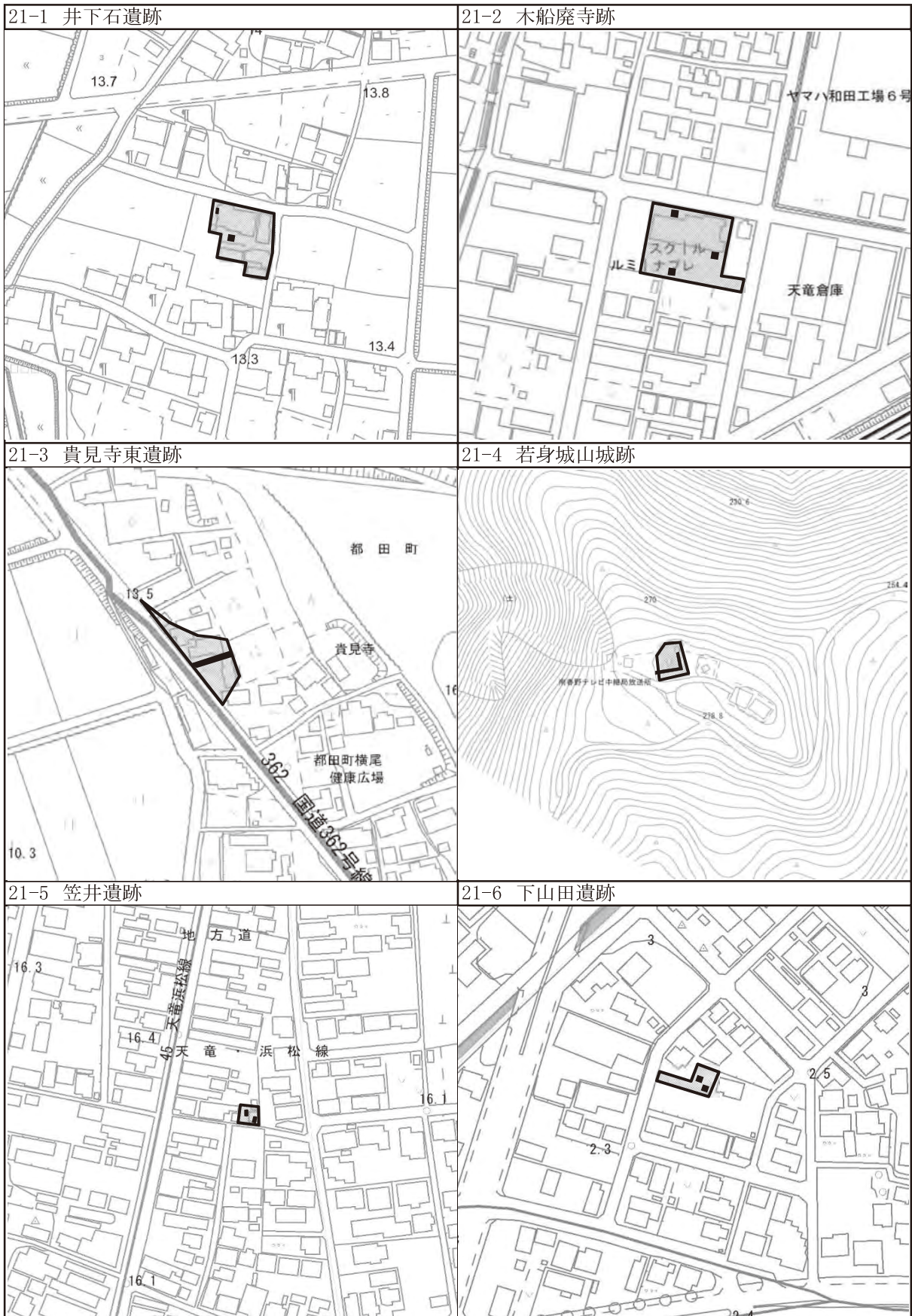
3 遺跡調査概要

凡例 <区分>補助:国庫補助事業
市単:市単独事業

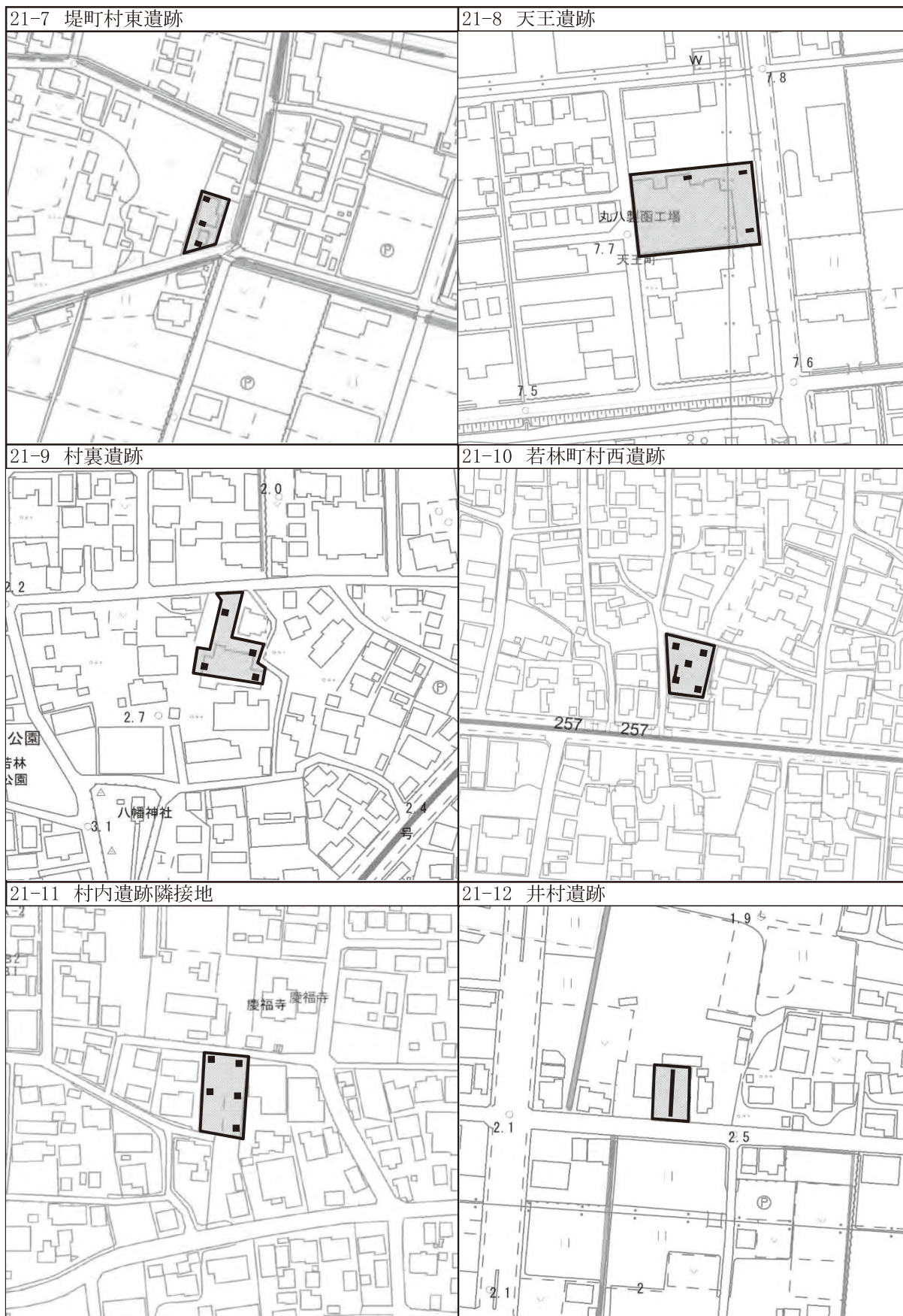
年度	No.	遺跡名	調査原因	遺跡の内容(調査成果)	対処	区分
		所在地	調査月日		報告	担当
平成 21 年度	21-1	井下石遺跡 浜北区内野 1778-1	個人住宅建設 4月13日	鎌倉、室町時代の土器小片が出土した。遺構は検出されなかった。	慎重工事	補助 井口智博
	21-2	木船廃寺跡 東区和田町 315	園舎建設 4月18日	奈良・平安の土器、瓦、戦国期の土器が出土した。小穴と大型の溝を検出した。	本発掘調査	補助 鈴木敏則
	21-3	貴見寺東遺跡 北区都田町 2522	道路新設工事 4月20日	戦国期以降の土器、砥石、銭貨が出土した。土坑と小穴を検出したが、近世以降のものであり、遺跡の範囲外であることが確認された。	遺跡外 範囲変更	先方負担 安藤 憲
	21-4	若身城山城跡 天竜区春野町堀之内 字若身1067-10,12	テレビ中継局建設 4月27日	遺物・遺構とも検出されなかった。城跡の遺構は存在したとしても既に消失していることが確認された。	慎重工事	補助 鈴木一有
	21-5	笠井遺跡 東区笠井町 176-1	個人住宅建設 5月14日	土師器片と近世陶器が出土した。遺構は検出されなかった。遺跡は消失していることが確認された。	慎重工事	補助 井口智博
	21-6	下山田遺跡 中区西伊場町 2568-7	個人住宅建設 5月15日	弥生から奈良時代と戦国期の土器が出土した。遺物包含層と小穴、溝を検出した。	設計変更 慎重工事	補助 井口智博
	21-7	堤町村東遺跡隣接地 南区堤町 4-1	個人住宅建設 5月21日	中世末以降の土器片が出土した。明確な意向は検出されなかった。遺跡の範囲外であることが確認された。	遺跡外	先方負担 鈴木敏則
	21-8	天王遺跡 東区天王町 1985	土地転用 6月9日	遺物・遺構とも検出されなかった。遺跡の範囲外であることが確認された。	遺跡外 範囲変更	補助 鈴木一有
	21-9	村裏遺跡 南区東若林町 1117	集合住宅建設 6月16日	古墳時代と戦国期の土器が出土した。遺物包含層と溝を検出した。ただし、建物予定地は攪乱を受けていた。	慎重工事	補助 井口智博
	21-10	若林町村西遺跡 南区若林町 1151-1、1151-5	宅地造成 6月16日	奈良から鎌倉時代の土器が出土した。溝と小穴を検出した。	設計変更 慎重工事	先方負担 鈴木敏則
	21-11	村内遺跡隣接地 南区三和町 253、254	集合住宅建設 8月3日	弥生から鎌倉時代の土器が出土した。溝、土坑、小穴が検出された。	設計変更 慎重工事	補助 鈴木一有
	21-12	井村遺跡 南区若林町 2644-1	土地転用 8月5日	古墳から鎌倉時代、戦国期の土器が出土した。堅穴住居跡、土坑を検出した。	設計変更 工事立会	補助 井口智博
	21-13	上新屋遺跡隣接地 東区中田町 94-1	集合住宅建設 8月28日	古墳時代の土師器片が出土した。遺物包含層を検出した。	隣接地 慎重工事	補助 井口智博
	21-14	八ツ面遺跡 東区豊町字石原 2815-1、2	個人住宅建設 9月14日	古墳から飛鳥時代の土器が出土した。土坑と遺物包含層を検出した。	設計変更 慎重工事	先方負担 鈴木一有
	21-15	尾奈居館跡 北区三ヶ日町尾奈 1379	個人住宅建設 9月15日	戦国期の土器が出土し、小穴と遺物包含層を検出した。居館の痕跡は確認できなかった。建物予定地は削平を受け、遺跡は消失していた。	工事立会	先方負担 井口智博
	21-16	増楽遺跡 南区増楽町 1647-1、2	市の廃墓工事 10月1日	飛鳥、奈良時代の土器が出土した。遺構は検出できなかった。遺跡は既に消滅していることが確認された。	調整中	先方負担 鈴木敏則
	21-17	恒武遺跡群(山の花遺跡) 東区恒武町 126	市の廃墓工事 10月5日	古墳から奈良時代の土器が出土した。小穴と溝、遺物包含層を検出した。	調整中	先方負担 鈴木敏則

年度	No.	遺跡名	調査原因	遺跡の内容(調査成果)	対処	区分
		所在地	調査月日		報告	担当
平成 21 年度	21-18	森遺跡 北区細江町中川字モリ 5008-1、5008-2、5005-1	集合住宅建設 10月29日	飛鳥から平安時代、戦国期の土器が出土した。遺構は検出されなかった。	隣接地 慎重工事	先方負担 鈴木敏則
	21-19	西脇前遺跡 東区市野町 491-2、492	個人住宅建設 11月19日	弥生、奈良、鎌倉時代の土器が出土した。遺物包含層が検出された。	設計変更 工事立会	補助 井口智博
	21-20	御殿山遺跡 東区笠井町 1051	道路建設 11月12、13日	鎌倉時代から戦国期の土器が出土し、溝を検出した。古代以前の遺構・以降がないことから、遺跡の範囲外であることが確認された。	遺跡外 範囲変更	先方負担 鈴木敏則
	21-21	曙東遺跡 中区西浅田 1097	個人住宅建設 12月1日	古墳、奈良、鎌倉時代の土器が出土した。遺物包含層を検出した。	設計変更 慎重工事	補助 井口智博
	21-22	増楽遺跡 南区増楽町 1496-1	集合住宅建設 12月4日	古墳、奈良時代、戦国期の土器が出土した。小穴を検出した。建築予定地は攪乱を受け、遺跡は消失していた。	慎重工事	補助 井口智博
	21-23	増楽町村北遺跡隣接地 南区増楽町 2551	集合住宅建設 12月3日	古墳から平安時代の土器が出土した。竪穴住居跡、溝、土坑、遺物包含層を検出した。	協議中 範囲変更	補助 鈴木敏則
	21-24	馬領家遺跡 中区領家 323-1	集合住宅建設 12月7日	戦国期以降の土器が少数出土した。遺構は検出されなかった。遺跡の範囲外であることが確認された。	遺跡外 範囲変更	補助 井口智博
	21-25	柳ノ内遺跡 西区馬郡町 5455-1、2、3	個人住宅建設 12月7日	奈良から鎌倉時代の土器が出土した。井戸と溝を検出した。	設計変更 慎重工事	補助 鈴木敏則
	21-26	百々原遺跡 浜北区於呂 4201-2	集合住宅建設 12月14日	遺物、遺構とも確認されなかった。遺跡の存在は確認できなかった。	慎重工事	先方負担 鈴木敏則
	21-27	天白遺跡 北区引佐町井伊谷 1140-4	個人住宅建設 12月14～18日	古墳時代と戦国期の土器が出土した。方形周溝墓と小穴を検出した。	本発掘調査	補助 井口智博
	21-28	増楽遺跡 南区増楽町地内	労働会館 建替工事 12月21日	奈良から鎌倉時代の土器が出土した。小穴を検出した。建物予定地は攪乱を受け、遺跡は消失していた。	慎重工事	先方負担 鈴木敏則
	21-29	川久保遺跡 北区細江町 4921-1、4921-2	個人住宅建設 1月25日	奈良時代と戦国期の土器が出土した。遺物包含層を検出した。	設計変更 慎重工事	先方負担 鈴木敏則
	21-30	木船廃寺跡	工場跡地開発 2月1日	奈良時代の土器が出土した。土坑もしくは溝、河川、遺物包含層を検出した。	協議中	補助 鈴木一有
	21-31	楠木遺跡	遺跡現状確認 2月16～23日	奈良～平安時代の大量の瓦、土師器、須恵器、灰釉陶器、鎌倉時代の山茶碗、戦国期以降の陶器が出土した。柱穴と土坑を検出した。	現状保存	補助 大野勝美
	21-32	二俣城跡	史跡現状確認 3月1～12日	二の丸と蔵屋敷との間にある堀切の底部の形状と、本丸中仕切り門を構成する礎石と礎石の抜き取り穴を4つ確認した。また、下層に弥生時代の遺構・遺物を検出した。	現状保存	補助 井口智博
	21-33	新屋遺跡	個人住宅建設 3月23日	灰釉陶器の小片は出土したが、遺構は検出されなかった。	慎重工事	市単 鈴木敏則
	21-34	芝本遺跡	道路新設 3月26日	遺物、遺構とも確認されなかった。	遺跡外	先方負担 鈴木一有
21-35	殿道東遺跡	個人住宅建設 3月29日	表土中に遺物の散布は認められるが、遺構・遺物は検出されなかった。	慎重工事	先方負担 井口智博	

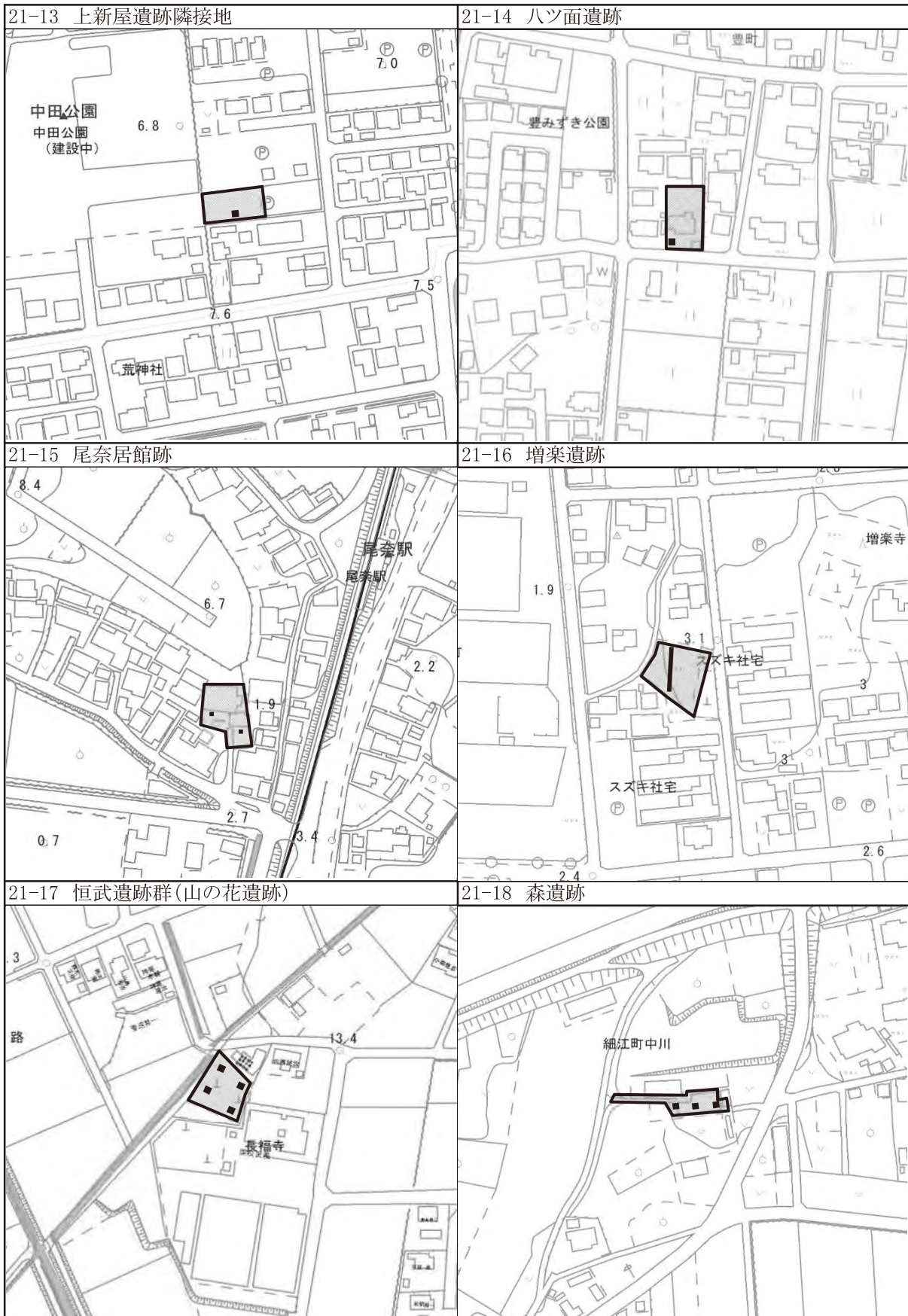
4 調査位置図①



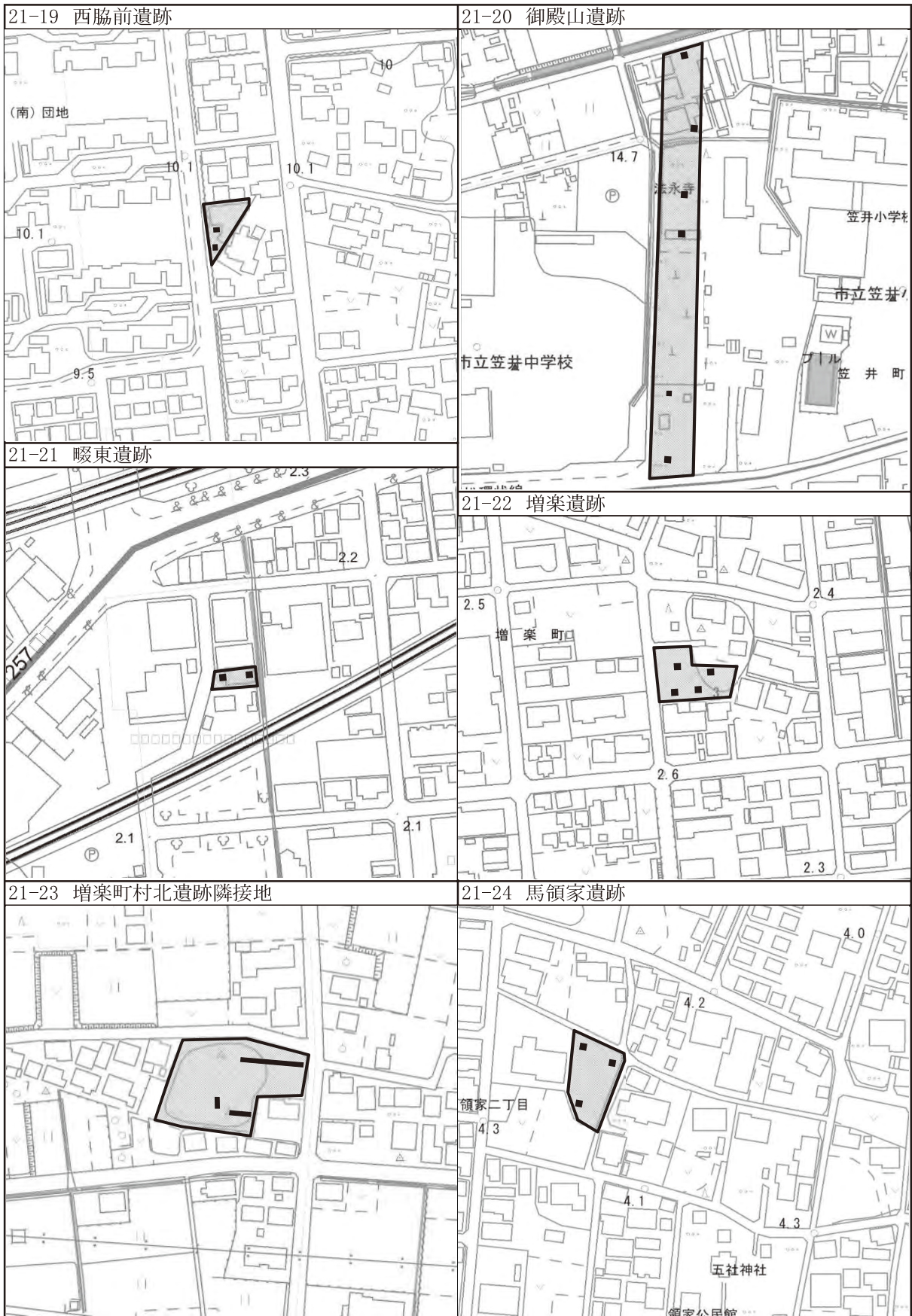
調査位置図②



調査位置図③



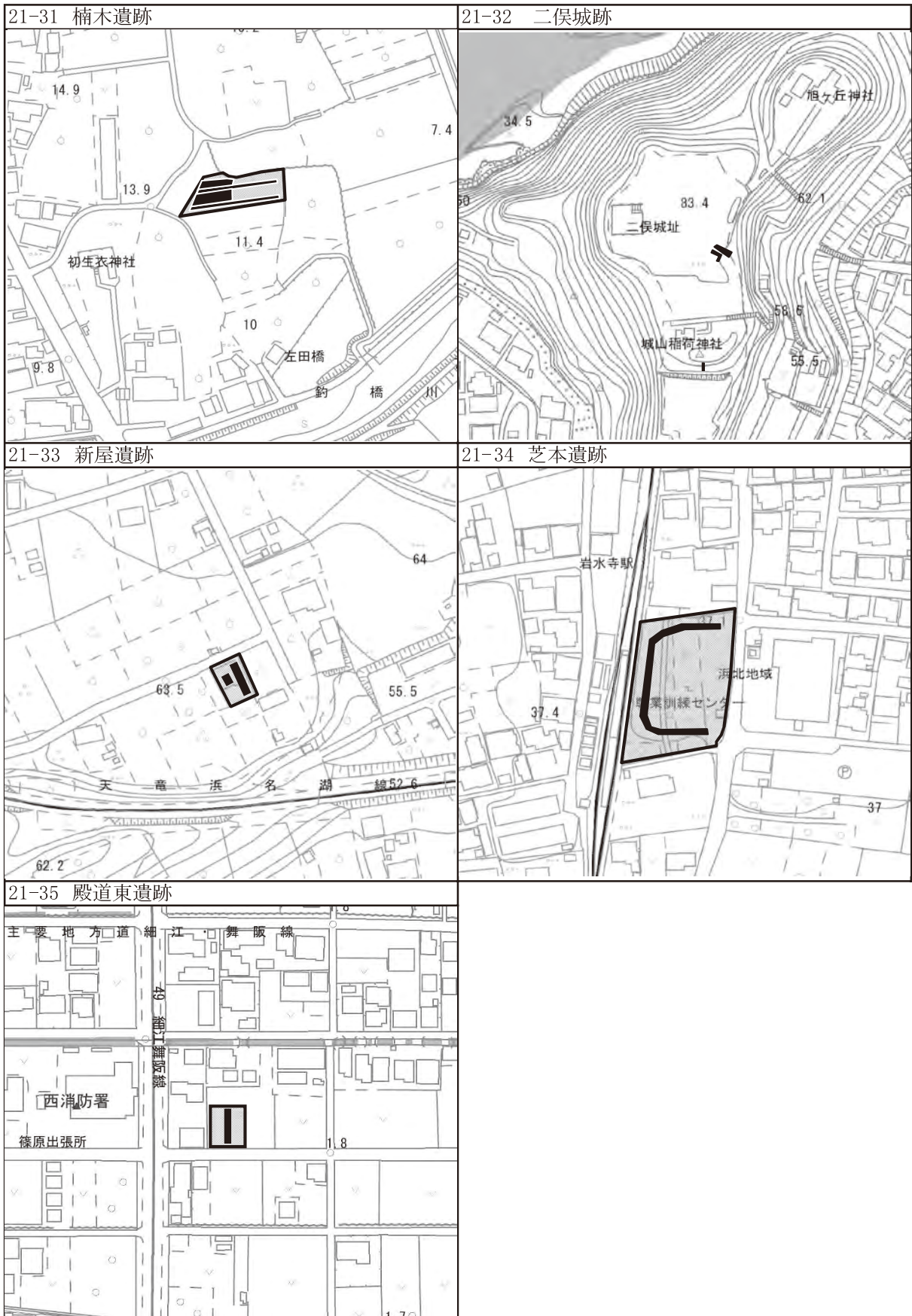
調査位置図④



調査位置図⑤



調査位置図⑥



5 試掘調査一覧(工事立会)

年度	No.	遺跡名	工事内容	立会結果	位置図
		所在地	調査月日		担当
平成 18 年度	18-1	城山遺跡 東若林町地内	サインポール建設・水道管理設 4月7日	2箇所とも遺跡内。発掘調査報告書刊行。	p19 鈴木敏則
	18-2	風呂ノ入古墳群 細江町小野地内	みかん畑開削 4月17・18日	上層からすべて砂層、遺構・遺物は確認できず。須恵器2点(杯蓋、広口壺)敷地内に須恵器破片多数散布。	p19 鈴木一有
	18-3	椋木遺跡 植松町地内	集合住宅建設 4月25日	遺跡の範囲外。	p19 鈴木敏則
	18-4	恒武遺跡群 貴平町1605	浄化槽設置 4月26日	遺跡の範囲外。	p19 佐藤由紀男
	18-5	学園内古墳群(千人塚古墳群) 東区有玉西町816	下水道管理設 5月17日	1号墳の後円部東側周溝の外側肩部。	p19 鈴木敏則
	18-6	東若林遺跡 東若林町地内	住宅建設 5月30日	7世紀から16世紀の遺物を採集。	p19 鈴木敏則
	18-7	梶子遺跡 南伊場町地内(JR浜松工場内)	体育館建設 6月17日	旧流路内の古代の堆積層(伊場の大溝IV・V層相当の包含層)を確認。	p20 鈴木敏則
	18-8	梶子遺跡 南伊場町地内(JR浜松工場内)	架台移設 9月19日	弥生時代から中世の包含層を確認。	p20 鈴木敏則
	18-9	殿畑遺跡 三ヶ日町三ヶ日253-2	個人住宅建設 10月2日	遺跡の範囲外。	p20 村松聡一郎
	18-10	恒武遺跡群 恒武町地内	下水道管理設 10月2日	包含層及び遺構を確認、詳細時期は不明。	p20 佐藤由紀男
	18-11	天王遺跡 天王町地内	下水道管理設 10月2日	遺跡の範囲外。	p20 佐藤由紀男
	18-12	梶子遺跡 南伊場町地内(JR浜松工場内)	架台移設 10月16日	弥生時代から中世の包含層を確認。	p20 鈴木敏則
	18-13	角江遺跡 入野町南平地内	下水道管理設 10月30日	遺跡の範囲外。	p21 鈴木敏則
	18-14	高塚遺跡 高塚町地内	下水道管理設 10月30日	遺構・遺物認められず。	p21 鈴木一有
	18-15	鳥居松遺跡 神田町鳥居松398	共同住宅建設 11月2日	遺跡の範囲内。7・8世紀の土坑(井戸)を検出。須恵器と土師器が出土。	p21 鈴木敏則
	18-16	天王遺跡 天王町地内	下水道管理設 11月2日	遺構・遺物認められず。	p21 村松聡一郎

年度	No.	遺跡名	工事内容	立会結果	位置図
		所在地	調査月日		担当
平成 18 年度	18-17	城山遺跡 若林町地内	災害復旧 11月10日	遺跡の範囲内。8世紀の包含層を検出(須恵器・土師器出土)。	p21 鈴木敏則
	18-18	天王遺跡 天王町地内	下水道カンマ移設 11月24日	遺構・遺物認められず。	p21 村松聡一郎
	18-19	梶子遺跡 南伊場町地内(JR浜松工場内)	レール延長 12月11日	GL下1.8mにコンクリート基礎があり土層の確認はできず。	p22 鈴木敏則
	18-20	角江遺跡 入野町南平地内	下水道管理設 1月10日	八柱神社南側で古代の溝を確認。	p22 鈴木敏則
	18-21	石岡遺跡 細江町三和232-2	浄化槽設置 1月9日	古墳時代中期の堅穴住居1軒・古墳時代中期及び古代と推定される小穴13基(ほとんどが古墳時代中期)を検出。古墳時代中期の土師器と古代の須恵器出土。	p22 村松聡一郎
	18-22	東前遺跡 志都呂町地内	河川ボックス・下水道管理設 1月31日	遺跡の範囲内。包含層を確認。4・7・8・13世紀の土器類出土。	p22 鈴木敏則
	18-23	高塚遺跡 高塚町地内	下水道管理設 2月1日	遺構・遺物認められず。	p22 鈴木一有
	18-24	東前遺跡 志都呂町地内	下水路建設 2月1,2日	鎌倉時代から近世の土坑を試掘範囲全体で検出。遺物包含層から古式土師器(古墳時代前期)、須恵器・土師器(飛鳥から奈良時代)、山茶碗(鎌倉時代)出土。	p22 鈴木敏則
18-25	宝平遺跡 水窪町奥領家3904-3	浄化槽設置 3月7日	遺構・遺物認められず。	p23 佐藤由紀男	
平成 19 年度	19-1	田尻古墳群 南区法枝町479-1	個人住宅建設 4月9日	遺跡の範囲外。	p23 井口智博
	19-2	大門西遺跡 浜北区根堅	住宅建設 5月10日	遺構・遺物認められず。	p23 鈴木一有
	19-3	村裏遺跡 南区東若林町1204-3他	建物解体 5月22日	遺跡の範囲外。	p23 井口智博
	19-4	田見合遺跡 東区市野町2519付近	排水路建設 7月2日	遺跡の範囲外。	p23 井口智博
	19-5	大島遺跡 西区高塚町地内	下水道管理設 11月7日	遺跡の範囲外(立ち会い地点は湿地内)。	p23 鈴木敏則
	19-6	宮竹野際遺跡 東区上西町地内	マンション建設 11月15日	遺跡の範囲外。	p24 井口智博
	19-7	高塚遺跡 西区高塚町地内	下水道管理設 11月29日	遺跡の範囲外(湿地内)。	p24 鈴木敏則

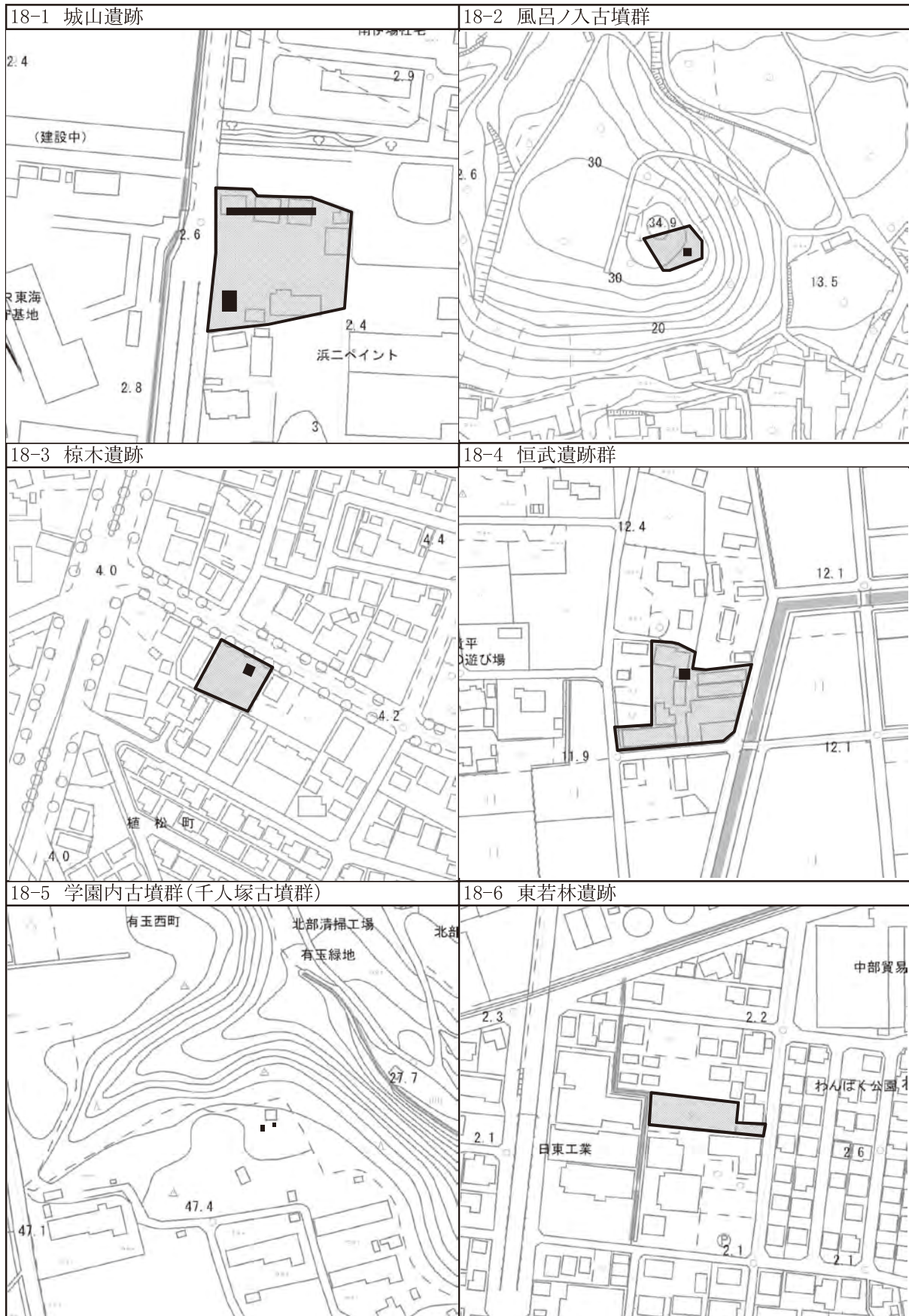
年度	No.	遺跡名	工事内容	立会結果	位置図
		所在地	調査月日		担当
平成 19 年度	19-8	大島遺跡 南区高塚町地内	下水道管理設 12月7日	立ち会い地点は湿地部。土師器小片が確認されたことから、周辺には遺跡が存在する可能性が高い。	p24 鈴木敏則
	19-9	梶子遺跡 中区南伊場町6-4	社宅解体 12月19日	遺跡内。伊場大溝内。4号棟東側は、伊場大溝の北側か。下層に弥生後期の遺構が存在。	p24 鈴木敏則
	19-10	大島遺跡 西区高塚町地内	下水道管理設 1月17日	遺跡内か？包含層(土師器小片・炭化物・焼土を含む)を確認。古代か？	p24 鈴木敏則
	19-11	梶子遺跡 中区南伊場町6-5他	社宅解体 1月21日	遺跡内。中世前半、古代、弥生時代中後期・後期の包含層を確認。伊場大溝覆土(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層・Ⅶ層又はⅧ層下層)を確認し、Ⅶ層若しくはⅧ層下層を確認した。	p24 鈴木敏則
	19-12	梶子遺跡 中区南伊場町6-6	社宅解体 1月30日	遺跡内。中世・古代(?)・弥生時代の包含層2枚を確認。古代の遺構検出面は弥生時代包含層上面である。	p25 鈴木敏則
	19-13	鳥居松遺跡隣接地 中区森田町地内	上下水道管理設 1月22日・2月5日	掘削は盛土の範囲内。	p25 鈴木一有
	19-14	鳥居松遺跡隣接地 中区森田町地内	下水道管理設 2月1日	遺跡内か？弥生時代包含層から弥生土器小片が出土。明確な遺構は確認できなかったが、黒色土層(基盤層)の標高は、1次調査地点と大差なく、遺跡内と推定。	p25 小粥良和
	19-15	北平経塚 北区三ヶ日町都筑1122-1他	店舗建設 2月5日	遺跡の範囲外。	p25 井口智博
19-16	梶子遺跡 中区南伊場町地内(市道101号線)	ガス管理設 2月27日	遺跡内。弥生時代の方形周溝墓周溝、古代包含層、中世の地境溝を確認。	p25 鈴木敏則	
平成 20 年度	20-1	上新屋遺跡 東区上新屋町(市道上新屋27号線内)	下水道管理設 4月3・7・16日	遺跡の境界。古墳・奈良時代、中世の包含層・溝を確認。西ほど遺物密度が濃い傾向有り。	p25 井口智博
	20-2	村裏遺跡 南区東若林町地内	個人住宅建設 5月9日	遺跡内。平安時代の遺構を確認し、遺構内から灰釉陶器片が出土。	p26 井口智博
	20-3	森西遺跡 東区天竜川町地内	調整池建設 5月19日	微量の細片化遺物を確認。明確な遺物包含層は確認できず。掘削工事は包含層上面で留まるため、遺跡への影響は無い。	p26 井口智博
	20-4	川久保遺跡 北区細江町中川4926-2	浄化槽埋設 6月10日	遺跡の範囲外？土器微細片を含む土層を確認。河川改修時の調査成果を参考にすると、遺跡の範囲外となる可能性が高い。	p26 川江秀孝
	20-5	増楽遺跡 南区高塚町地内	社宅解体 6月16日	遺跡内。奈良・鎌倉時代、中世後半の包含層を確認。奈良時代の遺物が多い。	p26 鈴木敏則
	20-6	上新屋遺跡 東区中田町426	下水道管理設 6月25・27日	遺跡内。7～8世紀の包含層、中世と思われるピットを確認。	p26 鈴木敏則
	20-7	上新屋遺跡 東区上新屋町地内	下水道管理設 6月20日・7月8日	遺跡内か？平安時代の包含層と想定しえる層を確認。	p26 大野勝美

年度	No.	遺跡名	工事内容	立会結果	位置図
		所在地	調査月日		担当
平成 20 年度	20-8	大塚古墳群 中区住吉五丁目地内	宅地造成 7月1日	遺跡内(推定大塚3号墳)。墓道と思われる溝を確認。出土遺物は無いが、古墳時代後期～終末期と推定。	p27 鈴木一有
	20-9	田見合遺跡 東区市野町2565-1	擁壁設置 7月11・12日	遺跡内。弥生時代後期前半～後半の遺物包含層を確認(夥しい量の土器・木片・焼土片・木片・炭化物を多く含む)。溝・大坑などの大型遺構の密集を確認。	p27 鈴木敏則
	20-10	梶子遺跡 中区南伊場町地内(JR浜松工場内)	下水道管理設 7月22・23日	遺跡内。古墳・奈良・鎌倉時代の包含層と梶子遺跡6次調査で検出した溝跡の延長部分を確認。	p27 井口智博
	20-11	下山田遺跡 中区西伊場町地内	道路側溝整備 9月17日	遺構・遺物認められず。	p27 井口智博
	20-12	鳥居松遺跡 中区森田町地内	水道管理設 10月14日	遺跡内と推定。立会箇所全体が伊場大溝の流路内に含まれる可能性が高い。しかし、攪乱が著しく、明言は避ける。	p27 井口智博
	20-13	下山田遺跡 中区西伊場町地内	道路側溝整備 10月14日	遺構・遺物認められず。	p27 井口智博
	20-14	根本山尾根古墳群隣接地 北区細江町気賀	工場用地造成 10月14日	遺構・遺物認められず。	p28 大野勝美
	20-15	百々原遺跡隣接地 天竜区渡ヶ島221	診療所建設 11月4日	攪乱・盛土が行われ、遺跡があったとしても、消滅したと推定。	p28 鈴木敏則
	20-16	茶ノ木田遺跡 東区恒武町842他	調整池建設 11月13日	遺構・遺物認められず。	p28 井口智博
	20-17	本坂関所跡 北区三ヶ日町本坂地内	市道拡幅 1月9日	遺構・遺物認められず。	p28 井口智博
	20-18	宮竹野際遺跡 東区和田町地内	水道管敷設 1月13日	遺跡の範囲内。古墳時代後期・奈良時代の遺物包含層を確認(須恵器出土)。	p28 井口智博
	20-19	千人塚古墳群 東区有玉西町816	三方原学園本館建設 3月4日	遺構・遺物認められず。	p28 県文化課
20-20	正楽寺遺跡・白山古墳群 北区引佐町井伊谷地内	祈祷者待機施設建設 3月24日	遺構・遺物認められず。	p29 鈴木一有	
平成 21 年度	21-1	恒武西宮遺跡 東区貴平町1697	倉庫建設 4月8日	表土層のみの掘削で、遺跡の詳細は不明。	p29 井口智博
	21-2	国方遺跡 西区篠原町地内	集合住宅建設 4月10日	表土層のみの掘削で、遺跡の詳細は不明。	p29 鈴木一有
	21-3	ウズカ山貝塚 北区三ヶ日町大崎1300-1	個人住宅増築 4月22日	遺構・遺物認められず。	p29 井口智博

年度	No.	遺跡名	工事内容	立会結果	位置図
		所在地	調査月日		担当
平成 21 年度	21-4	鳥居松遺跡 中区神田町383-1	店舗建設 5月13日	水田耕作層であり、遺物も確認できず。	p29 鈴木敏則
	21-5	増楽町村北遺跡 南区増楽町2551	集合住宅建設 5月13日	遺構・遺物を確認。	p29 鈴木敏則
	21-6	上大瀬遺跡 東区大島町地内	下水道管理設 5月20日	遺構・遺物認められず。	p30 井口智博
	21-7	浜松城跡 中区元城町49-2	4級水準点設置 7月9日	遺跡内、瓦出土。	p30 鈴木敏則
	21-8	市野遺跡群 東区市野町974	個人住宅建設 7月23日	掘削が浅く、遺跡の埋没状況は不明。かわらけ出土。中世か？	p30 井口智博
	21-9	木船廃寺跡 東区和田町294	集合住宅建設 8月1日	奈良時代の須恵器・瓦出土。近世の層まで掘削。奈良時代の遺構面は保護されている。	p30 鈴木一有
	21-10	仮屋坂遺跡 西区伊左地町3768	個人住宅建設 8月4日	遺構・遺物認められず。	p30 井口智博
	21-11	将監名遺跡 東区将監町34-1	集合住宅建設 8月8日	遺物包含層を確認(奈良・平安時代の須恵器、平安・鎌倉時代の山茶碗出土)。西隣の労災病院内では、弥生時代の包含層が確認されているが、その深さまで掘削を行っていないため、弥生時代の包含層の広がり不明。	p30 鈴木一有
	21-12	後之遺跡 西区深萩町字後之191-1	個人住宅建設 8月10日	遺構・遺物認められず。	p31 鈴木敏則
	21-13	浜松城跡 中区元城町214-10	ビル解体 8月11日	遺構は確認されず。瓦・陶器が出土。	p31 鈴木敏則
	21-14	和泉平Ⅱ遺跡 天竜区春野町和泉平横久保840-7	無線基地局建設 8月19日	遺跡の範囲外。	p31 鈴木敏則
	21-15	西脇遺跡 西区志都呂町1569-1東(志都呂103号線)	下水道管理設 10月1日	包含層や遺構が存在したとしても、すでに消滅したと推定。	p31 鈴木敏則
	21-16	服織神社境内遺跡 東区豊町2494-5	浄化槽設置 10月26日	中世後半？の溝状遺構・小穴を検出。包含層は耕作等により消滅。山茶碗・かわらけ・内耳鍋・羽付釜・播鉢が出土。遺跡の中心は立会地点の西側と推定。	p31 鈴木敏則
	21-17	馬郡観音堂跡隣接地 西区馬郡町地内	水道管理設 10月27日	遺構・遺物認められず。	p31 鈴木一有
	21-18	柳ノ内遺跡 西区馬郡町地内	水道管理設 11月2日	攪乱が著しく、遺跡は消滅している。遺構・遺物認められず。	p32 鈴木敏則
21-19	服織神社境内遺跡 東区豊町2494	浄化槽設置 11月12日	遺跡内。明確な遺物包含層を確認。山茶碗・山皿・内耳鍋・羽付釜・かわらけ・陶器・土錘・砥石が出土(鎌倉～戦国時代)。溝や小穴などの遺構を確認。	p32 井口智博	

年度	No.	遺跡名	工事内容	立会結果	位置図
		所在地	調査月日		担当
平成 21 年度	21-20	広岡遺跡 北区細江町102-3	個人住宅建設 11月18日	遺跡内。広岡遺跡のほぼ中心部にあたるが、掘削が浅いことや悪天候による湧水により、遺跡の埋没状況は明確でない。掘削面下層から須恵器が出土。包含層は存在すると推定。	p32 井口智博
	21-21	万斛遺跡 東区中郡町字橋爪東166	工場建設 11月24日	遺跡の縁辺部。鎌倉時代の山茶碗・土師器片が出土。遺物包含層は確認できず。	p32 鈴木敏則
	21-22	大山寺旧境内遺跡 中区大山町地内	個人住宅建設 11月26日	遺跡の縁辺部。16世紀頃の播鉢・青白磁表採。土坑を確認。	p32 大野勝美
	21-23	西脇前遺跡 東区市野町491-2他	住宅建設 11月30日	遺物包含層を確認。土師器片や炭化物を多く含む。	p32 鈴木敏則
	21-24	国方遺跡 西区篠原町21642-2	個人住宅建設 12月8日	鎌倉時代・室町時代後期の山茶碗・常滑甕片出土。	p33 鈴木敏則
	21-25	浜松城跡 中区元城町100-2他	公園駐車場整備 11月26日12月3,8日	盛土・攪乱内のみ掘削。	p33 鈴木敏則
	21-26	半場遺跡 天竜区佐久間町半場地内	農道建設 1月8日	遺跡の範囲外。遺構・遺物認められず。	p33 鈴木敏則
	21-27	笹岡古城跡 天竜区二俣町二俣481他	天竜区役所建設 1月8日	遺構・遺物認められず。	p33 鈴木敏則
	21-28	釣古墳群 北区三ヶ日町釣413-22	個人住宅建設 1月15日	遺構・遺物認められず(西山古墳西側の畑にて、7世紀代の須恵器を表採)。	p33 井口智博
	21-29	殿畑遺跡 北区三ヶ日町三ヶ日216-1他	鍼灸接骨院建設 2月8日	遺跡内。縄文時代晩期・弥生時代後期(主体)の土器が出土。基盤層直上で焼土が確認され、弥生時代後期の堅穴住居が存在する可能性が高い。	p33 鈴木敏則
	21-30	殿畑遺跡 北区三ヶ日町三ヶ日216-1他	排水設備工事 2月24日	遺跡内。明確な遺物包含層を確認。縄文時代晩期・弥生時代後期(主体)の土器が多数出土。掘削範囲が狭く遺構は確認できなかったが、全体が堅穴住居内の可能性もある。	p34 井口智博
	21-31	角江遺跡 西区入野町16102-7	店舗建設 3月9日	遺跡の縁辺部。幅3m以上の中世の溝を確認。覆土からは、弥生時代中期中葉と弥生時代中後期の遺物が出土。	p34 鈴木敏則

6 調査位置図①



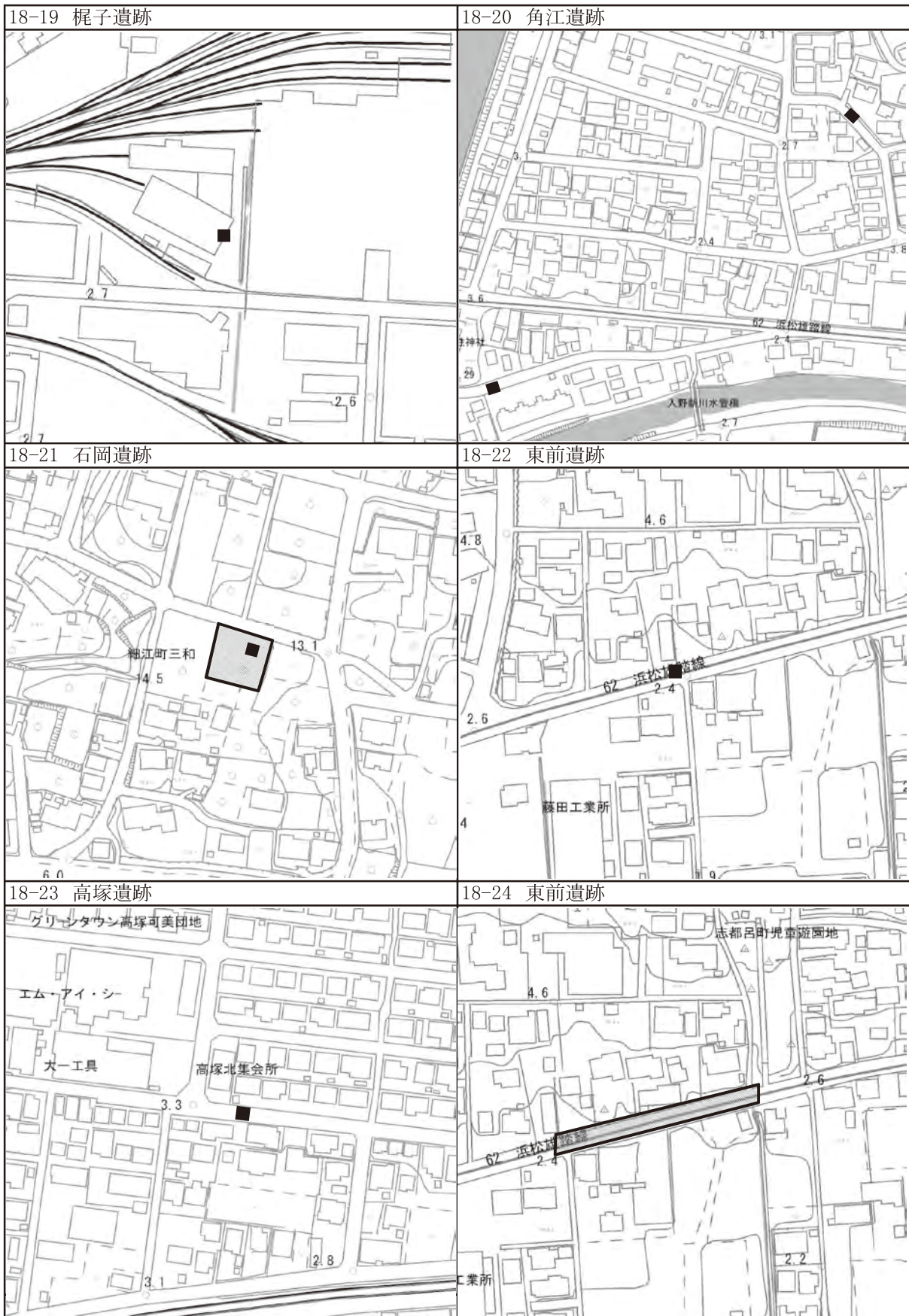
調査位置図②



調査位置図③



調査位置図④



調査位置図⑤



調査位置図⑥



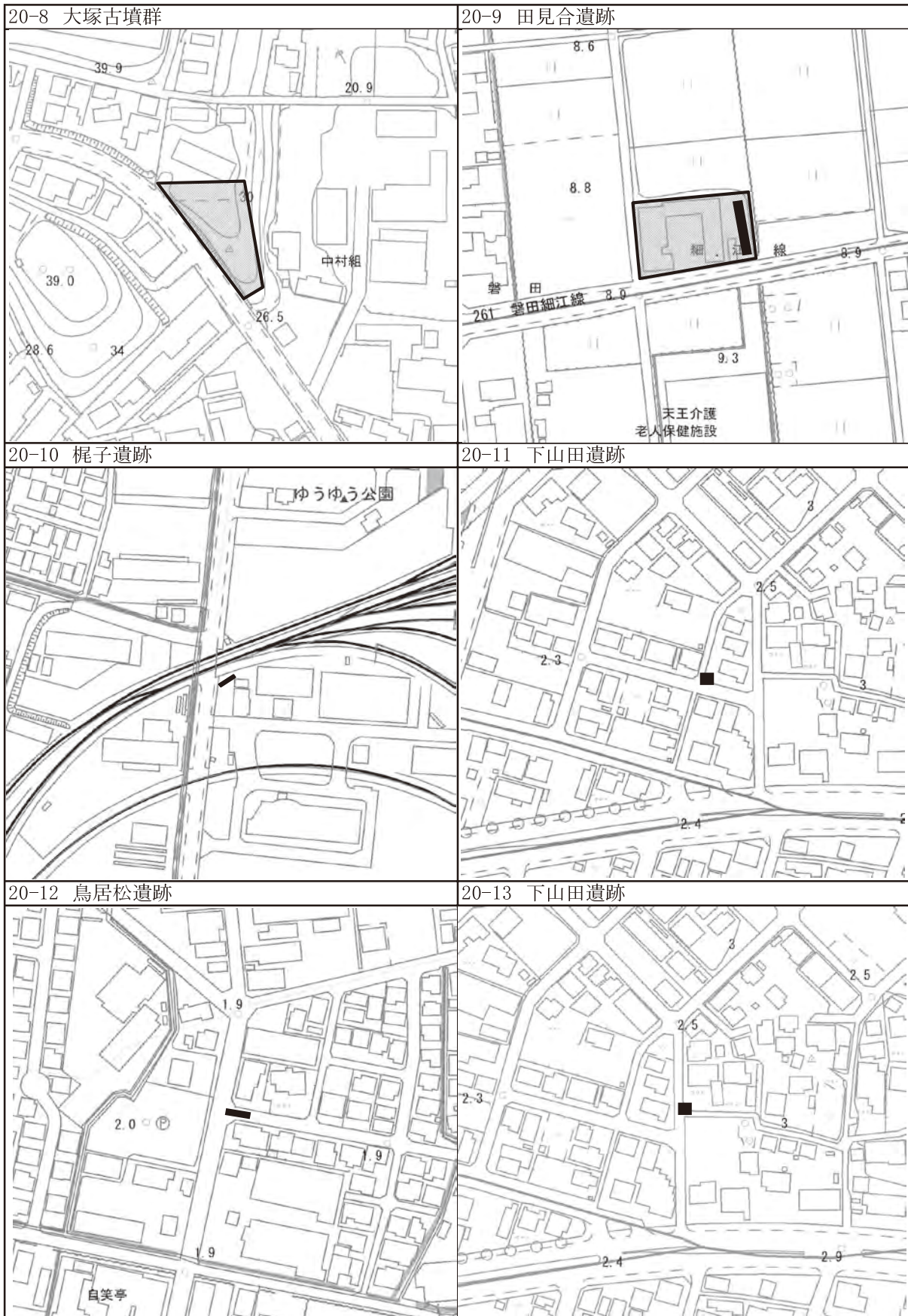
調査位置図⑦



調査位置図⑧



調査位置図⑨



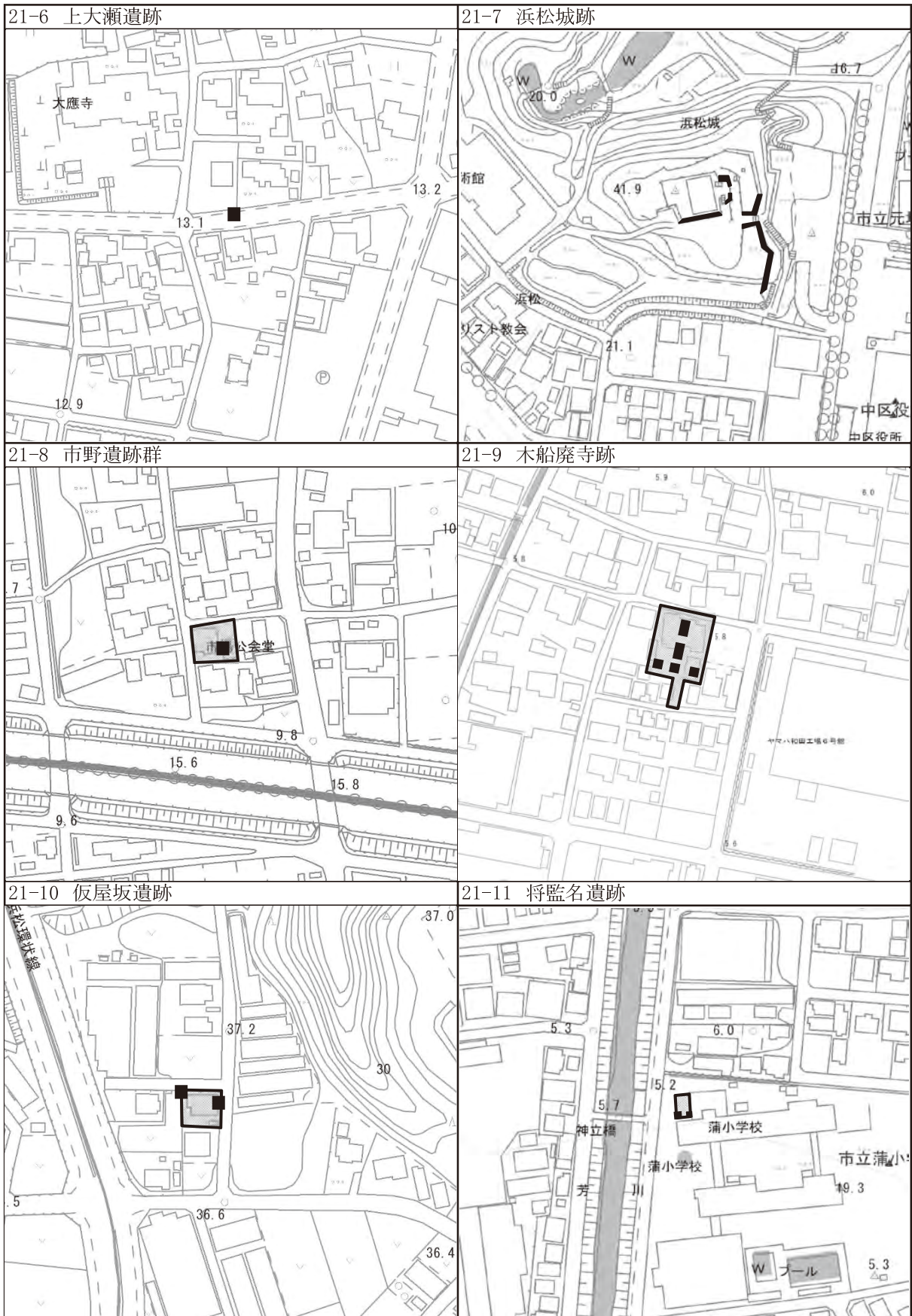
調査位置図⑩



調査位置図①



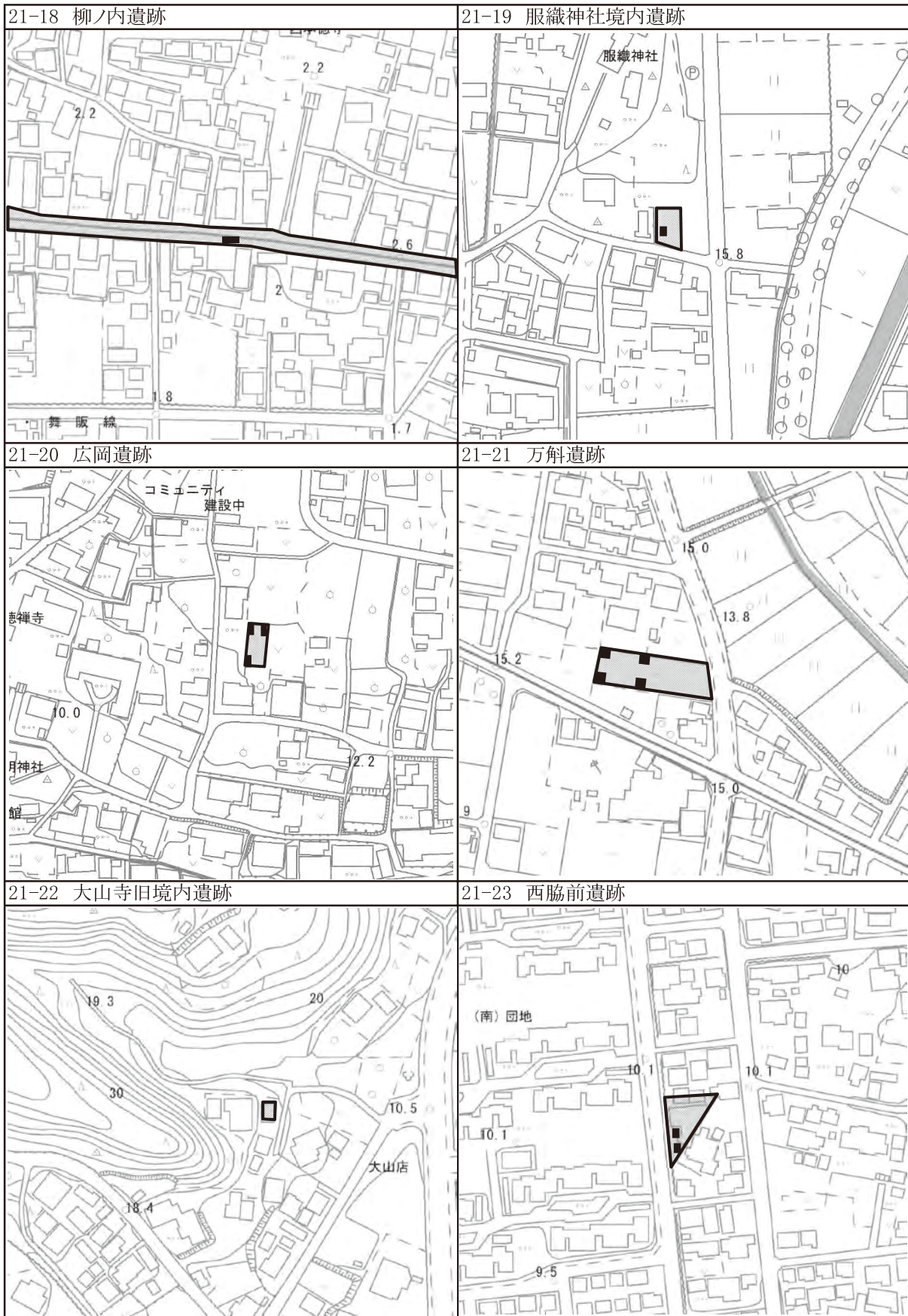
調査位置図⑫



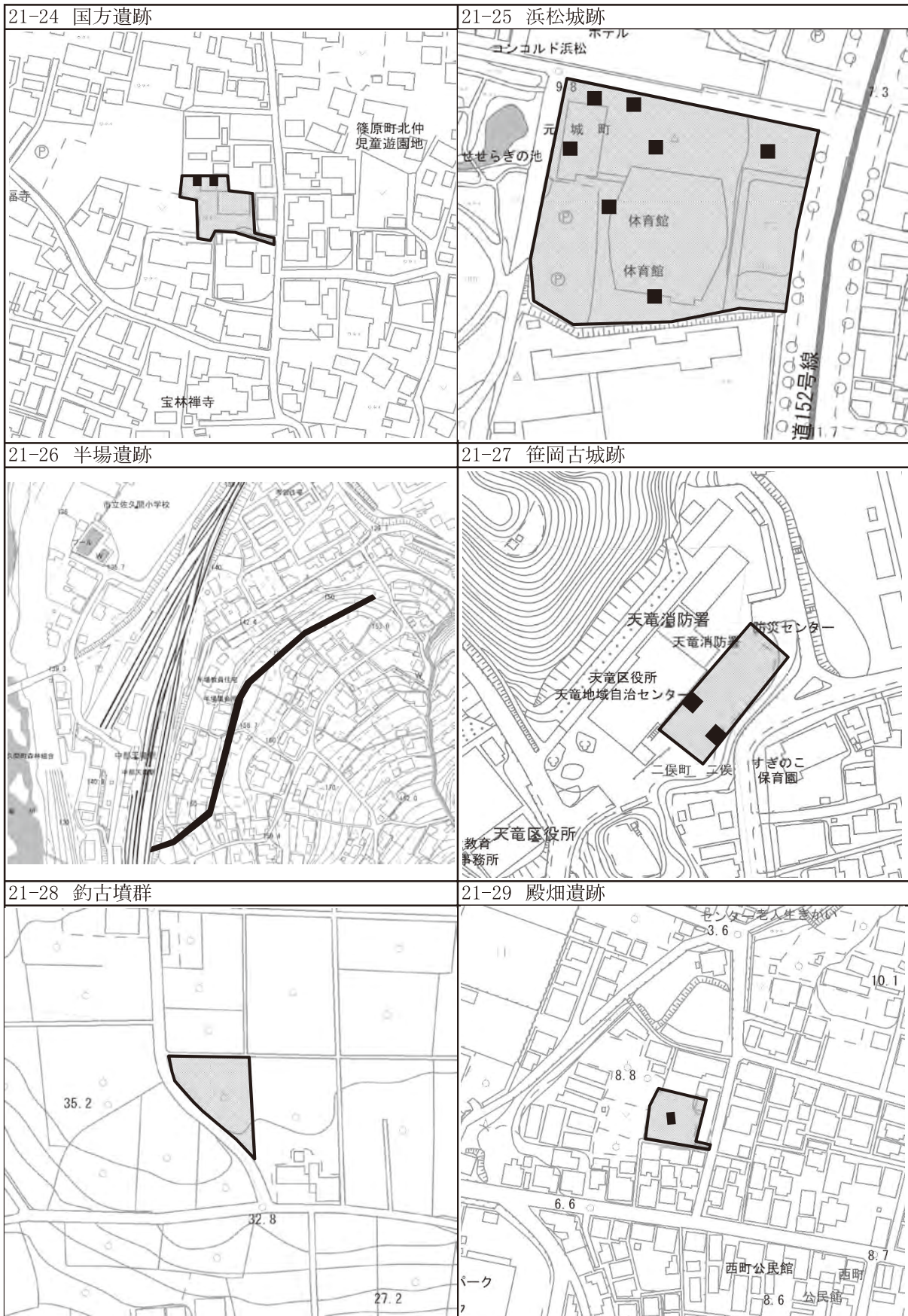
調査位置図⑬



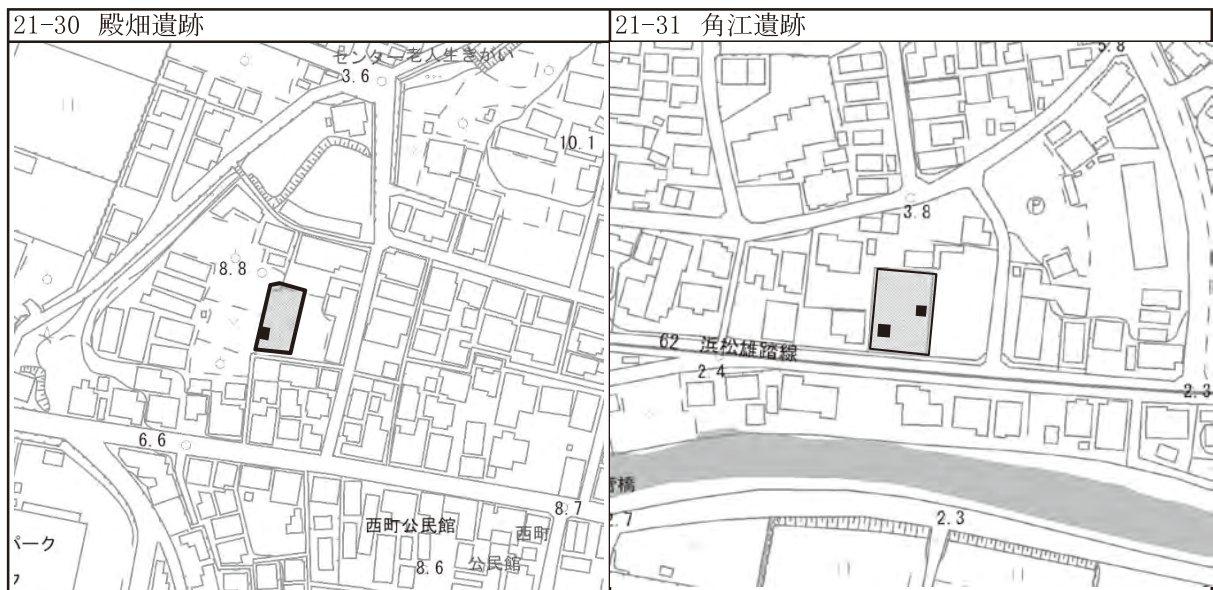
調査位置図⑭



調査位置図⑮



調査位置図⑯



第2部

試掘調査報告

(平成20～21年度)

1. 恒武西宮遺跡

所在地	東区恒武町 211-1 他
調査期間	平成20年 4 月 25 日
時代	古墳、奈良、戦国時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 6 箇所 0.5 × 0.5 試掘坑 2 箇所
検出遺構	遺物包含層、溝
出土遺物	土師器、須恵器、青磁、陶器
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500 分の 1)

調査概要

試掘坑の配置及び土層断面図は別添図に示した。対象地の西側は道路面とほぼ同等の高さまで盛土されていたのに対し、東側は水田であったため、70cm程の比高差があった。

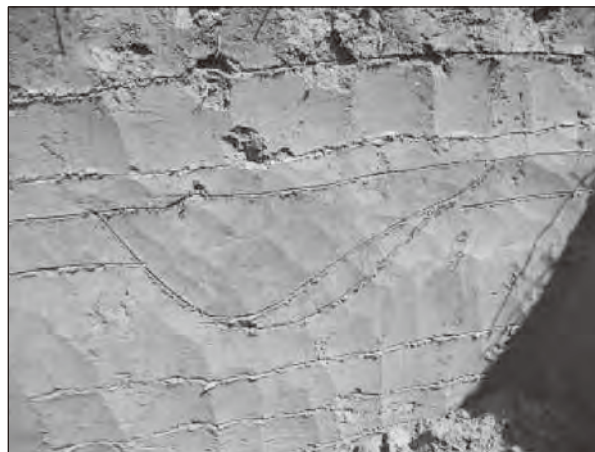
盛土下及び水田下の土層堆積の状況は隣接する第3・8次調査区とほぼ同様であった。水田耕作土（Ⅰ層）の下には遺物を包含するシルト層（Ⅱ層）が存在し、遺構もこの層位の中から掘り込まれていた。Ⅱ層の上面の標高は調査区北側の笠井街道寄りが12.1m前後であったのに対し、試掘坑4では11.9m前後であった。南端に位置する5・8試掘坑は他の試掘坑と土層堆積の状況が異なり、Ⅱ層が確認できず、暗青灰色のシルトが堆積していた。このことから、調査区の北西方向から南東方向に向かって標高が下がり、南側では遺物包含層が消失していると考えられる。Ⅱ層以下の土層の状況は、いずれの試掘坑も同様であり、灰色粘土層（Ⅲ層）が堆積していた。Ⅲ層の下には黒灰色粘土層（Ⅳ層）が確認でき、その下には青灰色の砂が堆積し、湧水があった。

試掘坑内を精査した結果、試掘坑2を除く全ての試掘坑で遺物が出土した。遺物は古墳時代から奈良時代の土師器や須恵器のほか、中世の陶器と青磁片が出土した。また、試掘坑3では溝状の遺構を確認した。溝は東西方向に横切っており、第3・8次調査区に続いている可能性が高いと考えられる。

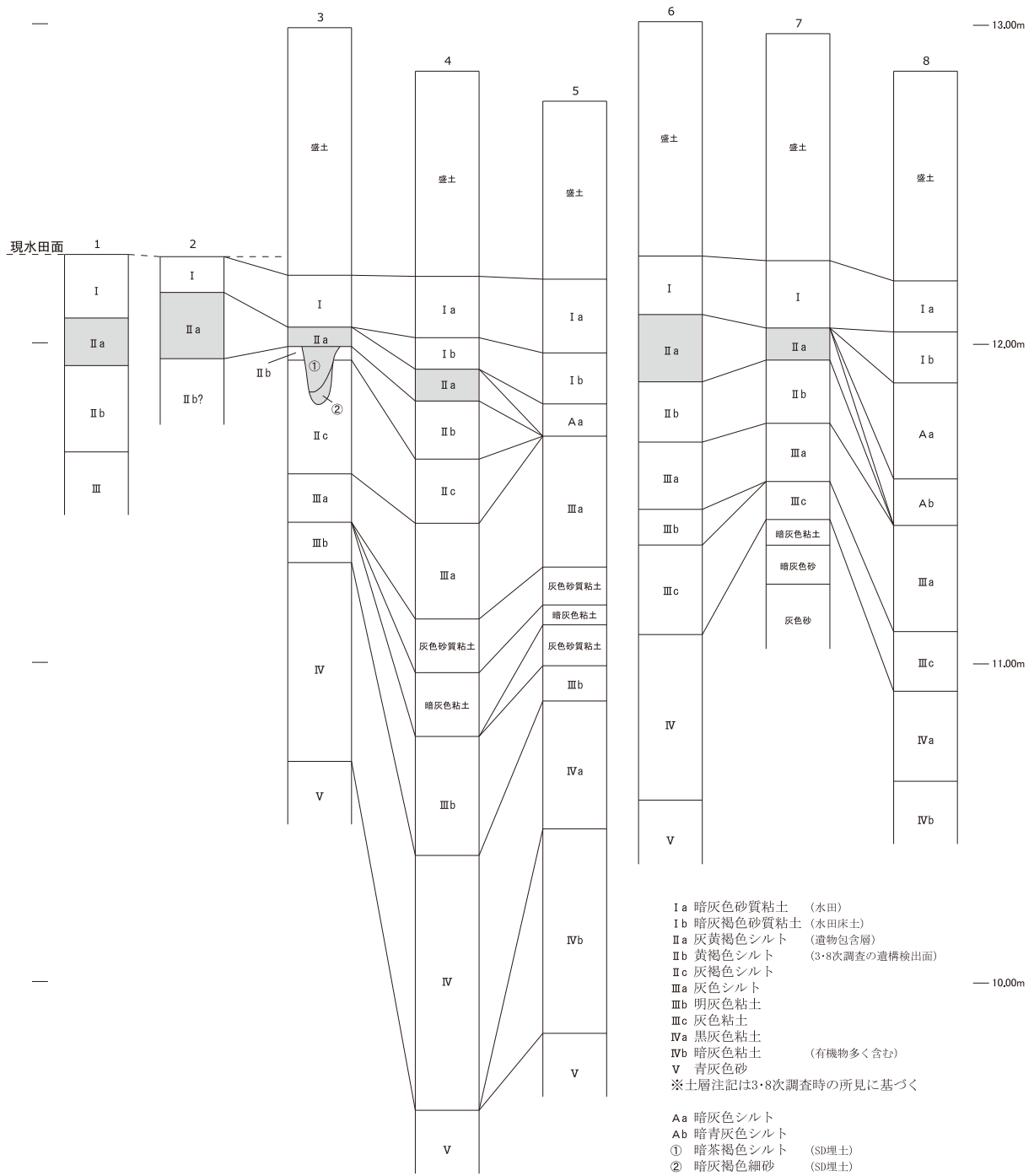
今回の試掘調査の結果、遺構の存在が確認でき、遺物も出土したことから、対象地内の北側を中心に遺跡が存在することが明らかとなった。



完掘状況 (試掘坑 3)



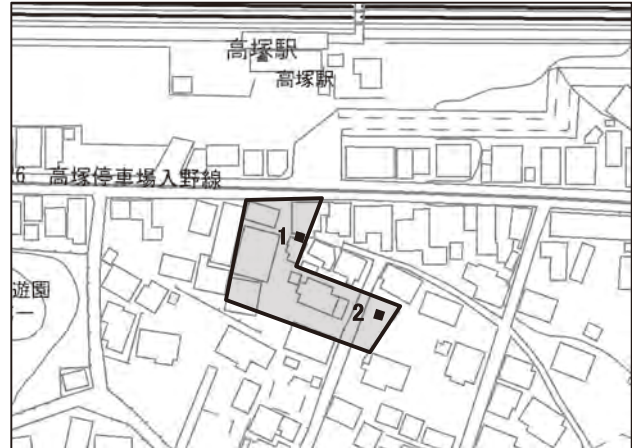
遺構検出状況



土層柱状図

2. 高塚遺跡

所在地	南区高塚町 4607-10 他
調査期間	平成20年 5 月 15 日
時代	飛鳥、奈良、戦国時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 2 箇所
検出遺構	遺物包含層
出土遺物	土師器、須恵器、かわらけ、土師質土器
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



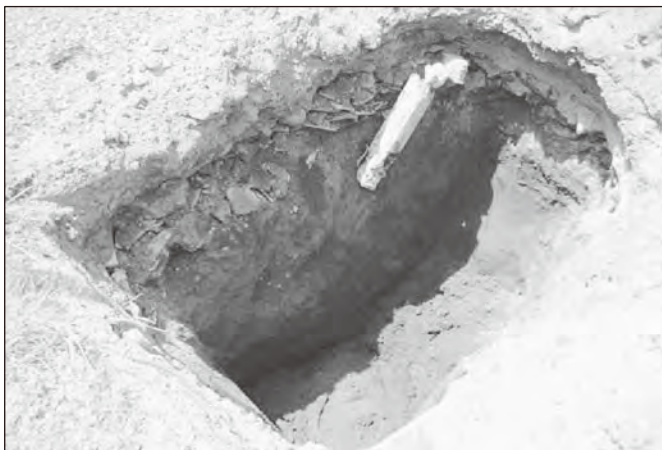
位置図 (2500 分の 1)

調査概要

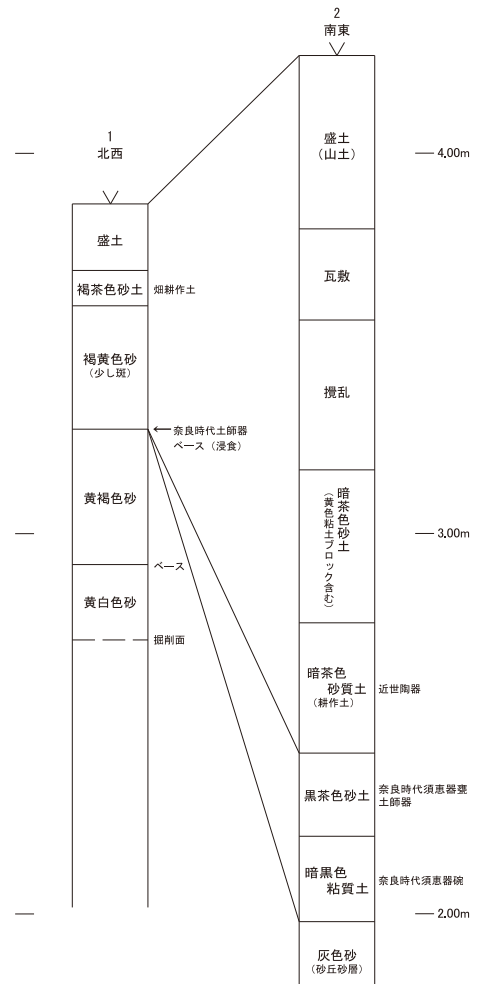
試掘坑 1 では地表下約 0.2 m で旧耕作層上面が、また 0.6m (標高 3.3 m) で基盤砂丘砂層が確認された。遺物は、砂層上面で奈良時代の土師器甕口縁部破片が認められたに過ぎない。当地点は、砂丘の高い部分にあたり、包含層及び遺構の大半は消失したものと推定される。

試掘坑 2 では地表下 1.5 ~ 1.8m に近世の耕作層、その下が包含層で、2.3 m (標高 2.0 m) に基盤砂層上面が確認された。包含層から 7 ~ 8 世紀の須恵器甕・碗、土師器甕などが出土した。当地点には遺跡もしくは遺構が存在することが確認された。

調査の結果、用地の北西部においては遺跡の存在は認められなかったが、南東側は遺跡の範囲内と推定される。しかし、調査したのは 2 箇所だけであり、遺跡の広がりが発見予定地のどの部分まで及んでいるのか、遺跡がどの程度残存するのかは不明である。遺跡の年代は、出土遺物から、飛鳥・奈良時代と推定される。



完掘状況(試掘坑 2)



土層柱状図

3. 高塚町村中遺跡

所在地	南区高塚町4445-1、4445-3
調査期間	平成20年5月15日
時代	戦国、江戸時代
調査方法	1 × 1.5 m 試掘坑2箇所
検出遺構	なし
出土遺物	かわらけ、内耳鍋、陶器
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



位置図 (2500分の1)

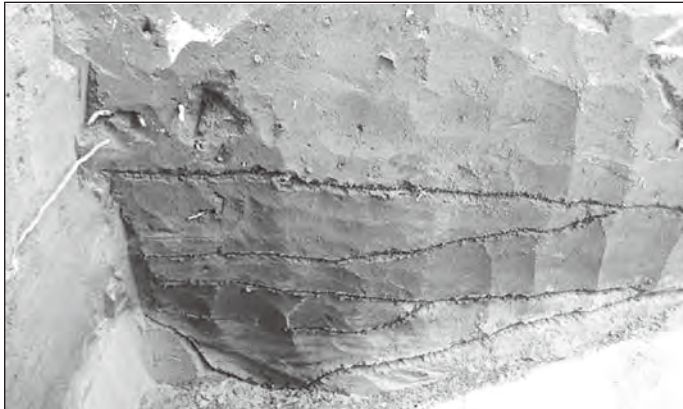
調査概要

試掘坑1は、地表下0.6m(標高1.8m)で基盤砂層が確認され、トレンチ南端には東西方向の地境溝が検出された。このトレンチから南に向かって急激に基盤層は傾斜しているものと考えられる。遺物は、耕作層と地境溝から中世末～近世のかわらけ、内耳鍋、陶器などが出土した。試掘坑2は、地表下1.3m(標高1.0m)まで砂質土で、近世以降の陶器などを含んでいた。耕作層などの砂質土の下は、1.7m(標高0.6m)まで暗黒褐色のピート層で、その下に基盤砂層がある。中世以前の遺物は、検出されなかった。

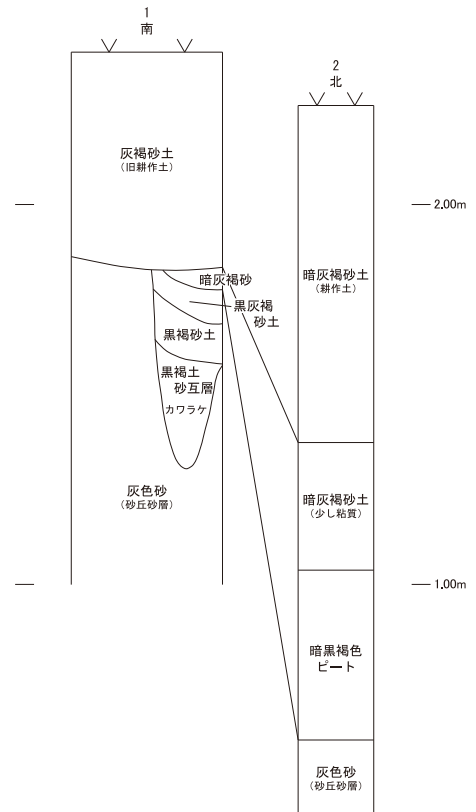
当用地においては、基盤層をなす砂丘は、南に向かって大きく傾斜し、南側は湿地に及んでいることが確認された。調査の結果、古代以前の遺物は無く、遺構も認められなかったことから、遺跡は当用地には及んでいないと推定される。



調査状況



土層断面状況 (試掘坑2)



土層柱状図

4. 茶ノ木田遺跡

所在地	東区恒武町 842 他
調査期間	平成20年 5 月21日
時代	古墳、鎌倉時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 9 箇所
検出遺構	遺物包含層
出土遺物	須恵器、山茶碗、陶器
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500 分の 1)

調査概要

対象地は、南側と北側の畑として利用されていた部分が高く、中央の水田部分が低い形状であった。土層を観察した結果、畑として利用されていた部分は、全面的に盛土されていることが判明した。各試掘坑の層位関係はおおむね共通しており、旧耕作土の下には、褐色ないし暗褐色粘土の堆積を確認した。その下には灰色細砂層が存在したが、対象地東側の試掘坑ではこの層が薄くなるか、全く確認できないなど、やや傾向が異なっていた。さらにその下には有機物を少量含む灰色粘土の堆積を確認した。また、灰色粘土層の下には黒灰色粘土層が確認できた。この層は恒武西宮遺跡において確認したIV層に相当するものと考えられる。黒灰色粘土層の下には礫を多く含む灰色砂層を確認した。この砂礫層は対象地の東側で高くなる傾向にあり、中央や西側の試掘坑と比較して1 m程の比高差があった。

試掘坑内を精査した結果、試掘坑7と試掘坑8で遺物を確認した。遺物は7～8世紀代の須恵器の破片と、中世の山茶碗と陶器の破片が出土した。今回の試掘調査の結果、一部の試掘坑から遺物が出土したが、いずれも小破片であり、明確な遺物包含層は確認できなかった。このことから、対象地は遺跡の縁辺部であると考えられる。遺物の出土した位置や土層の状況から、遺跡の中心は今回の調査地点より南西側の可能性が高いと考えられる。



重機掘削状況



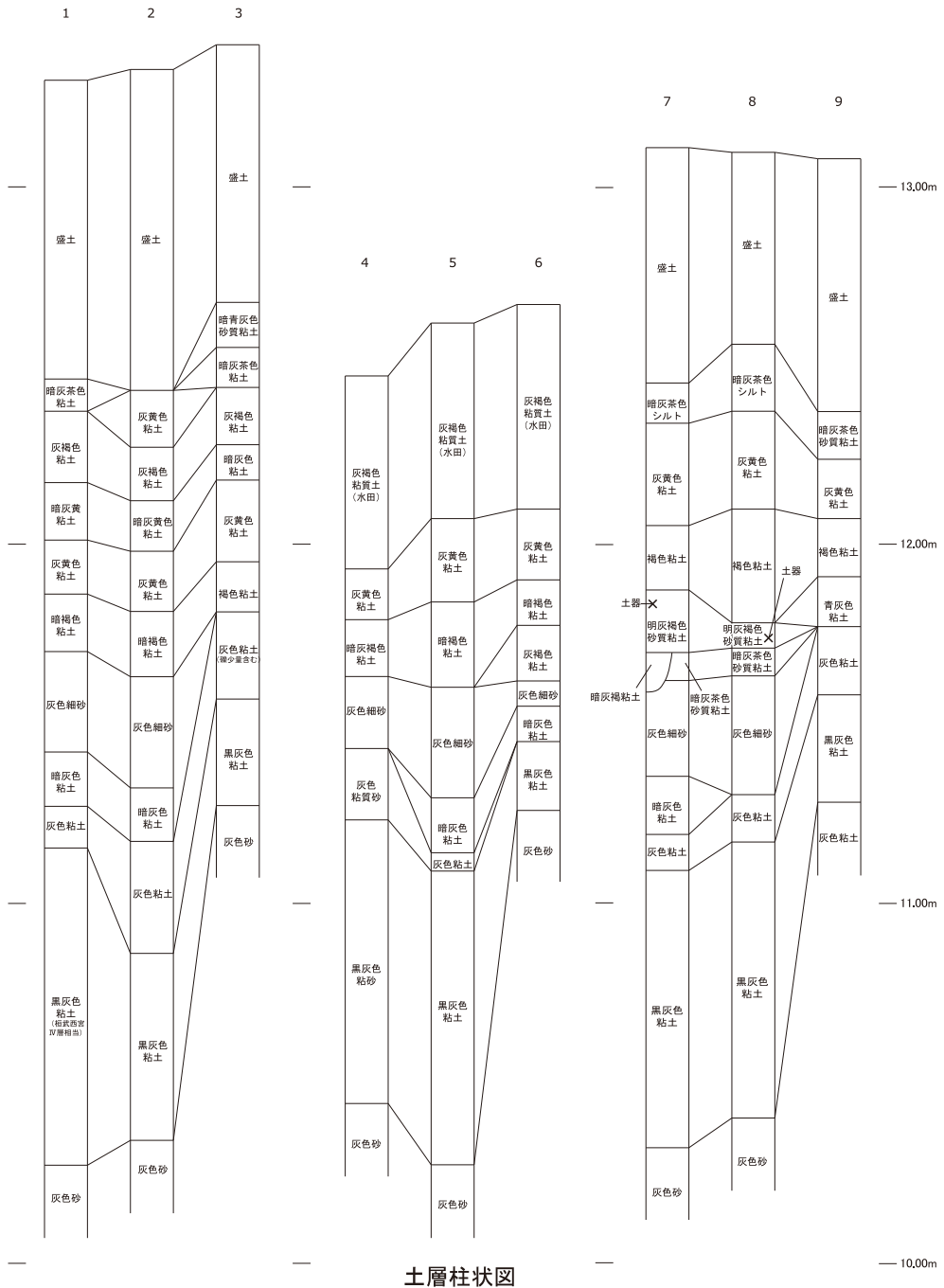
土層断面状況(試掘坑 6)



土層断面状況(試掘坑 3)



土層断面状況(試掘坑 8)



5. 半場遺跡

所在地	天竜区佐久間町半場 139 他
調査期間	平成20年 5 月 26 日
時代	縄文、戦国時代
調査方法	2 × 1 m 試掘坑 5 箇所
検出遺構	小穴・包含層
出土遺物	縄文土器、打製石斧、磨石 内耳鍋
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500 分の 1)

調査概要

対象地は J R 飯田線中部天竜駅東側に位置し、西向きの緩斜面にあたる。現況は、正方形の区画がほぼ水平に均されているが、土層を観察した結果、南西方向に向かって盛土 (I 層) が厚く行われていることが明らかとなった。各試掘坑の基本層序はおおむね共通しており、旧耕作土 (II 層) の下に黒褐色砂質土の遺物包含層 (III 層) が明瞭に確認できた。また、試掘坑 4, 5 では遺構が確認できた。基盤層は黄褐色の砂礫層 (V 層) であり、一部の試掘坑では遺物包含層との間に漸移層 (IV 層) が存在した。但し、試掘坑 2 のみはこれらと土層の堆積状況が異なり、耕作土を除去すると直下に基盤層が現れた。このことから、遺物包含層は既に削平されたものと推定できる。

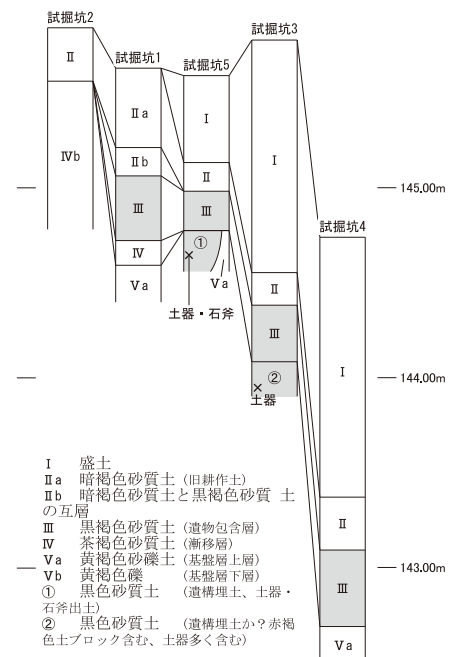
基盤層の状況から、対象地はかつて北東方向から南西方向に傾斜した地形であったものが、北東を削土して敷均したものと考えられる。

試掘坑内を精査した結果、2 を除く全ての試掘坑で遺物が出土した。試掘坑 1 からは縄文時代後期から晩期の土器が出土した。試掘坑 3 からは縄文時代後期から晩期にかけての土器が豊富に出土したほか、中世の内耳鍋片も出土した。試掘坑 4 も厚く堆積した包含層中から縄文時代後期から弥生時代中期の土器が多く出土し、黒曜石のフレイクも採集した。試掘坑 5 からは、縄文時代晩期の深鉢などの土器のほか、打製石斧・磨石など石器も出土した。

今回の試掘調査の結果、対象地の北東側の一箇所を除いて、明瞭に遺物包含層と遺構が確認でき、遺物も豊富に出土したことから、ほぼ全面に遺跡が存在すると推定される。



土層断面状況 (試掘坑 5)



土層柱状図

6. 高塚遺跡

所在地	南区高塚町 4607-10 他
調査期間	平成20年 6 月10日
時代	飛鳥、奈良、鎌倉時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 2 箇所
検出遺構	包含層
出土遺物	土師器、須恵器、山茶碗
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



位置図 (2500 分の 1)

調査概要

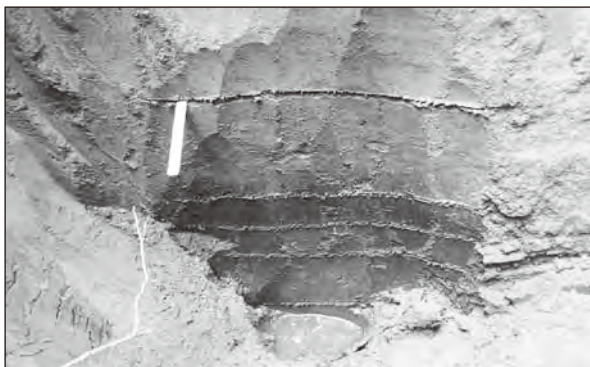
両試掘坑とも上層から、盛土層、灰褐色砂層 (旧耕作層)、黄色砂層があり、標高 2.0 ~ 2.2 m 以下では黒灰色粘土・砂混層 (中世前半の包含層)、黒色粘土 (奈良時代の包含層)、茶色粘土 (PEAT 層)、褐茶色粘土層が堆積しており、試掘坑 3 では標高 1.5 m、試掘坑 4 では 1.0 m あたりで基盤砂層に至っている。

遺物は、黒灰色粘土・砂混層から13世紀鎌倉時代の山茶碗片、黒色粘土から 8 世紀奈良時代の須恵器碗底部破片、同土師器甕体部破片が検出された。

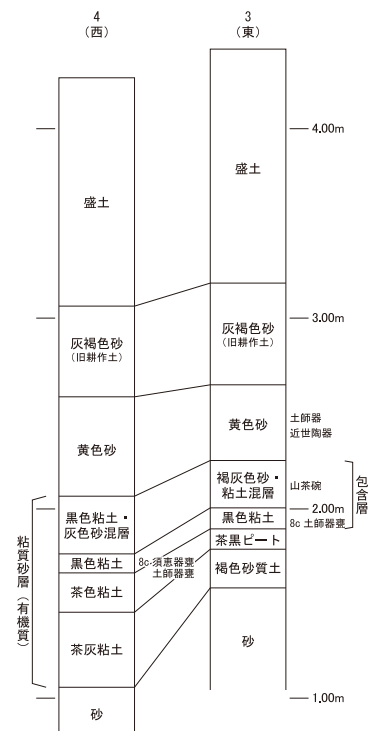
調査の結果、2つの試掘坑とも遺物が存在し、遺跡の範囲内と考えられるが、8~13世紀においては湿地性堆積土層が認められることから、前回調査した試掘坑 2 の所見を合わせ、開発予定地は遺跡縁辺部と考えられる。



重機掘削状況



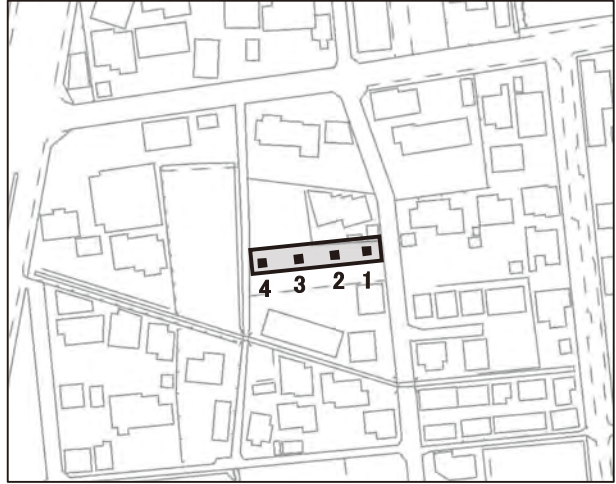
土層断面状況 (試掘坑 3)



土層柱状図

7. 中田東遺跡隣接地

所在地	東区中田町 107
調査期間	平成20年 6 月 13 日
時代	奈良、平安、戦国時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 4 箇所
検出遺構	小穴、包含層、井戸
出土遺物	須恵器、土師器、灰釉陶器 初山皿、くの字内耳鍋 かわらけ、羽釜、内耳鍋
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



位置図 (2500 分の 1)

調査概要

現耕作土と盛土層の下には青灰色粘土層があり、さらに下には黄褐色～茶褐色で管鉄が発達した粘質土層が存在する。この層が6～16世紀の包含層で、地表下1.0 m～1.2 mに存在し、0.2～0.3 mの厚さがある。遺構は、この包含層の途中もしくは下面から掘り込まれている。包含層の下は、灰色、暗灰色、黒色の粘土層で、所々に微砂質粘土層を挟み、2 m以上、厚く堆積している。

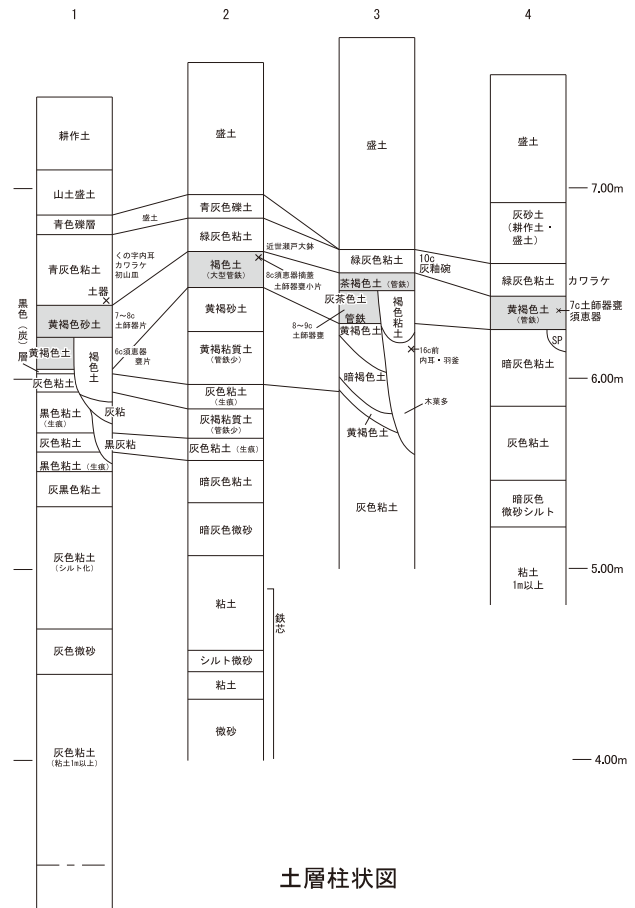
遺構は16世紀前半の井戸、中世と考えられる溝、8世紀の可能性が高い小穴が確認された。

出土遺物は、6～8世紀の須恵器甕・摘蓋、土師器甕・壺、10世紀の灰釉陶器碗、16世紀の羽釜、内耳鍋、かわらけ、16世紀末の初山皿などが検出された。

開発予定地は、遺構・遺物の存在から、遺跡の範囲内にあると判断される。遺跡は、6世紀後半の古墳時代後期から16世紀の織豊期に及ぶ複合遺跡であるが、8世紀の奈良時代と16世紀前半の戦国期の遺物が多い。



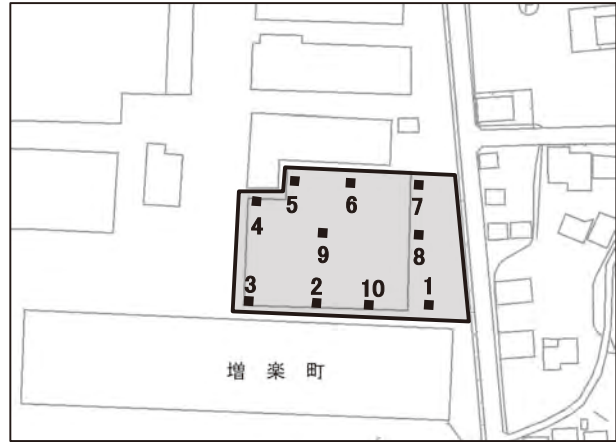
土層断面状況 (試掘坑 1)



土層柱状図

8. 増楽遺跡

所在地	南区高塚町 300
調査期間	平成20年 8 月 5 日
時代	飛鳥、奈良、鎌倉、戦国時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑10箇所
検出遺構	溝
出土遺物	須恵器、山茶碗、青磁、常滑かわらけ
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



位置図 (2500 分の 1)

調査概要

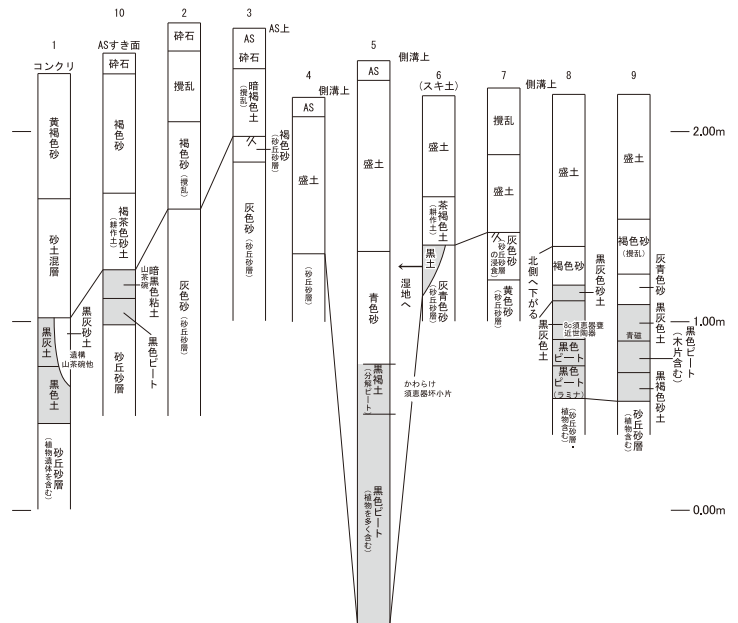
基盤層は砂丘砂層で、その砂層上面は用地南西部と北東部が高く、東側中央から北西部にかけては低くなっていた。低地は、近世まで湿地であった場所である。最も高いのは、南西角の試掘坑 3 で、標高約 2.0 m で攪乱されていない砂丘の上面を確認した。砂丘面が最も低いのは、北西部の試掘坑 5 で、標高-0.6 m である。ここは、谷状地形をなしていたと考えられる。

低地には、下層に黒色PEAT層、上層に植物遺体の分解が進んだ黒色土など、湿地性の堆積層が認められた。黒色土層からは 7 世紀から近世までの遺物が少数確認された。高位面では、遺構と遺物は確認されなかった。高い場所であったため、遺構や遺物包含層が、後世に削り取られるなど、攪乱を受けたのだろう。

試掘調査の結果、当用地は、古代から近世においては、砂丘の高まりと、湿地が複雑に入り組んだ地形であったことが明らかとなった。調査で、7 世紀から 13 世紀の遺物が発見されたことから、当用地には遺跡が存在したと考えられる。しかし、遺構は認められず、また出土遺物も少数であることから、遺跡の縁辺部と推定される。



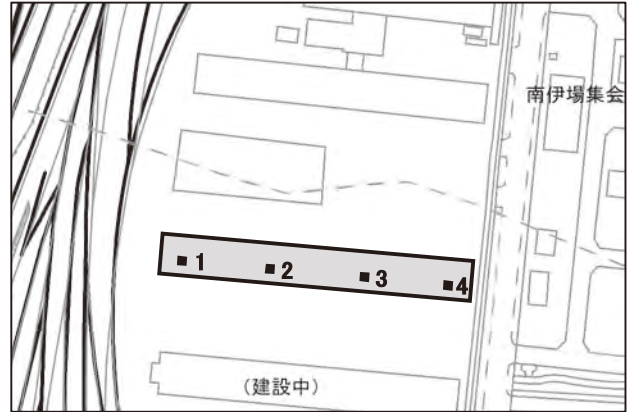
土層断面状況 (試掘坑 1)



土層柱状図

9. 城山遺跡

所在地	南区東若林町 514 他
調査期間	平成20年 8 月13日
時代	弥生、奈良時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 4 箇所
検出遺構	水田、小穴
出土遺物	土師器、須恵器
特記事項	なし
調査担当	鈴木 一有



位置図 (2500 分の 1)

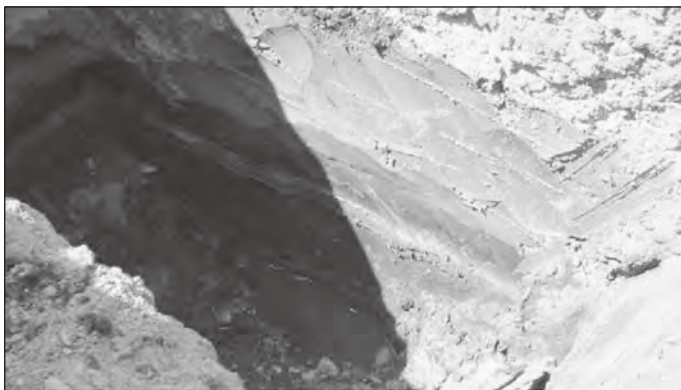
調査概要

土層堆積状況 試掘坑 1～3 においては、低い基盤砂層の上に湿地性の堆積層が、試掘坑 4 においては、高い位置で基盤砂層が確認できた。基盤砂層は調査対象地の西にむかって低くなる状況がみられ、砂層上に堆積する粘土も厚くなる。試掘坑 1～3 でみられた湿地性の堆積層は、伊場遺跡群で広範にみられるものと同一である。旧耕作土下には、飛鳥時代～奈良時代(7～8 世紀)の遺構検出層である淡青灰色粘土(一部シルト質)が広がっている。その下には、黒色粘土(泥炭質)、白色粘土、黒色粘土(泥炭質)の互層があり、基盤砂層に至る。試掘坑 4 では、盛土直下に茶褐色の砂層があり、その下 40cm ほどで基盤砂層に至る状況が確認できた。

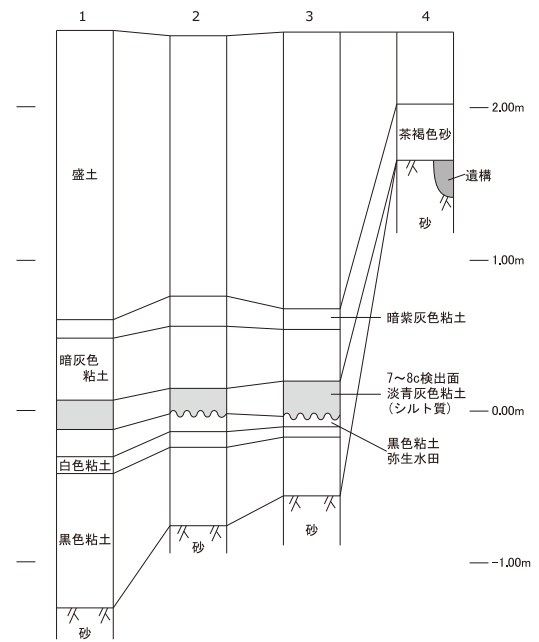
遺構 試掘坑 4 において基盤砂層の直上で小穴を確認した。また、明確な掘り込みは確認できなかったが、周辺の調査状況から、淡青灰色粘土(一部シルト質)層の直上において、7～8 世紀の遺構が確認できるものと考えられる。さらに、下層の黒色粘土層において、水田耕作に伴う地層の攪拌がみられた。城山遺跡 6 次調査で確認した水田層と層位的に平行することから、この水田は弥生時代中期末葉から後期にかけてのものと考えられる。

遺物 遺物は、試掘坑 3, 4 から出土した。7～8 世紀の土師器、須恵器の小片が数多く確認できる。また、試掘坑 3 からは、桃核が出土した。

小結 今回の試掘調査では、7～8 世紀の遺構検出層を全域において確認したほか、基盤砂層が西に向かって急激に下降している状況が確定できた。また、下層において、弥生時代の水田が広がっている状況もみられた。



土層断面状況(試掘坑 3)



土層柱状図

10. 天白遺跡

所在地	北区引佐町井伊谷字天白 1140-1
調査期間	平成20年10月2日
時代	縄文、古墳、戦国時代
調査方法	1.6 × 27m、1.6 × 19m トレンチ2箇所
検出遺構	溝（方形周溝墓）、土坑
出土遺物	縄文土器、土師器、 土師質土器（内耳鍋）
特記事項	なし
調査担当	鈴木 一有



位置図（2500分の1）

調査概要

土層堆積状況 1、2トレンチともに現状の畑耕作土である茶褐色砂質土(1層)が30～50cm程度堆積している。この層の下には部分的に遺物包含層である黒褐色粘質土(2層)が残存している箇所があり、その下層には地山である黄褐色粘土層(5層)がみられる。遺構は、2層、もしくは5層を掘り込んで形成されている。遺構の埋土は、黒色の粘質土である。

遺構 1、2トレンチの全面において遺構を検出した。幅2m、深さ40～50cmほどの大規模な溝（SD01～04）が4箇所にわたり検出できた。遺構の形状、出土遺物から、古墳時代前期の方形周溝墓と考えられる。また、調査区の全域にわたり、小穴、土坑を検出した。古墳時代前期の遺構とともに、戦国時代、江戸時代の遺構が混在している。

遺物 方形周溝墓と推定できるSD01～04から古墳時代前期の土師器が比較的まとまって出土した。また、SD03からは、土師器とともに、縄文土器が出土している。このほか、戦国時代の内耳鍋や、江戸時代の陶器片などが出土した。

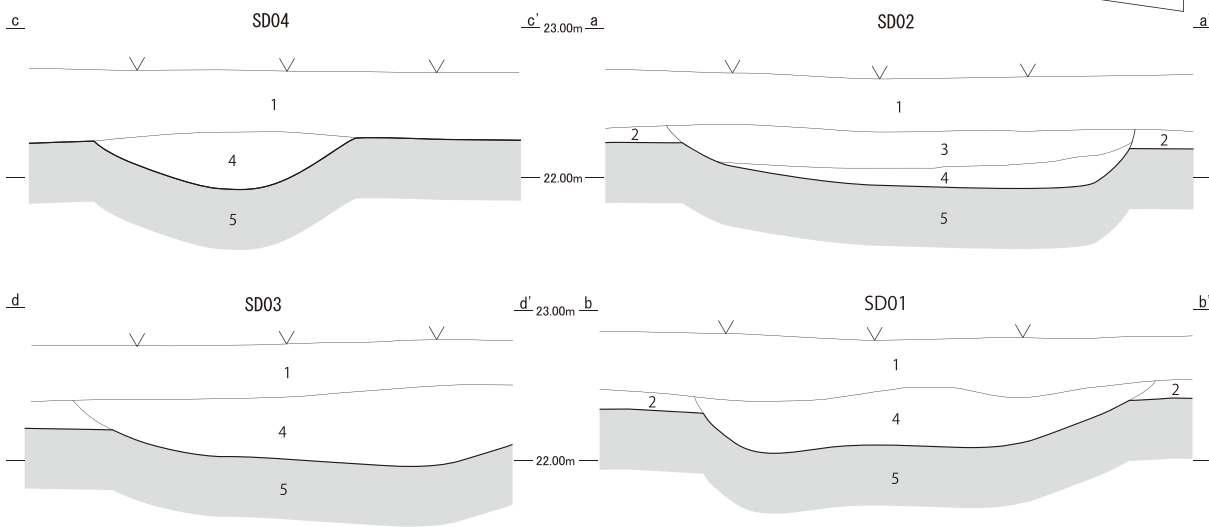
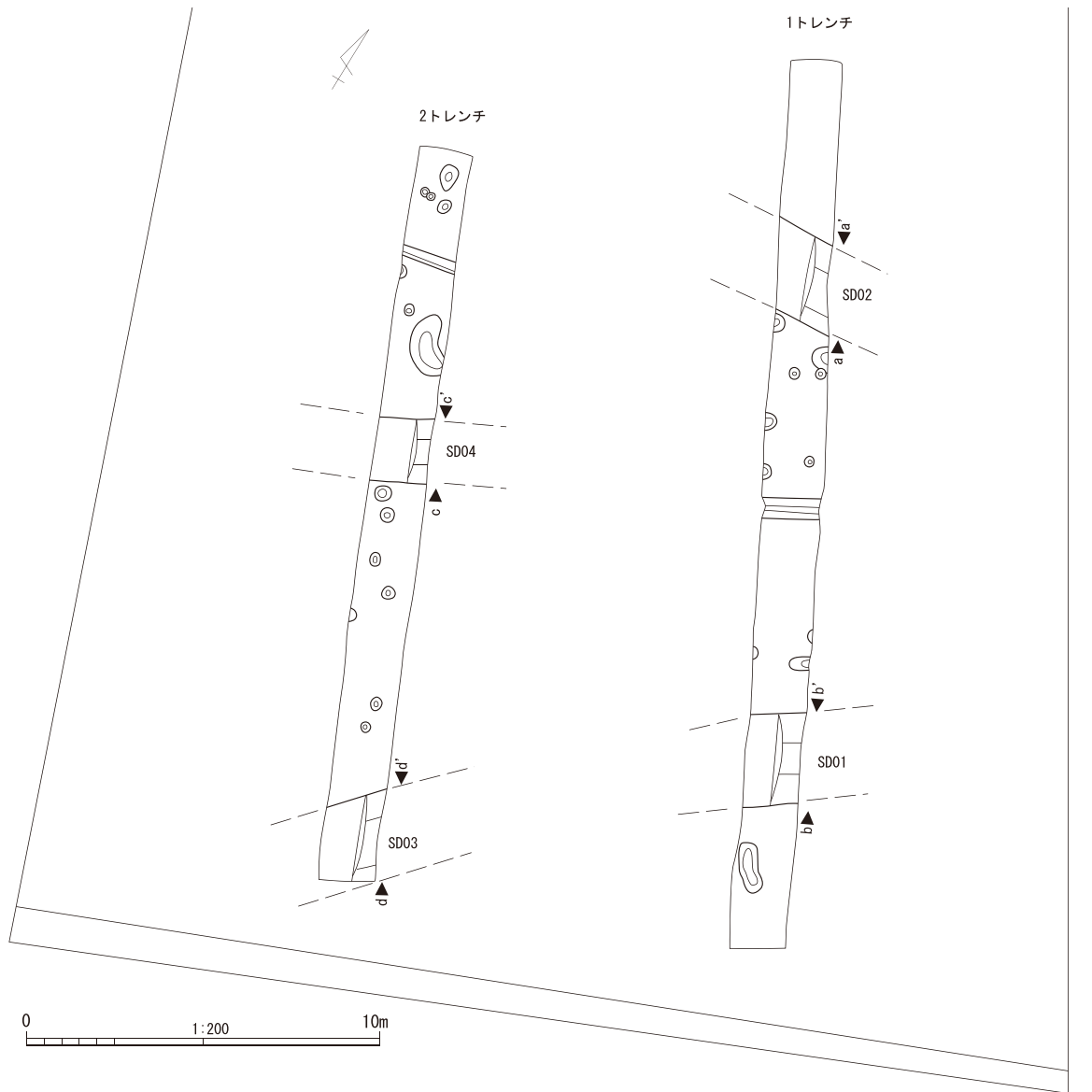
小結 今回の試掘調査によって、天白遺跡に古墳時代前期の方形周溝墓群が展開している可能性が高まった。同様の遺構は、南に接する北神宮寺遺跡でも確認できており、北神宮寺遺跡と天白遺跡は一連の遺跡であることが明確になった。遺構や包含層の中に縄文土器や戦国時代の遺物が含まれることも、北神宮寺遺跡と共通する。



調査状況

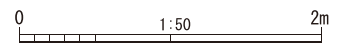


SD01 断面状況



- 1 茶褐色砂質土 (耕作土)
- 2 黒褐色粘質土 (包含層)
- 3 暗褐色粘質土 (SD埋土)
- 4 黒色粘質土 (SD埋土)
- 5 黄褐色粘土 (地山)

調査区平面及び土層断面図



11. 百々原遺跡

所在地	浜北区於呂 4201-2
調査期間	平成20年11月 4日
時代	不明
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 5箇所
検出遺構	なし
出土遺物	土師器？
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



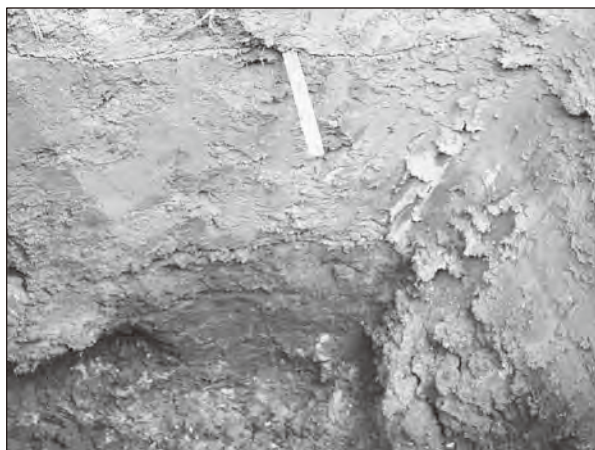
位置図 (2500分の1)

調査概要

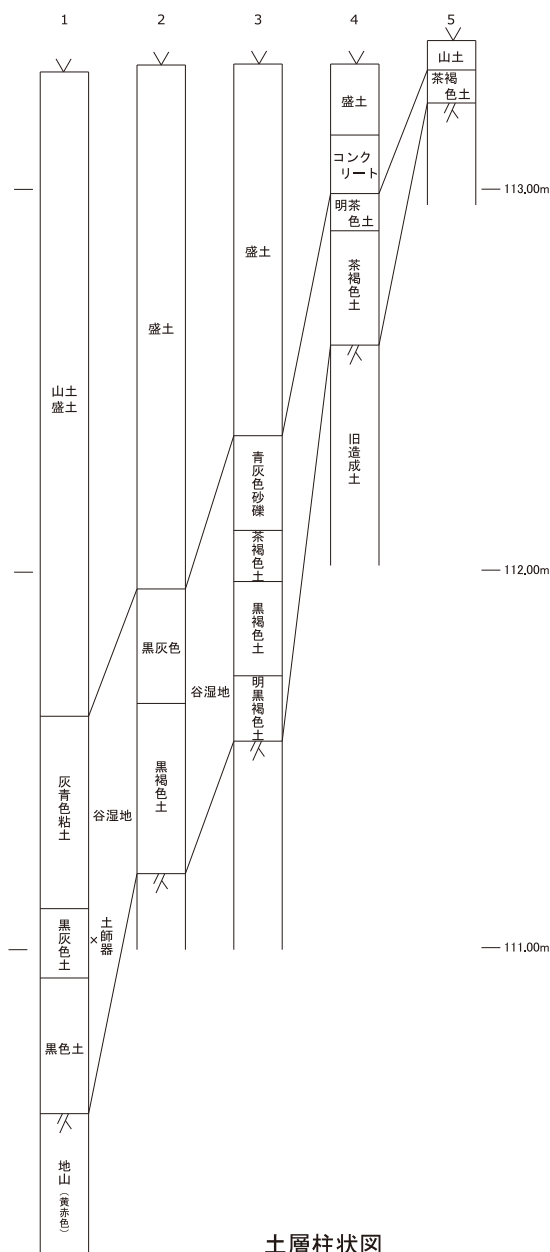
旧地形は、東から西に向かって低くなっており、西側では谷底に近いめか、黒色土が厚く堆積していた。黒色土は、試掘坑1では暗黒色土であるが、東に行くに従い、土層の厚さは薄くなるとともに、黒褐色(試掘坑2,3)、茶褐色(試掘坑4,5)と茶色味を増し、しかも粘質が強くなる。基盤層は黄赤色砂礫層で拳～人頭大の円礫を含む。

遺物は、試掘坑1の黒色土層中から、時期不明の土器(土師器?)小片が1点確認された。しかし、他の試掘坑では全く遺物は検出されなかった。また、遺構は全試掘坑で確認されなかった。

試掘調査から、開発予定地の旧地形は、南向きの斜面地であることが判明した。土器小片は出土したものの、遺構は無いことから、当該地は遺跡縁辺部もしくは遺跡範囲外と考えられる。



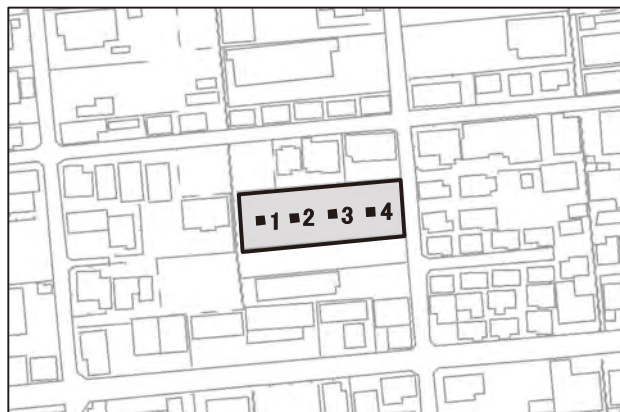
土層断面状況(試掘坑1)



土層柱状図

12. 五反田遺跡

所在地	東区丸塚町 278-1 他
調査期間	平成20年11月21日
時代	—————
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 4 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	須恵器片 (旧表土中)
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500分の1)

調査概要

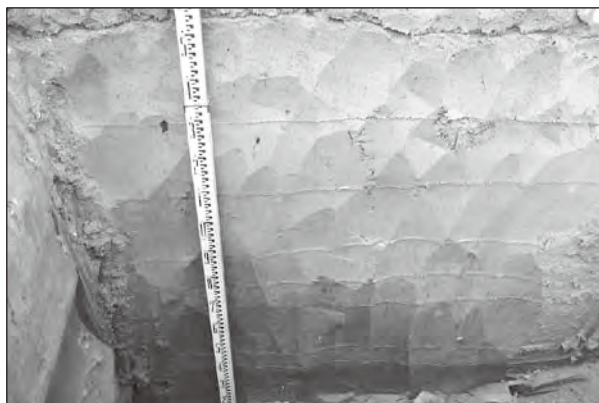
対象地内は全面的に盛土されている。盛土は現地表面下 1.1 ~ 1.2 m まで存在した。盛土以下の土層堆積状況はいずれの試掘坑もほぼ共通していた。盛土直下には旧耕作土と思われる土層が存在し、以下には管鉄の発達した灰黄褐色粘土と暗灰褐色粘土が 20cm から 40cm ほどの厚さで交互に堆積していた。現地表面下 2.3 ~ 2.6 m では粘質の強い暗灰色粘土層を確認した。この暗灰色粘土の下には、青灰色砂層が堆積しており、この層が基盤と考えられる。

試掘坑内を精査した結果、遺構の存在は認められなかった。遺物は試掘坑 2 の暗灰褐色シルト (旧耕作土) 中から須恵器の小破片が出土した他は、一切出土しなかった。

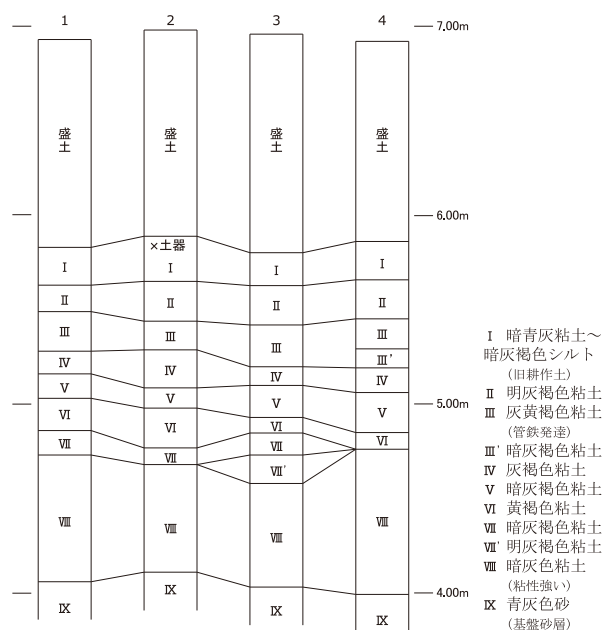
今回の試掘調査の結果、遺構は全く確認できず、遺物も旧表土中から小破片が出土したのみであることから、対象地は遺跡の範囲外と判断する。



重機掘削状況



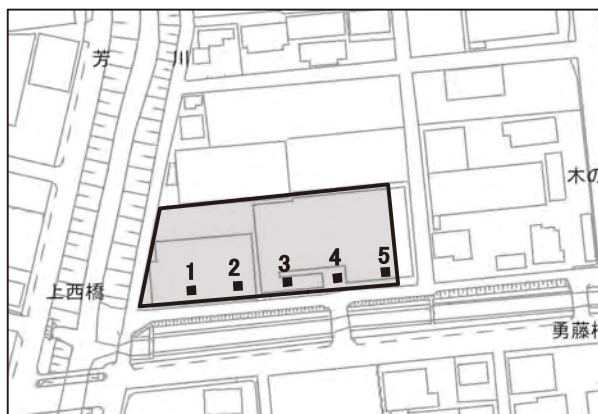
土層断面状況 (試掘坑 2)



土層柱状図

13. 東浦遺跡

所在地	東区上西町 858-2 他
調査期間	平成20年12月9日
時代	_____
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 5 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



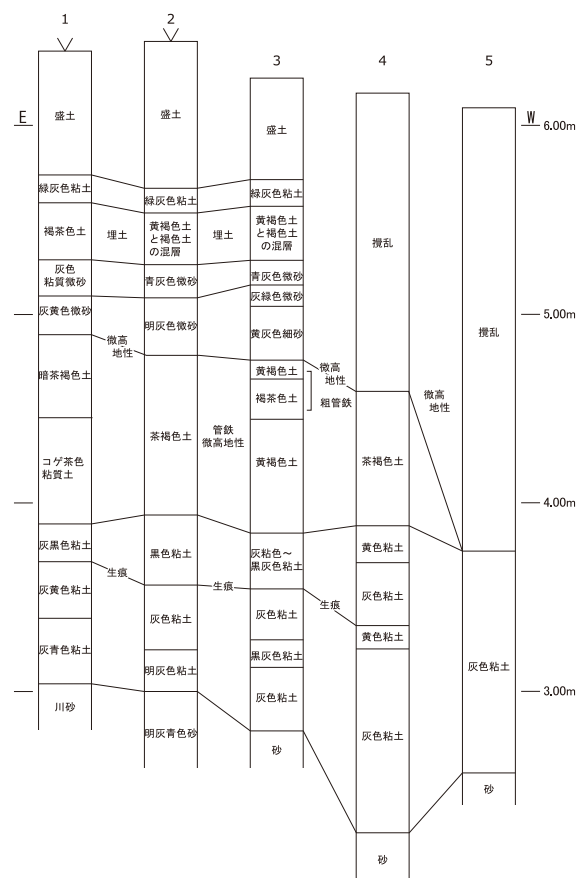
位置図 (2500 分の 1)

調査概要

基本層序は、上から、盛土層、緑灰色粘土層 (I層)、褐茶色土層 (II層)、灰青色微砂層 (III層)、灰黄色微砂層 (IV層)、暗茶褐色土層 (V層)、コゲ茶色土層 (VI層)、灰色～黒灰色粘土層 (VII層)、明灰色粘土層 (河砂層・VIII層) である。西側の試掘坑 4, 5 では上半分が建物の解体などにより攪乱されていた。他のところでは、層に乱れは無く、水平堆積であった。I層は水田耕作層、II層は客土層、III・IV層は湿地性の堆積層、V・VI層は微高地性の堆積層、VII層は湿地性の堆積層、VIII層は基盤の河砂層である。V・VI層は微高地性の堆積層であるが、遺構や遺物は確認されなかった。また、他の層位においても同様、遺構や遺物は検出されなかった。前回の試掘調査では、中世と考えられる溝と遺物がIV層で確認されたが、当地区では遺構の頻度は低く、遺物も僅かであったと考えられる。よって対象地区は遺跡の縁辺部と推定される。



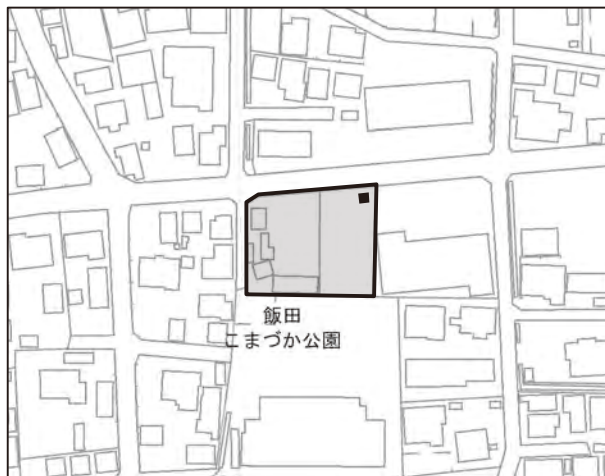
土層断面状況 (試掘坑 1)



土層柱状図

14. 飯田遺跡群

所在地	南区飯田町 810-1、810-2 他
調査期間	平成21年1月8日
時代	弥生、古墳、飛鳥、奈良 平安、鎌倉時代
調査方法	2.6 × 2.5 m 試掘坑1箇所
検出遺構	土坑、小穴
出土遺物	弥生土器、須恵器、灰釉陶器、 山茶碗、常滑、渥美、大平
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



位置図（2500分の1）

調査概要

堆積土層は、上から1層：盛土層、2層：灰色砂層（造成前の水田層）、3層：茶色土層一部ブロック混層（近世の畑）、4層：灰色砂層（中近世水田）、5層：灰黒色土層（弥生包含層）、6層：基盤層（上から灰黄色砂層、灰茶色砂質土層、黄茶色粘土層）、7層：基盤砂礫層（上からこげ茶色砂層、こげ茶色礫層）である。

遺構は、5層に切り込む鎌倉時代の土壇1と小穴2、6層に切り込む弥生時代の土壇1と小穴1が検出された。鎌倉時代の土壇は、下層に円礫を多く含み、山茶碗が多く出土した。弥生時代の土壇は、鎌倉時代の土壇の直下にあり、コゲ茶色の有機質の強い土層で、弥生時代後期の土器が少数出土した。

その他、遺構以外からは奈良時代の須恵器や、平安時代の灰釉陶器が出土した。

以上、弥生時代の土壇は、鎌倉時代の土壇とほとんど重なって検出されており、堆積土層も似ていることから、調査区周辺は、検出された遺構や出土土器から弥生時代から鎌倉時代の複合遺跡と考えられる。



重機掘削状況



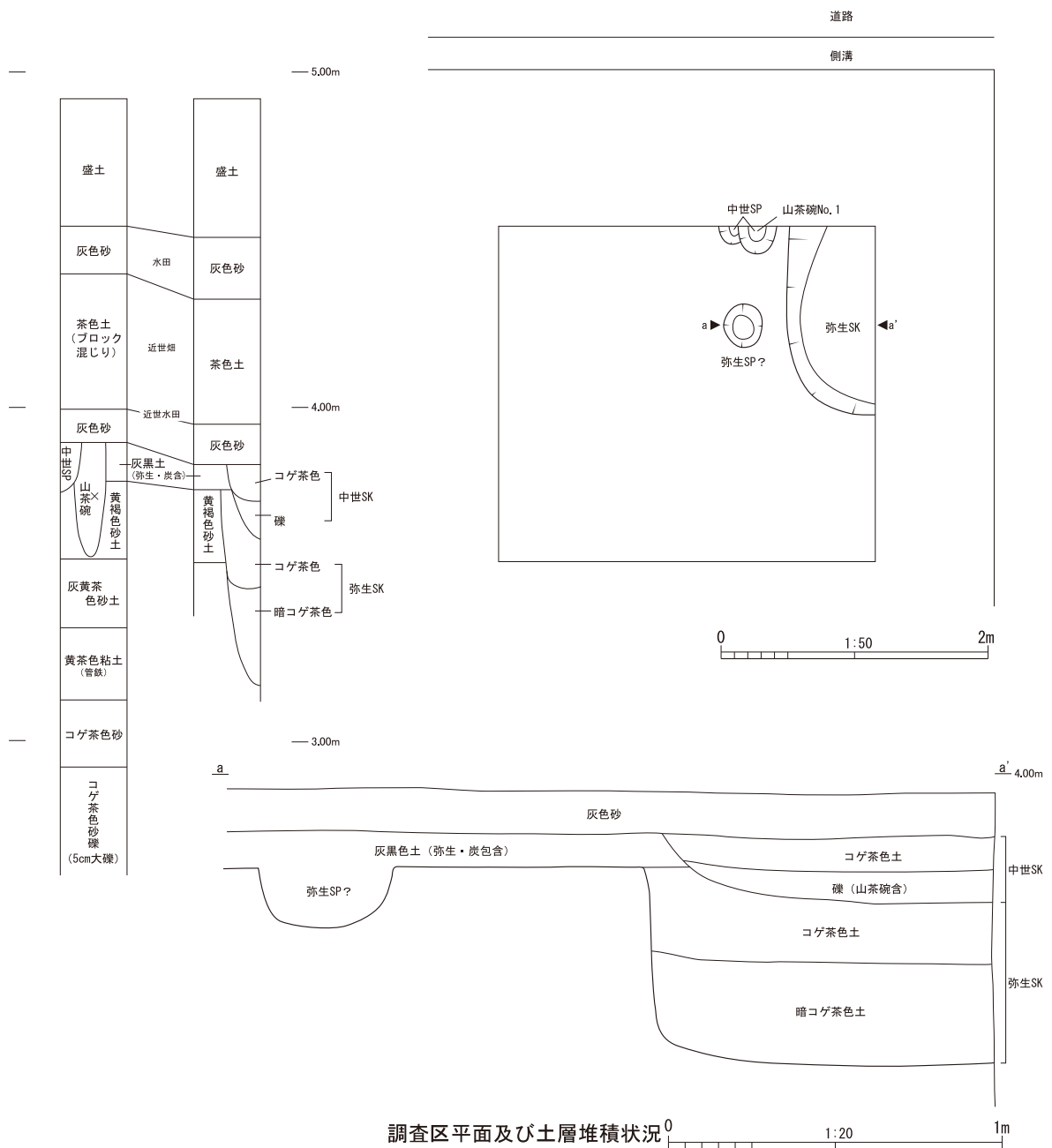
完掘状況



土層断面状況(北壁1)

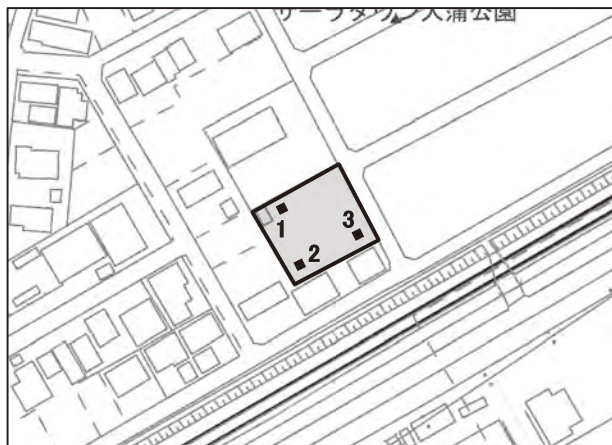


土層断面状況(北壁2)



15. 大蒲町村東Ⅱ遺跡隣接地

所在地	東区大蒲町115-10、115-11
調査期間	平成21年1月21日
時代	奈良、鎌倉、戦国時代
調査方法	2×2m 試掘坑3箇所
検出遺構	井戸、小穴
出土遺物	土師器、須恵器、山茶碗 山皿、土師器質土器
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



位置図（2500分の1）

調査概要

3つの試掘坑を調査したが、基本的な層位はほぼ共通していた。堆積土層は、大きくⅠ～Ⅵ層に区分された。Ⅰ層は上から砕石、土壌改良土、近代の造成土である。近代の造成土は、試掘坑1では茶色の畑土、試掘坑2,3では灰色砂層である。Ⅱ層は近世の水田もしくは湿地性の堆積層で、灰色をした砂質土層である。上部はシルト質、下部は試掘坑3では褐色砂層が存在した。Ⅲ層は、上部のⅢa層とした灰色粘土層、下部のⅢb層とした緑色かかった灰色粘土層の2層に細分される。Ⅲa層は炭酸鉄結石を多く含む層（灰緑色粘土層）で、山茶碗やくの字口縁内耳鍋などが出土した。Ⅲb層は、炭を含む締まった層である。試掘坑3では、Ⅲa層からⅢb層に切り込む小穴が認められた。Ⅳ層は、黒灰色粘土層であり、古代の包含層である可能性はあるものの、遺物は出土しなかった。試掘坑1ではこの層を切って中世の井戸が掘り込まれていた。井戸の底には直径10cmほどの丸太材を四角形に置いた井戸枠が存在した。井戸底中央の水溜の施設は、確認されなかった。Ⅴ・Ⅵ層は基盤層で、Ⅴ層は灰色シルト層、Ⅵ層は砂礫層もしくは締まった細砂層である。いずれの試掘坑でも、遺跡の基盤を形成するこれらの層は、大蒲村東Ⅱ遺跡の遺跡が立地した地点よりも相当深いところで検出された。

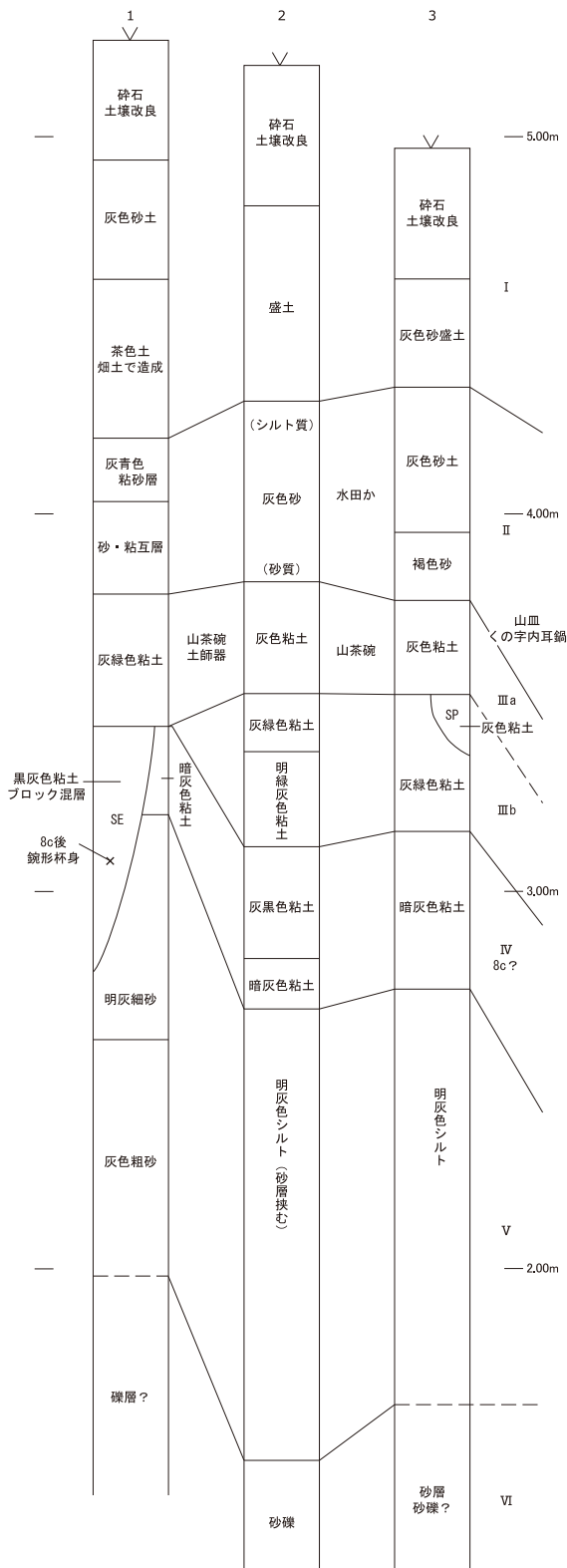
堆積土層から試掘坑1あたりは、古代～中世においては湿地への落ち際、試掘坑2,3は湿地内にあると考えられる。遺構は、試掘坑1では中世前半と推定される井戸、試掘坑3では中世後半の小穴が検出された。

出土遺物は、奈良時代(8世紀)の須恵器(鏡形有台坏身)・同土師器小片、鎌倉時代(13世紀)の山茶碗・山皿、戦国期のくの字内耳鍋などが発見された。

試掘調査の結果、開発予定地は遺跡内と考えられるが、北西部は中世の集落内、南側は集落縁辺部の湿地と考えられる。



重機掘削状況



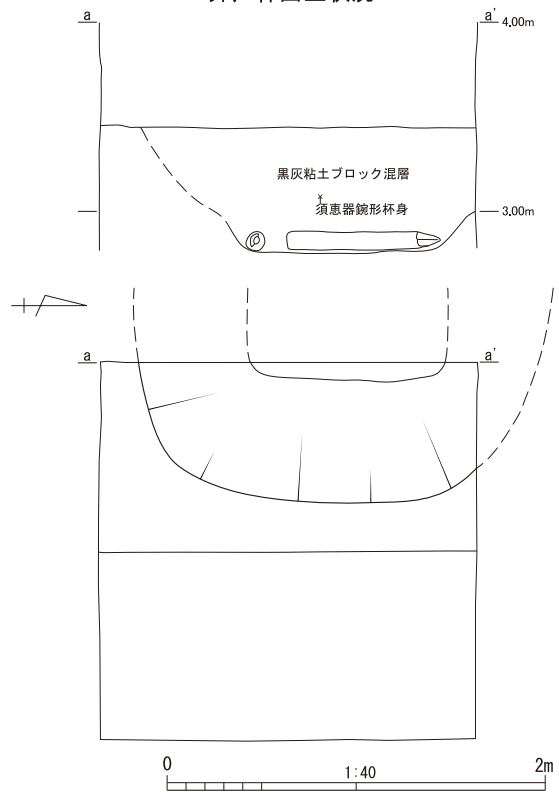
土層柱状図



土層断面状況 (試掘坑 1)



井戸棗出土状況



井戸推定図

16. 万斛遺跡

所在地	東区中郡町字橋爪東 166
調査期間	平成21年 2 月 17 日
時 代	鎌倉時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 3 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	山茶碗、中世土師器
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



位置図 (2500 分の 1)

調査概要

基本層位は、上から順に 1 層：灰褐色土（耕作層）、2 層：褐色砂質土（古い耕作層）、3 層：茶褐色土（中世の包含層）、4 層：明褐色砂質土（良く締まった層）、5 層：灰色砂質土（褐色化、砂層化、粘質化した部分あり）、6 層：礫層（砂層を含む＝基盤層）

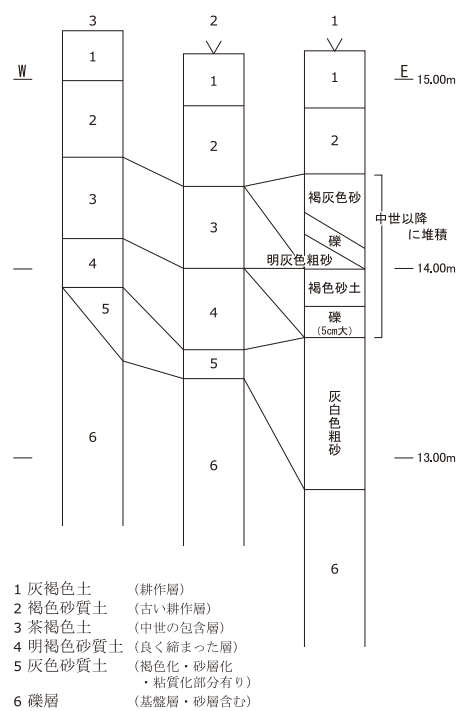
試掘坑 1 は、微高地から旧河川もしくは湿地への落ち際にあたり、中世以降の堆積層は存在するものの、遺構や遺物は検出されなかった。試掘坑 2, 3 の位置は、基盤層をなす礫層の上にあるが、礫層自体は東に向かって低くなっている。この 2 つ試掘坑では中世前半の包含層 (3 層) が認められたが、炭化物等の有機物や焼土片はほとんど含まれていない。また両試掘坑では遺構は一切検出されず、出土遺物もわずかであった。

遺物は、試掘坑 2 で山茶碗の口縁部が 1 点、試掘坑 3 では山茶碗底部が数点、土師器鍋体部片が 1 点出土した。

調査結果から、基盤をなす礫層が東から西に向かって高くなっており、対象地の西側には微高地が存在したと推定される。試掘坑 2, 3 のあたりは、鎌倉時代の集落遺跡の縁辺部にあたり、試掘坑 1 のあたりは地形的に低く、すでに遺跡から外れた場所と考えられる。



土層断面状況 (試掘坑 1)



- 1 灰褐色土 (耕作層)
- 2 褐色砂質土 (古い耕作層)
- 3 茶褐色土 (中世の包含層)
- 4 明褐色砂質土 (良く締まった層)
- 5 灰色砂質土 (褐色化・砂層化・粘質化部分有り)
- 6 礫層 (基盤層・砂層含む)

土層柱状図

17. 二俣城跡

所在地	天竜区二俣町二俣1034
調査期間	平成21年2月23～26日
時代	古墳、戦国時代
調査方法	1×17m（総延長） トレンチ3箇所
検出遺構	石垣、礎石
出土遺物	須恵器、中世瓦、かわらけ、 土師質土器、近世陶器
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図（2500分の1）

調査概要

二俣城の本丸及び周辺の郭は浜松市指定文化財となっており、現状は城山公園として保全が図られている。本丸は公園整備時に若干の改変が加えられているものの、天守台や土塁、石垣などが良好に残存している。今回の調査では天守台の根元付近(1トレンチ)、天守台南側の平坦面(2トレンチ)、本丸中仕切門の推定位置(3トレンチ)の3箇所にとレンチを設定した。

1 トレンチは天守台の根石確認を目的に設置した。二俣城の天守台北辺には天守へ登るための石段が設けられている。トレンチはこの石段の登り口と天守台北東隅を取り囲むように掘削した。その結果、現在露出している石積の下に、さらにもう一段分石積が存在することが明らかになった。土層断面を観察した結果、天守台の周囲は山土による盛土が全面的に施されており、公園整備時に本丸全体を盛土している可能性が高いと考えられる。遺物は陶器片が出土した。

2 トレンチは櫓等の確認を目的に設置した。トレンチを設定した場所は、かつて稲荷神社の社殿が存在し、解体時に埋め込まれた瓦や砕石により荒れた状態であった。表土を除去したところ、15～40cm大の円礫を配置した遺構が見つかった。大型の円礫は建物の礎石であった可能性があるが、詳細は明らかにできず、城郭に伴うものか否かも確認できなかった。稲荷神社の旧社殿の礎石であった可能性も残されるので、今後面的な調査が必要であると考えられる。遺物はかわらけと土鍋片が出土した。

3 トレンチは本丸中仕切門の存在の有無と、その構造解明を目的に設置した。調査以前から多数の瓦片が散乱しており、何らかの建造物の存在が想定できた。現状では東西方向に土塁が延びており、一部に石垣が露出している。トレンチは南面する石垣に沿って設定し、石垣の延長部分の確認と門の礎石の把握に努めた。その結果、想定どおり露出している石垣と一連の石垣を検出し、これに接して門の礎石が出土した。礎石は東西2つが見つかり、1間の大きさであったことが判明した。また、東の礎石から南と西に半間離れた位置からも礎石と思われる石が出土したが、位置関係から門跡に伴うものか否か明らかにできなかった。南側の礎石の検出も行ったが、今回の調査では確認に至らなかった。遺物は丸瓦や平瓦など瓦片の他、陶器片が出土した。

今回の試掘調査の結果、二俣城の遺構は良好に残存していることが明らかになった。今後はさらなる城郭の実態解明のため、より詳細な調査が必要であると考えられる。

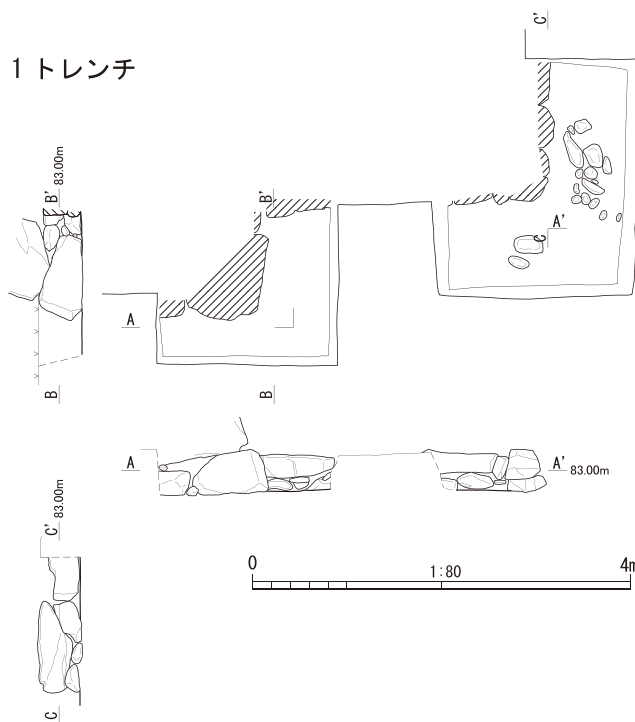


完掘状況 (1 トレンチ)

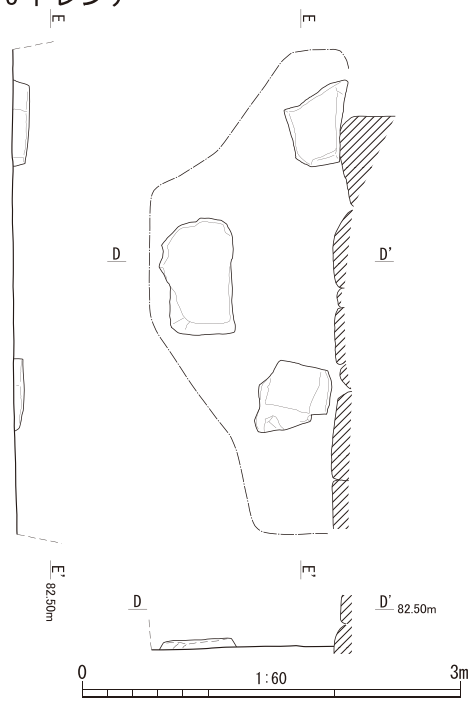


完掘状況 (3 トレンチ)

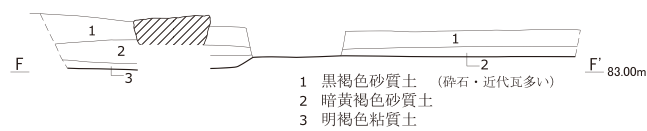
1 トレンチ



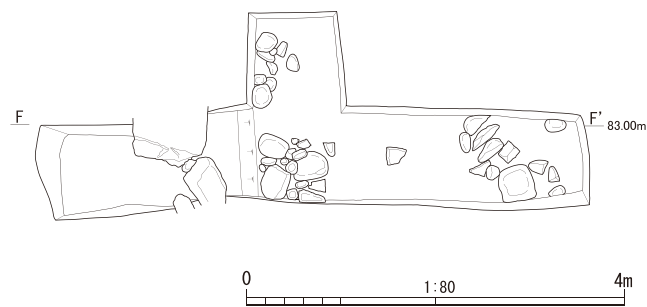
3 トレンチ



2 トレンチ



- 1 黒褐色砂質土 (碎石・近代瓦多い)
- 2 暗黄褐色砂質土
- 3 明褐色粘質土



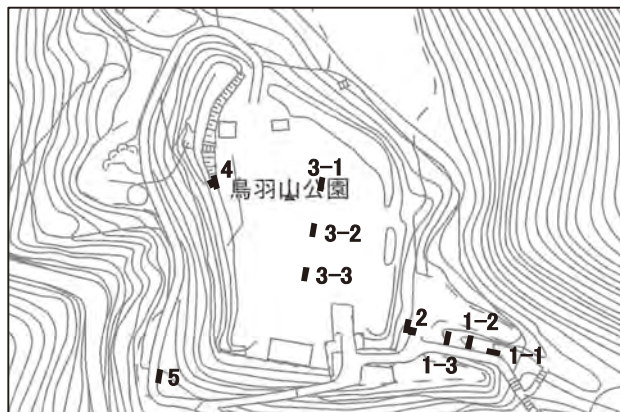
トレンチ実測図



調査状況

18. 鳥羽山城跡

所在地	天竜区二俣町二俣2364
調査期間	平成21年3月2～5日
時代	飛鳥、奈良、鎌倉時代
調査方法	約1m幅 トレンチ9箇所
検出遺構	石垣、礎石建物、土塁
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木 一有



位置図（2500分の1）

調査概要

1 トレンチは、大手道の北側3箇所を設定したトレンチである。すべての調査区において大手道北側斜面に築かれた石垣を確認した。1-1 トレンチでは、北側斜面東端に近い部分の基底石を検出した。1-2 トレンチでは、表土下1.5mにわたり、石垣が埋没している状況が確認できた。1-3 トレンチでは、石垣の基底とともに、石垣に併行して東西方向に並べられた石列を確認した。この石列は、側溝護岸の可能性もある。大手道の幅は、南側に遺存する石垣から計測して、6m以上あることが判明した。2 トレンチは、本丸東側の石垣裾に設定したトレンチである。表土直下で地山を検出した。このことから、本丸東側の石垣は基底部分まで露出していることが判明した。3 トレンチは、本丸中央部の3箇所を設定したトレンチである。すべての調査区において表土下2m以上にわたり盛土がなされていることを確認した。盛土は砂混じりの円礫を主体としており、水はけをよくするための造成の可能性もある。3 トレンチの調査状況から、本丸中央部には遺構が遺存していないことが明確になった。4 トレンチは、本丸北西側の土塁と本丸平坦面において設定したトレンチである。1974・75年調査において確認されていた礎石の遺存状況と、土塁の内部構造を確認した。調査区において3石分の礎石が良好に遺存していた。土塁には築造当初の盛土部分と崩落した流土の堆積が認められた。5 トレンチは、本丸西南隅の腰巻石垣の基底に設定したトレンチである。現地表下50cmにおいて地山を確認し、1段分の石垣石列が埋没している状況が明らかになった。

遺物は、すべてのトレンチにおいて出土しなかった。

今回の調査で、鳥羽山城の石垣を包括的に精査することができた。石垣の技法から、堀尾氏居住時代（1590～1600年）の遺構と捉えられる。幅6mをこえる大手道の規模は、この規模の軍事施設としては破格であり、鳥羽山城の性格を考える上で貴重な成果があがったといえる。



重機掘削状況



調査状況



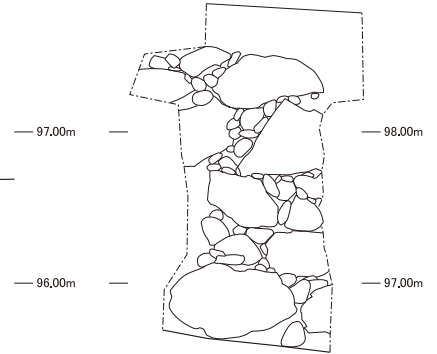
完掘状況(1-2 トレンチ)



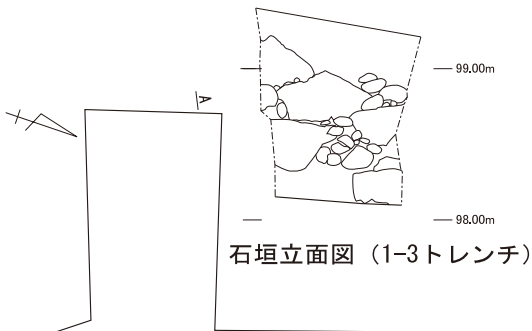
完掘状況(5 トレンチ)



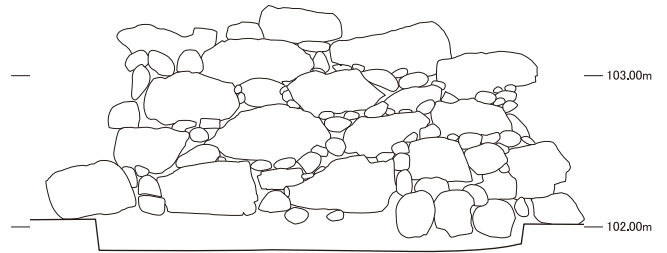
石垣立面図 (1-1トレンチ)



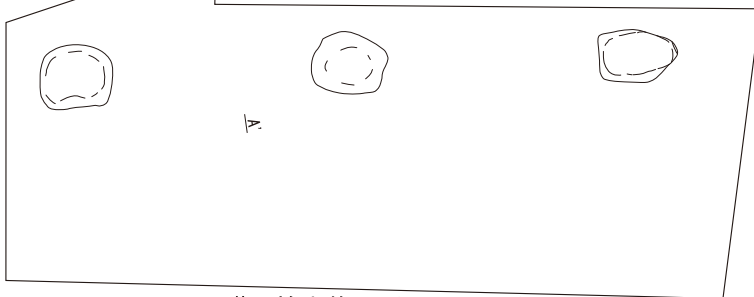
石垣立面図 (1-2トレンチ)



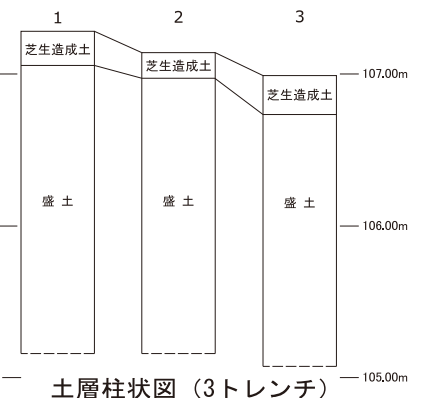
石垣立面図 (1-3トレンチ)



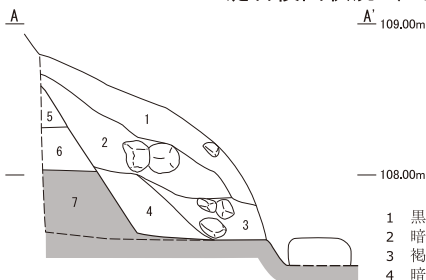
石垣立面図 (2トレンチ)



礎石検出状況 (4トレンチ)

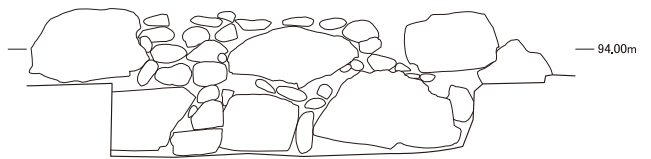


土層柱状図 (3トレンチ)

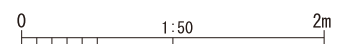


土層断面図 (4トレンチ)

- 1 黒褐色粘質土 (表土)
- 2 暗褐色粘質土 (流土)
- 3 褐色粘質土 (流土)
- 4 暗黄褐色粘質土 (流土)
- 5 黄褐色粘質土 (盛土)
- 6 暗褐色粘質土 (盛土)
- 7 黄褐色粘質土 (地山)



石垣立面図 (5トレンチ)



19. 井下石遺跡

所在地	浜北区内野 1778-1
調査期間	平成21年 4月13日
時代	鎌倉、室町時代
調査方法	2×2 m 試掘坑 1箇所 1×2 m 試掘坑 1箇所
検出遺構	なし
出土遺物	山茶碗、土師質土器、陶器、 かわらけ
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500分の1)

調査概要

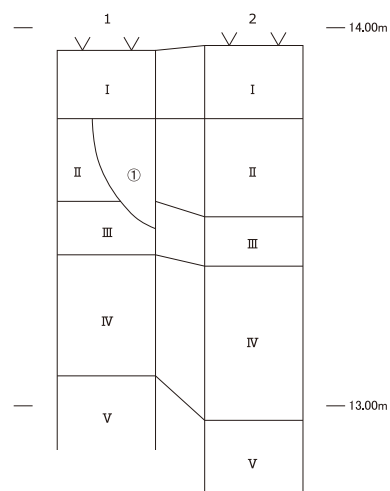
対象地は赤門上古墳直下の平野上である。試掘坑1と試掘坑2の土層堆積状況はおおむね共通しており、住宅建築時の整地層の下には、褐色のシルトの堆積が認められた。また、下層には小粒の円礫を含むやや粘性の強い土の堆積が確認できた。現地表面より約1.0 m下には砂礫層が存在し、この層が基盤層と考えられる。砂礫層の標高は試掘坑1と比較して、試掘坑2の方が低かったことから、北から南に向かって傾斜した地形と考えられる。

試掘坑を精査した結果、遺構は確認できなかった。遺物はⅠ～Ⅲ層中から山茶碗、土師質土器、かわらけ、中近世陶器の破片が出土した。また、対象地周辺の畑には遺物が散布しており、南側を中心に灰釉陶器や青磁の破片が採集できた。

今回の試掘調査の結果、遺構と明確な遺物包含層の存在は確認できず、遺物が出土したもののいずれも小破片であり、破断面の摩滅が著しいことから、周辺から流入したものと思われる。このことから、対象地は遺跡内では無く、その外周部に当たると考えられる。



土層断面状況 (試掘坑 2)



- Ⅰ 暗灰褐色シルト (住宅建築時の整地層・遺物含む)
- Ⅱ 茶褐色シルト (旧表土・遺物含む)
- Ⅲ 暗褐色シルト
- Ⅳ 灰褐色粘質土 (礫少量含む)
- Ⅴ 暗褐色砂礫土 (基盤層)
- ① 暗黄褐色シルト (近代の掘り込み)

土層柱状図

20. 木船廃寺跡

所在地	東区和田町 315
調査期間	平成21年 4 月 18 日
時代	奈良、平安、戦国時代
調査方法	1.5 × 1.5 m 試掘坑 3 箇所
検出遺構	小穴、溝
出土遺物	須恵器、布目瓦、土師質土器
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



位置図 (2500 分の 1)

調査概要

試掘坑 1～3 では、いずれも盛土層の下に旧耕作層があり、その下に遺物を含む層が認められた。基盤層は砂層であり、試掘坑 3 が最も高く、標高 4.5 m、試掘坑 1, 2 が 4.1～4.2 m である。基盤層が高い試掘坑 3 では、耕作層直下において深く掘りこまれた大型の遺構が検出された。この遺構の上層には古代の瓦が充満していた。大型遺構は、瓦の堆積状況から、南西～北東方向の深い溝と考えられる。瓦以外に出土した遺物はないが、年代は、覆土の状況から中世以降と推定される。試掘坑 1 は、標高 4.1～4.4 m に中世の造成土と考えられる灰色粘土と青灰色粘土のブロック混層が認められる。また、基盤層に掘り込まれた小穴も検出された。小穴からは須恵器が出土しており、古代の遺構の可能性もある。試掘坑 2 では標高 4.4 m まで灰色粘土層が厚く堆積しており、その下に灰色粘土層が存在した。灰色粘土層には土師器小片が含まれており、古代の包含層の可能性もある。

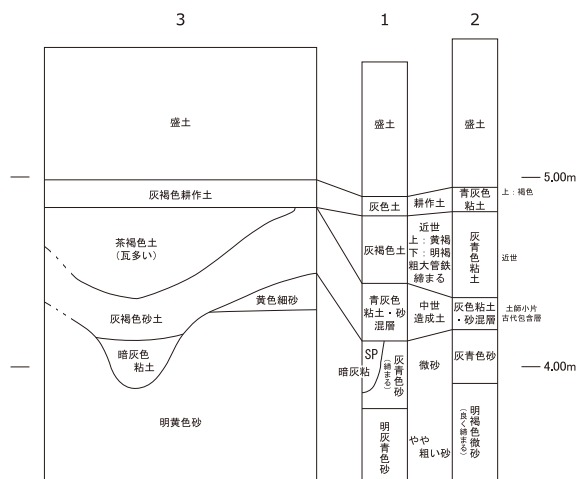


重機掘削状況



土層断面状況 (試掘坑 3)

調査の結果、対象地は奈良時代から中世の遺跡であることが確認された。遺構には、中世の大型の溝、奈良時代の小穴があり、遺物には奈良～平安時代の布目瓦、奈良時代の須恵器 (甕・ハソウ)、平安時代の灰釉陶器、戦国期のくの字内耳鍋がある。



土層柱状図

21. 若身城山城跡

所在地	天竜区春野町堀之内字若身 1067-10、1067-12
調査期間	平成21年4月27日
時代	—————
調査方法	1×20m トレンチ1箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木 一有



位置図 (2500分の1)

調査概要

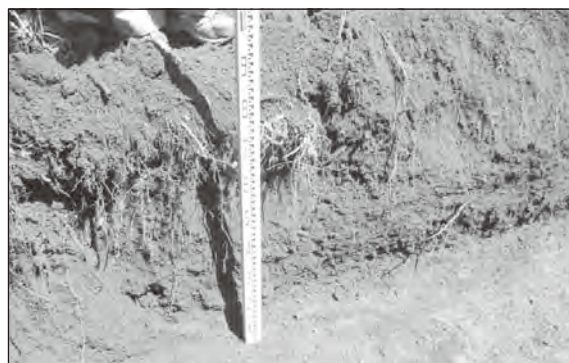
開発予定地は、既設のテレビ中継局舎が立ち並び、整地がなされていた。地下埋設物も多く、攪乱が著しい。表土（黒褐色粘質土）の直下に地山が認められた。地山は風化が顕著な岩盤、もしくは赤褐色粘土である。地山直上において精査を行ったが、遺構は全く確認できず、遺物も全く出土しなかった。

今回の調査では、城跡の痕跡を示す遺構、遺物は全く認められなかった。攪乱が顕著であったことに加え、調査対象地は既設の中継局が立ち並び、整地されていたことも一因であろう。開発予定地においては、遺構が存在したとしても、既に破壊されているものと判断できる。

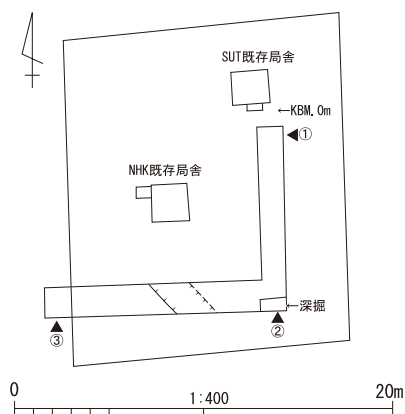
なお、城跡の遺構の可能性のある平坦面は開発予定地の周囲に広がっている。この平坦面を曲輪と捉えるなら、周囲の未開発地には遺構・遺物が埋没している可能性が考えられる。



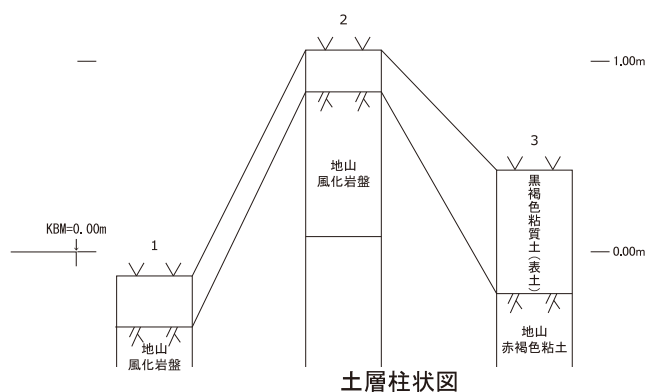
重機掘削状況



土層断面状況 (測点3)



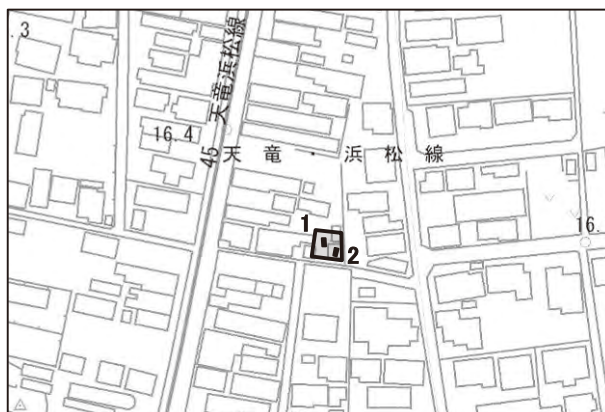
調査位置平面図



土層柱状図

22. 笠井遺跡

所在地	東区笠井町 176-1
調査期間	平成21年 5月14日
時代	古墳、江戸時代
調査方法	1.5 × 1 m 試掘坑 2箇所
検出遺構	なし
出土遺物	土師器、陶器
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500分の1)

調査概要

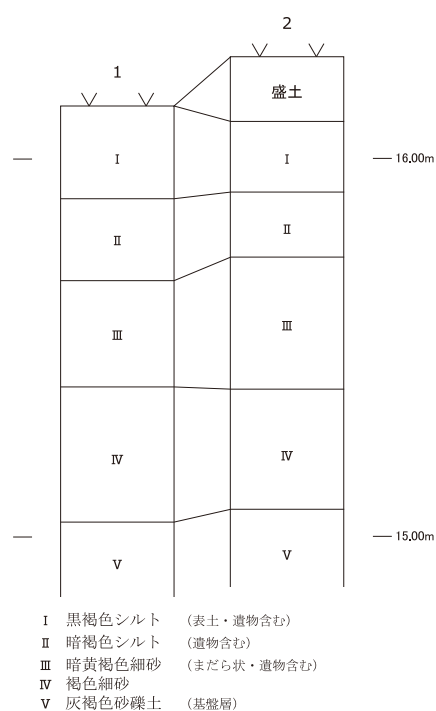
対象地は笠井遺跡 2次調査区から北東に約 300 mの笠井街道沿いに位置する。試掘坑 1と試掘坑 2の土層堆積状況は共通しており、表土である耕作土の下には、褐色のシルトないし細砂の堆積が認められた。下層に行くに従い砂質が強くなる傾向が看取できた。また、現地表面より約 1.1 m下には円礫を多く含む砂礫層が存在し、この層が基盤層と考えられる。砂礫層の標高は笠井遺跡 2次調査区では13.4 m前後であったのに対し、今回の調査地点では15m前後と 1.6 mほどの比高差があった。

試掘坑を精査した結果、遺構は確認できなかった。遺物はⅠ～Ⅲ層中から土師器や近世陶器の破片が僅かに出土した。

今回の試掘調査の結果、遺構と明確な遺物包含層の存在は確認できず、遺物が出土したもののいずれも小破片であり、破断面の摩滅が著しい。このことから、対象地における遺跡は後世の耕作や宅地の造成により消失していると考えられる。



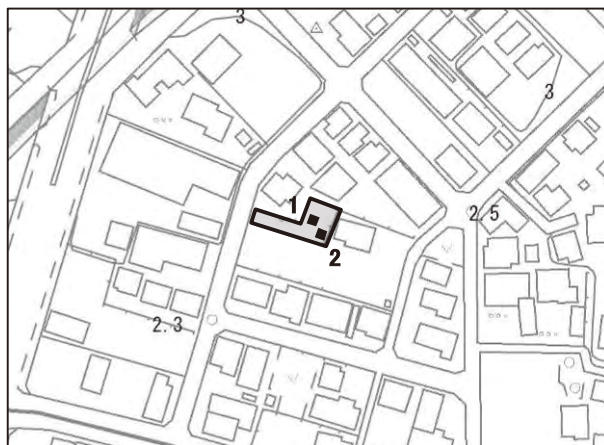
土層断面状況(試掘坑 2)



土層柱状図

23. 下山田遺跡

所在地	中区西伊場町 2568-7
調査期間	平成21年 5 月 15 日
時 代	弥生、古墳、奈良、戦国時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 2 箇所
検出遺構	遺物包含層、小穴、溝
出土遺物	弥生土器、土師器、須恵器 かわらけ
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500 分の 1)

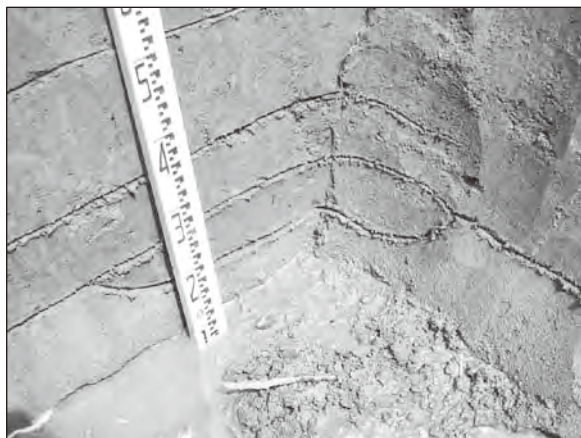
調査概要

対象地は梶子北遺跡や中村遺跡と同じ第一砂堤列上に存在すると考えられる。三方原台地直下には平野が広がり、一帯は宅地化する以前は主に水田として利用されていたが、対象地の周囲は蜜柑園となっていたようである。

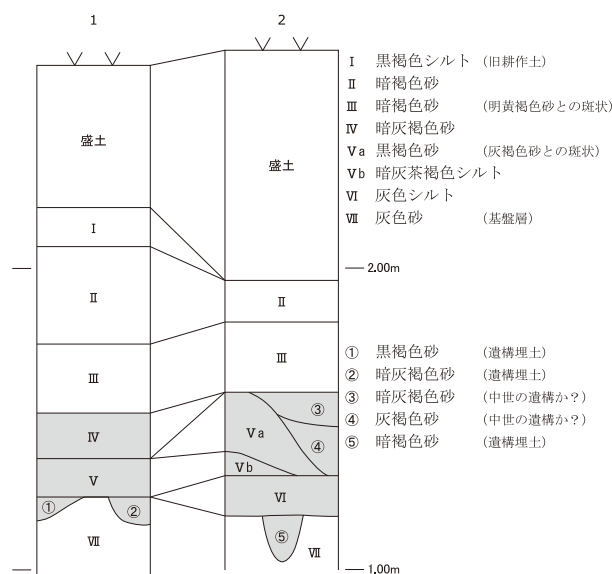
調査地内は、0.5～0.7 mの厚さで全面的に盛土が行われていた。試掘坑 1 では盛土の直下に旧耕作土である黒褐色シルト層を確認したが、試掘坑 2 では確認できなかった。試掘坑 2 には攪乱が全面的に及んでおり、旧耕作土層も削り取られたものと思われる。旧耕作土の下には暗褐色砂が堆積していた。遺物包含層は現地表面下 1.15 m 付近で確認した。包含層上面の標高は試掘坑 1・2 ともにほぼ同様であったが、試掘坑 1 では包含層は水平に堆積していたのに対し、試掘坑 2 では西から東に向かって傾斜していた。これが遺構か自然地形かは明らかにできなかった。また、現地表面下 1.4～1.5 m では、基盤層である灰色砂層を確認した。壁面を精査した結果、基盤層に掘り込まれた遺構の断面を検出した。

試掘坑を精査した結果、そのいずれからも遺物が出土した。試掘坑 1 からは弥生土器、土師器、かわらけが出土したほか、試掘坑 2 からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

今回の調査で遺物包含層と遺構が明確に確認でき遺物も出土したことから、対象地内に遺跡が存在することが明らかになった。



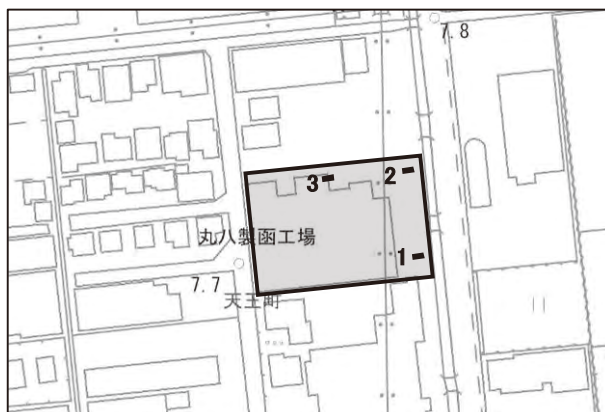
遺構検出状況(試掘坑 1)



土層柱状図

24. 天王遺跡

所在地	東区天王町1985
調査期間	平成21年6月9日
時代	—————
調査方法	1 × 2.5 m 試掘坑3箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木 一有



位置図 (2500分の1)

調査概要

土層堆積状況 3箇所の試掘坑ともに近似した土層の堆積状況がみられた。標高7.5mから標高7.0m付近まで盛土がなされ、その下には灰色粘土を主体とした湿地性の堆積がみられる。基盤層は標高5m前後まで堆積した灰色の砂であり、湧水が著しい。

灰色粘土層の間には、薄い黒色粘土層の堆積がみられる。有機物の分解が進行していない地層である。

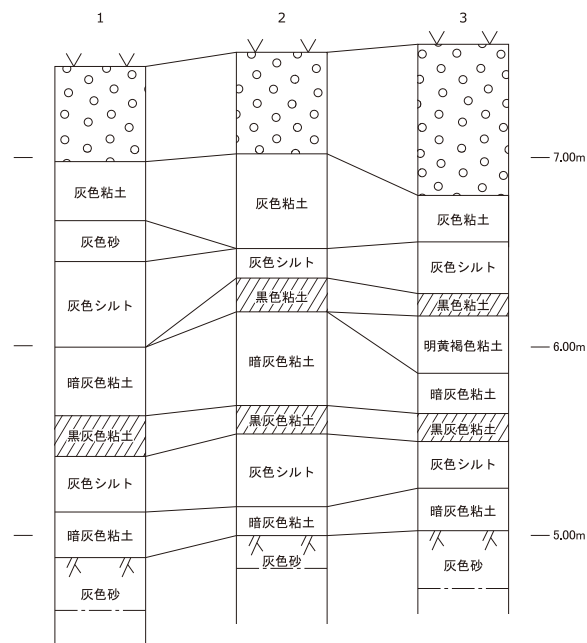
遺構 試掘調査地において、遺構は全く確認できなかった。人工的な層位の乱れも認められない。

遺物 今回の調査では、遺物は全く出土しなかった。

小結 今回の試掘調査では、基盤砂層の上に堆積する粘土層が確認できた。層位の乱れや遺構などはみられず、湿地性の堆積物と推定できる。調査対象地では、明確な人為的活動の痕跡はみられなかった。今回の調査対象地は遺跡ではないと捉えられるが、この地域は微地形の起伏が顕著であることから、隣接地に遺構・遺物が埋没している可能性は十分に考えられる。



土層断面状況 (試掘坑2)



土層柱状図

25. 村裏遺跡

所在地	南区東若林町1117
調査期間	平成21年6月16日
時代	古墳、戦国時代
調査方法	2×2m 試掘坑4箇所
検出遺構	遺物包含層、溝
出土遺物	須恵器、土師質土器、 かわらけ、陶器
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500分の1)

調査概要

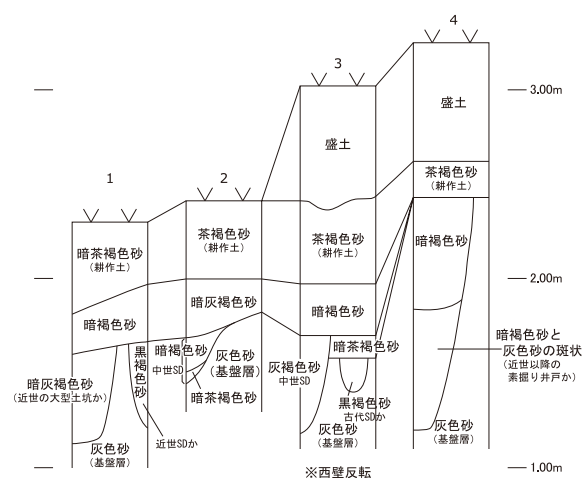
対象地は可美地区の砂堤列上に位置する。現在は全面的に宅地化されているが、かつては砂丘の高まりが存在し、一面松林であった。調査地内は、南側の標高が高く、北側に向かって傾斜した地形であった。試掘坑1は後世の攪乱が著しく、基盤砂層より下に及んでいた。試掘坑2は砂丘の斜面に当たり、基盤砂層が北側に向かって傾斜している状況を確認できた。また、傾斜変換点付近では中世末以降の溝を検出した。試掘坑3では、現地表面下0.6mまで盛土がされており、盛土以下の旧耕作土の標高は試掘坑1,2とほぼ同等であった。現地表面下1.3mでは中世の遺物を含む遺物包含層を確認し、この層から掘り込まれた溝を検出した。また、基盤砂層に掘り込まれた小穴も検出したが、時期を明らかにできなかった。試掘坑4は後世の攪乱が大きく及んでおり、明確な遺構は検出できなかった。この地点では基盤砂の標高が高く、他の試掘坑と比較して0.6～0.7mほど高かった。現状でも対象地東側の住宅付近が、周囲と比較して高くなっている状況を確認できる。

試掘坑を精査した結果、そのいずれからも遺物が出土した。古代の須恵器が僅かに含まれるが、多くは中世末以降の内耳鍋、かわらけ、陶器などであった。

今回の試掘調査の結果、遺物包含層と遺構を確認し遺物も出土したが、主体は中世末以降であった。中世以前の確実な遺構が無いのは、後世の造成や耕作等により消失したと考えられる。



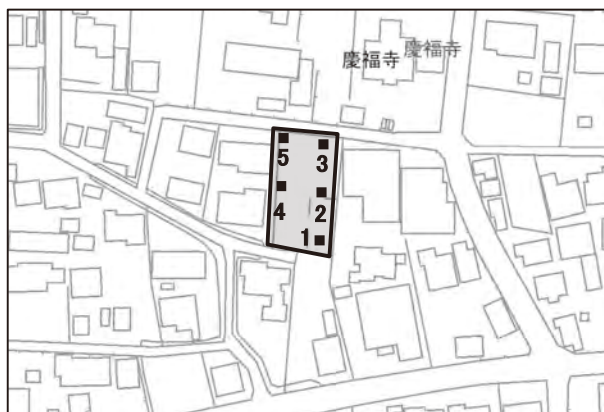
遺構検出状況(試掘坑2)



土層柱状図

26. 村内遺跡隣接地

所在地	南区三和町 253, 254
調査期間	平成21年 8 月 3 日
時 代	弥生、古墳、奈良、鎌倉時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 5 箇所
検出遺構	溝、土坑、小穴
出土遺物	土師器、須恵器、山皿
特記事項	なし
調査担当	鈴木 一有



位置図 (2500 分の 1)

調査概要

土層堆積状況 5 箇所の試掘坑のうち、南東側の試掘坑 1, 2 と北西側の試掘坑 3 ~ 5 でそれぞれ異なる状況が確認できた。試掘坑 1 では、近世以降の盛土と捉えられる暗褐色砂質土 (2 層)、茶褐色粘土 (3 層) の下に、灰色砂質土が堆積していた。この層には、大量の有機物が含まれ、鎌倉時代の山皿が出土した。基盤層は灰色砂層 (5 層) であり、その下層には礫混じりの粗砂が確認できた。試掘坑 2 でも近似した土層堆積状況がみられた。試掘坑 3 ~ 5 では、盛土と推定できる茶褐色粘土 (3 層) の下に、硬く締まった明黄褐色粘土 (4 層) が堆積していた。この層において、弥生時代後期もしくは古墳時代前期の遺構が掘り込まれている。層の色調が明るいことから遺構の平面検出は比較的容易である。基盤層の状況は、試掘坑 1 とすべて同じである。

遺構 試掘坑 3 ~ 5 において 明黄褐色粘土 (4 層) を掘り込んだ遺構が認められた。遺構内には、暗紫褐色粘土もしくは下層に灰色粘土が堆積しており、識別は容易であった。

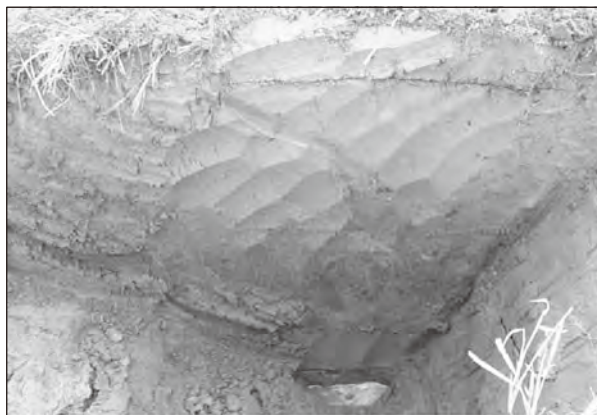
遺物 試掘坑 1, 2, 4, 5 において遺物が出土した。試掘坑 1 では、基盤砂層直上の灰色砂質土中から鎌倉時代の山皿が出土している。出土量が多かったのは試掘坑 4 である。遺構検出面である明黄褐色粘土 (4 層) 直上や遺構内から、弥生土器もしくは土師器がまとまって出土した。

小 結 今回の試掘調査では、基盤砂層の上に堆積する明黄褐色粘土 (4 層) と、この層を掘り込んでいる弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が確認できた。明黄褐色粘土 (4 層) が確認できたのは試掘坑 3 ~ 5 であり、この範囲に遺構が高密度で分布していると想定できる。村内遺跡の範囲が、従来知られていた部分に加えて北東側にさらに広がることが明確になった。

いっぽう、基盤砂層の直上に有機物を多量に含む灰色砂質土の堆積が認められた試掘坑 1 の状況は、この地が沼地などの湿地環境であったことをうかがわせる。下層において鎌倉時代の山皿が出土したことから、比較的古い時期から湿地が展開していた可能性が指摘できる。



重機掘削状況



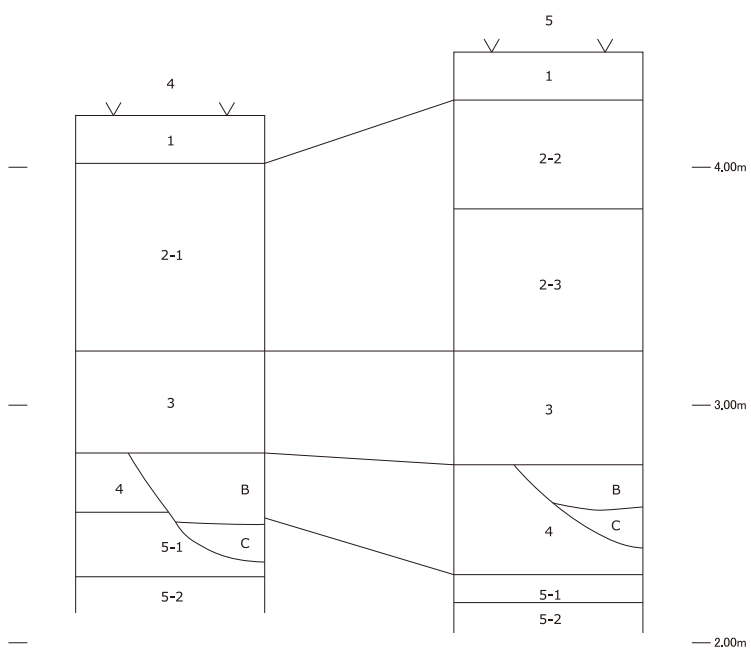
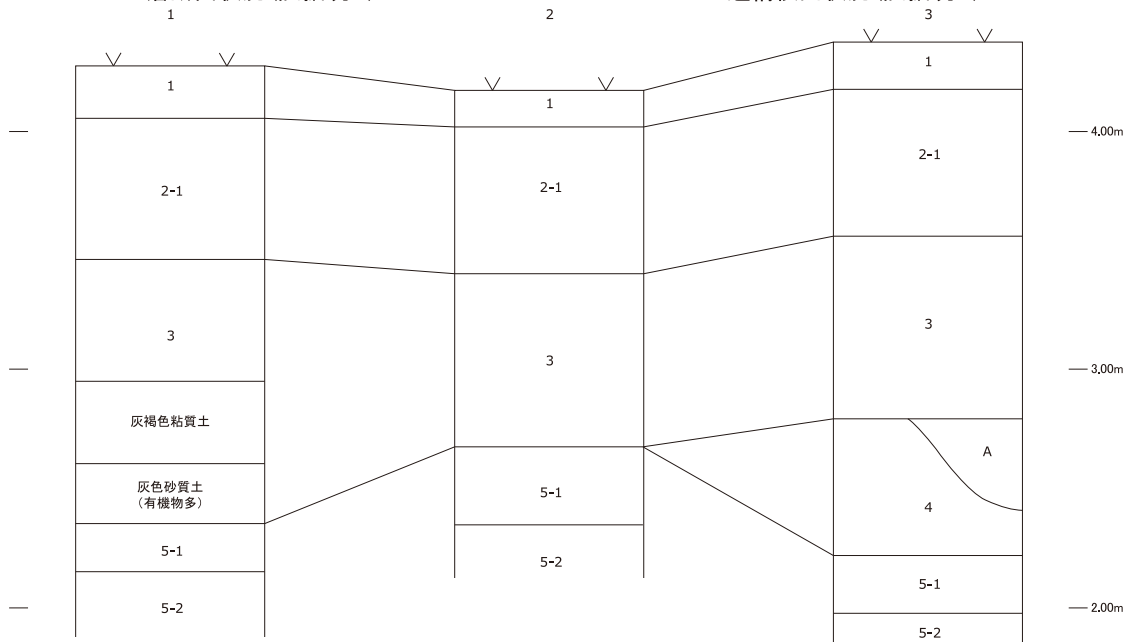
土層断面状況 (試掘坑 2)



土層断面状況(試掘坑3)



遺構検出状況(試掘坑4)



土層柱状図

基本層位

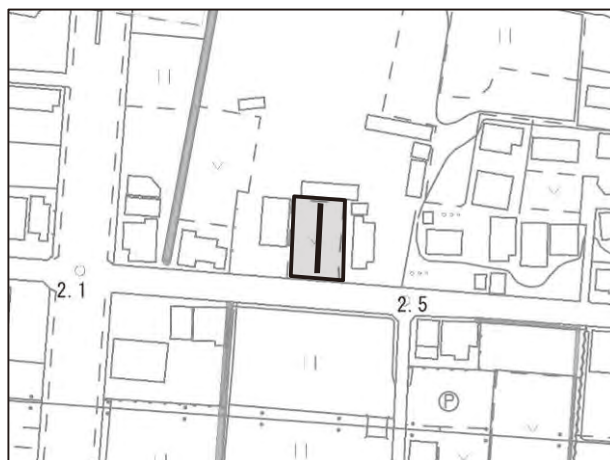
- 1 暗茶褐色砂質土
- 2-1 暗褐色砂質土
- 2-2 褐色砂
- 2-3 褐色砂質土
- 3 茶褐色粘土 (鉄分沈着)
- 4 明黄褐色粘土 (遺構検出面・硬い)
- 5-1 灰色細砂
- 5-2 灰色粗砂 (礫混じり)

遺構埋土

- A 灰褐色粘土
- B 暗紫褐色粘土
- C 灰色粘土

27. 井村遺跡

所在地	南区若林町2644-1
調査期間	平成21年8月5日
時代	古墳、奈良、鎌倉、戦国時代
調査方法	1.5 × 22m トレンチ1箇所
検出遺構	遺物包含層、竪穴住居、土坑
出土遺物	土師器、須恵器、山茶碗 土師質土器、かわらけ、陶器
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図（2500分の1）

調査概要

対象地は可美地区北端の砂堤列上に位置する。トレンチは敷地の中央に南北方向に設定した。対象地の現況はほぼ平坦であるが、トレンチ内の土層を観察した結果、基盤砂層の標高が南から北に向かって高くなっている状況が確認できた。基盤砂層の標高はトレンチの南端で約1.4 m、北端で約2.1 mであった。遺跡の位置や北に向かって砂層の標高が上がっていることから、城山遺跡などと同様に第2砂堤列上に立地していると推定できる。土層の堆積状況はトレンチの中央付近を境に南北で異なっており、南側では粘性の強い土が堆積していたのに対し、北側では砂質の強い土が堆積していた。堆積状況から南側を水田として、北側を畑として利用した痕跡と考えられる。

トレンチ内を精査した結果、北端で竪穴住居跡を確認した。住居跡の北側には灰白色粘土で構築されたカマドの痕跡が明瞭に確認できた。また、貯蔵穴と思われる土坑や小穴を検出し、基盤砂層の標高が高い北側を中心に遺構が展開していることが判明した。

遺物はトレンチ内のほぼ全面から出土した。古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器や須恵器が多く、鎌倉時代の山茶碗、戦国時代以降の内耳鍋やかわらけ、播鉢なども少量含まれていた。

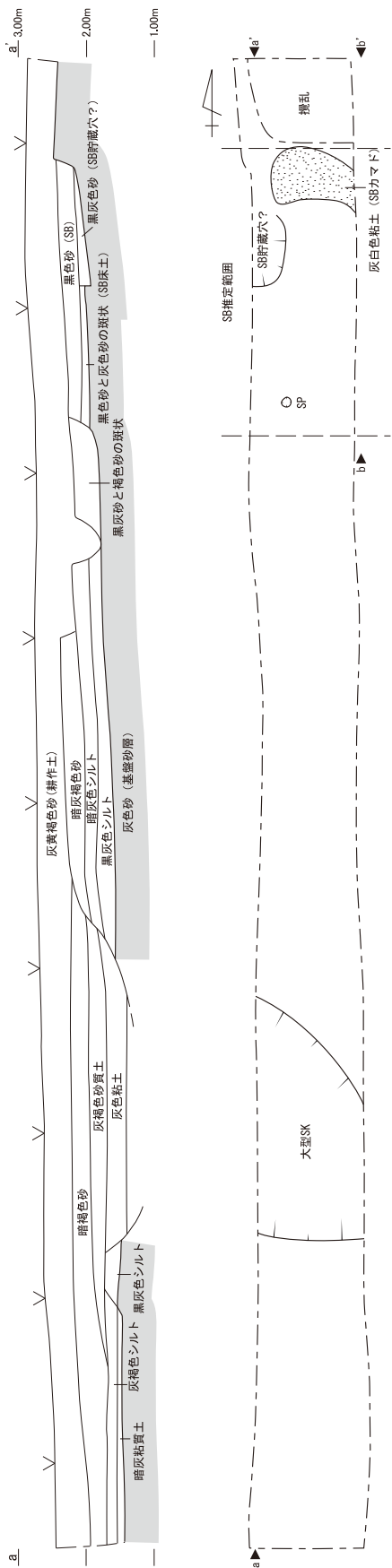
今回の試掘調査の結果、トレンチの全面において遺物が出土し、北側を中心に竪穴住居等の遺構が良好に残存していることが確認できた。このことから、対象地内に遺跡が存在することが明らかになった。



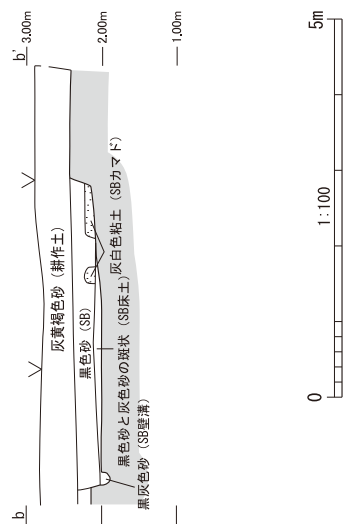
重機掘削状況



調査状況



平面図・土層断面図



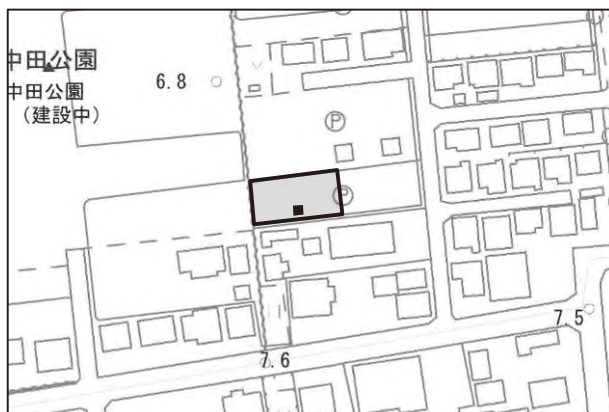
完掘状況



土層断面状況

28. 上新屋遺跡隣接地

所在地	東区中田町94-1他
調査期間	平成21年8月28日
時代	古墳時代
調査方法	2×2m 試掘坑1箇所
検出遺構	遺物包含層
出土遺物	土師器
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500分の1)

調査概要

対象地は、上新屋遺跡1次調査区から北西に約300mの地点である。

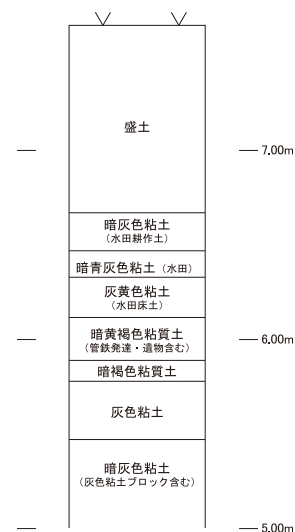
対象地内は約1mの厚さで盛土がなされていた。盛土を撤去すると、旧水田耕作土と思われる暗灰色ないし暗青灰色粘土の堆積を確認した。また、その下には細長い管鉄が認められる灰黄色粘土層があり、水田床土に相当すると考えられる。現地表面から約1.5m下には、管鉄の発達した暗黄褐色粘質土層が、またその下層には、暗褐色粘質土が10cmほどの厚さで堆積していた。これらの褐色粘質土より下層には、灰色粘土と暗灰色粘土が厚く堆積しており、可能な限り掘削を行ったが、基盤礫層の確認には至らなかった。

グリッド内を精査したところ、遺構の存在は確認できなかったが、暗黄褐色粘質土中から古墳時代の土師器片が少量出土した。

今回の試掘調査の結果、遺物を含む層位を確認した。しかしながら、出土した遺物はいずれも小破片であり、遺構の存在も確認できなかったことから、対象地は遺跡の外縁部であると考えられる。遺跡の中心部は従来の想定どおり、東側の芳川沿いに広がっている可能性が高いと考えられる。



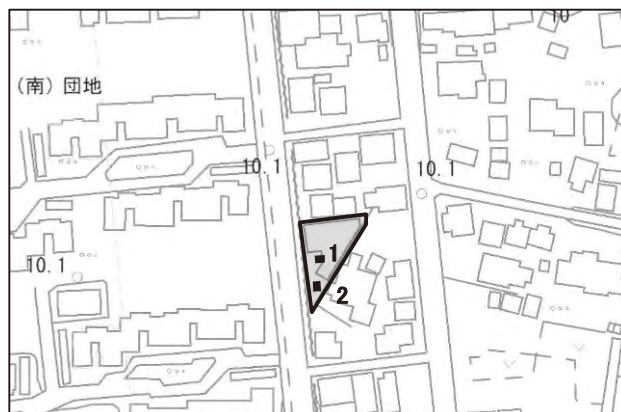
土層断面状況



土層柱状図

29. 西脇前遺跡

所在地	東区市野町 491-2, 492
調査期間	平成21年11月9日
時代	弥生、奈良、鎌倉時代
調査方法	2 × 1.5 m 試掘坑2箇所
検出遺構	遺物包含層
出土遺物	弥生土器、土師器、山茶碗
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500分の1)

調査概要

対象地は、市営鷺の宮団地東側の住宅地に位置する。

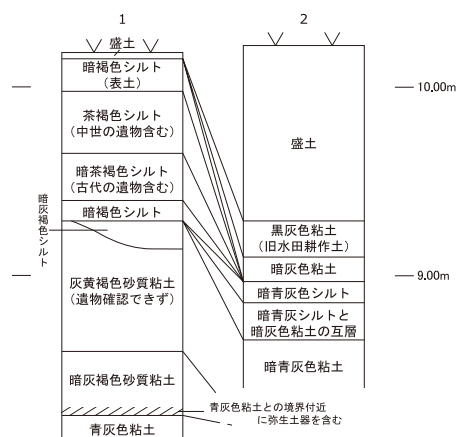
試掘坑1と2は南北に6m程しか離れていないが、地下の土層堆積状況は大きく異なっていた。試掘坑1では、盛土は殆どされておらず、掘削するとすぐに褐色の旧表土が露出した。旧表土以下は管鉄の発達した微高地性の堆積が確認され、比較的安定した地盤が形成されていたと考えられる。現地表面から約1.9m下では青灰色粘土の堆積が確認されたことから、微高地が形成される以前は湿地であったと思われる。また、試掘坑1から南東側に向かって、褐色シルトから青灰色粘土に土層堆積状況が変化していた。試掘坑2は地表から約1mの厚さで盛土がなされていた。盛土の下には黒灰色の旧水田耕作土、その下には青灰色のシルトと粘土が堆積していた。いずれのグリッドも可能な限りの掘削を行ったが、崩落の危険があり基盤層となる砂層や礫層の確認には至らなかった。

試掘坑内を精査したところ、試掘坑1から弥生土器、奈良時代の土師器、鎌倉時代の山茶碗が出土した。このうち弥生土器は下層の青灰色粘土との境界付近で出土しており、微高地が形成される過程で流入したものと考えられる。試掘坑2では遺構・遺物ともに確認できなかった。

今回の試掘調査の結果、対象地の北西側に遺跡が及んでいることが確認できた。南側は盛土前の表土の標高が低く、かつて湿地が広がっていたと考えられる。居住者からの聞き取りでは、過去に対象地の北側は畑として利用されており、南側は水田であったとのことから、試掘坑1付近が微高地と低湿地の境界であったと考えられる。位置関係からみて、今回の調査地点はかつて神畑遺跡としていた遺跡の範囲の南東隅に該当すると思われる。



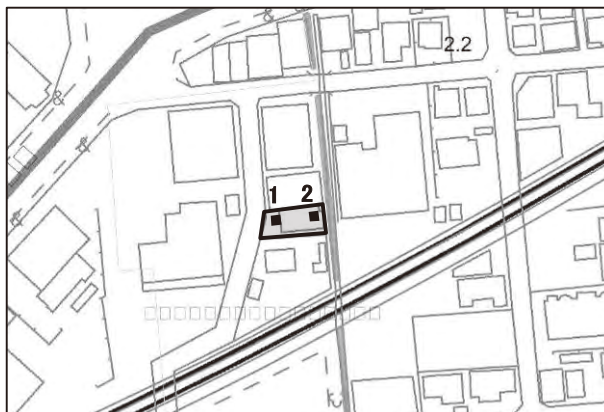
土層断面状況(試掘坑1)



土層柱状図

30. 睨東遺跡

所在地	中区西浅田1丁目1097
調査期間	平成21年12月1日
時代	古墳、奈良、鎌倉時代
調査方法	2×2m 試掘坑2箇所
検出遺構	遺物包含層
出土遺物	土師器、須恵器、山茶碗
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500分の1)

調査概要

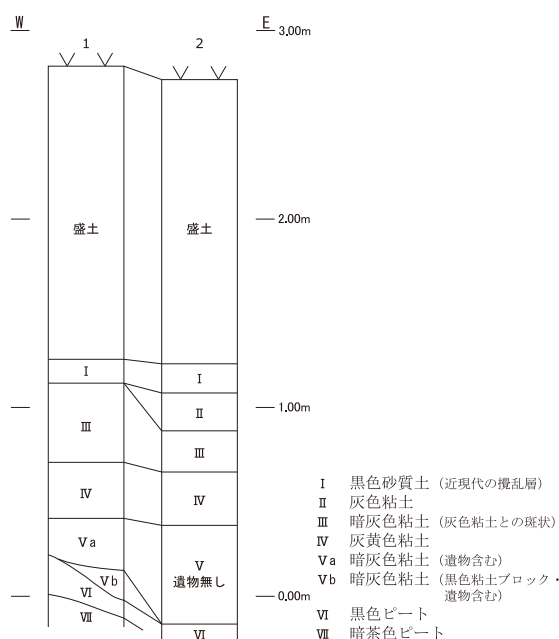
対象地は、睨東遺跡1次調査区の北東約100mの地点に位置する。

対象地内は、1.5mほどの厚さで全面的に盛土が施されていた。盛土下の土層堆積状況は、試掘坑1,2ともにおおむね共通していた。I層は黒色砂質土で、近現代の瓦礫や廃木が多く含まれていた。II層は灰色粘土で、旧水田耕作土に相当すると考えられる。III層は暗灰色粘土と灰色粘土の混層で、著しく攪拌を受けていた。この層からは古墳時代の土師器や奈良時代の須恵器、鎌倉時代の山茶碗片が出土した。なお、この層には近現代の陶磁器も含まれていたが、混入した遺物と思われる。IV層は灰黄色粘土で、遺物は出土しなかった。V層は暗灰色粘土の堆積で、試掘坑1では2層に分離できた。精査した結果、奈良時代の土師器甕片が出土し、この層が遺物包含層と考えられる。但し、試掘坑2からは遺物は出土しなかった。また、西から東へ向かって層位が落ち込む状況が確認できた。VI層は黒色ピートの堆積で、未分解の有機物が多く含まれていた。VII層は暗茶色のピート層である。伊場遺跡群周辺では、基盤層として灰色砂の堆積が広範囲で認められるが、今回の調査では確認に至らなかった。

今回の試掘調査の結果、現地は、微高地から低湿地への傾斜変換点に当たると考えられる。今回の結果や過去の調査区の位置関係などからみて、対象地は睨東遺跡の東端部にあたり、西側に遺跡の中心があると推定される。



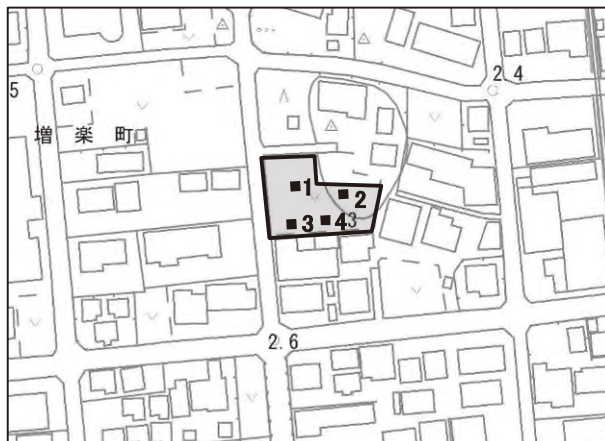
土層断面状況(試掘坑3)



土層柱状図

31. 増楽遺跡

所在地	南区増楽町1496-1
調査期間	平成21年12月4日
時代	古墳、奈良、戦国時代
調査方法	2×2m 試掘坑4箇所
検出遺構	小穴
出土遺物	土師器、須恵器、かわらけ 土師質土器、陶器
特記事項	なし
調査担当	井口 智博

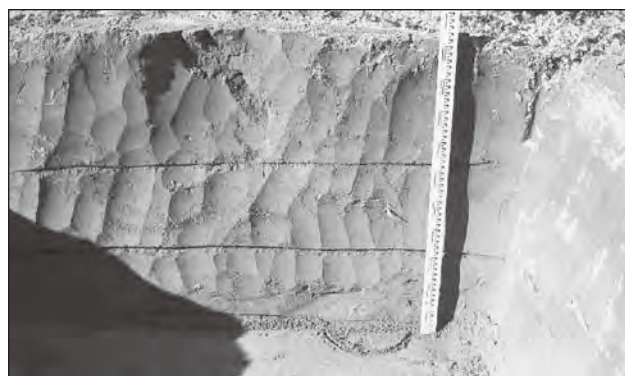
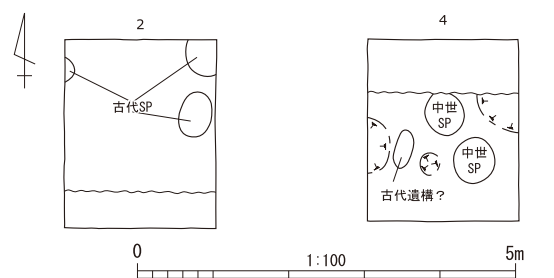


位置図 (2500分の1)

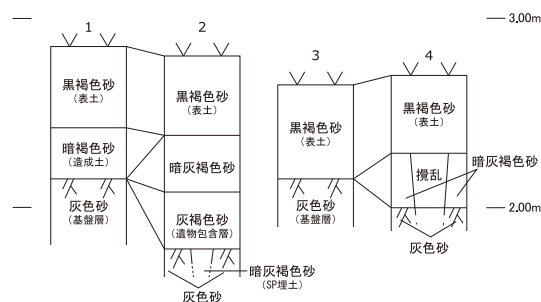
調査概要

対象地は可美地区の砂堤列上に位置し、調査前から地表面に遺物の散布が認められた。各試掘坑の土層堆積状況はおおむね共通しており、上層に黒褐色砂の堆積（表土層）が、下層に灰色砂の堆積（基盤砂層）を確認した。また、地点によっては中間に灰褐色砂の堆積が認められた。試掘坑1を精査した結果、奈良時代の土師器や須恵器、中世の陶器等の遺物が出土したが、平断面ともに遺構の存在は確認できなかった。堆積土を観察したところ、基盤砂層の直上まで近現代の攪乱が及んでおり、耕作等によって遺構は既に消滅した可能性が高い。試掘坑2では、基盤砂層に掘り込まれた遺構が明瞭に確認できた。他の試掘坑と比較して基盤砂層の標高が低く、耕作等の影響を受けずに遺構が残存したと考えられる。試掘坑内からは古墳時代後期から奈良時代の土師器や須恵器が出土し、検出した遺構も覆土の状況からこの時期のものと推定される。試掘坑3では、長芋の耕作による攪乱が著しく基盤砂層まで及んでいた。試掘坑内からは奈良時代から中世にかけての土器が出土したが、遺構の存在は確認できなかった。試掘坑4も耕作による攪乱が及んでいたものの、遺構の存在が確認できた。試掘坑2で検出した遺構と比較して覆土の状況が異なり、遺物も戦国時代以降の土器が主体であることから、中世の遺構と考えられる。

今回の試掘調査の結果から、対象地の東側に遺構が残存していることが明らかになった。対象地の西側も遺物が分布していることから、かつては遺構が存在したと考えられるが、後世の耕作や造成によって消失したと考えられる。



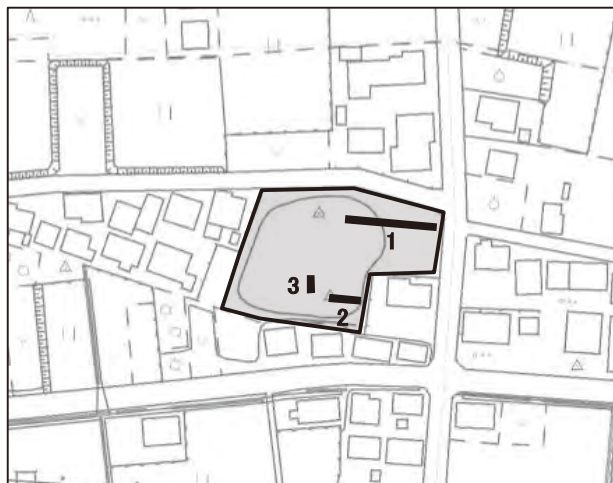
土層断面状況(試掘坑2)



土層柱状図

32. 増楽町村北遺跡隣接地

所在地	南区増楽町2551
調査期間	平成21年12月3日
時代	古墳、飛鳥、奈良、平安時代
調査方法	2×30m, 2×10m, 2×6m トレンチ3箇所
検出遺構	竪穴住居跡、溝、土坑 遺物包含層
出土遺物	土師器、須恵器、灰釉陶器
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



位置図（2500分の1）

調査概要

1 トレンチ：西側はベース砂層まで攪乱を受けていた。東側は、攪乱はあまり受けてはいないが、耕作層の直下はベース砂層である。遺物は、攪乱層から7～8世紀の土師器小片が数点出土しただけで、包含層や遺構は確認されなかった。1 トレンチ周辺には、遺跡は及んでいない。

2 トレンチ：上層には東から2～3m辺りに斑状の灰色土を積み上げた土手状の遺構が確認された。それより西には灰色砂層が、東には褐色砂層が堆積していた。遺物の出土はないが、近世以降の遺構であろう。その下には褐黄色砂質土がある。西に向かって厚さを増し、砂質化と茶色を強めている。この層から10世紀の灰釉陶器碗が出土した。さらに下層には、包含層と考えられる暗灰色土、灰黒土、黒色土の堆積層があり、6～8世紀の須恵器と土師器が検出された。最下層の黒色土は人為的な掘削を伴う遺構覆土で、規模と掘り方周囲の溝の存在から竪穴住居跡と推定される。またトレンチの東端でも暗黒色土を覆土とした土壌もしくは溝状の遺構が確認された。2 トレンチ周辺は7～8世紀の竪穴住居を伴う集落域である。

3 トレンチ：上層には耕作層の褐色砂層、褐茶色砂層の2層がある。褐茶色砂層は2 トレンチの褐黄色砂質土に連続するものである。その下に包含層と考えられる黒色土、暗黒色土、黒灰色土が存在する。黒色土は竪穴住居跡の覆土であり、掘方の北側にはカマドも確認された。カマド内からは、土師器の甕、小型甕、土製支脚が出土した。土師器は、カマド本体に塗り込められていた可能性が高い。3 トレンチ周辺も集落内にあることは、間違いない。

以上、開発予定地の南側半分に竪穴住居跡などが存在し、村北遺跡から続く6～8世紀の集落域であることが確認された。

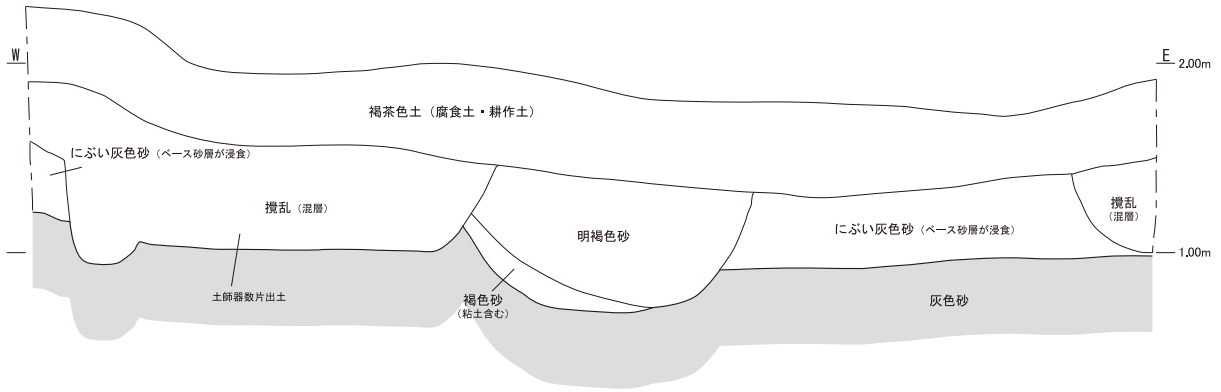


調査状況

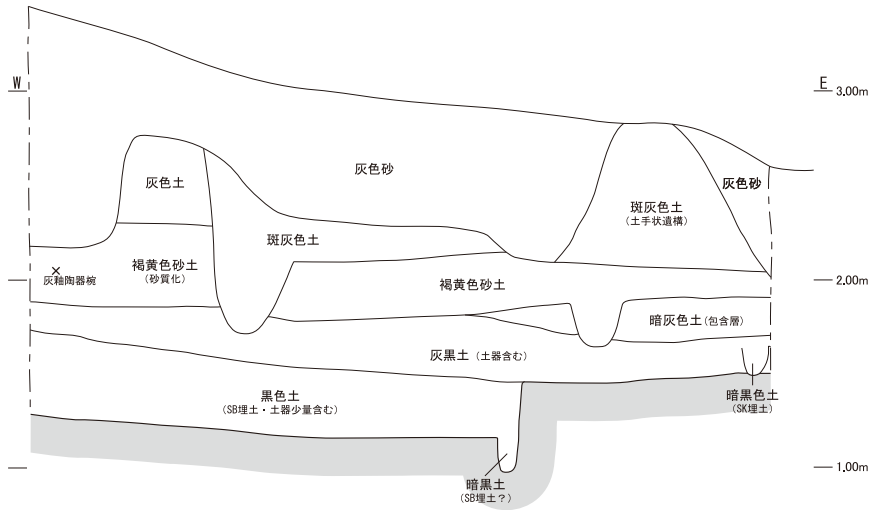


土層断面状況（試掘坑2）

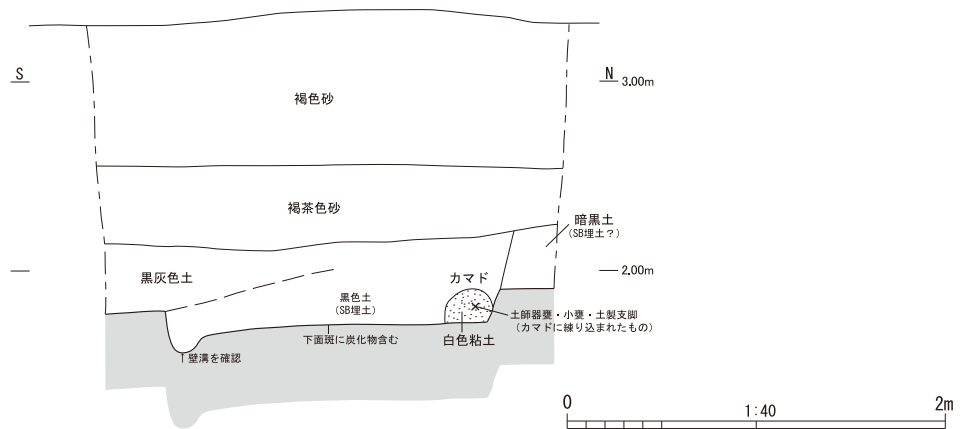
1 トレンチ



2 トレンチ



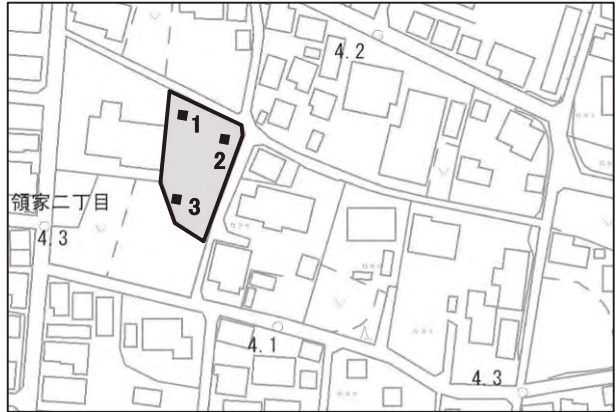
3 トレンチ



土層断面図

33. 馬領家遺跡

所在地	中区領家二丁目 323-1
調査期間	平成21年12月 7日
時代	—————
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 3 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	かわらけ、土師質土器、陶器
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図 (2500 分の 1)

調査概要

対象地は昨年度試掘を行った場所から西に約 140 m の地点に位置する。

対象地の現状は駐車場となっており、全面にアスファルト舗装が施されていた。舗装版を撤去すると砕石敷きの基礎があったのみで、大きく盛土は施されておらず、直下に褐色砂の旧表土が現れた。土層堆積状況は各試掘坑で細かい差異はあるものの、おおむね共通しており、上層に褐色砂が認められ、下層に灰褐色シルトと灰色砂が堆積していた。基盤層は円礫を多く含む灰色砂礫土であり、3 箇所とも現地表面下約 1.5 m で確認した。

試掘坑内を精査したところ、上層の褐色砂中から戦国期以降のかわらけや土鍋、施釉陶器の破片がごく少数出土したのみで、遺構の存在は全く確認できなかった。

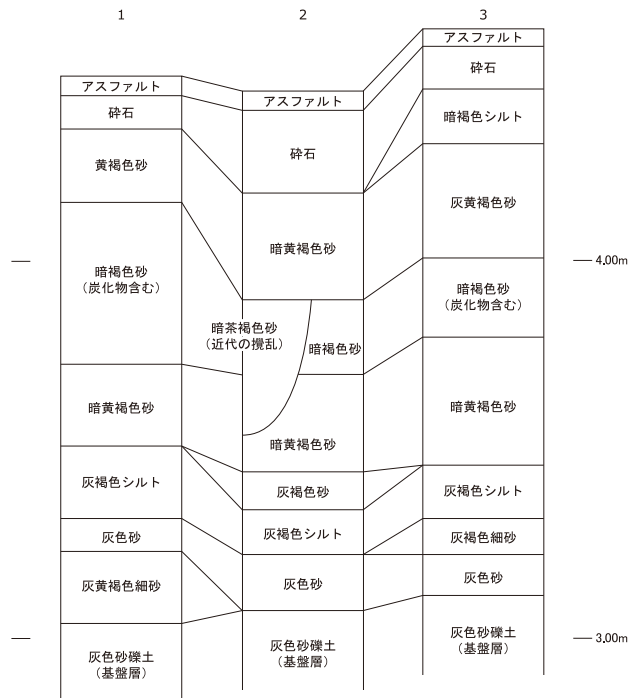
今回の試掘調査の結果、遺物が希薄であることや遺構の存在が確認できなかったこと、安定して包含層が存在しなかったことから、対象地は遺跡の範囲外であると考えられる。今回の調査地点は従来、馬領家遺跡の中心部と考えられて来た地点であるが、前回の試掘調査結果も踏まえて、馬領家遺跡の範囲変更を行う。



重機掘削状況



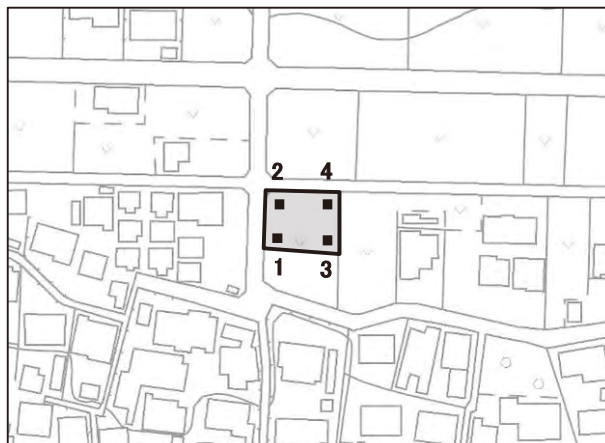
土層断面状況 (試掘坑 3)



土層柱状図

34. 柳ノ内遺跡

所在地	西区馬郡町 5455-1, 2, 3
調査期間	平成21年12月 7日
時代	奈良、平安、鎌倉時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 4箇所
検出遺構	溝、井戸
出土遺物	土師器、須恵器、土製支脚 灰釉陶器、山茶碗、常滑
特記事項	なし
調査担当	鈴木 敏則



位置図 (2500分の1)

調査概要

基本層序は、I層：黄色山土による整地土層、II層：褐色砂層（旧畑耕作層）、III層：褐茶色砂層、IV層：黒色砂層（包含層）、有機質、古代（7～8世紀）、V層：黄灰色砂層（基盤砂丘砂層）である。

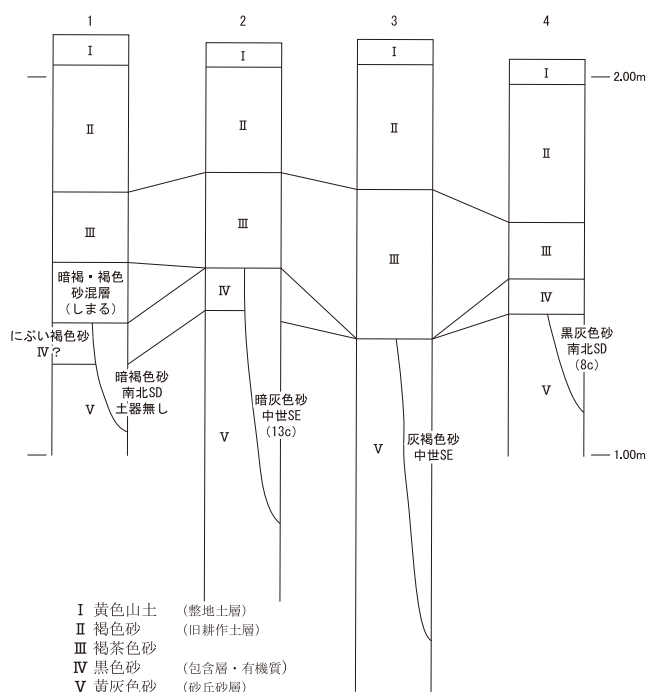
III層には奈良時代～鎌倉時代の遺物が含まれるが、安定した包含層ではない。IV層は良く締まった黒色砂層の包含層で、8世紀の遺物を多く包蔵している。IV層は、北側の試掘坑2,4で明瞭に認められた。試掘坑3では、鎌倉時代の井戸が掘削されているため、III層が残らなかった可能性が高い。

試掘坑1のIII層下には中世と考えられる整地層がある。試掘坑の北側には南北方向の暗褐色砂層を覆土とした溝が存在した。遺物が確認されなかったが、土層の状況から奈良時代と推定される。試掘坑2,3では鎌倉時代の素掘りの井戸が検出された。試掘坑2の井戸上層からは13世紀の山茶碗（底部破片）が出土した。試掘坑4の東端では南北方向の溝が検出され、8世紀後半～末葉の土器が出土した。

調査対象地は、全面が遺跡であることが確認された。年代は、奈良時代～鎌倉時代であるが、遺物は奈良時代のものが多い。特記すべき遺構は、鎌倉時代の井戸2基、奈良時代の溝2条である。なお、周辺の畑では7世紀の前半に遡る須恵器坏身片も採集された。



重機掘削状況



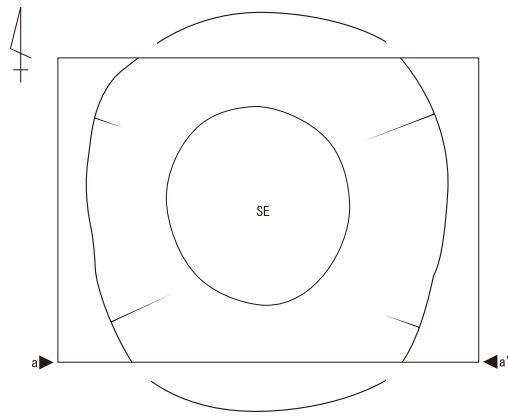
土層柱状図



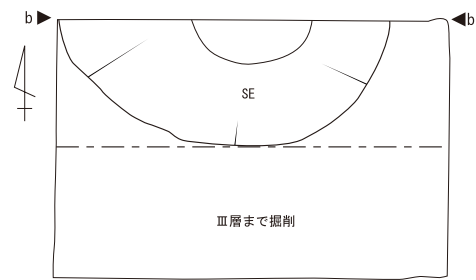
土層断面状況(試掘坑 2)



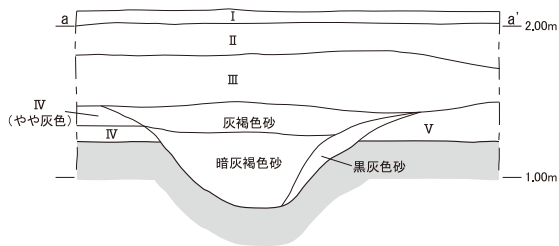
完掘状況(試掘坑 4)



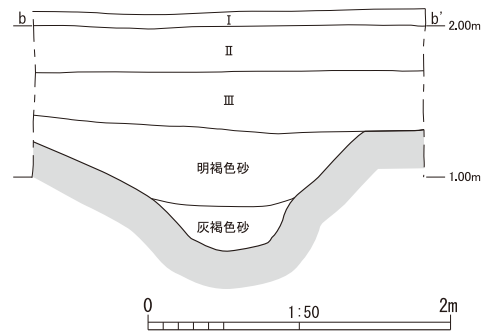
平面図(試掘坑 2)



平面図(試掘坑 3)



土層断面図(試掘坑 2)



土層断面状況(試掘坑 3)

35. 天白遺跡

所在地	北区引佐町井伊谷1140-4
調査期間	平成21年12月14～18日
時代	古墳、戦国時代
調査方法	11.4×9.52m
検出遺構	方形周溝墓、小穴
出土遺物	古式土師器、土師器、かわらけ 土師質土器、陶器、磁器
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図（2500分の1）

調査概要

対象地は北神宮寺遺跡1次調査区の北約100mの地点に位置する。現地では2008年10月に試掘調査が行われ、方形周溝墓等の遺構が存在することが明らかになっていた。

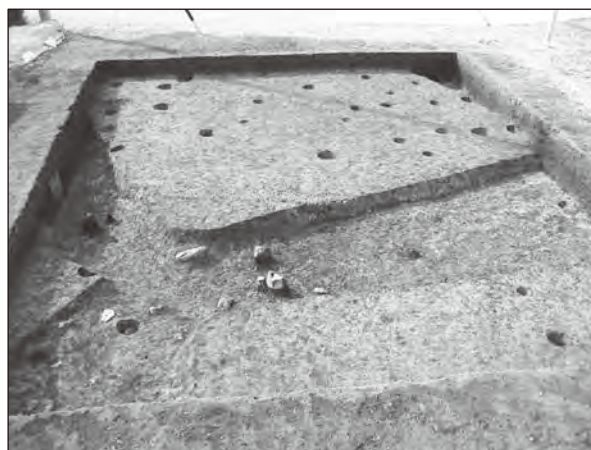
調査区の全面に畑耕作土である茶褐色砂質土が40cm程度の厚さで堆積していた。この層の下には遺物包含層である黒褐色粘質土が残存していた。但し、調査区の北東側ではこの層は確認できず、畑耕作土の直下が地山となっていた。地山は円礫を含む黄褐色粘土である。遺構はこの層に掘り込んであり、埋土が黒色を呈していたことから検出は容易であった。

遺構は試掘調査の段階で想定したとおり、古墳時代前期の方形周溝墓を検出した。調査区の西側と東側に周溝を共有して2基が連なり、西側をSZ01、東側をSZ02とした。SZ01は墳丘部分の西辺が調査区外であり、全体を窺い知ることはできなかったが、一辺8.7mの規模と考えられる。主体部は既に削平されており、確認できなかった。遺物は南側と東側の周溝から完形の瓢壺をはじめ、甕や高坏などの古式土師器が出土した。SZ02は南西の一部を検出したに過ぎず、全体の規模は不明である。遺物は南側の周溝から古式土師器が出土した。また、方形周溝墓と重複する状態で、多数の小穴を検出した。明瞭に掘立柱建物を構成するものは確認できなかったが、建物の柱穴として掘削された可能性が高いと考えられる。小穴からの出土遺物が少なく、時期が明確にできないものが多いが、埋土の状況等から大半は戦国時代以降の遺構と思われる。

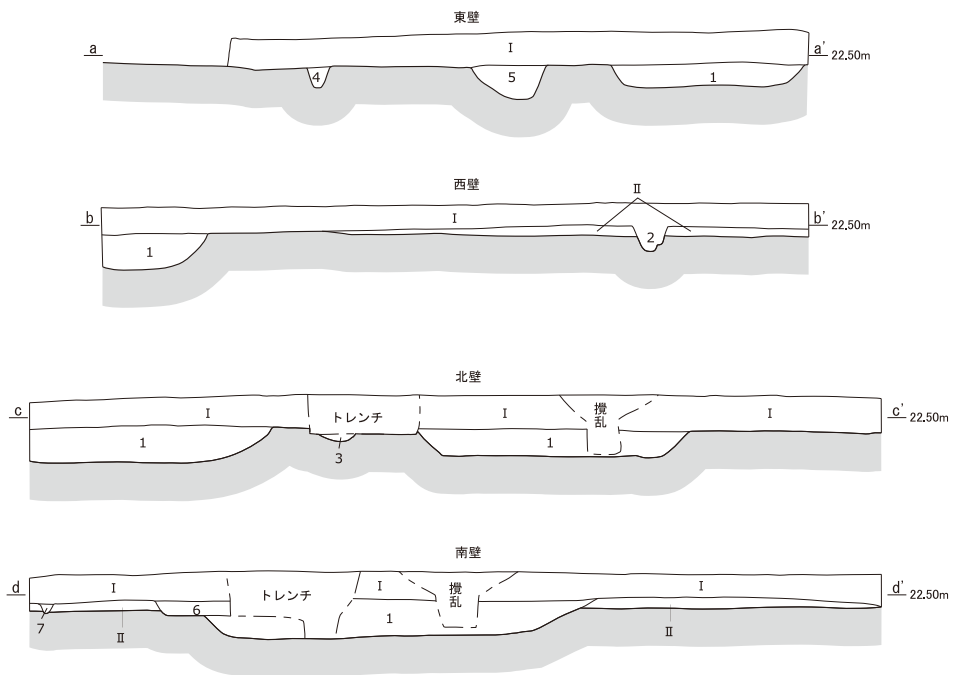
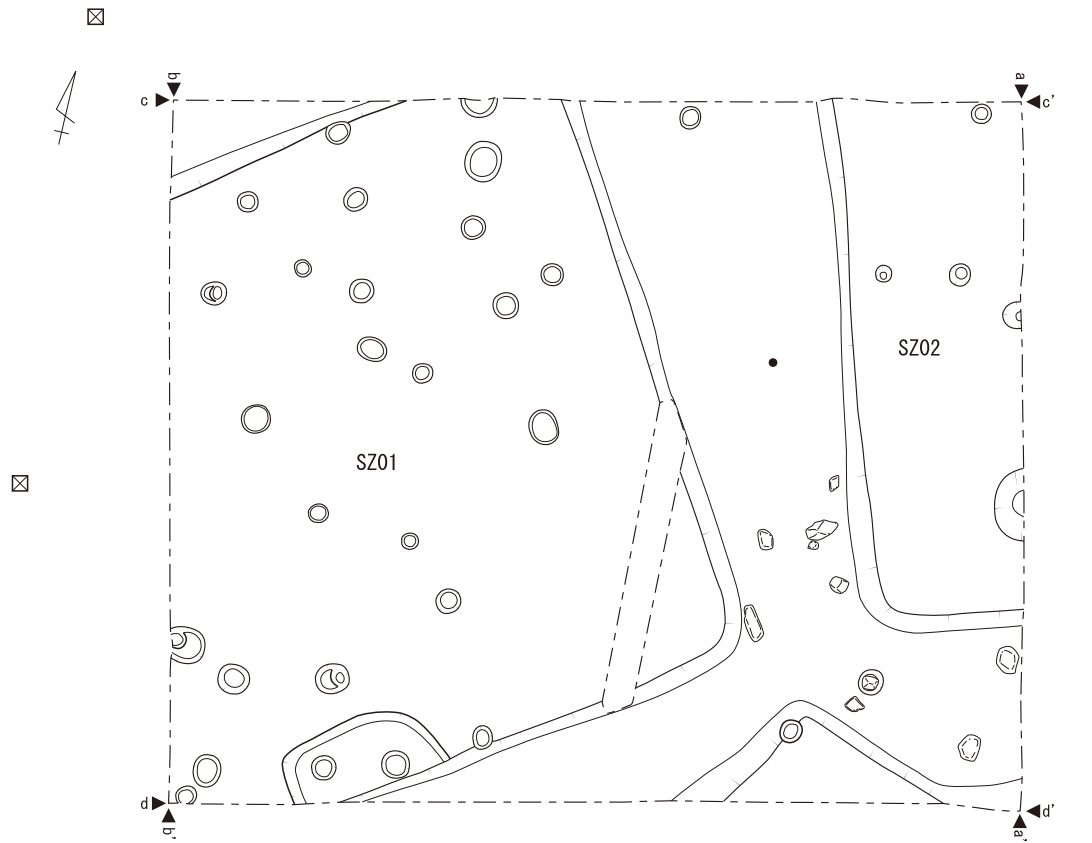
今回の調査の結果、天白遺跡の範囲内にも古墳時代前期の方形周溝墓が展開していることが明らかになった。北神宮寺遺跡の調査では、調査区の北側を中心に同時期の方形周溝墓群が広がっており、天白遺跡と一連の墓域が形成されていたと考えられる。



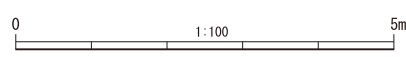
調査状況



完掘状況



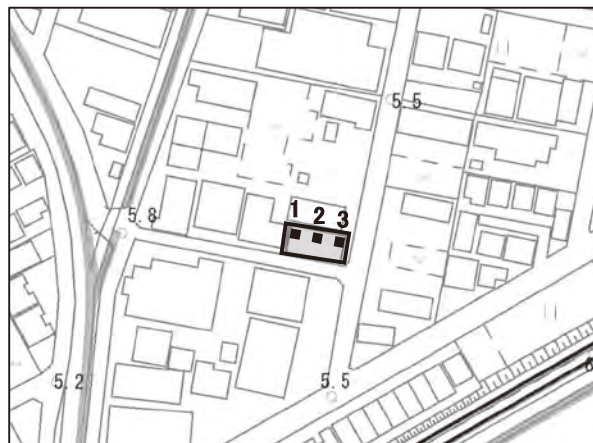
- | | |
|-----------------|-------------------|
| I 茶褐色砂質土 (耕作土) | 1 黒色粘質土 (SZ 周溝埋土) |
| II 黒褐色粘質土 (包含層) | 2 暗褐色粘質土 (SP 埋土) |
| III 黄褐色粘土 (地山) | 3 黒褐色粘質土 (SP 埋土) |
| | 4 暗褐色粘質土 (SP 埋土) |
| | 5 黒褐色粘質土 (SP 埋土) |
| | 6 暗褐色粘質土 (SP 埋土) |
| | 7 黒色粘質土 (SP 埋土) |



調査区平面及び土層断面図

36. 木船廃寺跡

所在地	東区和田町 334-4
調査期間	平成22年 2月 1日
時代	奈良時代
調査方法	2 × 2 m 試掘坑 3箇所
検出遺構	遺物包含層、土坑もしくは溝 低位面もしくは河川
出土遺物	土師器、須恵器
特記事項	なし
調査担当	鈴木 一有



位置図 (2500分の1)

調査概要

土層堆積状況 試掘坑 1, 2 と試掘坑 3 では土層堆積状況が異なる。試掘坑 1, 2 においては、盛土下に水田耕作土とみられる灰色粘土層があり、その下に遺物包含層である褐色砂質土もしくは暗褐色砂質土が堆積している。包含層の下には基盤層である褐色砂がある。

試掘坑 3 では、盛土の下に砂質土がみられず、暗茶灰色粘土、灰色シルト、暗灰色粘土、黒灰色粘土という堆積状況がみられた。黒灰色粘土の下には基盤層である暗緑灰色砂層が堆積している。遺物は基盤層直上の黒灰色粘土層に比較的多く確認できる。

遺構 試掘坑 1, 2 では、大型の遺構（土坑もしくは溝）が確認できた。これらの遺構は、遺物包含層である褐色砂質土層もしくは暗褐色砂質土層を切り込んでいる。

試掘坑 3 では、明確な掘り込みは認められなかった。ただし、基盤層直上にみられる黒灰色を呈する粘土層が、堆積時における湿地性の環境を示しており、比較的遺物が豊富に出土していることが留意される。以上のことから、試掘坑 3 全体が、遺跡内の低位面、もしくは河川などの大型遺構にあたる可能性がある。

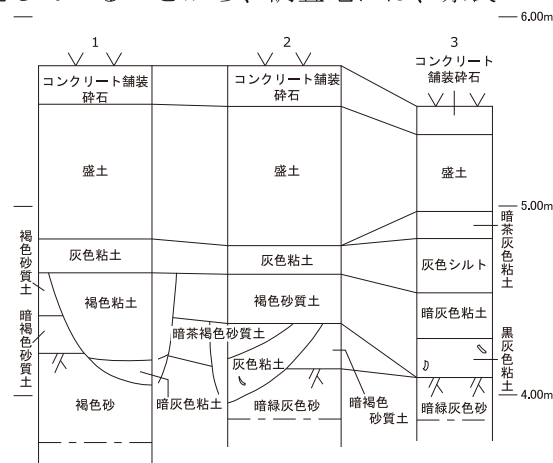
遺物 各試掘坑から、奈良時代の須恵器と土師器が出土した。遺構に伴うものが多く、包含層からも土器の小破片が出土している。

試掘坑 3 では、基盤層直上の黒灰色粘土層から、奈良時代の遺物が比較的多く出土した。

小 結 試掘調査した場所は、古代の瓦が集中的に出土する地点の南南西約 500 m に位置する。瓦は出土しなかったが、同時代（奈良時代）の須恵器や土師器が比較的まとまって出土し、当該期の遺構も確認できた。遺物包含層や基盤層も安定していることから、調査地には、奈良時代の遺構が良好な状態で埋没していると考えられる。



土層断面状況 (試掘坑 2)



土層柱状図

37. 楠木遺跡

所在地	北区三ヶ日町岡本東畑 536
調査期間	平成22年 2月16～23日
時代	奈良、平安、鎌倉時代、 戦国期
調査方法	2～6 m幅トレンチ 4箇所
検出遺構	土坑、柱穴、溝
出土遺物	瓦、須恵器、土師器、山茶碗 大平鉢、天目茶碗、播鉢
特記事項	なし
調査担当	大野 勝美



位置図（2500分の1）

調査概要

土層堆積状況 調査地内は畑地となっていたため、全域が褐色粘質土の耕作土で覆われていた。その下層に、礫を多量に含む暗褐色粘質土層が堆積している。この層は、調査地内北西で検出された基壇状の高まりの部分を除いて、調査地内全域に広がっている。この層からは瓦の他に中世陶器が出土していることから、鎌倉時代以降の包含層と考えられる。その下層には、小礫を多量に含む黒褐色粘質土層が堆積している。この層は調査地内の南側でのみ確認でき、調査地内の北側には広がっていなかった。地山は礫を多量に含む黄褐色粘土層であり、部分的に、にぶい黄褐色粘土層や赤褐色粘土層となった所がある。

また、調査区北西の基壇状の高まりには耕作土のみが堆積しており、耕作土の直下は地山となっている。そのため、調査区の北西はすでに畑地の造成により、かつての地表面は削平されている可能性が高い。

なお、基壇状の高まりの東から北東部にかけては、段状に削られており、開墾時に出たと思われるやや大きな礫（10cm大）とともに多量の瓦が投棄されていた。

遺構 トレンチ1では柱穴と土坑を検出した。柱穴は軸がほぼ揃うことから、建物または柵と考えられる。トレンチ2では、基壇状の高まりが検出され、この基壇状の高まりはトレンチ3やトレンチ4にまで広がっている。また、東側の一辺には簡易な石積みが施されている。この基壇状の高まりの上からは、遺構は一つも検出されなかった。基壇状の高まり、石積み、段状の削りは、土地宝典に記されている地割と一致することから、畑地に伴う遺構であり、中世末以降のものであろう。今回の調査では、寺院に関わる遺構はおろか、確実に古代に遡る遺構も全く認められなかった。その他、トレンチ3では柱穴が検出され、柱穴から天目茶碗が出土していることから、年代は中世末から近世初頭と考えられる。トレンチ4では土坑や溝が検出された。トレンチ3で検出した柱穴は軸がそろったことから建物または柵と考えられ、トレンチ1で検出した柱穴と方向が揃うことから、中世末以降の一連の遺構である可能性が高い。

遺物 調査地内全域で、奈良～平安時代の瓦と須恵器、土師器、灰釉陶器、鎌倉時代の山茶碗や戦国期以降の陶器が出土した。出土した遺物のほとんどは奈良時代の瓦であり、それ以外の遺物は少量である。遺構では、SP07・08・11・12・14から遺物が出土した。SP07からは奈良時代の瓦、SP08からは須恵器甕、SP11からは中世の土師質土器、SP12からは天目茶碗、土師質土器、SP14からは土師器が出土した。

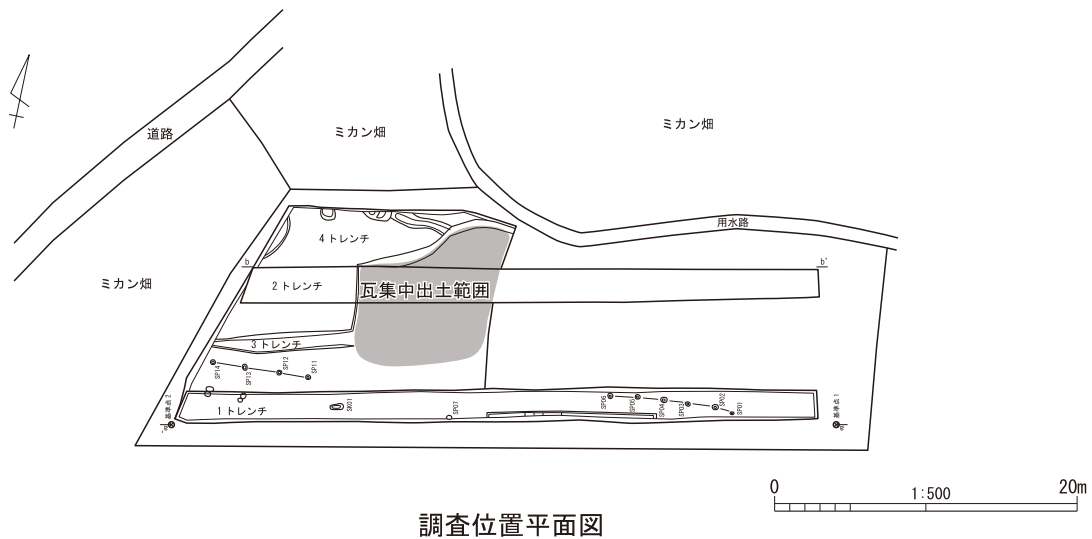
小結 試掘調査地内では、奈良時代の瓦が多量に出土したことから、周辺に古代の寺院の存在がうかがえる。しかし、今回の調査では古代の寺院に関わる遺構は全く検出できなかった。瓦は元位置を留めたものではないが、その出土位置が用地の西側に片寄っていることから、寺院建物は調査区の北西方向に存在したと推定される。



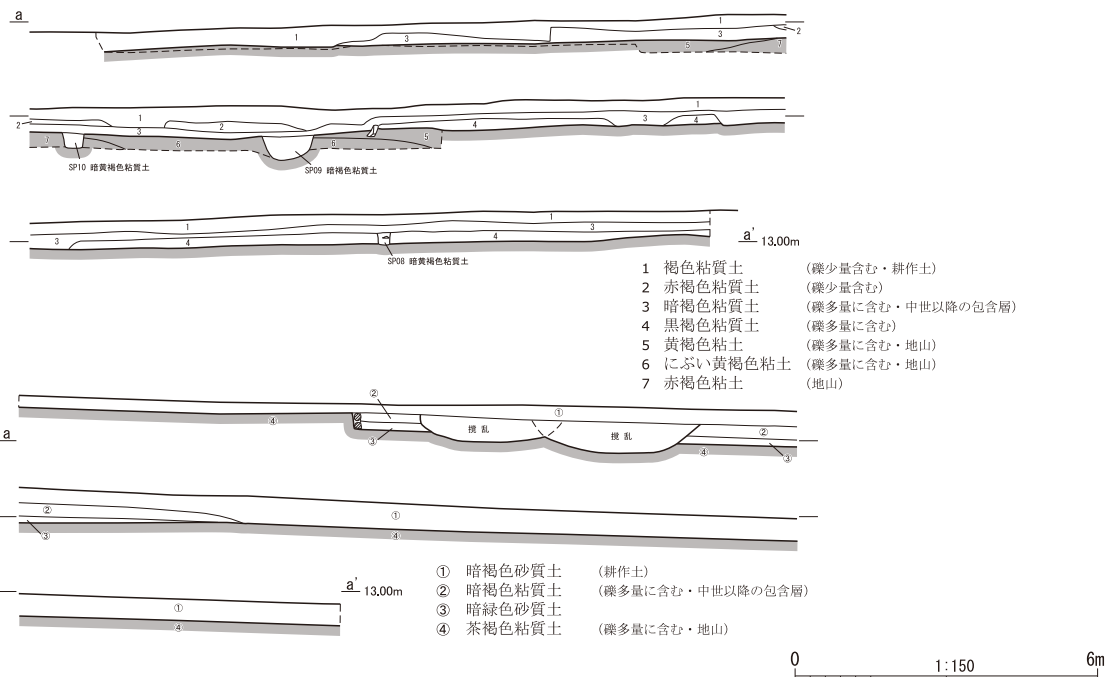
重機掘削状況



完掘状況 (3, 4 トレンチ)



調査位置平面図



土層断面図

38. 二俣城跡

所在地	天竜区二俣町二俣1034
調査期間	平成22年3月1～12日
時代	弥生時代、戦国期
調査方法	1×4m トレンチ1箇所 4×9m トレンチ1箇所
検出遺構	石垣、礎石、堀切
出土遺物	弥生土器、かわらけ、土師質土器、播鉢、天目茶碗、瓦、和釘
特記事項	なし
調査担当	井口 智博



位置図（2500分の1）

調査概要

前年度に引き続き本丸中仕切門跡の調査を実施した他、二の丸と蔵屋敷との間にある堀切の調査も行った。

本丸中仕切門跡では、門の全容解明を目的として南側に調査区を拡大し調査を行った。その結果、南側においても石垣と礎石、礎石の抜き取り穴を検出し、4つの礎石で構成される門であることが明らかになった。南北の石垣の間隔は約3.7mを測り、礎石間の規模は東西約2.1m、南北3.2mであった。南北の礎石間の規模が、そのまま門扉の規模となるため、門のおおよその規模が確定したことになる。門の形状は櫓門であった可能性が高いと思われる。

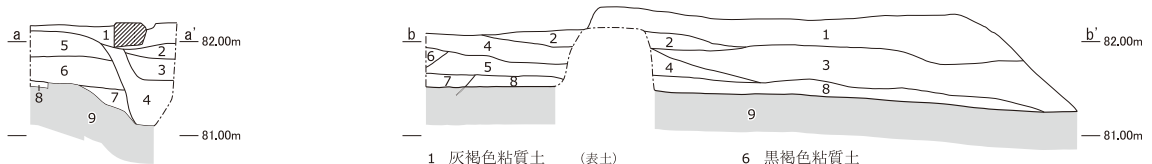
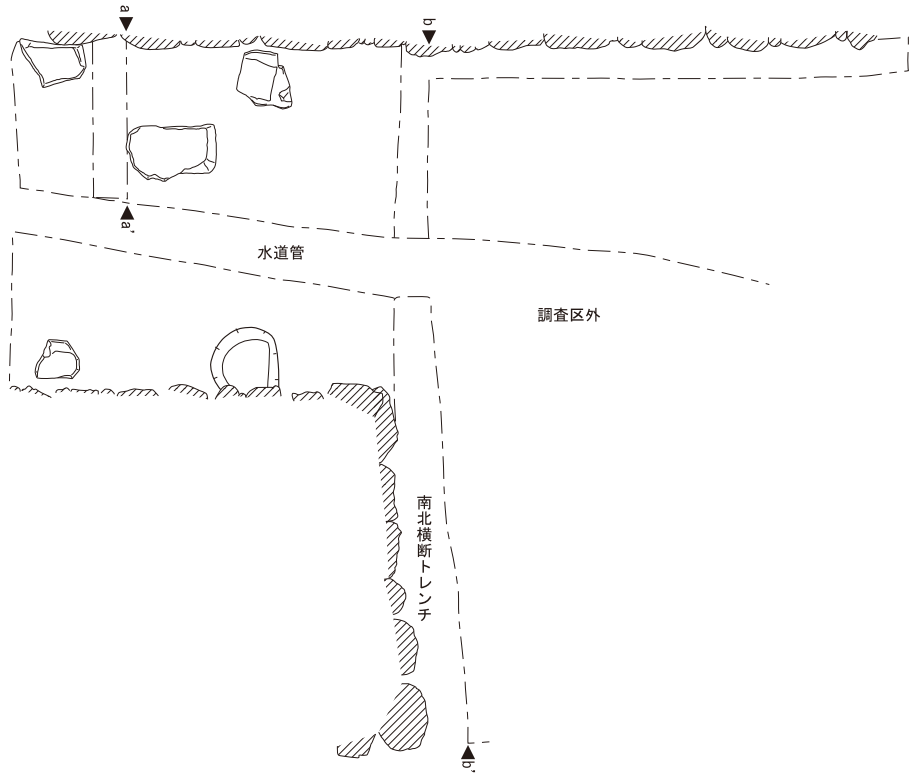
また、門の形状確認と同時に、二の丸への通路と石垣を確認するため、南北方向にトレンチを設定した。調査の結果、南側の石垣はコ字形に直角に折れ、二の丸へと続いていることが確認できた。二の丸と本丸中仕切門の間には1m程の高低差があるが、トレンチ内を精査したところ、石段等の施設は存在せず、坂道で高低差を解消していることが明らかになった。土層断面の観察結果から、坂道の部分には精微な黄褐色土を用いて整地した痕跡が確認できた。さらに城郭に伴う整地層の下層では、複数の遺構とともに弥生土器が出土し、二俣城の下層に先行する時代の遺構や遺物が存在することが明らかになった。

堀切の調査では断面形状を確認するため、直交する方向にトレンチを設定し調査を行った。調査の結果、堀切の底部までは現状より約1.5mの深さがあり、底部の形状は箱型を呈することを確認し、堀底道として利用されていたことが明らかになった。



本丸中仕切門検出状況

本丸中仕切門

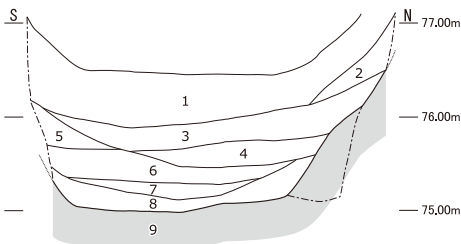


- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土 (暗褐色粘質土とのブロック状)
- 4 黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の混層
- 5 暗灰褐色粘質土
- 6 黒褐色粘質土
- 7 黒褐色粘質土 (遺構覆土)
- 8 黒褐色粘質土 (遺構覆土)
- 9 赤褐色粘質土 (基盤層)

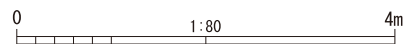
- 1 灰褐色粘質土 (表土)
- 2 灰褐色粘質土と黄褐色粘質土の混層
- 3 暗褐色砂質土 (円礫を多く含む)
- 4 黄褐色粘質土 (城門の整地層)
- 5 暗黄褐色粘質土 (整地前遺構か?)
- 6 黒褐色粘質土
- 7 黒色粘質土 (弥生遺構か?)
- 8 暗茶褐色粘質土
- 9 赤褐色粘質土 (基盤層)

本丸中仕切門平面図・土層断面図

堀切



- 1 黒色砂質土 (表上に円礫を多く含む)
- 2 暗褐色砂質土
- 3 暗茶褐色砂質土
- 4 暗褐色砂質土 (やや粘性有)
- 5 暗褐色砂質土 (円礫を多く含む)
- 6 暗黄褐色砂質土 (円礫を多く含む)
- 7 暗褐色砂質土
- 8 黄褐色砂礫土
- 9 明黄褐色砂礫土 (基盤層)



堀切土層断面図

試掘調査出土遺物

平成 20 年度と平成 21 年度の試掘調査における出土遺物を P90～94 に示した。試掘調査の性格上、破片化したものが多く、遺物の遺存状態は良くないが、遺跡の時代や内容を知る手がかりとなる資料である。遺物は第 2 部の記述順に掲載した。なお、第 3 部で詳述する半場遺跡、天白遺跡、楠木遺跡の遺物は、本項では割愛した。

高塚遺跡 同じ敷地内を 2 回に分けて試掘を行っており、5 月 15 日の調査では 1～6 の遺物が、6 月 10 日の調査では 8 が出土した。1 は 8 世紀後葉の土師器の甕である。4 と 5 は 8 世紀代の須恵器の碗である。6 は 7 世紀代の須恵器の甕である。

茶ノ木田遺跡 明確な遺物包含層の確認には至らなかったが、試掘坑 7 から 7 の須恵器が出土した。須恵器の壺類の底部と考えられ、7 世紀代のものと考えられる。

中田東遺跡隣接地 調査の結果、9～18 の遺物が出土した。9～12 は試掘坑 1 からの、13 は試掘坑 2 からの、14～18 は試掘坑 3 からの出土品である。9 は 16 世紀末の初山焼の皿、10 は 16 世紀代の非クロロ成形のかわらけ、11 は 16 世紀代の内耳鍋の口縁である。12 は 6 世紀代の須恵器の甕片である。13 は 8 世紀代の須恵器坏蓋、14 は 7～8 世紀代の土師器甕である。17 は 16 世紀代の内耳鍋、18 は羽釜である。

増楽遺跡(2008 年度) 低地内の黒色土中から、19～22 の遺物が出土した。19 は試掘坑 9 から出土した 13 世紀代の青磁碗の口縁である。20 は試掘坑 8 から出土した 7 世紀代の須恵器の甕片、21 は試掘坑 10 から出土した 13 世紀代の山茶碗の底部である。22 は試掘坑 1 から出土した常滑の甕底部である。

飯田遺跡群 弥生時代や中世の土坑などから多数の遺物が出土し、23～61 にまとめた。23 と 24 は弥生時代の土坑から出土した。23 は壺の底部、24 は高坏の口縁で、ともに弥生時代後期の土器である。中世の土坑からは 25～57 の遺物が出土した。主体は鎌倉時代の山茶碗であるが、弥生時代から平安時代の遺物が多数混入していた。25～44 は鎌倉時代の山茶碗である。底部の破片が多く、高台は低平かつ粗雑なつくりのものが多い。45～47 は混入した弥生土器である。45 は壺の口縁、46 は小型壺、47 は台付甕の脚台部である。48～54 は混入した須恵器である。48 と 49 は壺類、50 は瓶類の口縁、51 と 52 は甕片、53 と 54 は高坏の坏部である。55～57 は混入した灰釉陶器の碗である。55 は K14 窯式段階の碗で、全面にハケヌリの灰釉が施されている。58～61 は表土や包含層から出土した遺物を示した。58 と 59 は弥生土器、60 は山茶碗の底部、61 は土師器の甕口縁である。

大蒲町村東遺跡隣接地 試掘坑 1 で検出した中世の井戸跡から 62 の須恵器の碗形有台坏身が出土した。8 世紀後葉の遺物で、中世の井戸内に混入したと考えられる。

万斛遺跡 万斛遺跡は中世の大規模な居館跡と推定されているが、調査地点は遺跡の縁辺部と考えられる。遺物は少なく、試掘坑 3 から 63 と 64 の山茶碗底部が出土した。

下山田遺跡 遺物包含層中から弥生土器や土師器、須恵器が出土したが、いずれも小破片であり、図示できたのは試掘坑 2 から出土した 65 の須恵器の坏蓋のみであった。

村裏遺跡 66～70 に示したように須恵器の破片が若干出土したが、主体は中世の遺物であった。66 と 68 は試掘坑 2 から、67 と 69 は試掘坑 3 から、70 は試掘坑 4 から出土した。66 は非ロクロ成形のかわらけの底部、67 は天目茶碗の底部である。68 と 69 は内湾内耳鍋の口縁である。70 は須恵器の甕片である。

井村遺跡 竪穴住居跡などの遺構を確認し、遺物も比較的多く出土したが、図化できたものは少なかった。71 は土師器の高坏で、坏部と脚部の接合部分の破片である。72 は須恵器の甕片、73 は須恵器の坏蓋、74 は須恵器の有台坏身である。75 は山茶碗の底部片である。

西脇前遺跡 対象地北側の試掘坑 1 から遺物が出土した。76 は弥生時代後期の壺の口縁である。77 は土師器の碗の口縁で、全面に赤彩が認められ、内面には暗文が施されている。

曝東遺跡 試掘坑 1 の暗灰色粘土中から土師器や須恵器、山茶碗が出土した。78 は山茶碗の口縁部片である。79 は 7～8 世紀代の土師器の甕口縁である。

増楽遺跡(2009 年度) 調査の結果、80～83 の遺物が出土した。試掘坑 1 からは 80 と 81 が出土した。80 は須恵器の坏身の口縁、81 は須恵器の有台坏身の底部であり、ともに 8 世紀代の遺物である。82 は試掘坑 2 から出土した 7 世紀後葉の須恵器坏蓋である。83 は敷地内で表採した天目茶碗の底部である。

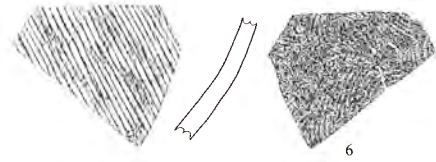
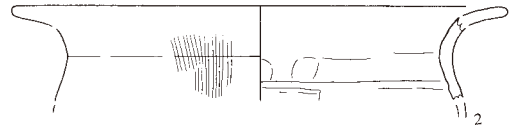
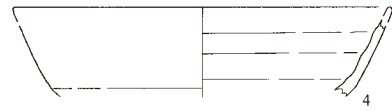
増楽町村北遺跡隣接地 竪穴住居跡などの遺構を良好な状態で確認し、多数の遺物が出土した。84～88 は 2 トレンチの包含層や竪穴住居跡から出土した遺物である。84 は土師器の小型壺、85 は土師器の小碗である。86 は土師器の高坏、87 は須恵器の坏身である。88 は土師器の台付甕の脚台部である。89～95 はいずれも 3 トレンチのカマド内や周辺から出土した遺物である。89 は須恵器の高坏である。90 は土師器の壺の底部である。91～95 は土師器の甕である。形態はやや小型のものと長胴のものがある。

馬領家遺跡 試掘坑 1 上層の旧表土中から、96 のかわらけが出土した。非ロクロ成形のかわらけで、戦国期以降のものと考えられる。

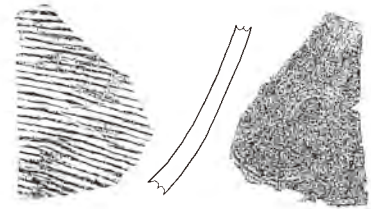
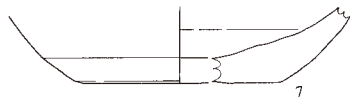
柳ノ内遺跡 全面的に遺跡が広がっていることが確認され、多数の遺物が出土した。試掘坑 2 からは 97～100 の遺物が出土した。97 は中世の井戸内から出土した山茶碗である。98 は須恵器の壺口縁、99 は須恵器の甕底部、100 は須恵器の甕片である。試掘坑 3 からは 101 の山茶碗と 102 の須恵器甕片が出土した。試掘坑 4 からは 103～105 の須恵器が出土した。いずれも 8 世紀代の坏蓋である。106～108 は敷地内で表採した遺物である。106 は 7 世紀代の須恵器坏蓋、107 は 12 世紀代の山皿、108 は 8 世紀代の須恵器坏蓋である。

二俣城跡 2008 年度の調査では 109～114 が、2009 年度の調査では 115～136 が出土した。109 は天守台脇の 1 トレンチから出土した染付碗である。110～114 は本丸中仕切門跡の 3 トレンチから出土した遺物である。111～113 は丸瓦の、114 は平瓦の破片である。115～130 は本丸中仕切門跡から出土した遺物である。115～117 は石垣下層から出土した弥生土器である。118 と 119 はロクロ成形のかわらけ、120 はく字内耳鍋の口縁である。121 と 122 は播鉢の底部、123 は常滑焼の大甕である。124 は染付の瓶類である。瓦は 125～127 が出土した。また、128～130 の和釘も出土している。131～136 は堀切からの出土品で、かわらけ、天目茶碗、播鉢、瓦が出土している。土器や瓦は、16 世紀末葉の特徴が見受けられ、堀尾氏による二俣城の改修を示していると言える。

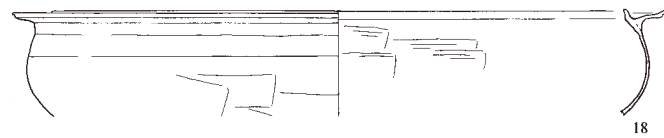
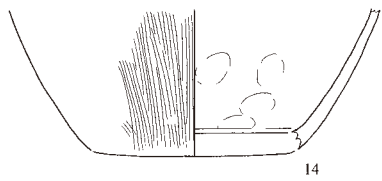
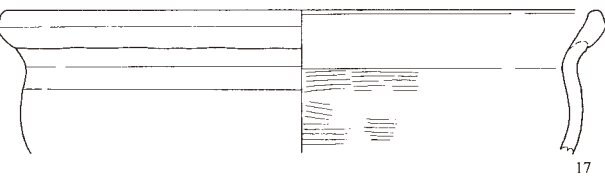
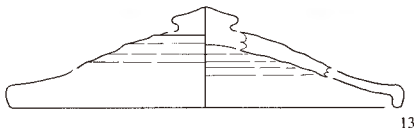
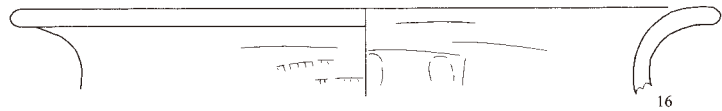
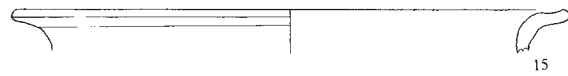
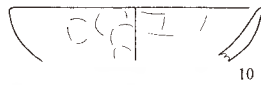
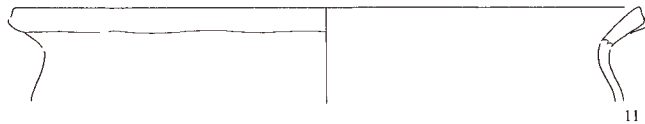
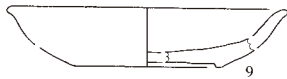
高塚遺跡



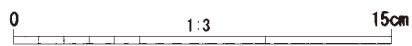
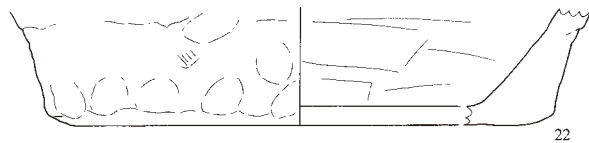
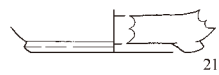
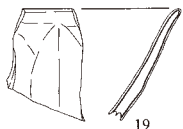
茶ノ木田遺跡



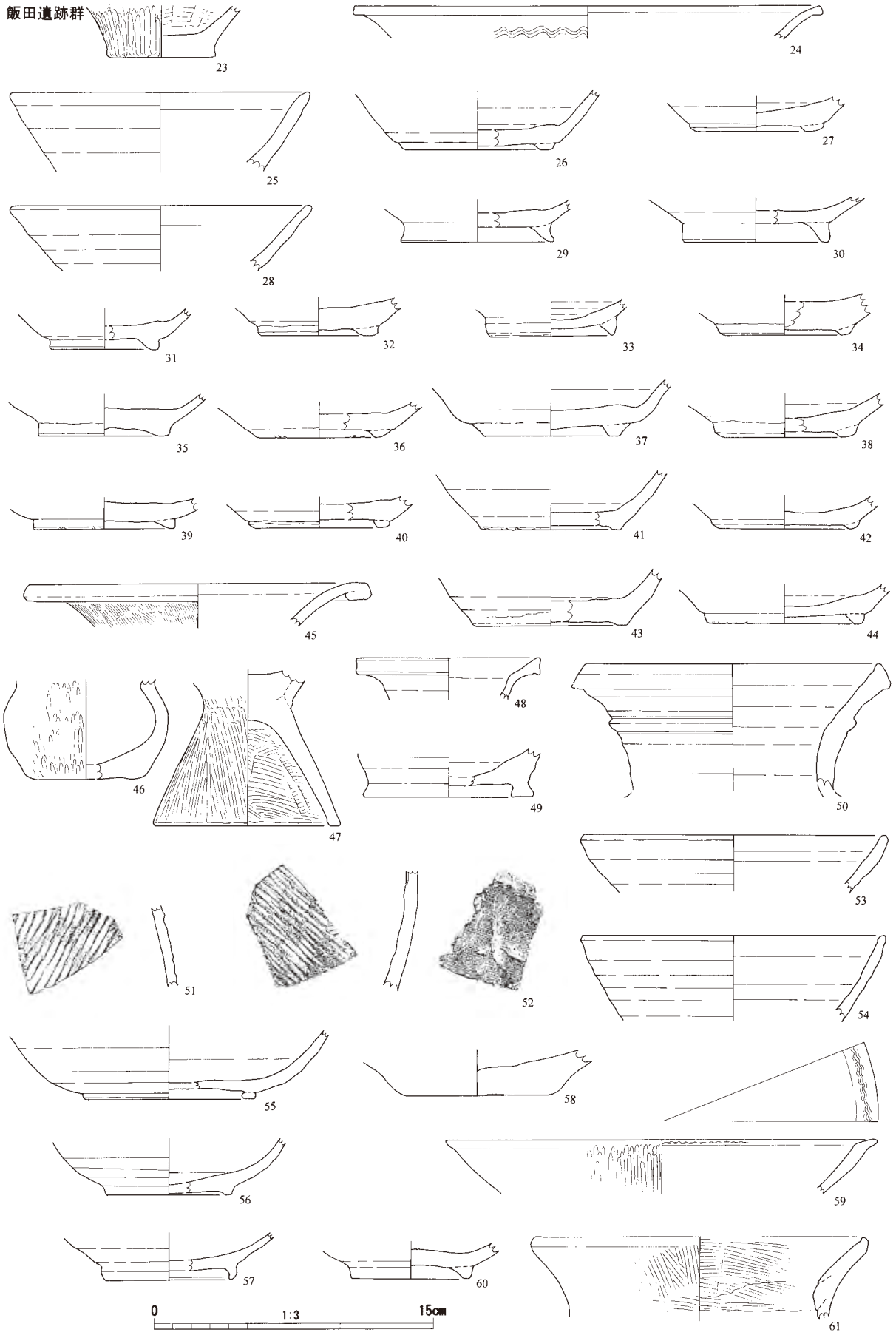
中田東遺跡隣接地



増楽遺跡 (2008年度)

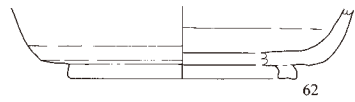


飯田遺跡群

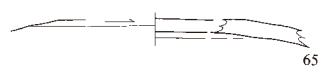


試掘調査出土遺物(2)

大蒲町村東Ⅱ遺跡隣接地



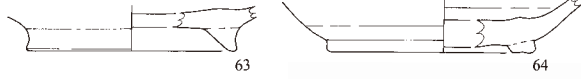
下山田遺跡



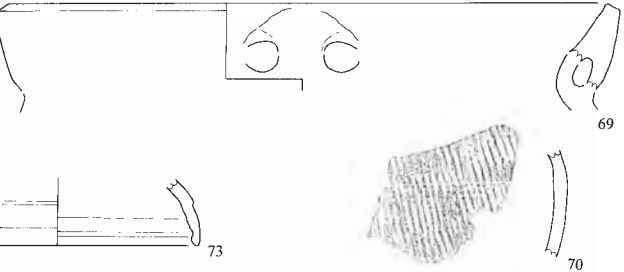
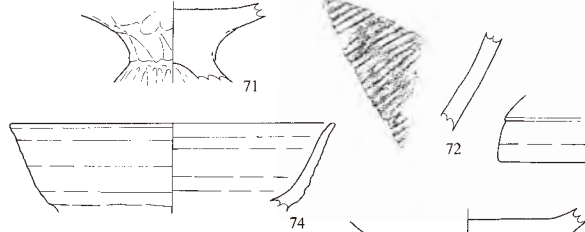
村裏遺跡



万斛遺跡



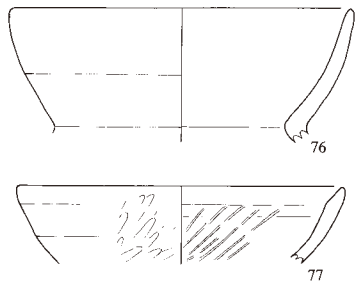
井村遺跡



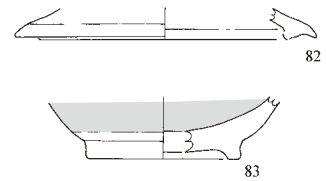
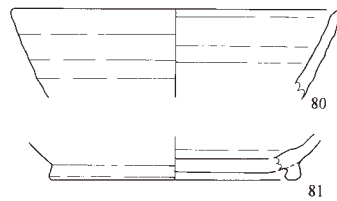
畷東遺跡



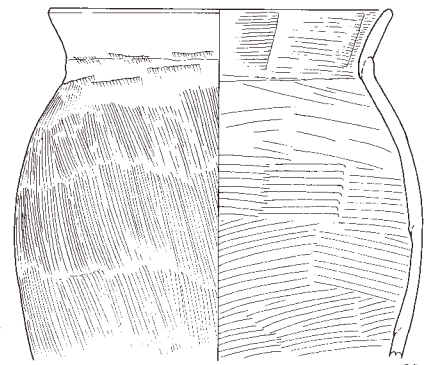
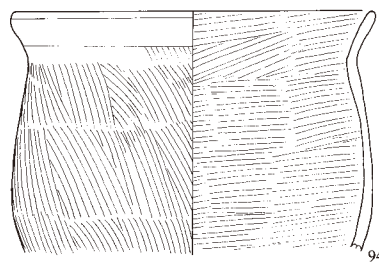
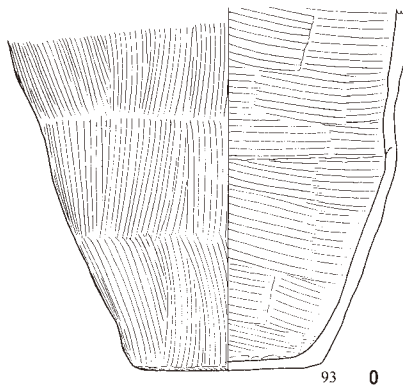
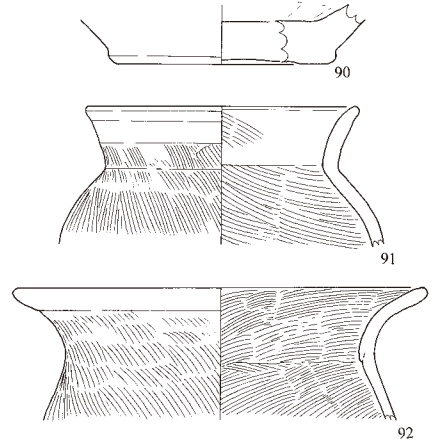
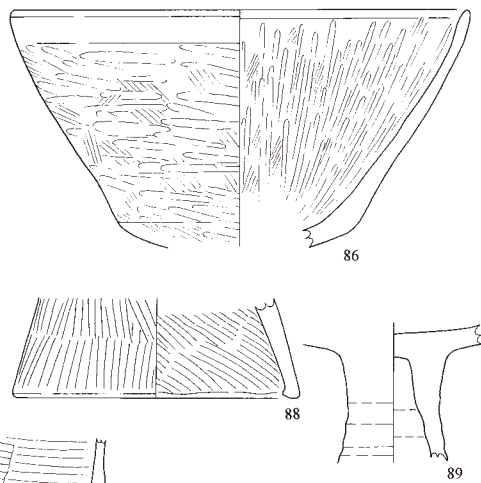
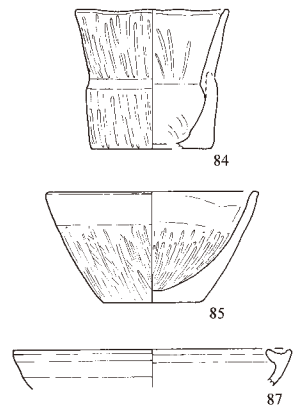
西脇前遺跡



増楽遺跡(2009年度)



増楽町村北遺跡隣接地

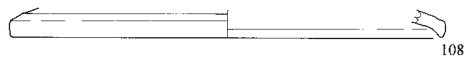
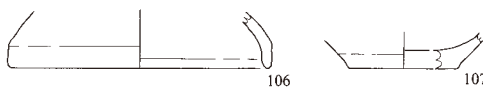
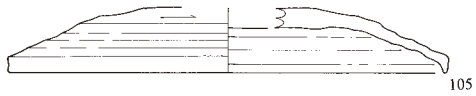
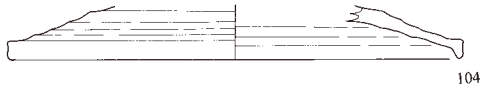
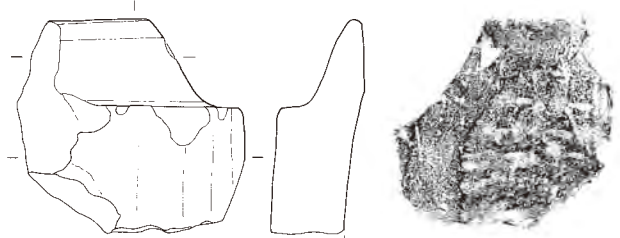
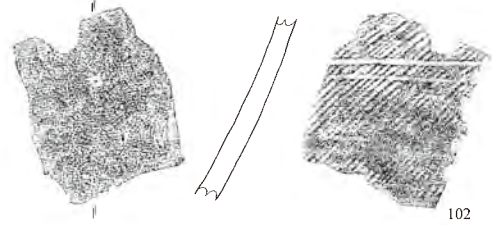
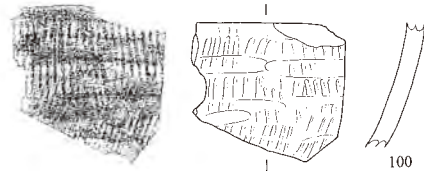
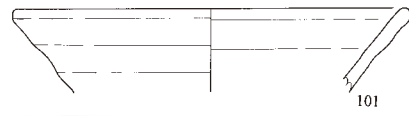
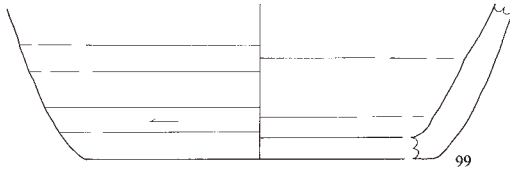
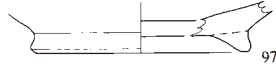


0 1:3 15cm

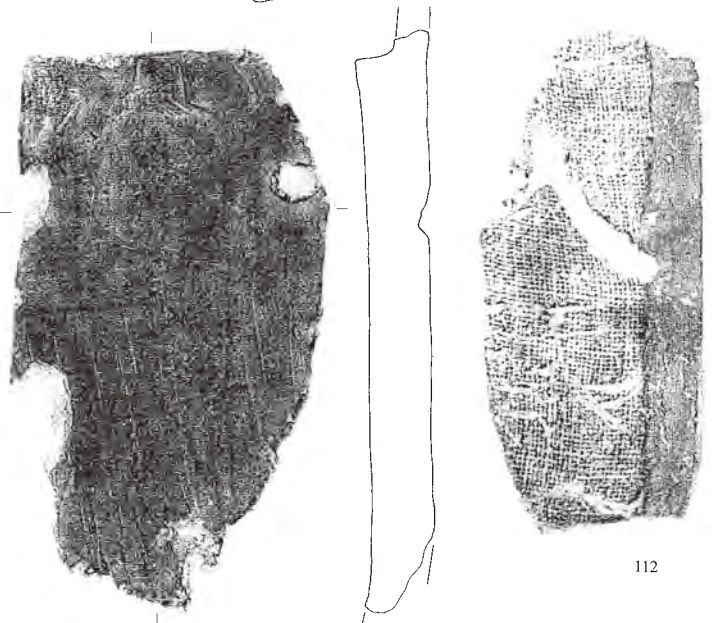
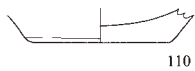
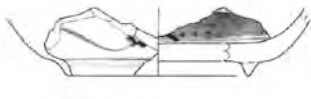
馬領家遺跡



柳ノ内遺跡

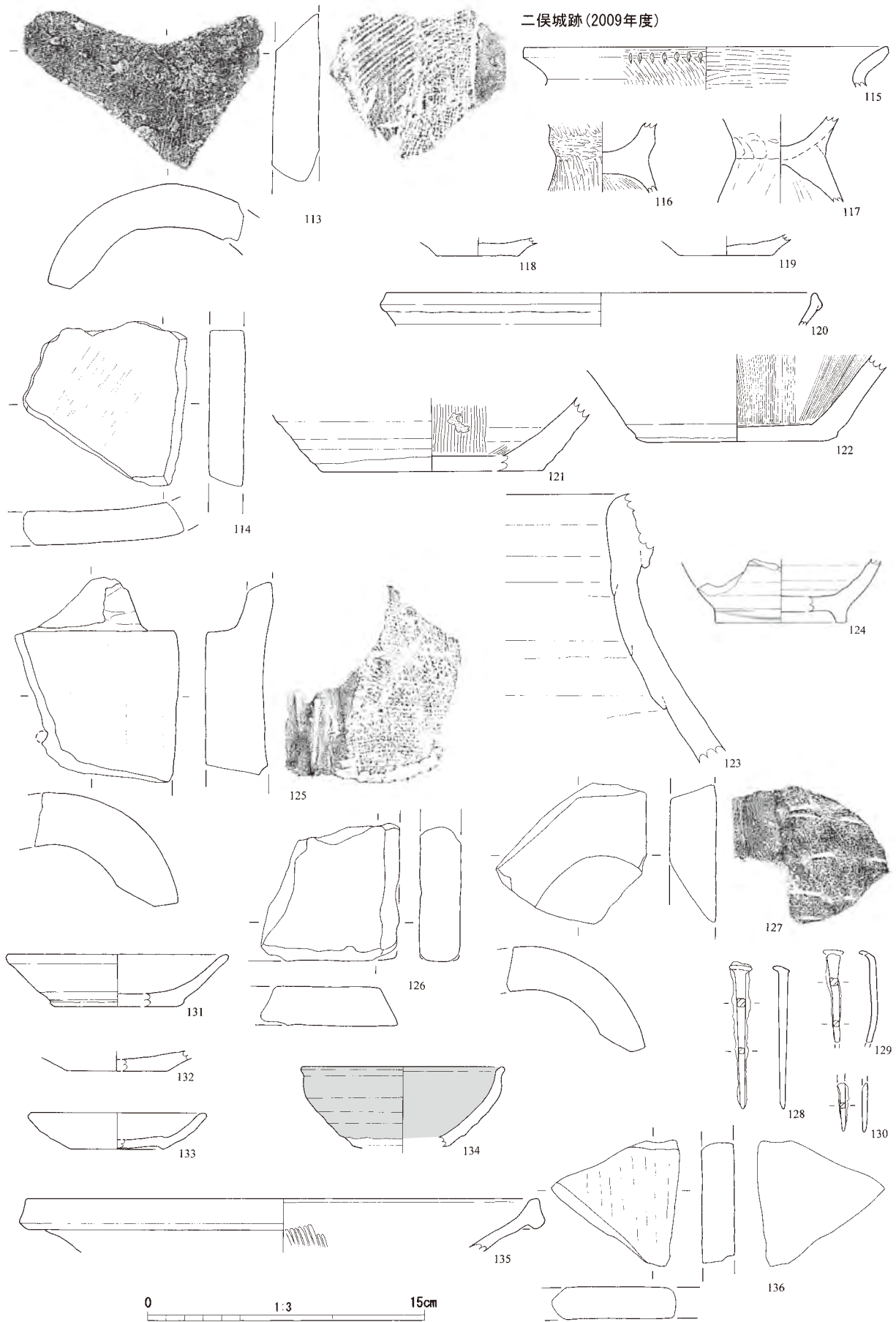


二俣城跡(2008年度)



0 1:3 15cm

二侯城跡(2009年度)



試掘調査出土遺物(5)

第3部

試掘・立会調査詳細報告

(平成17～21年度)

1. 浜名惣社神主屋敷跡

(1) 調査の概要

遺跡の立地 浜名惣社神明宮は浜松市北区三ヶ日町にあり、本殿は神明造の構造を残す建造物として、重要文化財に指定されている。浜名惣社神主屋敷跡は神明宮の南側にあり、丘陵地には屋敷を区画した造成地が遺存している。現在、遺跡地には神主屋敷にかかわる建物は認められない。

調査経過 2005年、浜名惣社神明宮の社務所にかかわる配電線地下埋設工事の折、土器が出土したとの連絡を受けた。これらの遺物は平安時代から鎌倉時代にかけてのものであり、現在の境内地に遺構等が遺存している可能性が考えられた。また、同じく2005年7月には浜名惣社神明宮の境内地において集水槽を設置する工事計画が予定された。計画地は遺跡内にかかわる可能性があるため、試掘調査を実施した。試掘調査は、2005年7月19日に行われた。調査面積は84㎡である。

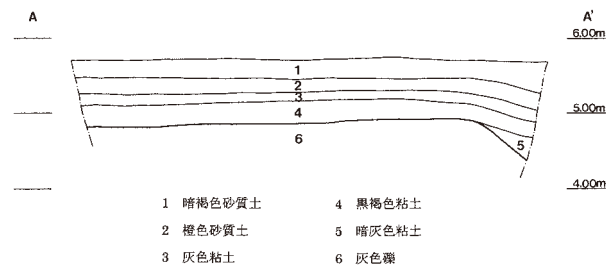


第1図 浜名惣社神明宮と試掘調査の位置

(2) 調査の詳細

試掘調査では、調査区の東側に向かって低くなる地形を確認した。出土遺物が全く確認できなかったことから、この地形が人工的なものか不明確である。

調査区の北辺の土層堆積状況を図化した。地山は灰色を呈した礫層であり、その上位に粘土層もしくは砂質土層が堆積していた。調査区の東側にみられる低地には、暗灰色粘土層（5層）がみられた。



第2図 土層断面図

(3) 出土遺物

試掘調査では、遺物は全く出土しなかった。いっぽう社務所北西側にあたる配電線地下埋設工事地点（土器出土1地点）からは、第4図の1～5、7～15が出土した。また、社務所から東25mほどの池の堆積土（土器出土2地点）から、第4図の6が出土した。

1は須恵器甕の口縁である。7～8世紀頃のものとして捉えられる。2は土師器の皿である。口縁端部上面に一条の沈線が入れている特徴から、9～10世紀頃のものとしてみられる。3～7は灰釉陶器である。2はK90 窯式期（9世紀後半）、4～6はO53 窯式期（10世紀）、7はH72 窯式期（11世紀）に位置づけられる

8は山皿である。形態的特長からおおむね12世紀後半～13世紀頃に位置づけられる。9～13は山茶碗である。高台の特徴から13世紀を中心としたものとみられるが、高台が矮小化した12や高台が消滅している13は14世紀以降に降る可能性がある。

14・15はかわらけである。14はロクロ成形の製品で、糸切の底部が厚い。形態的特長から16世紀以降のものとして捉えられる。15は非ロクロ成形の製品で、口径



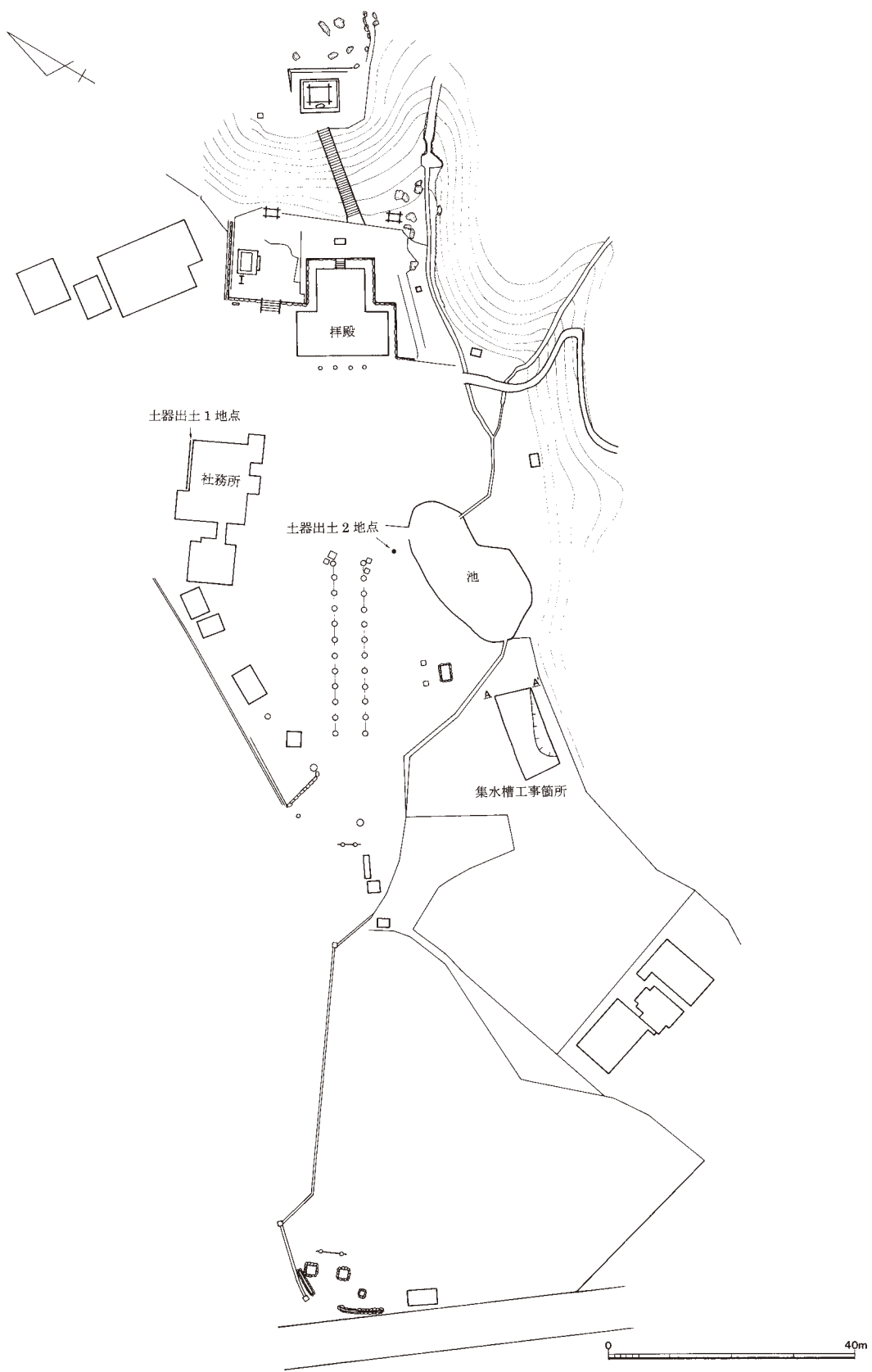
浜名惣社神明宮本殿



浜名惣社神明宮現況



遺物出土地（浜名惣社神明宮社務所）



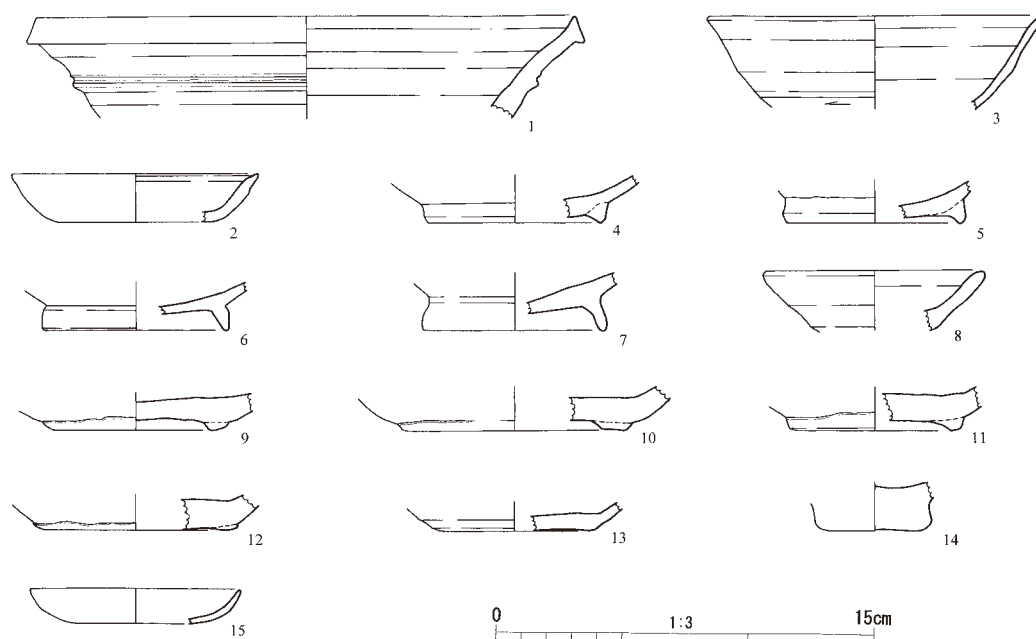
第3図 調査区全体図

の復原値は8.4cmである。かわらけが小型化した段階のものとみられ、製作時期は17世紀以降であろう。

(4)まとめ

集水槽建設地における試掘調査では、当遺跡にかかわる具体的な情報は得られなかった。いっぽう、境内地における出土遺物から、当地にかかわる人びとの営みが9世紀頃までさかのぼることが明確になった。遺物が含まれる遺構の詳細が判明しないので、これら出土遺物が示す歴史的な事象は必ずしも明確ではない。ただし、出土地点が神社拝殿に近接していることから、浜名惣社神明宮もしくはその前身と目される英多神社にかかわる遺物と捉えても矛盾はないだろう。

(鈴木一有)



第4図 出土遺物

2. 岡の平遺跡 3 次調査

(1) 調査の概要

遺跡の立地 岡の平遺跡は、浜松市北区細江町中川にあり、弥生時代の代表的な集落遺跡として浜松市の史跡に指定されている。都田川が貫く平野部を北にのぞむ台地の縁辺部に立地している。岡の平遺跡は、弥生時代後期の銅鐸が集中的に出土した滝峯谷の先端に位置し、銅鐸祭祀と密接にかかわる拠点的な集落であったとみられる。

調査経過 浜松市指定史跡にかかわる範囲確認を目的として、2006年2月6日から8日の間に調査を実施した。岡の平遺跡については、1970年の日本考古学協会による調査(第1次調査)、および1998年～1999年の細江町教育委員会による調査(第2次調査)がなされている。今回の発掘はこれらの調査に続くもので、3次調査と呼ぶ。3次調査は集落北側の水田部分を対象にし、1m×2mの試掘坑4箇所、2m×2mの試掘坑1箇所、1m×8mの試掘坑(トレンチ)1箇所の合計20㎡を精査した。各調査区の位置と名称は、図に示すとおりである。

(2) 調査の詳細

調査成果 大量に遺物が出土したのは、試掘坑Bと試掘坑Fである。両試掘坑では、丘陵土の2次堆積層である6・7層に遺物が大量に含まれる。下層には、遺構検出面である5層が確認でき、集落の範囲内にあたりと考えられる。

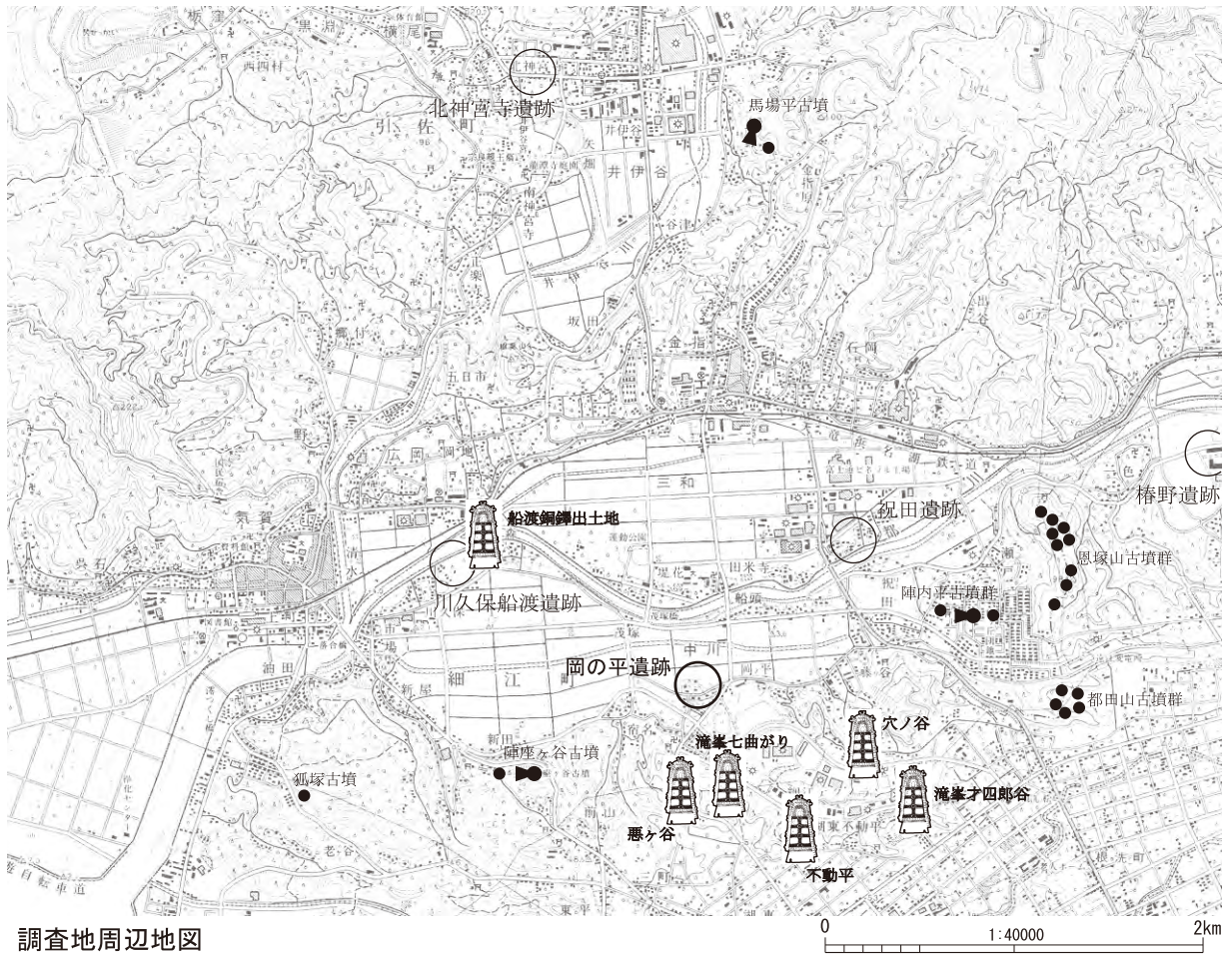
試掘坑Dは、上面検出に留めたが、下層に大量の遺物が包含されている可能性が高い。試掘坑Eでは、泥炭層と砂層が確認でき、大量の植物遺体の埋没状況が確認できた。試掘坑D・Eでは、河川から供給された砂や泥炭が堆積している。近くには多くの木製品も埋没していると推定できる。集落の周囲に広がる生活残滓廃棄域といえよう。

試掘坑Aと試掘坑Cは、湿地性の堆積状況が確認でき、土層境界面の擾乱状況から、水田が広がっていたと考えられる。水田の帰属時期は不明確であるが、試掘坑Cで水田耕作土(4層)から古墳時代の須恵器が出土している。少なくとも、古墳時代には水田として使われていた可能性が高い。

(3) 出土遺物

B トレンチ出土遺物 1～16はBトレンチから出土した遺物である。いずれも6層(暗灰色粘質土層)もしくは7層(黒灰色粘質土層)から出土したものである。帰属時期には開きがあるが、おおむね6層が弥生時代後期、7層が奈良時代を中心とする堆積層とみられる。

1は弥生時代中期後葉の壺の口縁である。厚く作られる口縁外面には、わずかに斜格子文の可能性のある櫛描文様がみられる。2～13は弥生時代後期の土器である。2～6は壺、7は小型の鉢、8は壺蓋である。5の壺肩部にはU字形の櫛描文様がみられる。9・10は弥生後期前半様式(山中様式)の高坏坏部、11は弥生後期後半様式(欠山様式)の高坏脚部である。12・13は台付甕の脚台接合部である。12には補強粘土帯がみられ、弥生後期前半様式(山中様式)に位置づけられる。14・15は奈良時代の須恵器甕口縁、16は鎌倉時代の山茶碗の底部である。

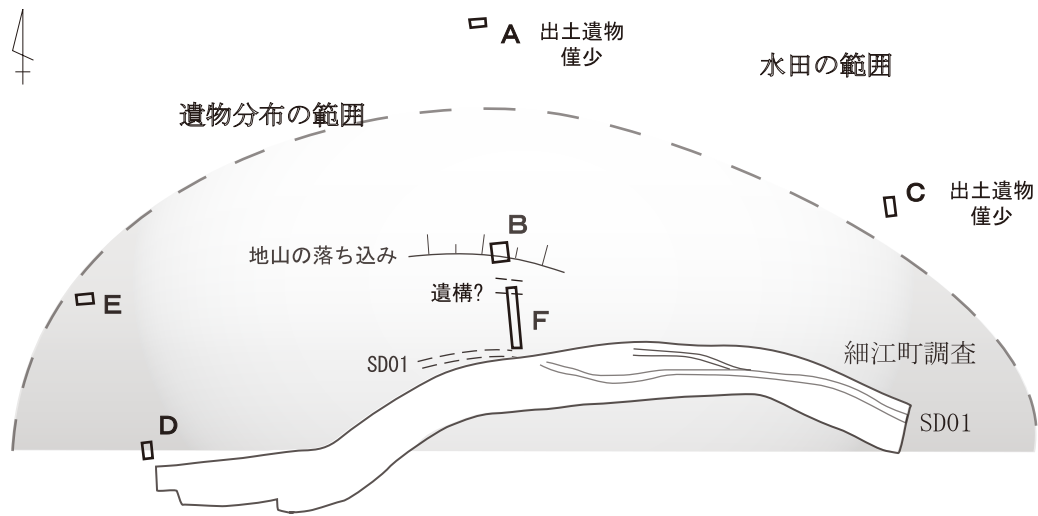


調査地周辺地図

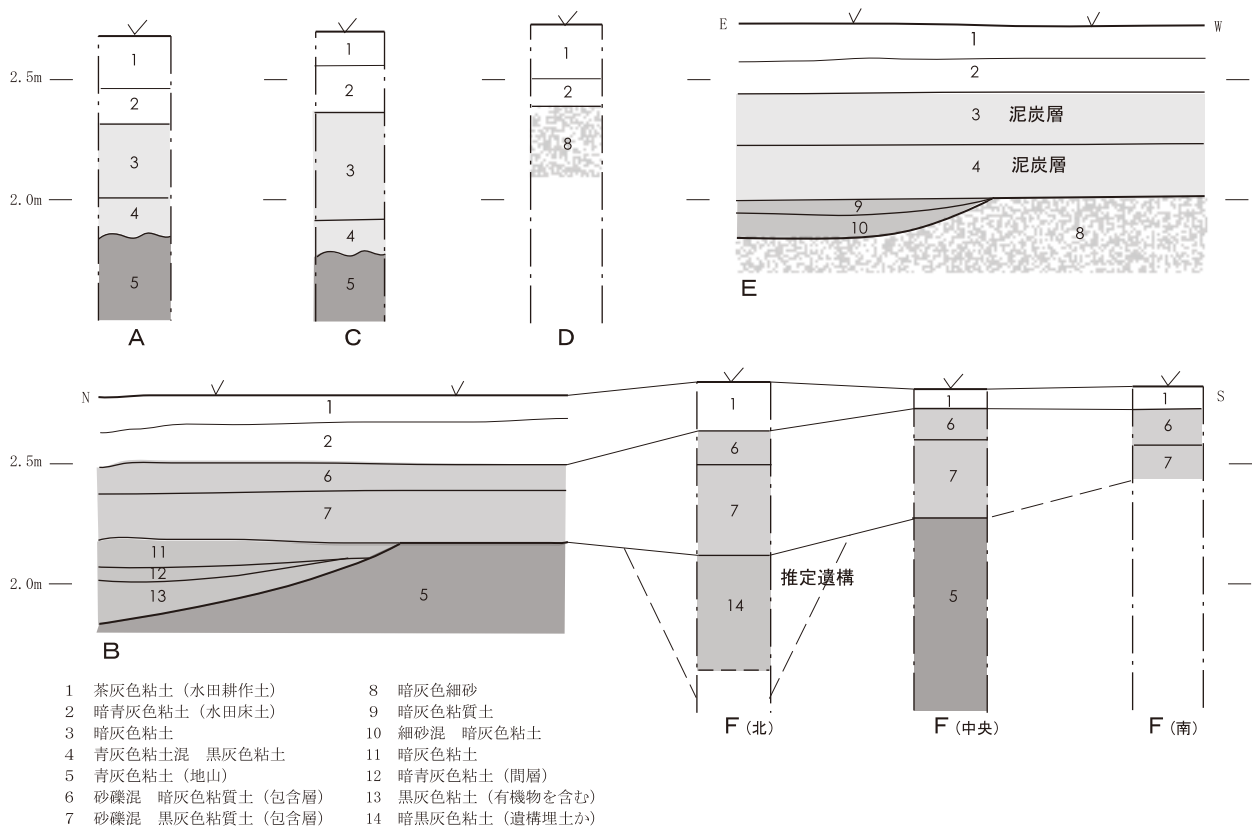


岡の平遺跡北 試掘調査位置図 (A~F)

第5図 岡の平遺跡周辺地図・試掘調査位置図



岡の平遺跡北 試掘調査詳細図



試掘調査 土層図

第6図 試掘調査詳細図及び土層図

F トレンチ出土遺物 17～52はFトレンチから出土した遺物である。北端で確認できた遺構(暗黒灰色粘土層、14層)から18が出土したほかは、いずれも6層(暗灰色粘質土層)もしくは7層(黒灰色粘質土層)から出土したものである。層位の帰属時期にかかわる理解は、Bトレンチにおける所見と同様である。

17～19は弥生時代中期後葉の壺である。17は壺口縁で、1と同様に端部は厚くつくられている。18は櫛刺突による直線文が施されたもので、Fトレンチ北端で確認できた遺構の時期を示す遺物と捉えられる。19は細かい格子文がみられる。

20～37、39～41は弥生時代後期の土器である。20～32は壺である。口縁形態には、外反口縁(20～22)、内彎口縁(23・24)、折返口縁(25・26)、複合口縁(27～30)といった多様性がみられる。31・32は壺肩部の文様帯がうかがえる破片である。31には縄文が、32には幅が広い櫛描直線文に刺突文がみられる。33は小型の壺もしくは鉢、34は小型の鉢である。35～37は高坏である。柱状の脚部をもつ35・36は弥生後期前半様式(山中様式)に、脚台端部が外に開く37は弥生後期後半様式(欠山様式)に位置づけられる。38～41は甕の破片である。38の口縁は下端部を摘む形態で、弥生時代中期後葉のものともみられる。残りの39～41は弥生時代後期の所産とみてよい。

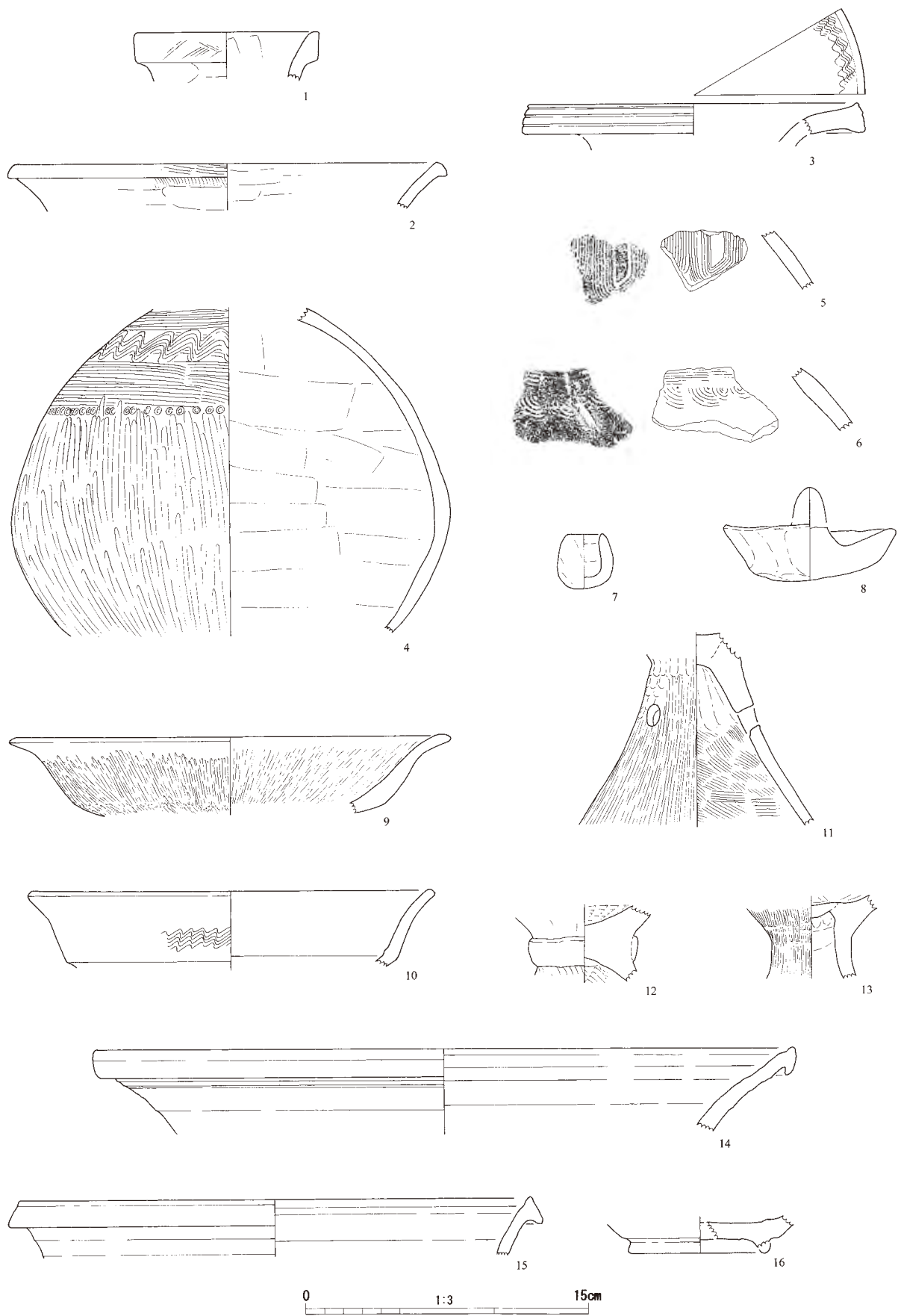
42～52は奈良時代を中心とする須恵器である。42～45は摘み蓋である。42は器高が高く、端部が下方に屈曲する古相の形態を呈する。7世紀末から8世紀初頭頃のものといえるだろう。いっぽう、43・44は直径が小さく、端部が厚く矮小化した新相の形態である。8世紀後葉頃の所産と考えられる。45は直径が28cmほどの大型の坏蓋である。46・47は高台がない箱型の坏身で、8世紀後葉頃のものである。48は碗である。50・51は甕、52は高台付の壺類底部である。

E トレンチ出土遺物 53～56はEトレンチから出土した遺物である。53は条痕文が施された壺で、弥生中期前葉の所産とみられる。54は弥生時代後期前半の高坏の坏部である。55は甕の口縁部とみられるが、口縁端部に刺突がみられない。弥生時代後期後半から古墳時代前期のものともみられる。56は弥生時代後期から古墳時代前期の甕の脚台部である。

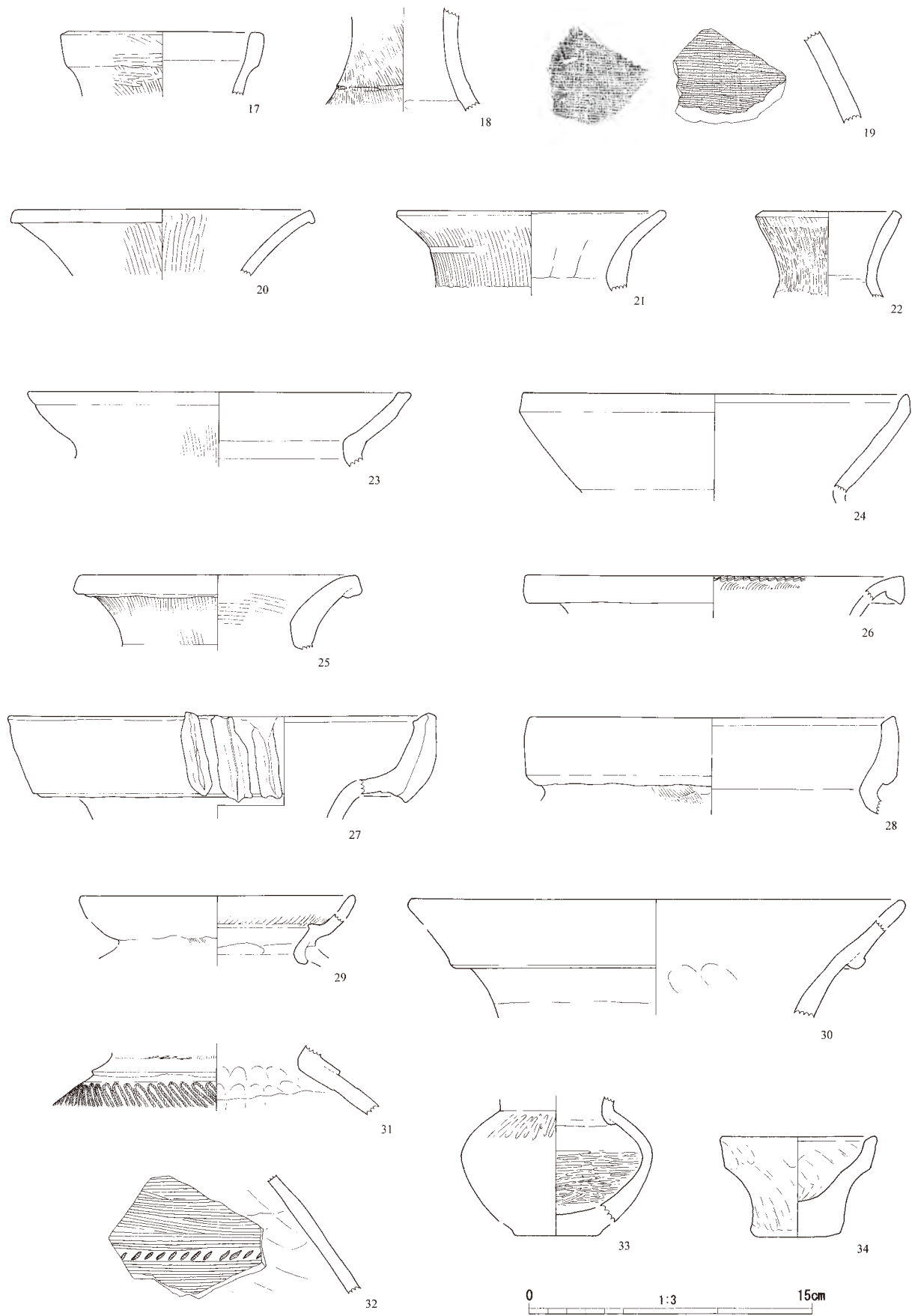
表面採集遺物 57～69は史跡指定地の南西部において採集できた遺物である。57は土師器、58～67は須恵器、68・69は灰釉陶器である。57は甕の脚台部であり、形態的特長から5～6世紀頃のものともみられる。58は7世紀初頭頃の坏身である。59・60は摘み蓋で、ともに8世紀後葉のものともみられる。61は碗、62は皿、63・64は壺、65～67は甕で、いずれも8世紀代のものであろう。68・69は9世紀後半から10世紀頃の所産である。

(4)まとめ

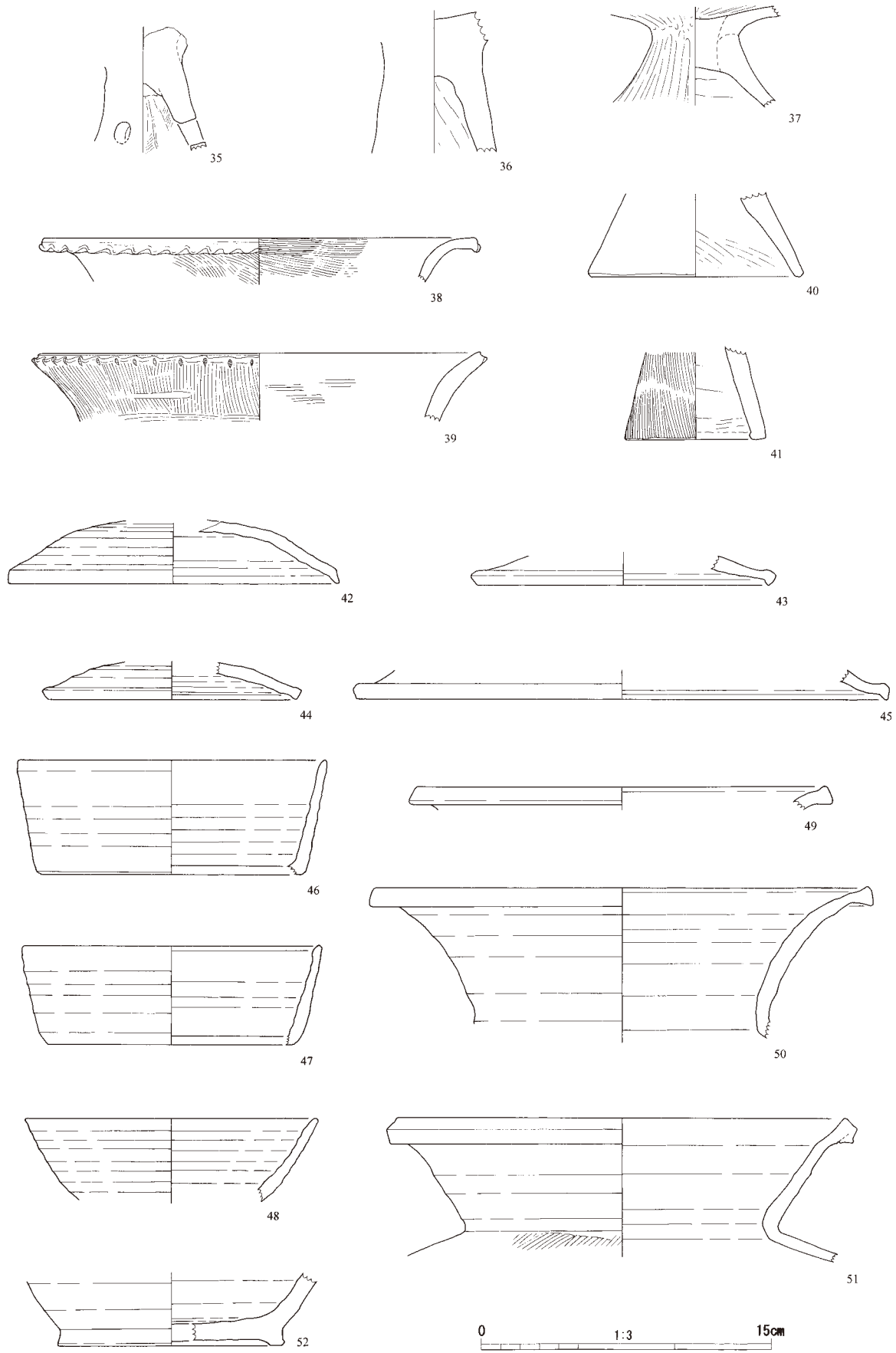
今回の試掘調査によって、岡の平遺跡の北端が確定できた。北側の低位面には弥生時代の環濠とみられる2次調査SD01が弧状に貫入している。試掘溝Fの南端において確認できた遺構は、このSD01と同一のものである可能性がある。試掘坑B、D、E、Fにおいては、遺構や遺物が比較的多く確認できたことから、遺跡の範囲内であることが確実である。いっぽう、試掘坑A、Cは遺構、遺物ともに確認できなかったことから、遺跡の範囲外とみられる。(鈴木一有)



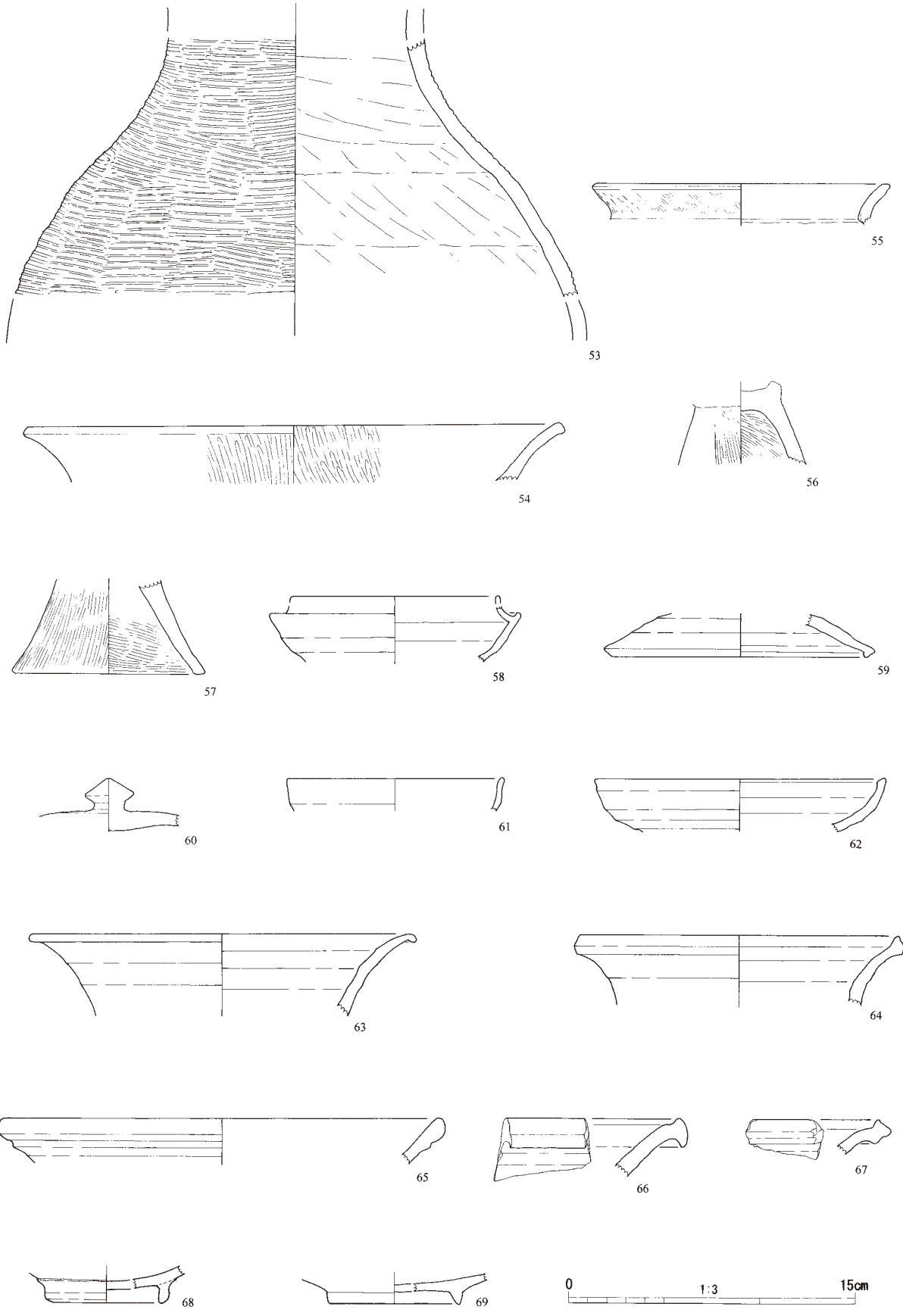
第7図 岡の平遺跡出土遺物(1)



第8図 岡の平遺跡出土遺物(2)



第9図 岡の平遺跡出土遺物(3)



第10図 岡の平遺跡出土遺物(4)

3. 風呂ノ入古墳群

(1) 調査の概要

古墳の立地 浜松市北区細江町の北部には数多くの古墳が残存している。とくに神宮寺川沿いの丘陵上には横穴式石室をもつ小古墳が広範囲に分布しており、北に接する引佐町域の古墳群とともに大規模群集墳を形成している。これら群集墳の詳細はいまだ不明な点が多く、分布調査もなされていない。今回報告する風呂ノ入古墳群についても、正確な古墳数や、個別の古墳の位置が確認されていない。

調査経過 北区細江町小野の風呂ノ入古墳群内の蜜柑畑において耕作者が土地を開削したところ、古墳時代の土器が出土した。遺物出土の連絡を受け、直ちに現地へ赴き、出土状態を確認するとともに、残存遺構の精査に努めた。調査は2006年4月17日、18日に実施した。

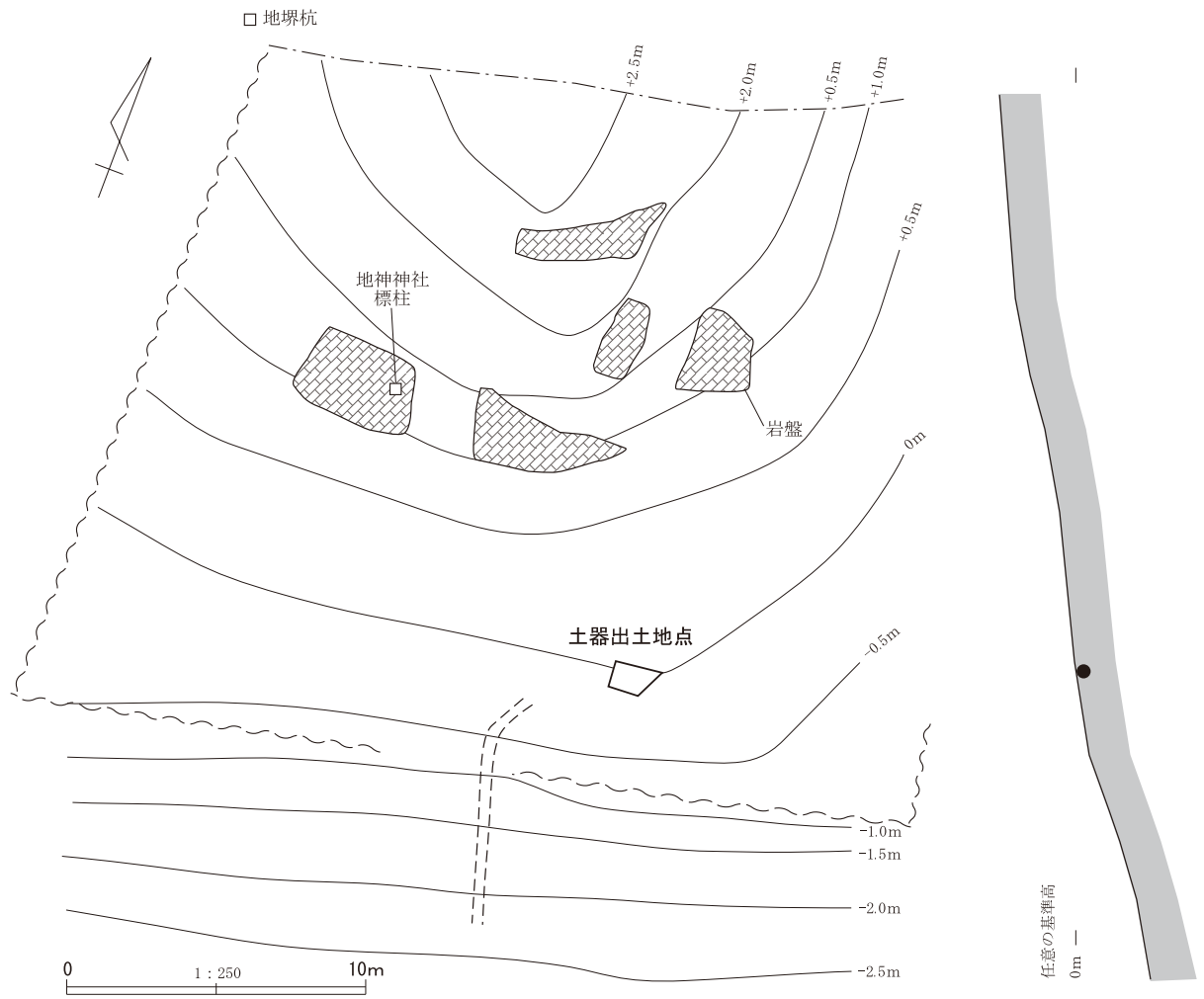
(2) 調査の詳細

遺物が出土した近辺を精査したところ、現位置を留める須恵器広口壺と須恵器坏蓋を確認した。いずれも完形に近く、古墳など何らかの遺構に伴う遺物と予想された。遺物出土地点の周辺を平面的に精査し、関連遺構の検出を目指したが、明確な遺構は確認できなかった。

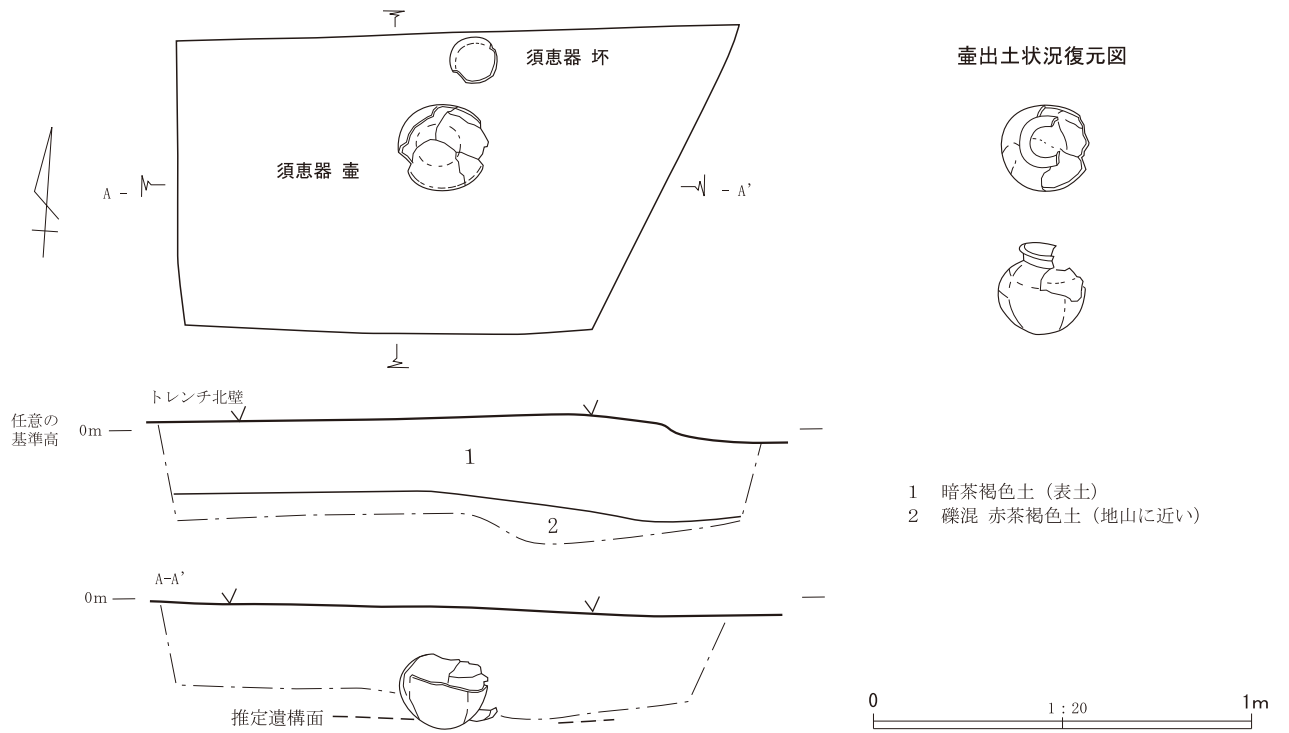
遺物が出土した地点は、独立丘陵の南斜面であり、ところどころに岩盤が露出している景観を呈している。古墳の墳丘など明確な構造物は確認できていない。



第11図 風呂ノ入古墳群調査区位置図



風呂ノ入古墳群 土器出土地点 周辺地形図



土器出土地点 詳細図・土層図・復元図

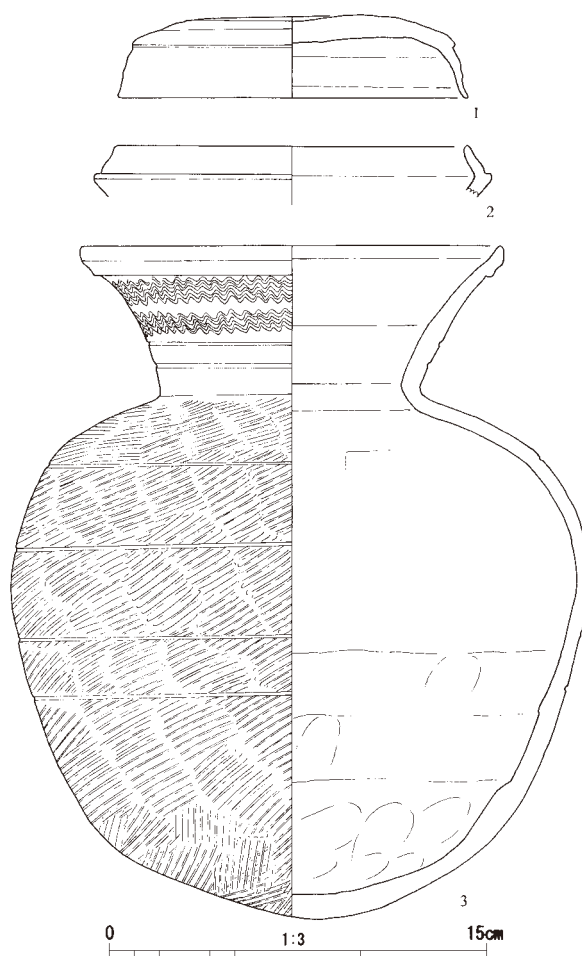
第12図 土器出土地点周辺地形図・詳細図

広口壺は口縁部を上に向けた正位置で据えられており、ほぼ完形の状態で出土した。坏蓋は内面を上にした状態で出土している。

関連遺構が検出できなかったのは、調査対象地が狭かったことに原因があるとみられ、遺物が出土した地点は何らかの遺構内にあると想定できる。須恵器の広口壺や坏蓋は古墳副葬品にふさわしい。周囲には石組みがみられなかったことから、横穴式石室墳の石室が破壊され、玄室内の遺物のみが残ったか、周溝・墓道などの施設に相当する可能性がある。また、出土品の帰属時期が6世紀前半と比較的古い段階であることから、木棺直葬墳であった可能性がある。

(3) 出土遺物

1 は須恵器坏蓋である。比較的扁平な天井部をもち、屈曲部の稜線が明瞭である。口縁部内面には面取りがみられず、緩やかに外反する。2 は須恵器坏身である。立ち上がりはやや低いが直径が16cmを超える。3 は須恵器広口壺である。口縁部は2条の沈線および波状文が入れられ、胴部にはタタキ調整の後に4条の沈線が施されている。2はやや時期が降るとみられるが、完形に近い遺存状態を示す1や2は、いずれもTK10型式期(6世紀前半)に位置づけられる。



第13図 風呂ノ入古墳群出土遺物

(4) まとめ

今回の調査では明確な遺構は確認できなかったものの、完形に近い状態の須恵器が出土した。遺跡の立地環境から判断すると、これら須恵器は古墳に伴うものと判断できる。須恵器の帰属時期が古墳時代後期でも比較的古い段階に位置づけられることから、木棺直葬の古墳にかかわる可能性が考えられる。

調査対象地の周囲には、横穴式石室墳が多数確認できる。市内では比較的遺存状態のよい古墳群といえ、今後、詳細な分布調査と石室図を作成する必要がある。(鈴木一有)



調査地区遠景



調査地の現状



遺物発見時の状況



須恵器広口壺出土状況



須恵器坏蓋出土状況



残存する横穴式石室

4. 石岡遺跡

(1) 調査の概要

石岡遺跡は都田川下流部の細江平野を北から望むことができる台地上に立地する遺跡である。北側には赤石山脈がせまり、台地は緩やかな南向きの斜面地となっている。北側の山麓には石岡古墳群があり、現在までに3基が確認されている。石岡遺跡は、縄文土器や打製石斧や石鏃が採集されたことから、縄文時代の遺跡として周知されてきた（細江町1986『細江町史資料編六』）。

2006年11月7日の試掘調査は、北区細江町三和232-2における集合住宅の建築に先立ち、埋蔵文化財の有無を確認するために実施された。その結果、5世紀を中心とした竪穴住居跡が複数確認され、石岡遺跡は古墳時代中期の集落遺跡であることが判明した。

埋蔵文化財の存在が明らかになったため、集合住宅の宅盤には盛土を行い、地盤改良は柱状改良にするなどの設計を変更し、遺跡の保護策が講じられたため、本発掘調査には至らなかった。

浄化槽の設置工事については、工事立会とし、遺物・遺構が確認された場合には、必要な調査を実施することとした。2007年1月9日に工事立会を行った結果、遺構が確認されたため、調査を実施し、遺構図面の作成と記録用写真の撮影などの作業を行った。

(2) 調査の詳細

試掘調査は、用地の南端に設定した東西方向の1トレンチ（幅1.4×長さ23.5m）、中央に設定した南北方向の2トレンチ（幅1.4×20m）、北側の浄化槽設置箇所に設定した3トレンチ（6×4.5m）の、3地点で実施した。調査総面積は、約88㎡である。

1 トレンチ 1トレンチでは約30cmの表土層をバックホーで除去すると、直ちに基盤層（遺構検出面）となった。基盤層は黄褐色砂礫層で、それに掘り込む暗褐色土層を覆土とした古墳時代中期の竪穴住居跡が認められた。掘り方の深さは土層の堆積状況から、深いもので約20cmである。しかし、掘り方が深いものばかりではなく浅いものもあり、それらは貼り床の存在から、竪穴住居であることが確認された。石岡遺跡の竪穴住居においては、遺構の検出状況から察して、ほとんどのものに貼り床が施されていたようである。竪穴住居跡のうち最も西側で確認されたSB01には、真っ赤に焼けた炉跡も確認された。1トレンチにはSB01を含め、4軒分の竪穴住居跡の存在が推定された（SB01～03・07）。遺構は試掘調査の性格上、完全には掘り下げていない。出土遺物は、すべて土器で、主にSB01と02の床面および覆土から出土した。

竪穴住居跡の他には、トレンチの東端で奈良時代の土壌が1つ検出された（SK01）。覆土から、8世紀後半の須恵器箱坏が出土した。

2 トレンチ 地形的に北が高いため、北ほど検出面は浅く、しかも竪穴住居跡の掘り方はほとんど削平されていた。貼り床は表土層の直下で確認され、床面もかなり削られている可能性が高い。貼り床の確認状況から、3軒分以上の竪穴住居跡（SB04～06）が存在したと推定される。さらに、トレンチ北半には、貼り床の痕跡は確認されなかったが、小穴の存在が多く認め

られた。貼り床さえも完全に削平された竪穴住居跡、あるいは掘立柱建物跡が存在した可能性が高い。遺物は、細片化した土師器が検出されたに過ぎない。

3 トレンチ 調査区の北西部において、竪穴住居跡の貼り床らしき硬化面を確認した (SB08)。また、2 トレンチの北から続く小穴群も、多くを確認した。ほとんどの遺構は、出土土器や覆土の状況から古墳時代中期と考えられる。

遺物には土師器のほか、古代の須恵器もあるが、いずれも細片である。

(3) 出土遺物

出土遺物は、全て土器であり、古墳時代中期の土師器と奈良時代以降の須恵器や陶器である。

古墳時代中期 いずれも土師器で、器種には壺、甕、高坏、鉢 (第 17 図) がある。大半の土器は風化が進み、残存状況は極めて悪い。

1 トレンチから出土した土器から説明しよう。1~18 が SB01 から出土したものである。1~3 が直口縁部の小型壺、4~6 が同じ直口縁部の中型壺である。1 はオサエとナデで仕上げられたものである。7 と 9 がエンタシス脚高坏の坏部、10~12 がその脚部である。8 は脚部下半が二重口縁部状を呈する二重高坏である。これに伴う坏部は口縁部が二段に外反する二重口縁部状のものと一般的な有稜の 7 のような形態のものがある。13 と 14 は単純なくの字口縁部の甕で、18 のような平底甕と 15・16 のような台付甕がある。口縁部は中脹みし、先端を細くするのがこの時期の特徴である。17 は口縁部が屈曲した鉢である。

19~23 が SB02 から出土したものである。19 は口縁部を欠くが、直口縁部の中型壺であろう。20 は上げ底となった壺底である。21 はくの字口縁の小型壺である。22 はくの字口縁部の甕で、23 は台付甕の台部である。26 は 3 トレンチから出土した平底の壺底部である。

今回発見された土器の年代は、山ノ花様式のⅢからⅣ様式に比定できるものであり、5 世紀中葉から後葉と考えられる。

奈良時代以降 須恵器の破片は数点出土したが、形が推定できるものは、1 トレンチ東端の SK01 から出土した 24 の箱坏だけである。底部はヘラケズリにより平に整形されている。

25 と 27 は 3 トレンチから出土した戦国期以降のもので、25 は非ロクロ成形のカワラケ、27 は瀬戸美濃製の播鉢である。

(4) まとめ

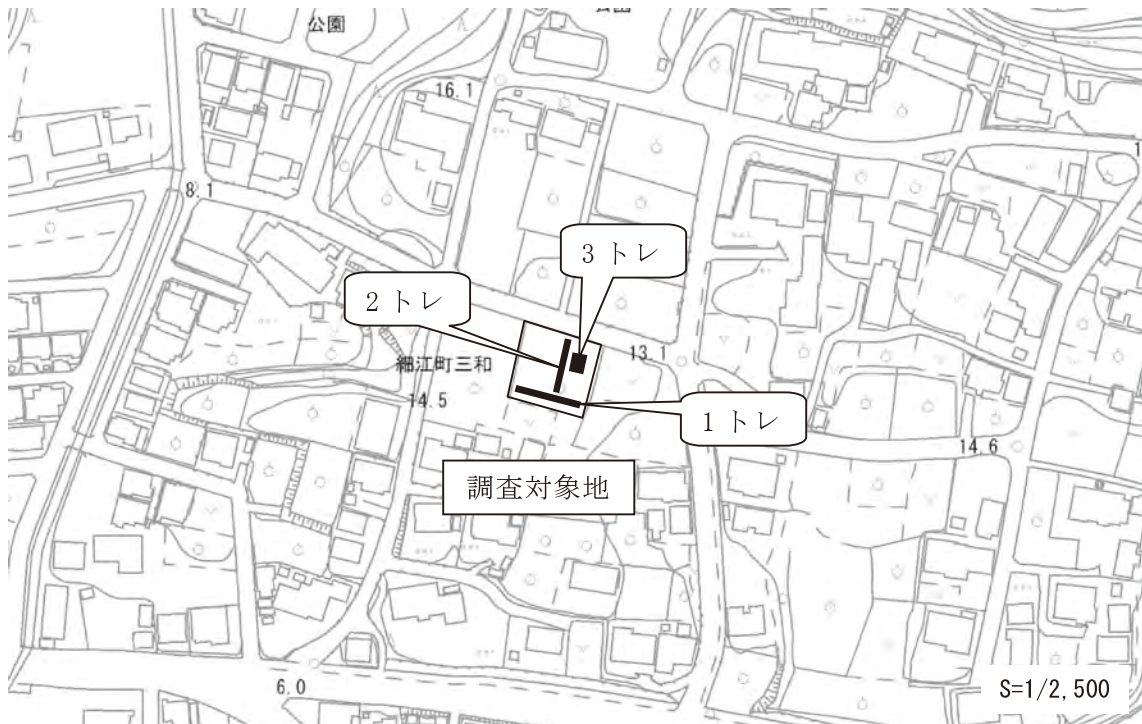
石岡遺跡は、古墳時代中期の竪穴住居で構成される台地上の集落であることが判明した。なお、石岡遺跡は今まで縄文時代の遺跡とされてきたが、今回の調査区からは、当期の遺構や遺物はまったく確認されなかった。

古墳時代中期の遺跡は、都田川下流域の細江平野では川久保遺跡、上流部都田平野では須部Ⅱ遺跡において、竪穴住居跡が確認されており、当該期の集落が存在したことが発掘調査で明らかになっている。さらに、井伊谷川が都田川に合流する地点に存在し、古代に引佐郡衙が置かれる井通遺跡や、都田川が形成した微高地上に存在する多くの遺跡においても当該期の土器が多く出土している。古墳時代中期における引佐細江平野には、安定した集落群が形成されていたと考えられる。

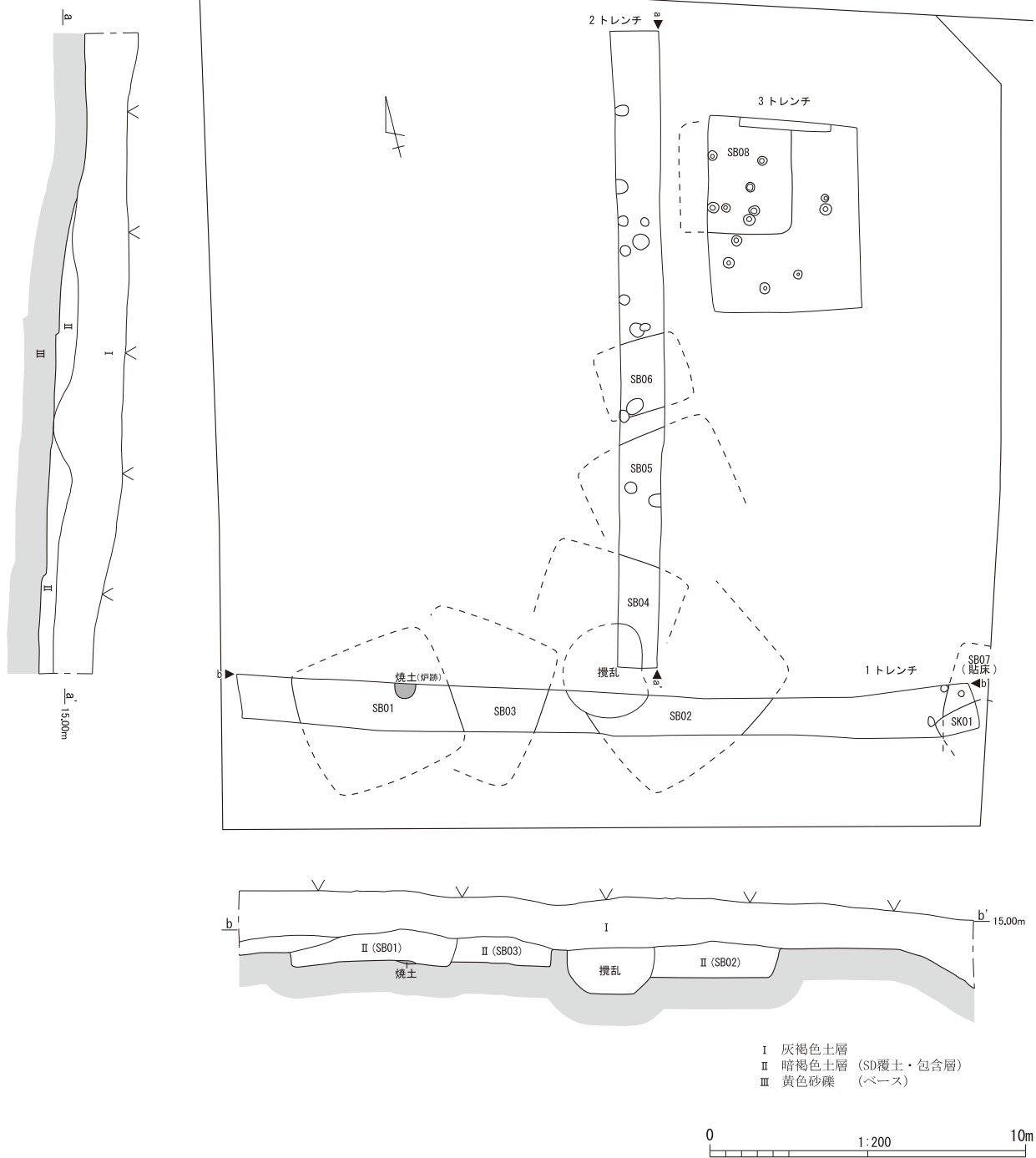
都田川流域では、前期に北岡大塚（前方後円墳）や馬場平古墳（前方後円墳）、中期には谷津山古墳（造出円墳）や陣座ヶ谷古墳（前方後円墳）と首長墓が継続的に築造される。継続する首長墓の存在は、都田川流域の自然堤防上や台地上での安定した集落群の営みが背景にあることを忘れてはならない。（鈴木敏則）



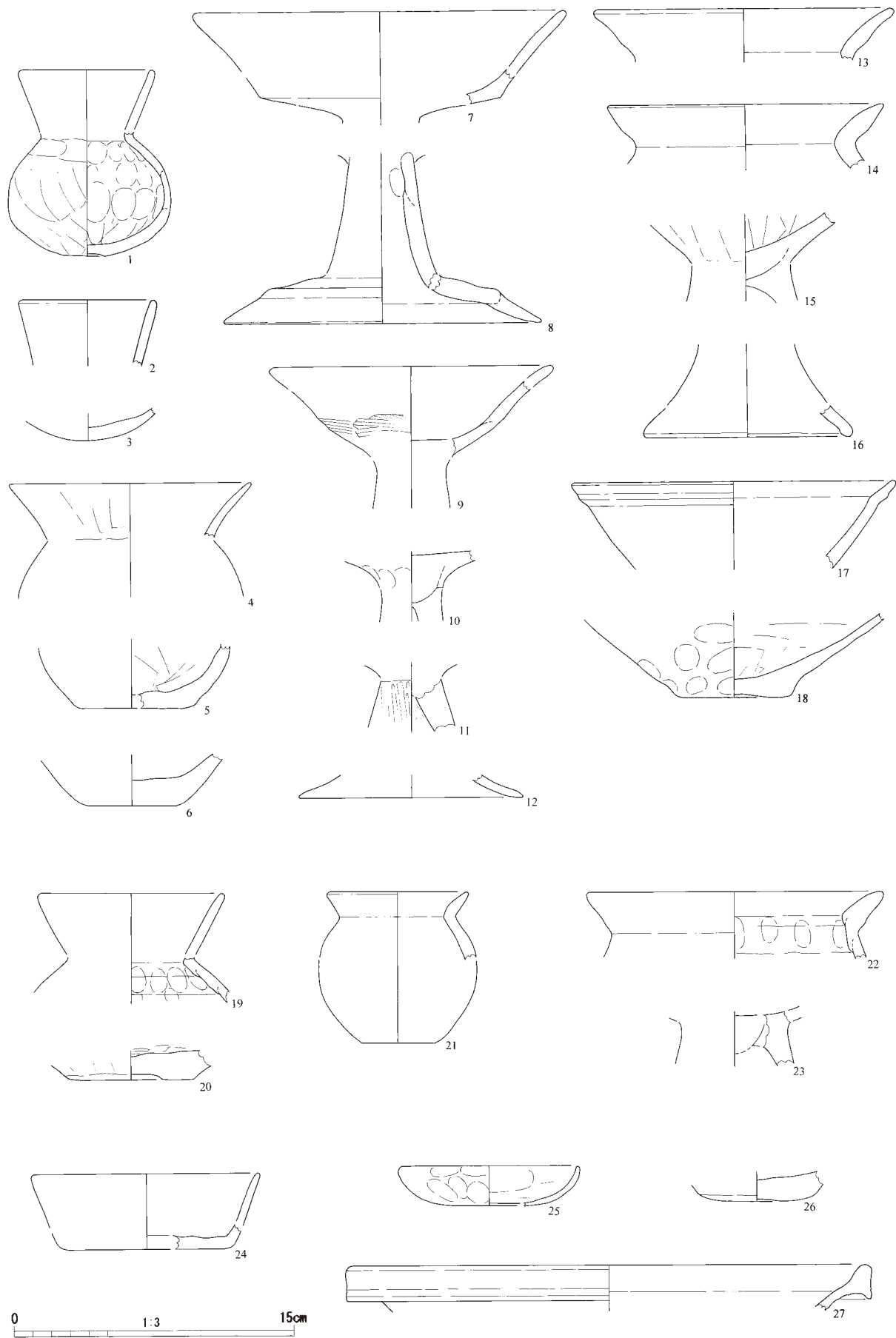
第14図 石岡遺跡の位置



第15図 調査区の位置



第 16 図 調査区全体図



第 17 图 石岡遺跡出土遺物



調査対象地



1 トレンチ



1 トレンチ SB01(○印が炉跡)



1 トレンチ



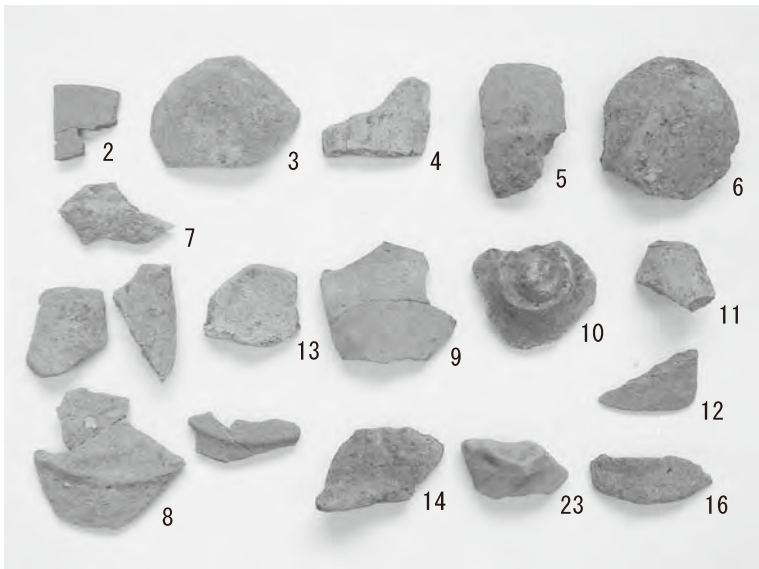
2 トレンチ



3 トレンチ



出土遺物(1)



出土遺物(2)



出土遺物(3)

5. 八反田遺跡

(1) 調査の概要

遺跡の立地 八反田遺跡は浜松市西区入野町にある古墳時代から平安時代の集落遺跡である。三方原台地が途切れ、海岸平野が広がる北端部に相当し、近世の交通路である雄踏街道に近接する。現在、遺跡とその周辺には大型商業施設が建ち、地表面の観察から遺跡の状況をうかがうことは難しい。

調査経過 八反田遺跡の試掘調査は、2001年および2002年に実施されている(浜松市教育委員会 2003『浜松市遺跡調査集報』)が、今までに本格的な発掘調査はなされていない。2007年(平成19)、入野町6010において土地の開発が計画され、八反田遺跡の遺存状況を確認するための試掘調査を行った。調査は、2m×2mの試掘坑を4箇所設定し、遺物の残存状況や遺構の埋没状況を精査した。調査年月日は、2007年4月26日である。

(2) 調査の詳細

土層堆積状況 浜松市南部地域(沖積世)の典型的な堆積状況が認められた。基盤層である砂層の上に黒色粘土(PEAT質)と白灰色粘土層の互層が堆積し、最上部は灰色粘土で覆われている。試掘坑は東西90mにわたるが、基盤層である砂層の標高は、西側が低く、東側が高い。

遺構 基盤砂層の標高が低い西側の試掘坑1,2では、黒色粘土層の境界面が攪拌されており、この地層を水田として使用している可能性が高い。帰属時期は、試掘坑3と4の出土遺物から、古墳時代中期から奈良時代頃と推定できる。このほかに明確な遺構は確認していないが、試掘坑4では、比較的大量の遺物を包含しているため、近辺に遺構が存在している可能性が高い。



第18図 八反田遺跡の位置

(3) 出土遺物

遺物は、試掘坑 3, 4 から出土した。遺物出土層位は、最上の黒色粘土層である。試掘坑 3 では、古墳時代中期の土師器が数点出土した。試掘坑 4 では、古墳時代中期の土師器と、飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器が比較的大量に出土している。

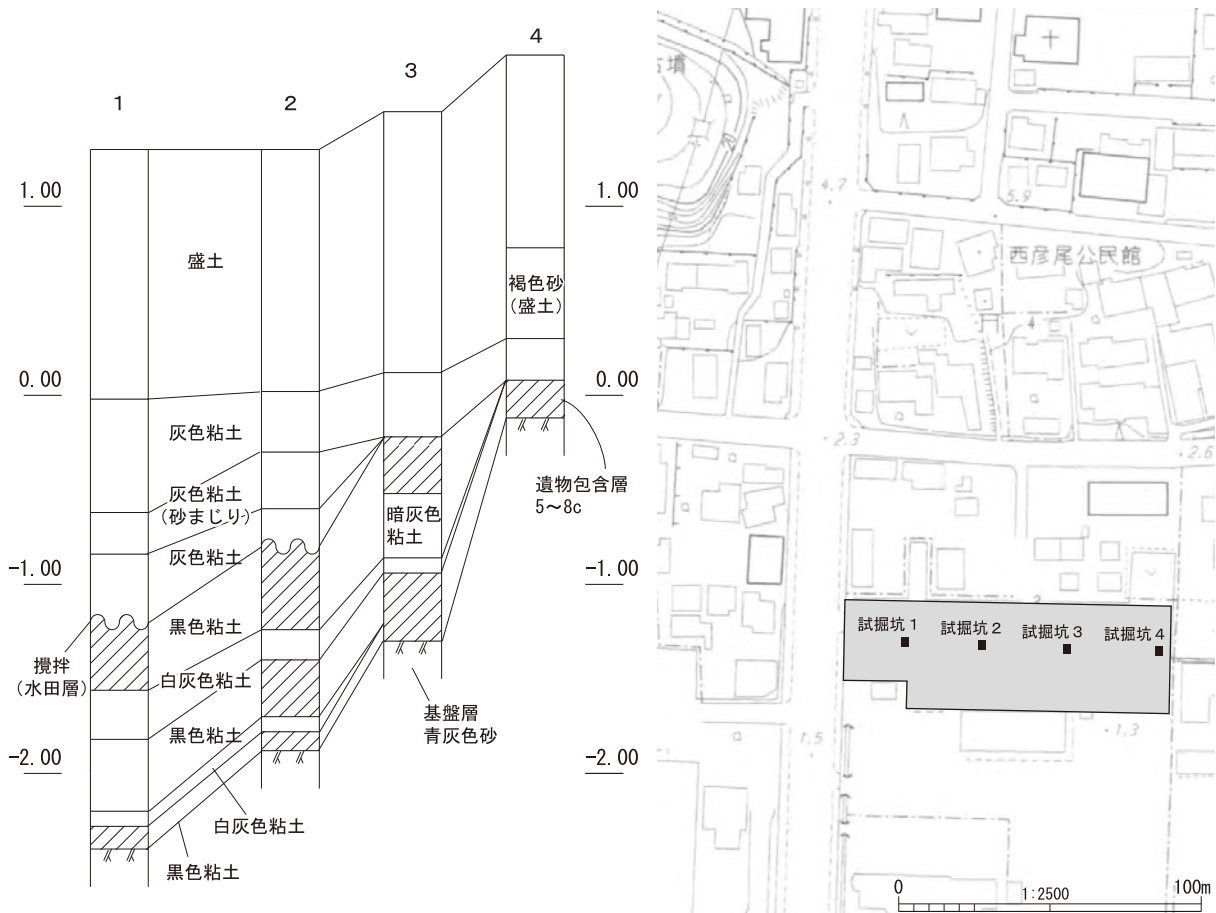
1 は 2007 年調査地の試掘坑 3 から、2~14 は 2007 年調査地の試掘坑 4 から、15~19 は 2001 年試掘調査地(大型商業施設進入路)から出土した遺物である。

2007 年出土遺物 1~12 は土師器、13・14 は須恵器である。1~4 は壺、5~9 は高坏、10~12 は甕である。1~11 は 5 世紀後半を中心とする時期のものであり、12 が 7 世紀もしくは 8 世紀に降るものである。13 は 7 世紀~8 世紀頃の坏身、14 は 8 世紀の盤である。

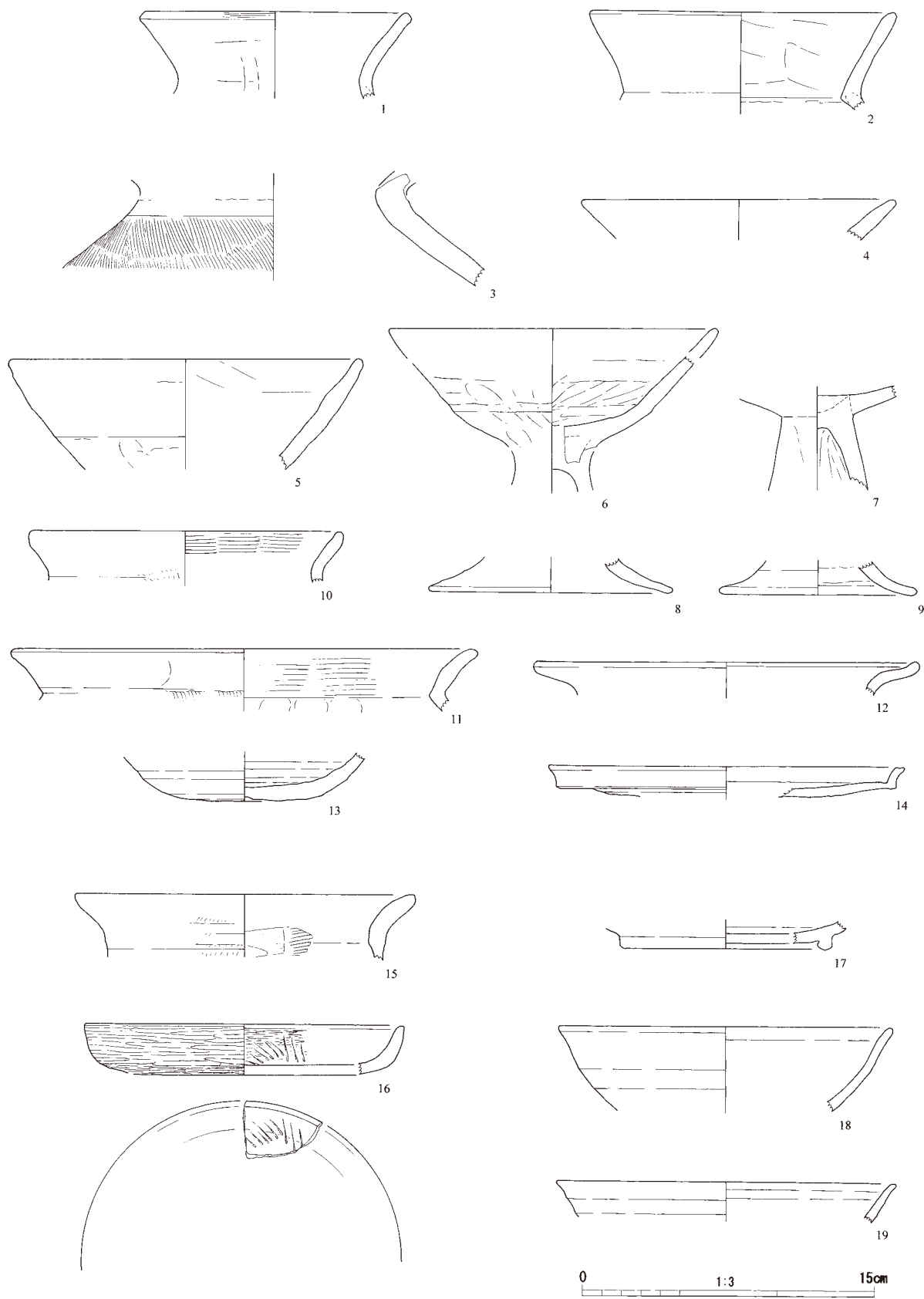
2001 年出土遺物 15・16 は土師器、17 は須恵器、18・19 は灰釉陶器である。15 は甕、16 は暗文を施した皿、17 は坏身、18・19 は碗である。

(4) まとめ

今回の試掘調査では対象地の東側ほど基盤砂層が高く、遺物量も多くなる傾向がある。対象地の北東側の約半分が、古墳時代中期から奈良時代の集落の範囲に相当すると捉えられよう。基盤砂層が低い南西側については、同時代に水田として使われていた可能性が高い。(鈴木一有)



第 19 図 試掘坑配置図及び土層図



第 20 图 八反田遺跡出土遺物

6. 田組遺跡

(1) 調査の概要

田組遺跡は、1965～66年に行なわれた県立二俣高校（二俣仲町）南館西半の建替にともなう基礎工事中に、地表下0.5～1.2mから古墳時代～平安時代の多くの土器が出土したことにより、知られるようになった遺跡である。古墳時代中期前半（5世紀前半）から後期前半（6世紀）の土師器（甕、高坏、埴）、後期後半の須恵器（坏身）、奈良時代の須恵器（有台坏身、甕、埴）と土師器（甕、丹塗り坏身）、平安時代の灰釉陶器（碗）と土師器（甕）、時期の限定が困難な刀子？と小型の土錘9点が出土している（天竜市1981『天竜市史上巻』）。

今回報告する田組遺跡の調査区は二俣高校の南側一帯で、天竜区二俣町二俣字田組199他の、かつて遠州レース株式会社の工場があった場所であり、今まで周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかった地域である。

用地の南側は、店舗の建設に伴い2007年7月25日（1次）、北側は分譲宅地建設に伴い同年11月20日（2次）に試掘調査を行った。調査面積は、1次で約66㎡（約2m×3mのグリッドを11箇所）、2次で約24㎡（約2m×2mのグリッドを6箇所）である。店舗建設と分譲宅地工事に伴う掘削ではともに、十分な保護層が確保されることから、本発掘調査には至らなかった。

(2) 試掘調査

調査は、開発予定地内において約2m×2～3mのトレンチを1次に11箇所、2次に6箇所設定した。バックホーで層位的に掘削して遺物の出土状況を確認したのち、人力でトレンチ壁面を精査し、土層の堆積状況を観察した。調査終了後は埋め戻し、旧状に復した。

調査の結果、1次1～6・9・10トレンチ、2次1～4トレンチにおいて褐色粘土の遺物包含層（VI層）または遺構（1次2・4・5・9、2次3トレンチ）が検出され、用地西端を除く大半が埋蔵文化財包蔵地であることが確認された。確認された遺構は、小穴（1次5・2次3トレンチ）や土壇（1次4・9トレンチ）や溝（1次2トレンチ）であるが、坪掘りのため規模や性格は不明である。

包含層下面は、1次4・2次4トレンチで39.8m以上と高く（高位面）、次いで1次5・6・9と2次1～3トレンチにおいて39.2m以上と高い（中位面）。1次1・2・10トレンチでは39.2m未満と低い位置（低位面）にある。

包含層の上には中近世の水田や蓮池に伴う緑灰色や灰色の耕作層（通称ドブ色粘土層＝IV・V層）があり、包含層の下には灰色を基調としたシルト層（基盤粘土層＝VIII層）がある。この層は南に向かってわずかではあるが傾斜している。

包含層が相対的に高い位置にある1次4～6・9、2次4トレンチでは包含層の下は茶褐色土層（VII層）が確認された。また、2次1～3トレンチでは包含層のVI層自体が茶色を強めていた。用地中央が、古代において小規模ながら南北に長い微高地をなしていたと推定される。

用地西側の1次7・8・11、2次6トレンチでは洪水に伴う礫層が厚く堆積しており、古くは河川敷であったと推定される。

(3) 出土遺物

出土遺物は最も多いのが9世紀後半から10世紀前半にかけての土師器や灰釉陶器であり、二俣高校南館で出土した土器群とも一致する。今まで確認されている最も古い土器は古墳時代中期であるが、16はこの時期もしくはそれを遡る古墳時代前期の高坏脚部である。これ以外には6の須恵器坏蓋が、古墳時代後期前半の6世紀末葉に遡る可能性がある。

土器は、1次1・2・9トレンチと2次3・4トレンチから多く出土し、次いで1次4・5トレンチと2次1・2トレンチが多い。出土土器は6と16を除くと、飛鳥・奈良時代(7～8世紀)の須恵器(坏身・摘蓋・甕・壺片)と土師器(坏身・高盤・甕・碗)、ふいごの羽口、平安時代(9世紀後～10世紀)の灰釉陶器(碗)、土師器(甕)、鎌倉時代(13世紀)の山茶碗、近世の播鉢・茶碗などである。

土器の出土位置は、1～5が1次1トレンチ(以下トレンチを略す)、6～9が1次4、10が1次6、11・12が1次9、13・14が2次1、15が2次2、16～25が2次3、26～28が2次4、30が2次6からの出土である。

1は外面に平行タタキがあり、内面にケズリ調整が施された7世紀の須恵器甕である。2は8世紀の須恵器摘蓋である。3は近世の瀬戸美濃製の茶碗、4・5は戦国期以降の瀬戸美濃製の播鉢である。6は6世紀末葉～7世紀初頭頃の須恵器坏蓋で、天井部には稜を有している。7はK90窯式に比定される灰釉陶器碗で、高台は低いが爪形を呈する。底部は黒色化していることから、吉名1号窯で生産された灰釉陶器の可能性が高い。8は9世紀代の土師器鉢で、赤彩されている。9は8世紀後半代の土師器甕、10は8世紀前半の土師器坏身である。11は8世紀中頃～後半の高盤坏部で、赤彩されている。12は8世紀の須恵器無台碗である。

13は7～8世紀の須恵器甕で、肩部に平行タタキ目、内面には無文当具痕が認められる。14は7～8世紀の土師器甕である。15は13世紀の山茶碗、17は8世紀後半の箱形坏身、18は9世紀の赤彩された土師器坏身、19は9世紀後半から10世紀前半の灰釉陶器碗である。20～25は9世紀～10世紀前半の土師器甕である。26は7～8世紀の須恵器甕で、外面には平行タタキ目、内面に薄い同心円タタキ目が残る。27・28は10世紀の灰釉陶器碗(053窯式)で、28は明瞭に底部糸切跡を残す。29はフイゴの羽口で、外面は還元し灰色、内面は酸化し赤色を呈している。30は13世紀の山茶碗である。

(4) まとめ

遺跡は、二俣川と平行する南北に長い小規模な自然堤防上の微高地に立地する、古墳時代中期から鎌倉時代に及ぶ複合遺跡であることが確認された。遺跡の中心年代は、出土遺物の量から考えて奈良時代から平安時代前期(8～10世紀)と考えられる。フイゴの羽口が出土したことから、小鍛冶を含む、有力な集落が存在したと推定されよう。なお、炊飯具である土師器の甕が多いのは、集落が存在したことを示すものである。

二俣から山東にかけて奈良・平安時代の遺跡は、八幡神社西遺跡、西台寺山遺跡など、比較的多く確認されている。

天竜区二俣は、山間部を流下した天竜川にとって平野への出口に当たるところであり、河川交通の重要な位置にある。そればかりでなく、西へ行けば、宮口・都田を經由して浜名湖北岸

そして三河へ、東へ行けば国府がある磐田へ、北へ行けば佐久間を經由して南信濃へ、といった陸上交通路の結節点にある。戦国期末期に今川氏、武田氏、徳川氏がこの地で覇権を争ったのは戦略上、河川・陸上交通路として重要視されていたためである。

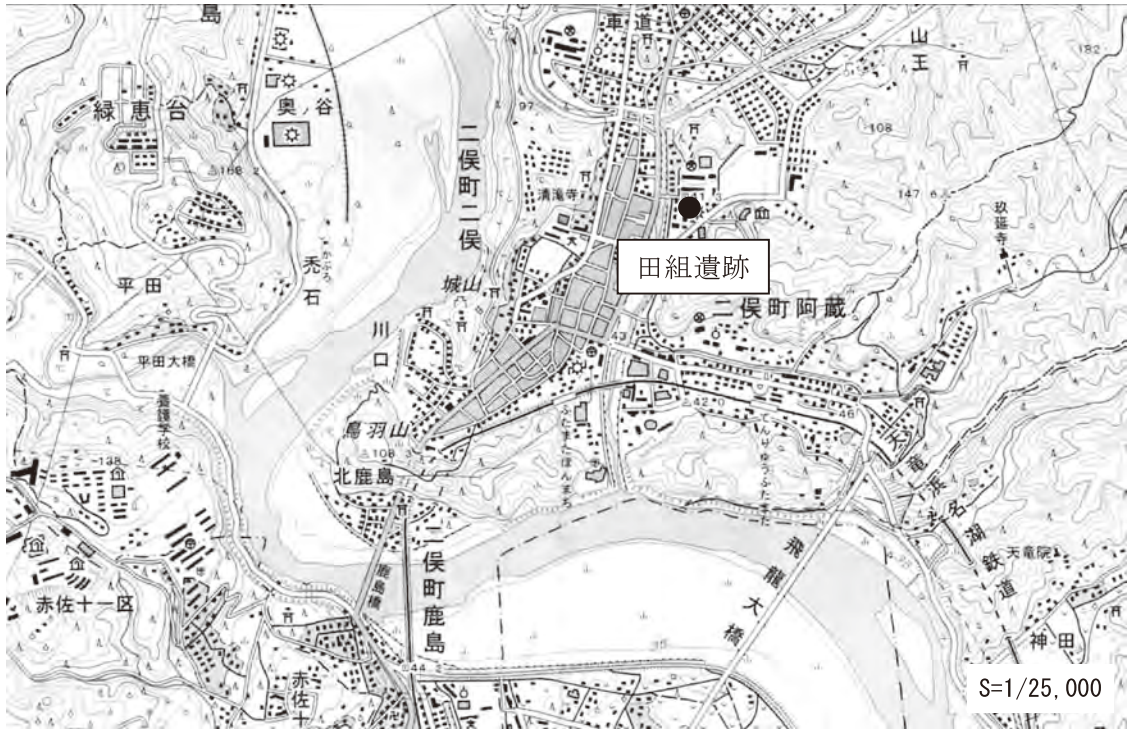
天竜区における奈良・平安時代の遺跡は、今までに全く調査されていないため、実態はほとんど知られていない。田組遺跡は当地域にとって重要な遺跡であることが、今回の試掘調査により判明した。このことが、最大の成果と言えよう。 (鈴木敏則)



重機掘削状況



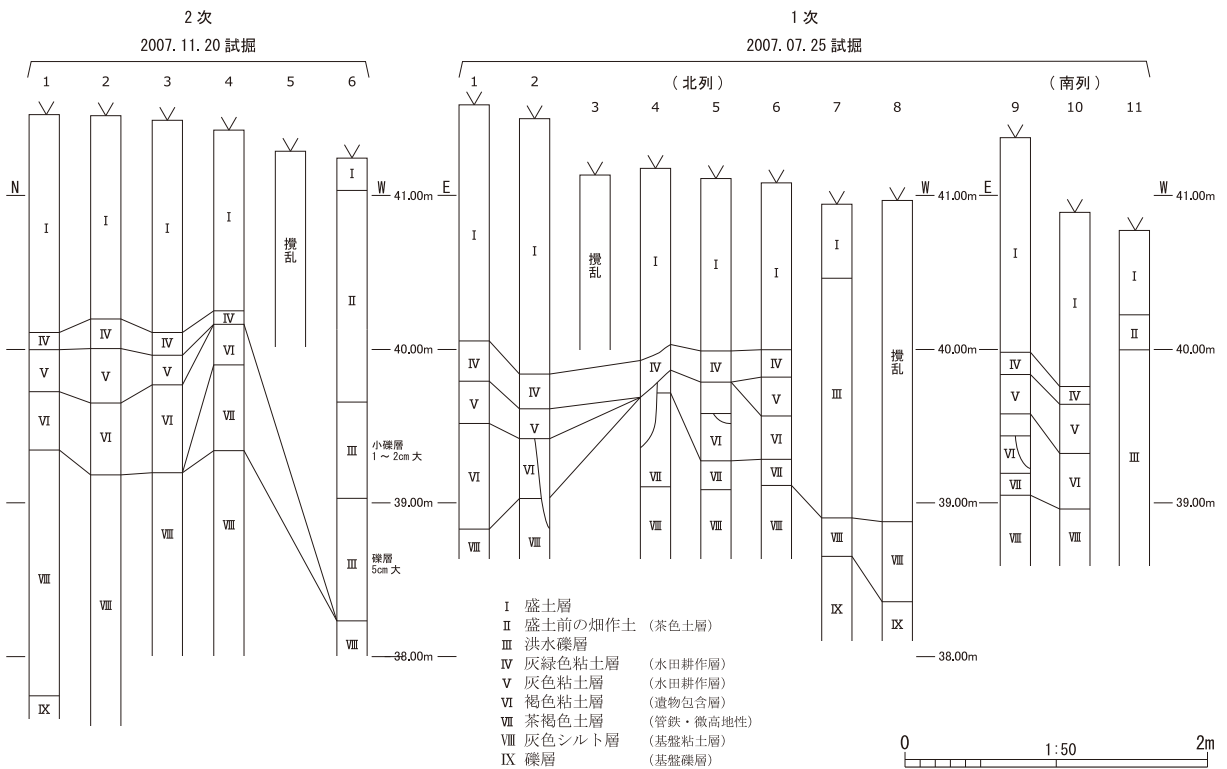
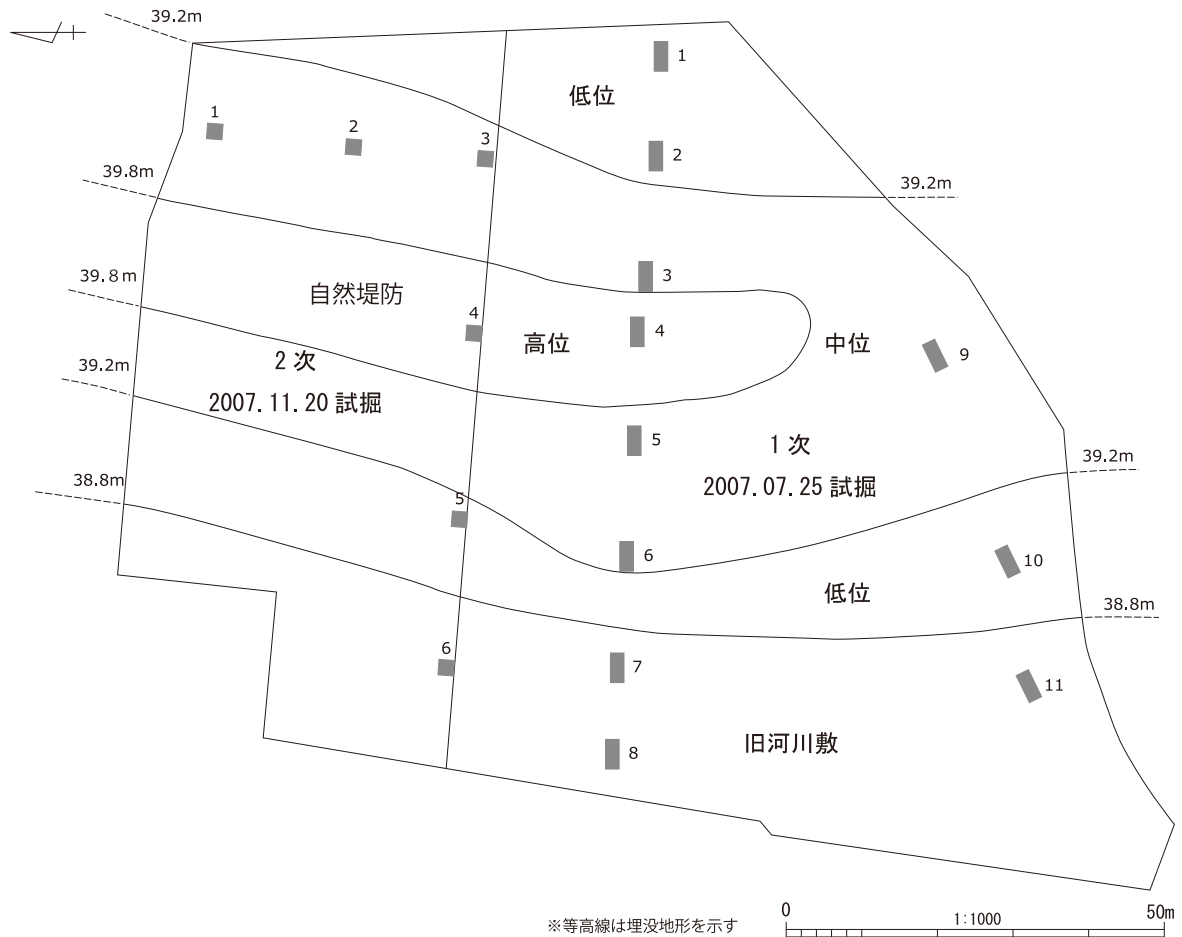
作業風景



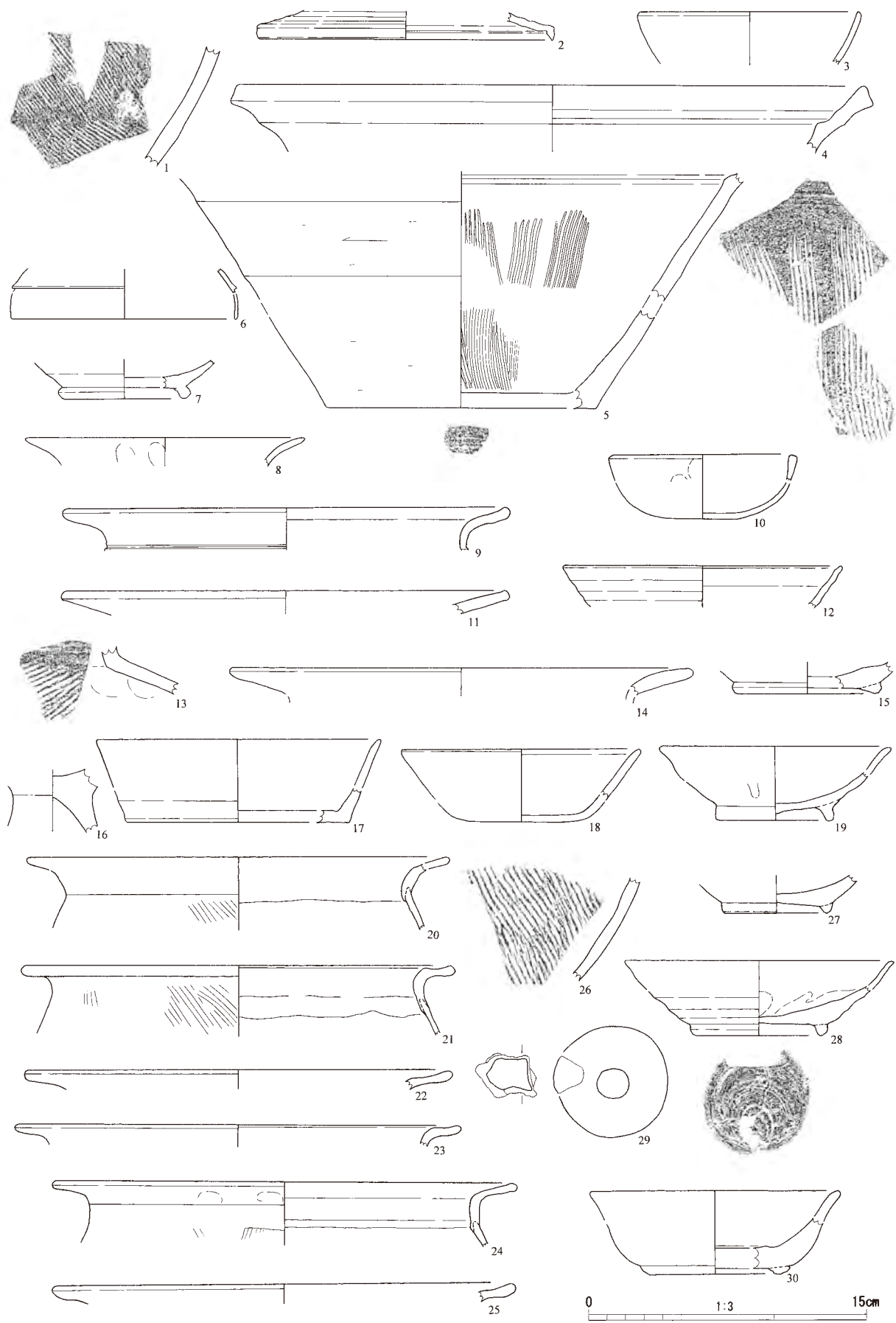
第 21 図 田組遺跡の位置



第 22 図 調査区的位置



第23図 田組遺跡試掘調査区



第 24 図 田組遺跡出土遺物



調査区全景(南から)



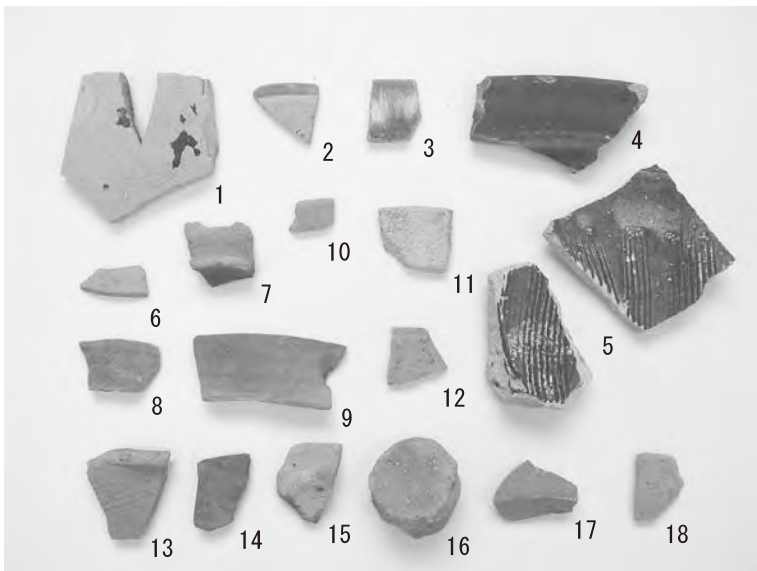
調査区全景(東から)



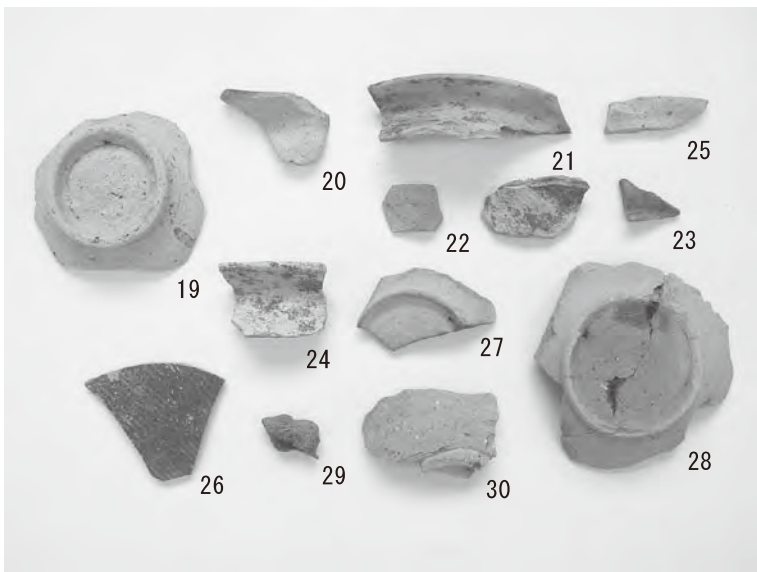
試掘坑 3 記録作業状況



試掘坑 1 土層断面



出土遺物(1)



出土遺物(2)

7. 里原遺跡

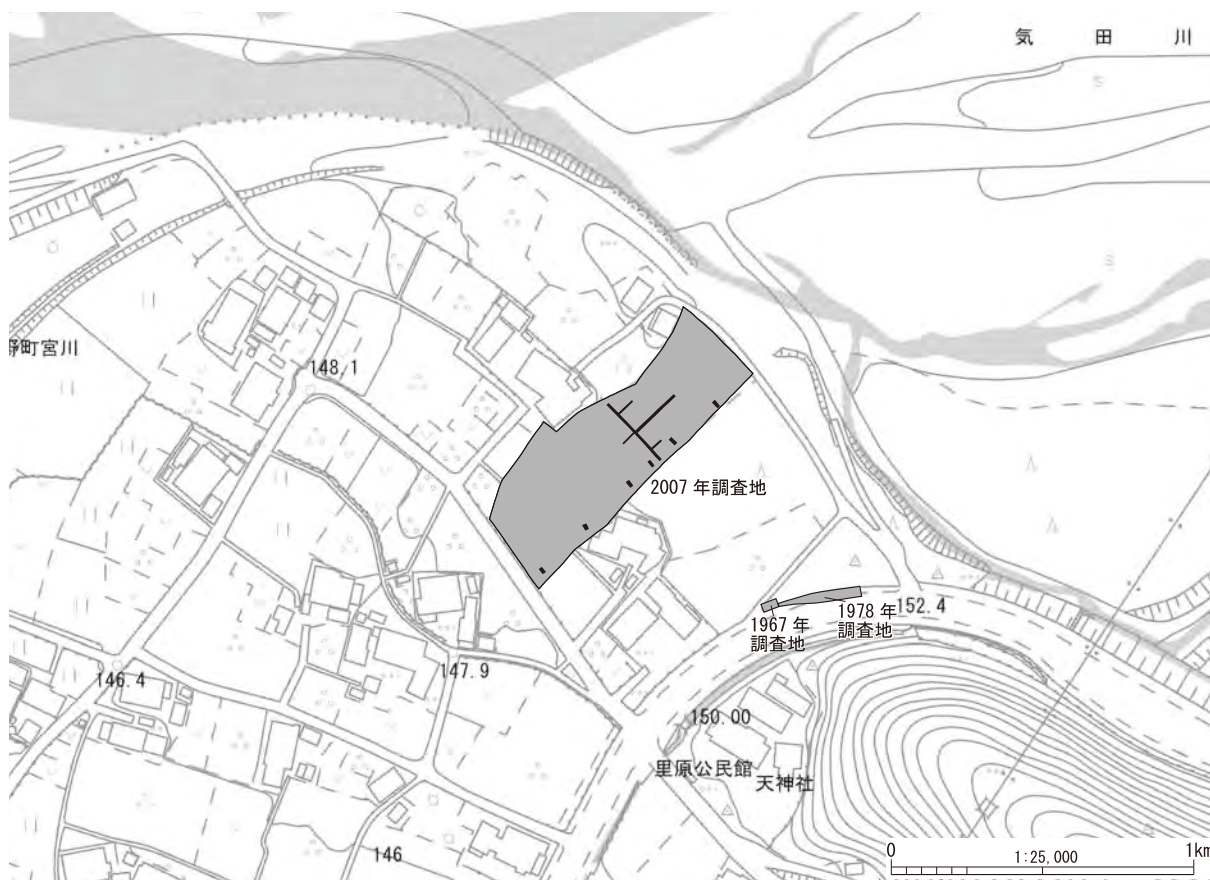
(1) 調査の概要

遺跡の立地 里原遺跡は、浜松市天竜区春野町の気田川南岸に形成された段丘上に立地する。古くから存在が知られた遺跡であり、1967年に遠江考古学研究会による学術調査が、1978年に国道362号線のバイパス建設に伴う調査が行われている。

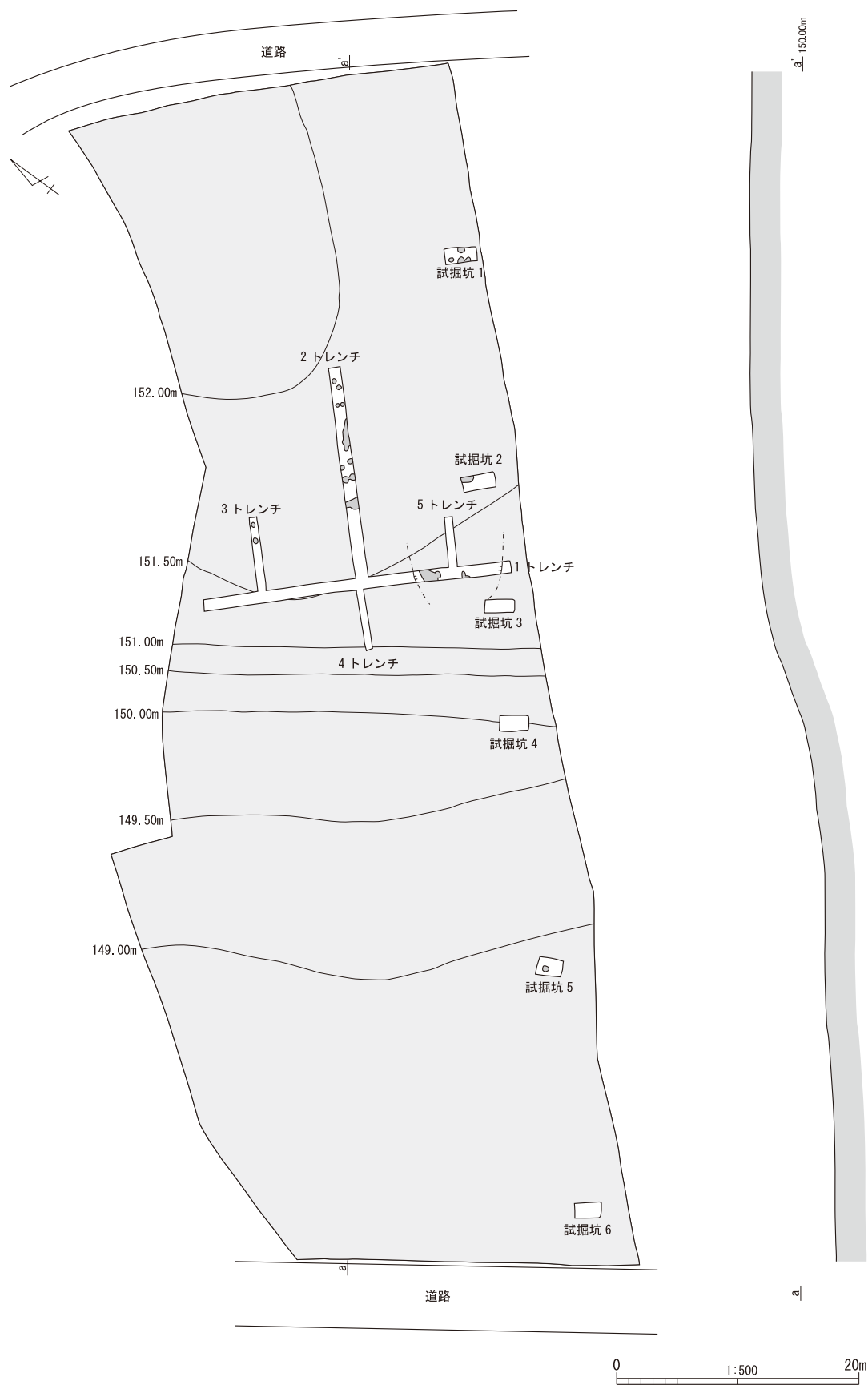
調査経過 2007年、里原遺跡の範囲内において茶畑の改植計画があがった。対象地は段丘の南向きの斜面に位置し、畑のほぼ中央で急激に落ち込み、段差が生じている状態であった。改植作業に当たって気田川沿いの高位面を削平し、その土で低位面を埋め立てる計画であったことから、遺跡の範囲と埋没状況の確認のため試掘調査を実施することとなった。調査は2007年9月3日に実施し、1m×2mの試掘坑を6箇所設定して行った。

試掘調査の結果、対象地内に良好に遺跡が残存していることが明らかになった。特に削平対象になっている高位面に遺構や遺物が認められたことから、さらに詳細な調査が必要になり、2007年10月15日～16日にかけて補足調査を行った。調査は、高位面を中心に幅0.5m～1mのトレンチを5本設定して行った。

基本層位 調査区は茶畑として耕作されており、暗褐色の耕作土が全面的に堆積していた。基盤層は円礫混じりの黄褐色砂質土である。耕作土と基盤層の間には黒褐色土の遺物包含層が認められたが、斜面地の一部では、遺物包含層が消失している箇所もあった。



第25図 里原遺跡調査区位置図



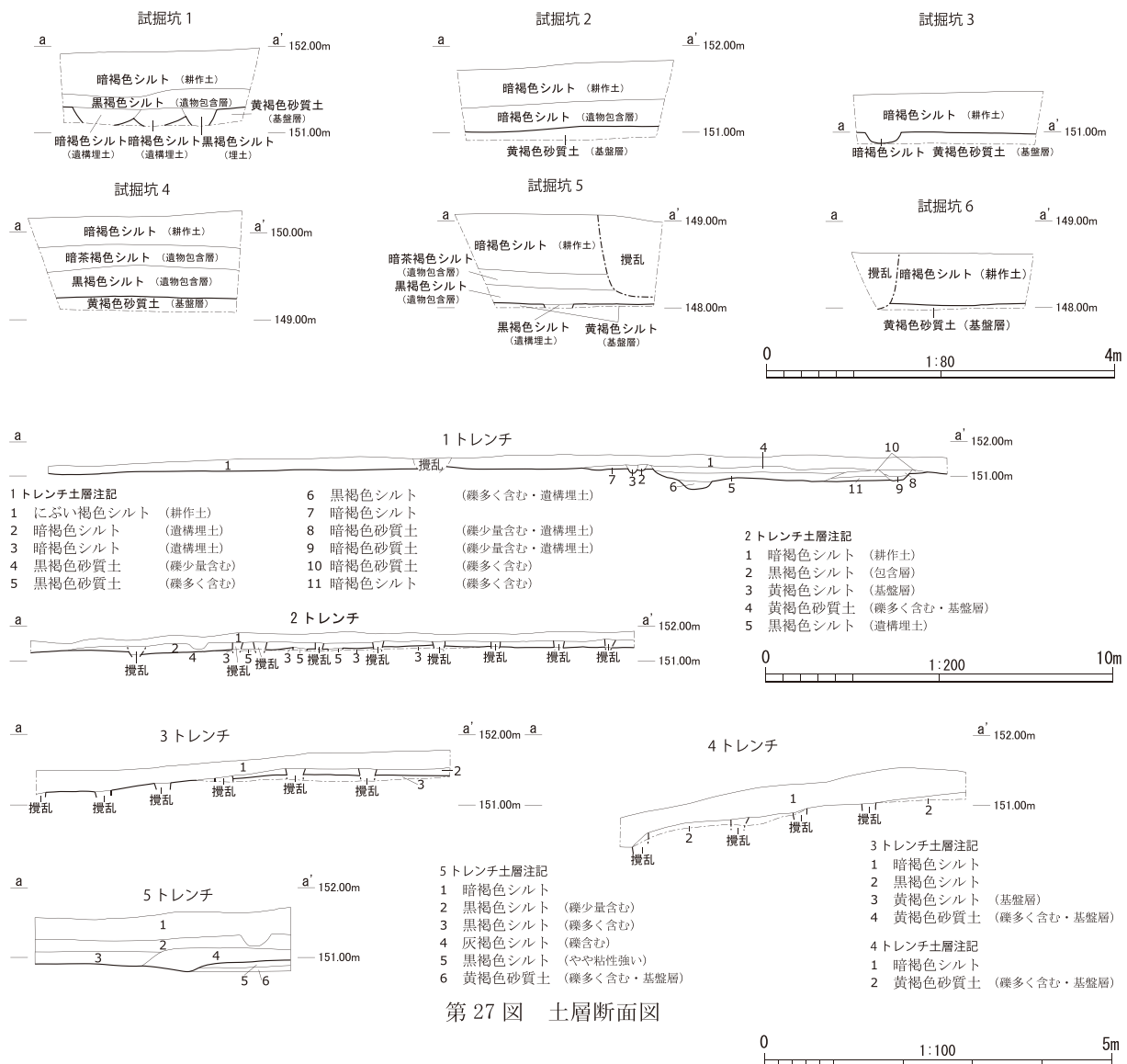
第 26 図 里原遺跡試掘調査区

(2) 調査の詳細

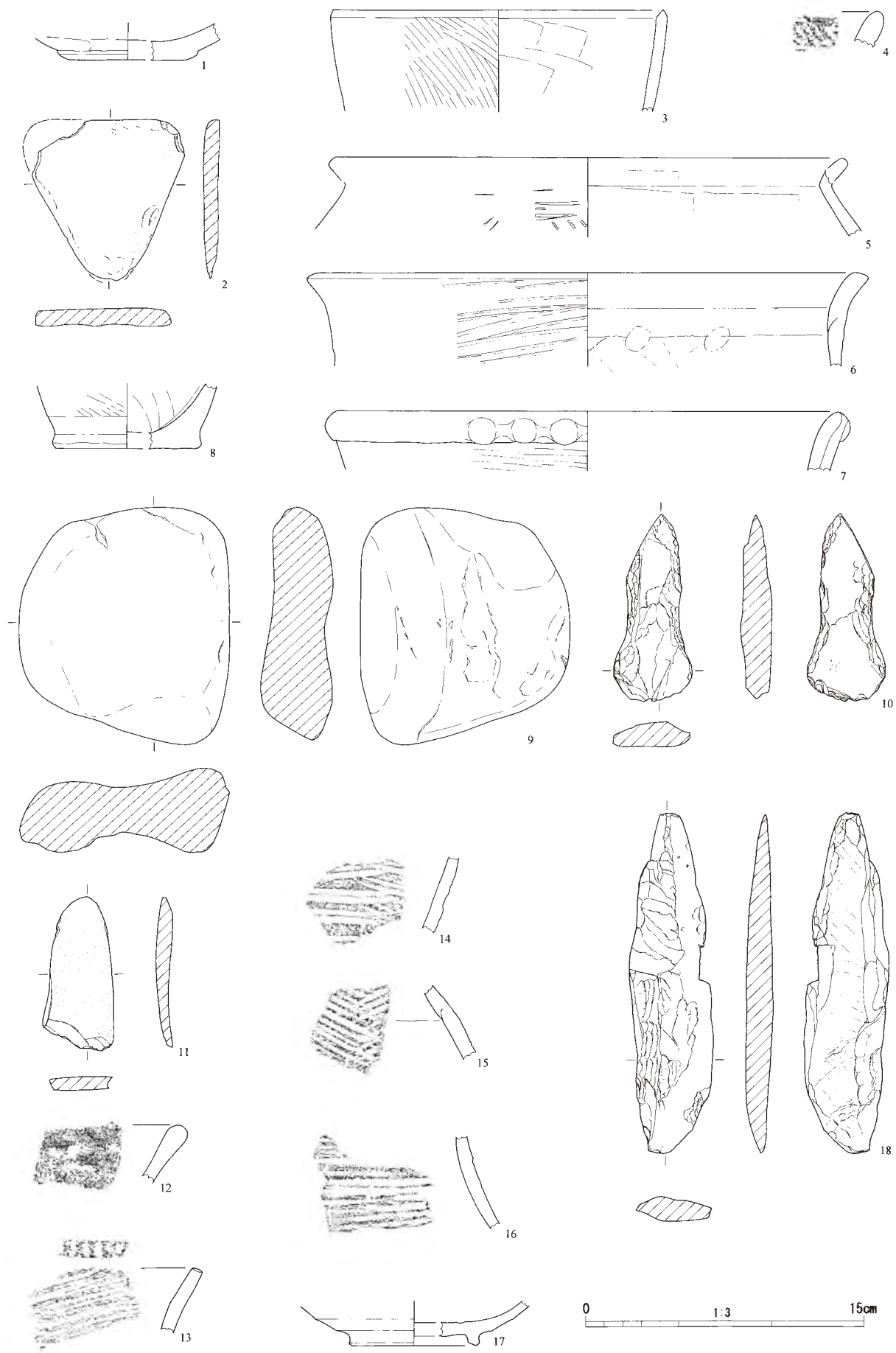
概要 9月3日の調査では、調査区南側の地境に沿って6箇所の試掘坑を設定し、調査を行った。調査の結果、試掘坑1・2・5で遺構と思われる小穴を確認し、包含層中から遺物が出土した。また、試掘坑4では、遺構は確認できなかったものの、厚く堆積した遺物包含層から多数の遺物が出土した。試掘坑4付近は斜面地の下側に当たり、高位面から流入した土砂の中に多数の遺物が混入したものと推定される。

10月15日～16日の調査では、段丘の高位面を中心に5本のトレンチを設定した。特に最も削平による影響を受ける傾斜変換点付近を重点的に調査するため、幅約1mのトレンチ(1・2トレンチ)をT字形に掘削し、そこから幅0.5mのトレンチ(3～5トレンチ)を補足的に設定した。

トレンチ内を精査した結果、1トレンチ南側で窪地状の遺構を確認し、内部から縄文土器や石器、古墳時代の土師器が出土した。埋土の堆積状況から人為的な掘り込みではなく、自然地形と考えられる。2トレンチでは、西側の傾斜変換点付近は遺構・遺物ともに希薄であったが、東側の平坦面では多数の遺構が確認できた。出土遺物も豊富で縄文土器や石器、黒曜石剥片が出土した。3トレンチも同様に、平坦面で遺構を検出した。2トレンチの延長方向の斜面に4トレンチを設定したが、遺構や遺物は確認できなかった。



第27図 土層断面図



0 1:3 15cm

第 28 図 里原遺跡出土遺物(1)
135

(3) 出土遺物

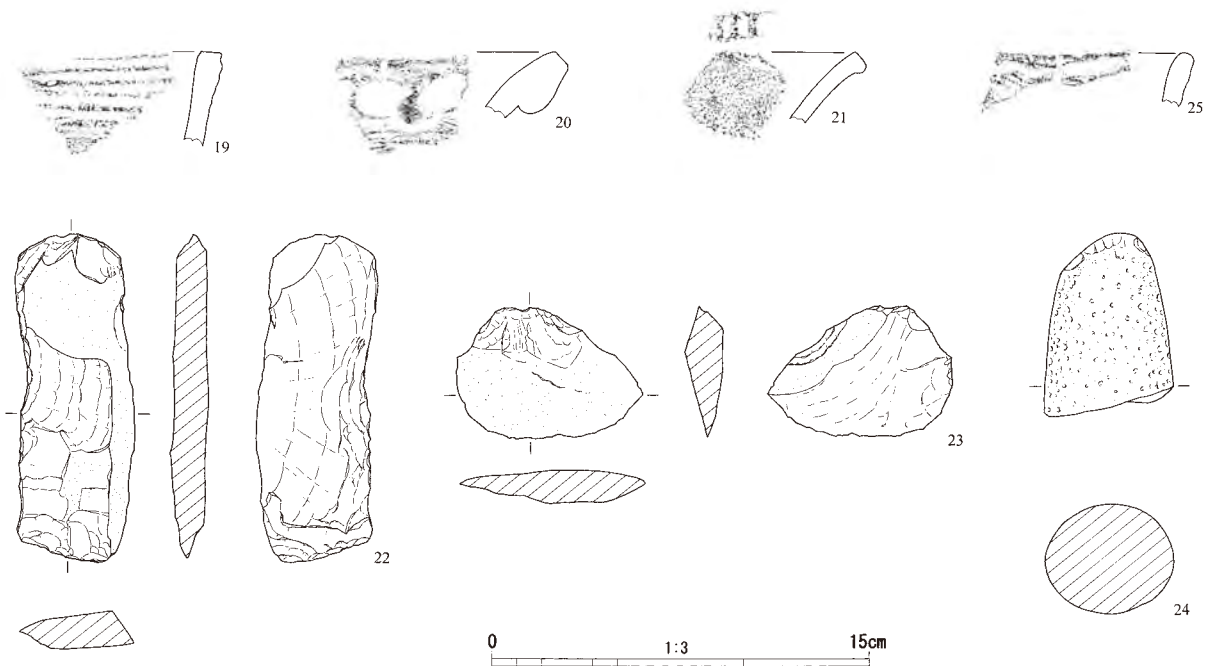
出土した遺物を第 28 図と 29 図に示した。1～11 には、9 月の調査における出土遺物を、12～24 には 10 月の調査における出土遺物を示した。

試掘坑 1 からは、1 の弥生土器の壺底部と 2 の石器が出土した。2 は扁平な三角形の石器で、ユーズドフレイク的一种と考えられる。試掘坑 4 は 6 箇所の試掘坑の中で最も多くの遺物が出土し、3～11 に図を示した。3 は縄文時代晩期前葉の深鉢の口縁である。4 は縄文時代晩期中葉の鉢の口縁である。5～8 は縄文・弥生移行期の檜王式土器である。石器は 9～11 の 3 点が出土した。9 は凹石、10 は石剣の可能性のある石器である。

1 トレンチからは、12～17 の遺物が出土した。12 は縄文時代晩期前葉の深鉢の口縁である。13 と 14 は縄文・弥生移行期の檜王式の深鉢である。15 と 16 は弥生時代中期の丸子式に相当する土器の破片である。17 は緑色の透明釉が施された陶器である。18 の石器は打製石斧の未成品と推定される。2 トレンチからは 19～23 の遺物が出土した。19 と 20 は檜王式の深鉢の口縁、21 は弥生時代中期の甕口縁である。石器は 22 の打製石斧と 23 のフレイクが出土した。また、2 トレンチからは細片のため図示していないが、黒曜石の剥片も多く出土した。3 トレンチからは 24 の磨製石斧が出土した。5 トレンチからは多数の土器片が出土したが、図示できたのは 25 の 1 点のみであった。25 は檜王式の深鉢の口縁である。

(4) まとめ

今回の発掘調査から、対象地の全面に遺跡が良好に残存していることが確認できた。特に段丘の平坦面において遺構の存在を明らかにできたことは、大きな成果である。出土遺物の主体は、縄文時代の土器や石器であるが、弥生時代以降の遺物も少なからず出土した。過去の発掘調査や表面採集において、縄文時代から中世に至る膨大な量の遺物が出土しており、春野地区を代表する複合遺跡であると言える。(井口智博)



第 29 図 里原遺跡出土遺物(2)



試掘坑 1 遺構検出状況



1 トレンチ完掘状況



2 トレンチ完掘状況

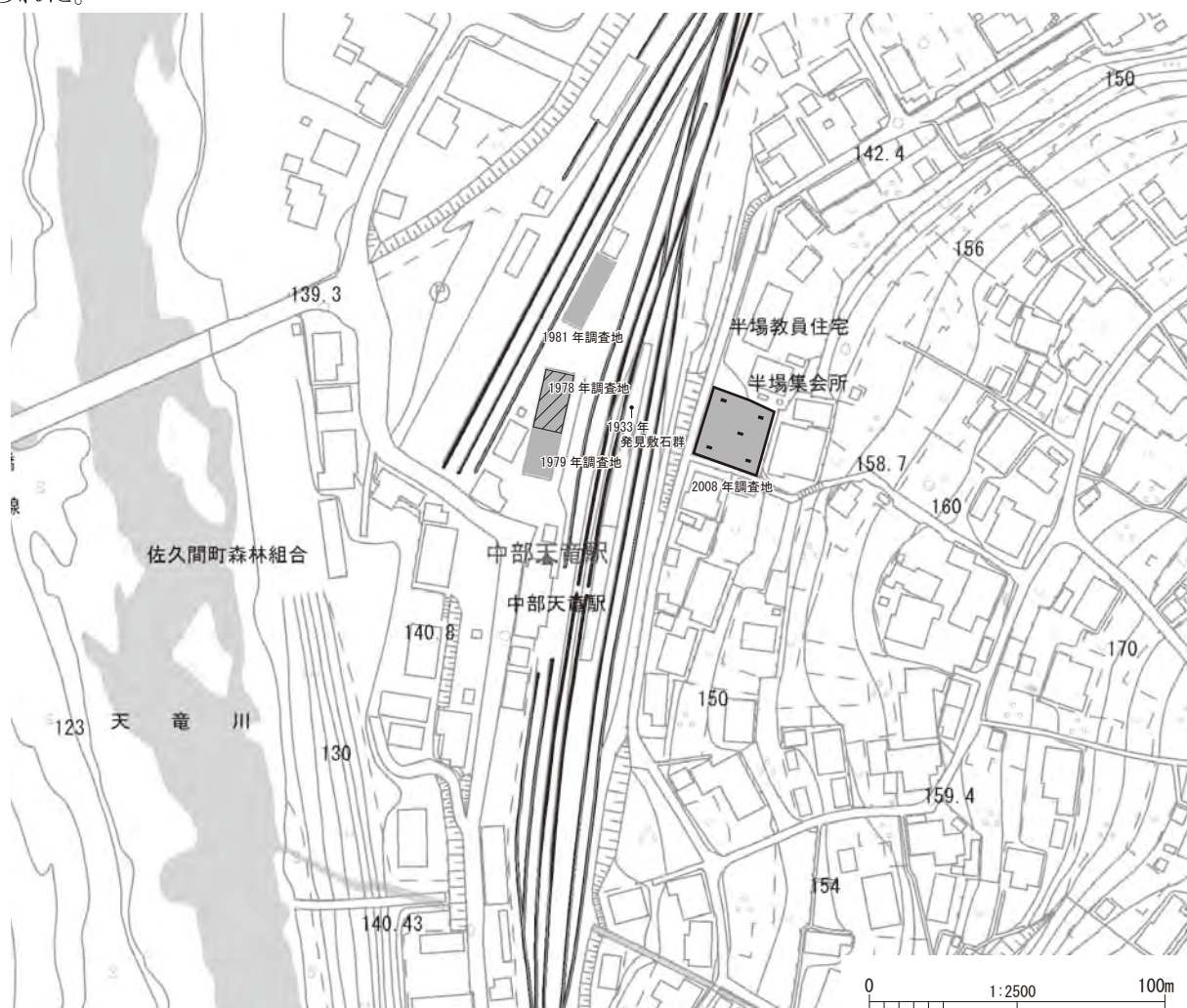
8. 半場遺跡

(1) 調査の概要

遺跡の立地 半場遺跡は、浜松市天竜区佐久間町の天竜川東岸の河岸段丘上に立地する。遺跡はJR飯田線中部天竜駅一帯に広がっており、過去には鉄道施設建設に伴う発掘調査が行われている。これまでの調査で土偶や土製耳飾などの土製品や、多数多様の縄文土器や石器が出土しており、北遠地区を代表する縄文時代の遺跡として知られている。

調査経過 2008年、半場遺跡の範囲内において社宅の建設計画があがった。このため遺跡の埋没状況を確認するため試掘調査を実施することとなった。調査は、2m×1mの試掘坑を5箇所設定し、2008年5月26日に実施した。

基本層位 対象地は中部天竜駅東側に隣接し、西向きの緩斜面にあたる。現況はほぼ正方形の平坦な区画であるが、試掘調査の結果、南西方向に向かって厚く盛土が行われていることが明らかになった。盛土下では、一部を除き旧耕作土と黒褐色砂質土の遺物包含層が明瞭に確認できた。基盤層は黄褐色の砂礫土であり、遺物包含層との間には茶褐色砂質土の漸移層が認められた。



第30図 半場遺跡調査区位置図

(2) 調査の詳細

試掘坑の配置と土層堆積状況は第31図に示した。対象地の現況は、ほぼ平坦な形状となっているが、前述のとおり盛土による地形の改変が著しい。しかしながら、盛土下の旧地形は試掘坑2を除き良好に遺存していた。基盤層の標高は、北東に位置する試掘坑2が最も高く、南西に位置する試掘坑4が最も低かった。試掘坑2は、表土を除去すると直下に基盤層が現れ、遺物包含層が確認できなかった。敷地の東側は急な崖面となっていることから、北東側の斜面を削土して造成が行われたと推定される。

各試掘坑を精査した結果、試掘坑2を除く全ての試掘坑で遺物包含層を確認し、一部では遺構も検出できた。試掘坑1では、縄文土器が出土した。試掘坑3は、遺物包含層下層に赤褐色土ブロックを含む層が確認でき、多数の土器が出土したことから試掘坑全体が遺構内の可能性が高い。試掘坑4では、厚く堆積した遺物包含層中から縄文土器や弥生土器が出土したほか、黒曜石のフレークも出土した。試掘坑5では、基盤層に掘り込まれた遺構が明瞭に確認でき、遺構埋土中から縄文土器や打製石斧、磨石などの石器が出土した。

(3) 出土遺物

今回の試掘調査で出土した遺物を第32図と33図に示した。遺物の主体は縄文時代の土器や石器であるが、弥生土器や中世の土器も少量出土した。

1～19には縄文時代の土器を示した。1は後期初頭の称名寺式に相当する土器である。2は後期前葉の堀ノ内Ⅰ式に、3と4は堀ノ内Ⅱ式に相当する土器である。5は加曾利BⅠ式に相当する土器である。6は後期中葉の元住吉山Ⅰ式の深鉢の口縁である。7は後期前葉の深鉢の底部である。底面には網代の痕跡が明瞭に認められる。8～16はいずれも晚期中葉の深鉢の口縁部片である。17～19は晚期中葉の土器片である。18と19の外面には二枚貝条痕が認められる。

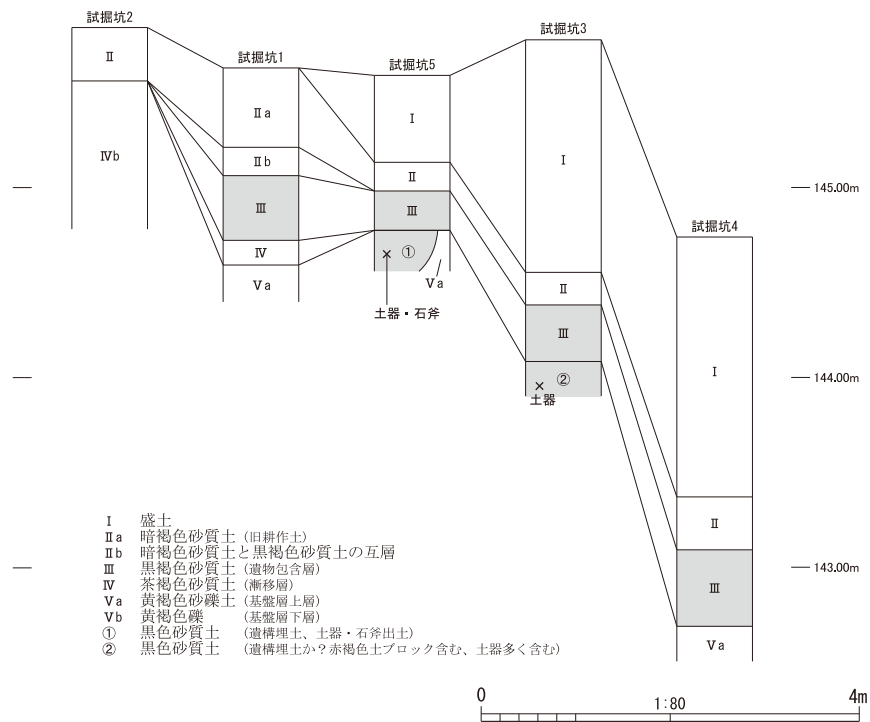
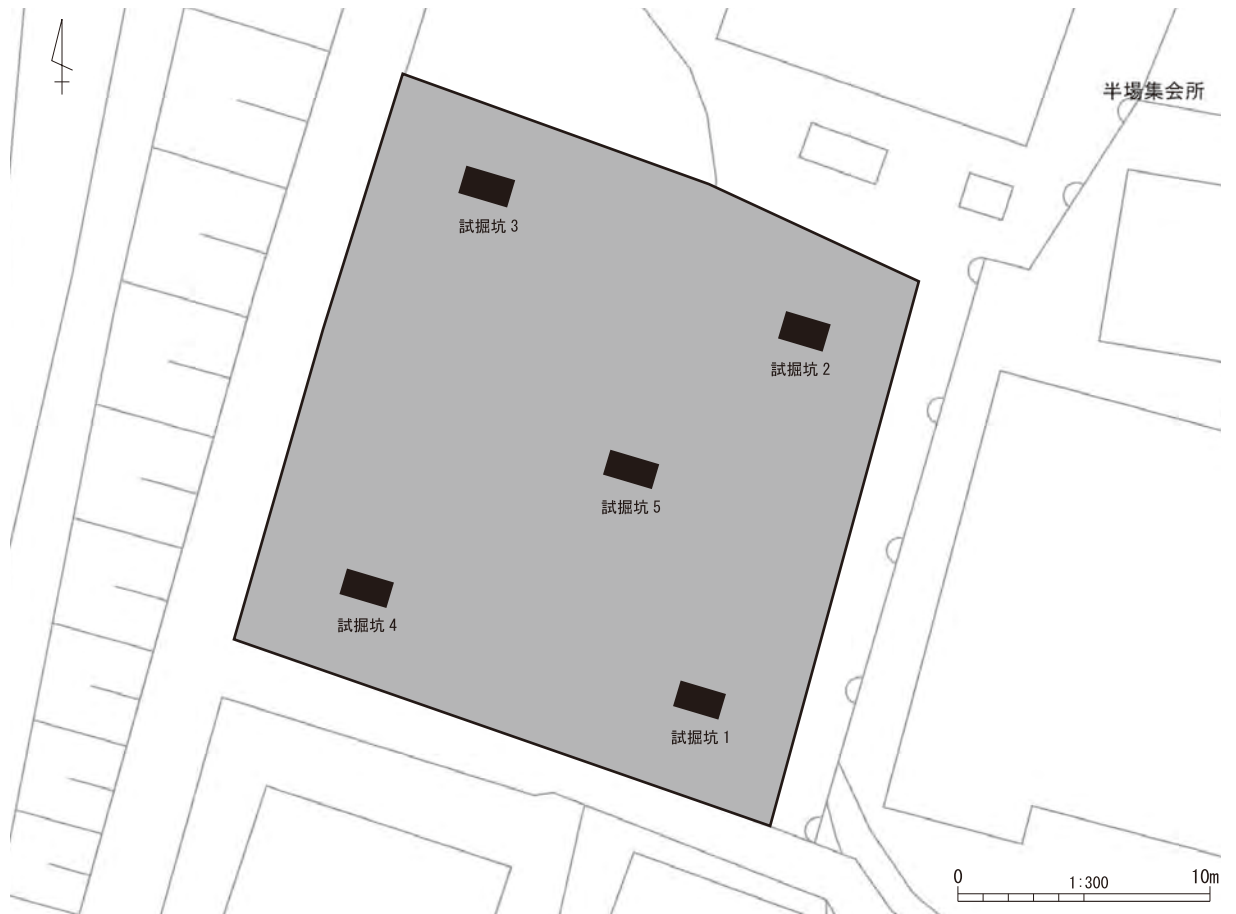
20と28は縄文・弥生移行期の櫛王式土器である。どちらも表面には粗い条痕文が施されている。21～23はいずれも縄文・弥生移行期の水神平式土器の破片である。24は弥生時代中期の丸子式に相当する土器である。外面には円形の突起が貼り付けられ、周囲を沈線文で加飾している。25も丸子式土器の口縁部である。26は戦国時代の羽釜の破片である。27は江戸時代の寛永通宝である。

石器は29～31の3点が出土した。29は片岩製の打製石斧、30は花崗岩製の磨石である。ともに試掘坑3の遺構埋土中から出土した。31は黒曜石のフレークである。

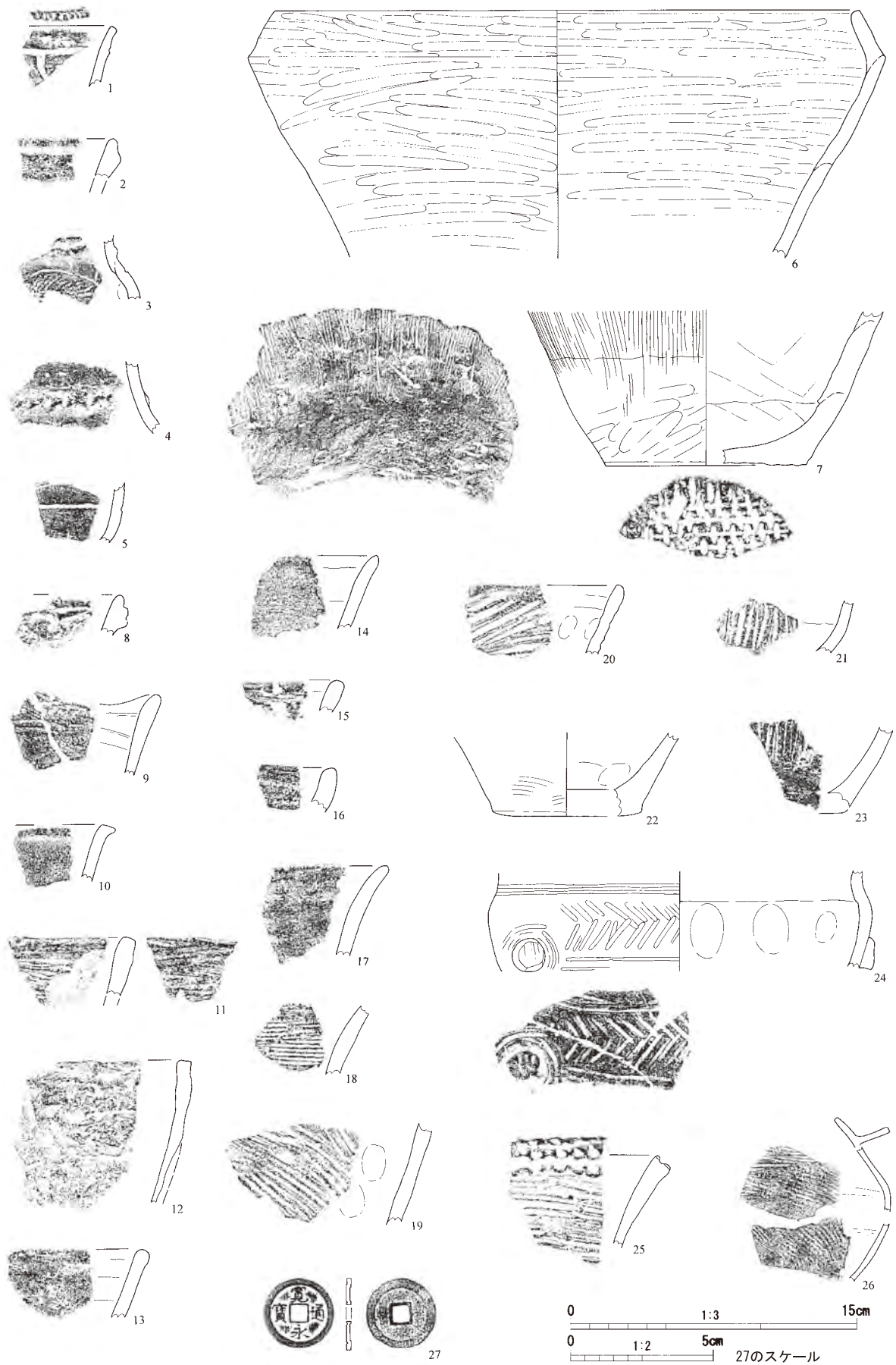
(4) まとめ

今回の試掘調査の結果、対象地内に良好に遺跡が残っていることが判明した。調査面積は、ごく小規模な範囲であったが、縄文時代を中心に多数の遺物が出土した。また、遺構の性格は明らかにできなかったが、竪穴住居等の存在も想定でき、遺物も豊富に出土したことから半場遺跡の中核部分に当たると考えられる。半場遺跡は、北遠地域における縄文時代の代表的な遺跡として知られているが、考古学的な調査は中部天竜駅構内に限られていた。今回の調査を通じて中部天竜駅東側の一帯にも、遺跡が残存していることが明らかとなったのは、大きな成果と言える。

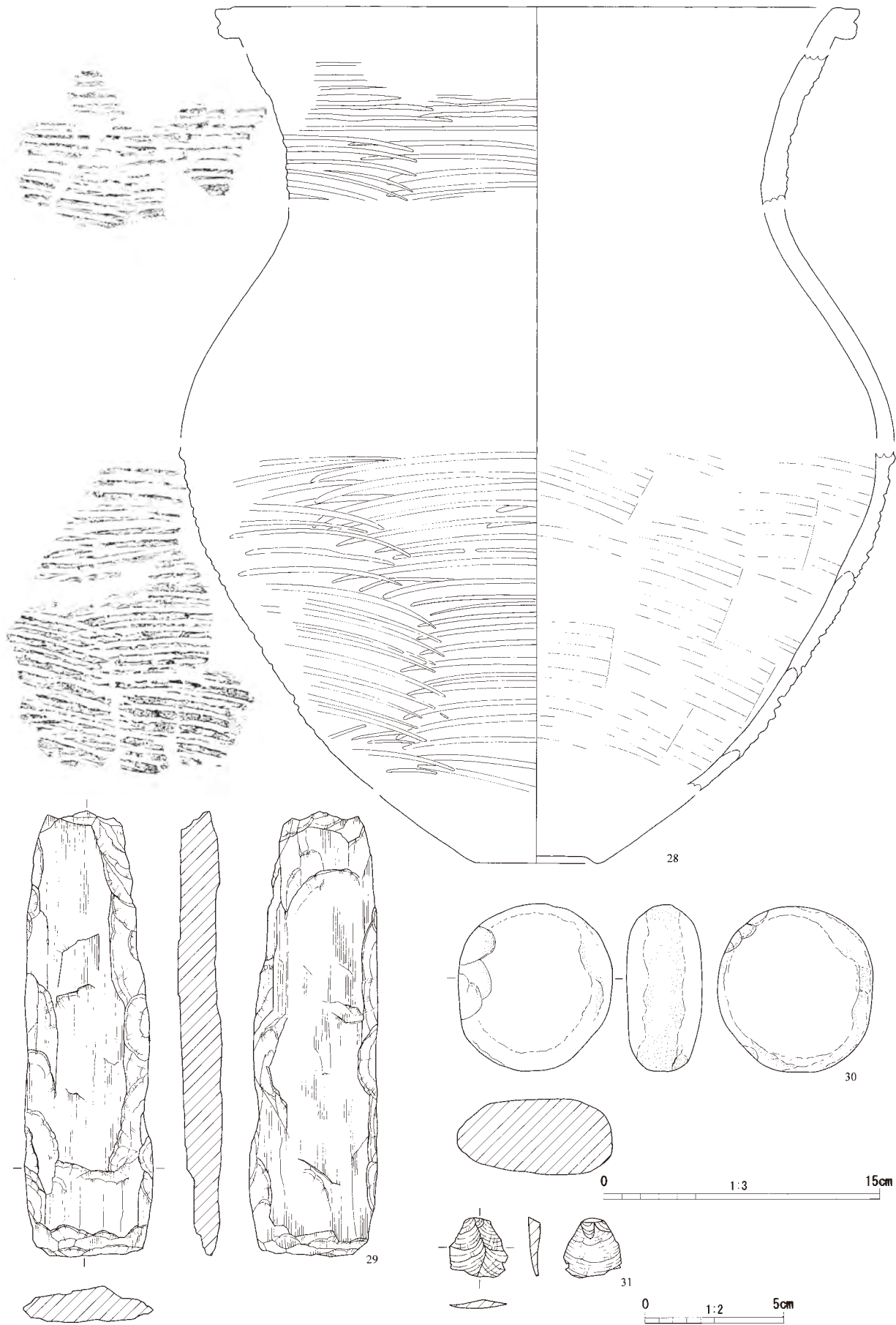
(井口智博)



第 31 図 試掘坑配置図・土層柱状図



第32図 半場遺跡出土遺物(1)



第 33 図 半場遺跡出土遺物 (2)



調査状況



試掘坑完掘状況



打製石斧出土状況

9. 田見合遺跡

(1) 立会調査の概要

立地と環境 田見合遺跡は、天竜川西岸平野のほぼ中央部、浜松市東区市野町 2565-1 にある。古代の天竜川は平野部を本流と支流が入り乱れて網の目状に流れており、田見合遺跡の南側には「天王低地」と呼ばれる広大な低湿地が広がっていた。当然のこととして、田見合遺跡に存在した弥生後期集落はこの低湿地の水田開発および水田経営に深く係っていたと考えられる。

過去の調査歴 田見合遺跡では、老人保健施設の建設工事に先立ち 2001 年 11 月に試掘調査、2002 年 6 月に本調査が行われており、この調査で集落に伴う環濠と推定される溝が検出されている。また 2005 年の 5 月、同年 6 月、2007 年に 3 地点で立会調査が行われたが、どの地点からも遺構が検出されなかった。この結果から 3 地点はいずれも集落のはずれに当たると推測されている。今回の立会調査地では、2008 年 7 月 7 日に試掘調査が行われ、少量の土器が出土している。

周辺遺跡の調査については、1994 年に箕輪遺跡 1 次調査（静岡県）と 2000 年に箕輪遺跡 2 次調査（浜松市）、および 2000 年に天王遺跡で 2 箇所立会調査が行われている。（以上：第 34 図参照）



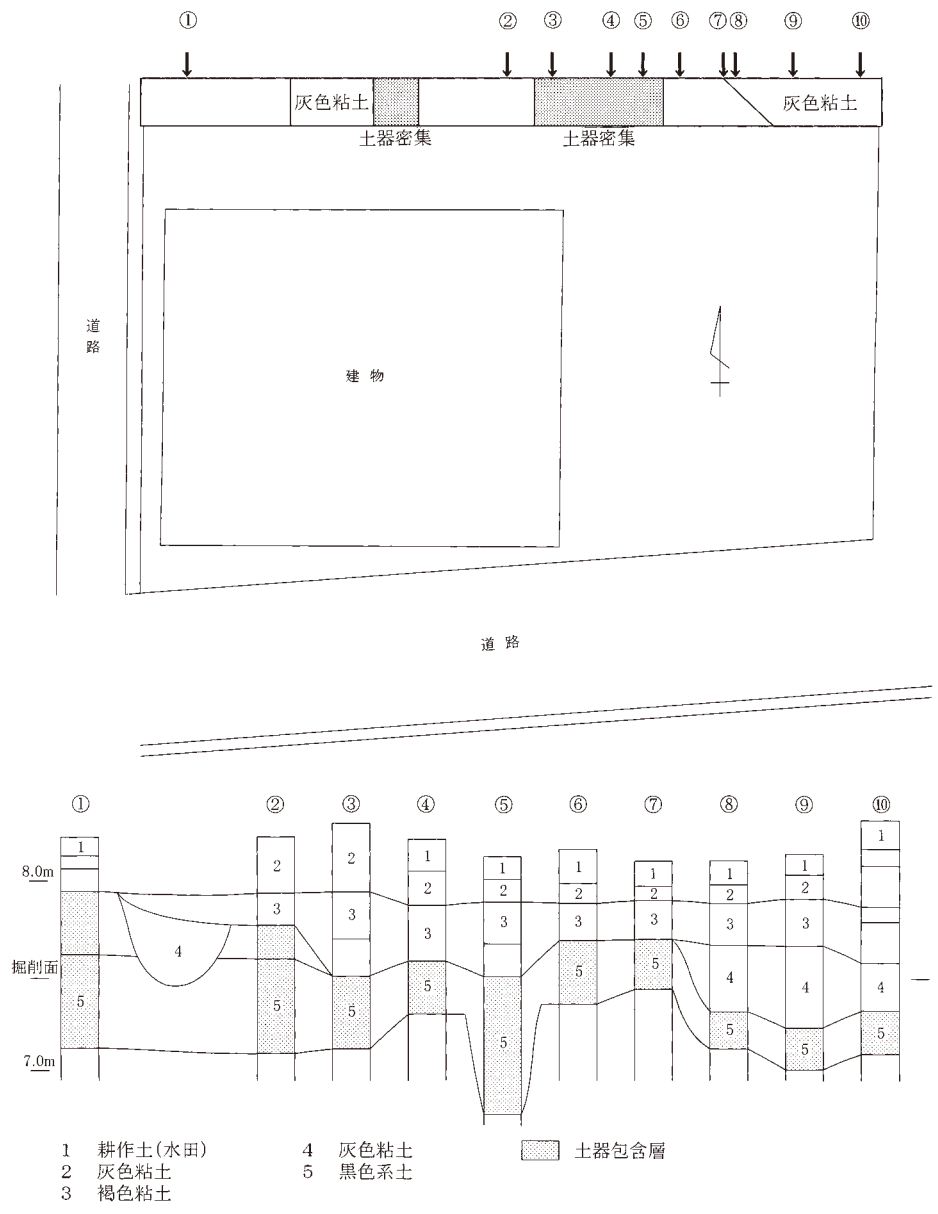
第 34 図 立会箇所位置図

立会の経緯 浜松市東区市野町 2565-1 で貸事務所建設に伴う擁壁工事が行われることになった。しかし同地で2008年7月7日に行われた試掘調査(2m×2mを4箇所)の結果からみて、擁壁工事底面が遺構面には達しないと推測された。そこで立会調査だけが行われることになった。

基本層位 第1層と第2層は灰色粘土で、近現代の水田耕作土とその床土である。第3層は褐色粘土で、無遺物層となっている。第4層は灰色粘土で、溝や低地に堆積しており、これも無遺物層である。第5層は茶褐色～黒色有機質土(黒色系土)で、弥生時代後期の包含層である。用地の西端ではこの層が水田層の直下にあるが、東に行くにしたがって上部に第3層(褐色粘土層)や第4層(灰色粘土層)が出現してそれらが厚みを増していく。それとは逆に、包含層は西ほど厚く、東に向かって薄くなっている。(以上：第35図参照)

(2) 立会の詳細

概要 2008年7月11～12日に貸事務所の建設に伴う擁壁工事が行われた。工事は用地北側の境界線に沿って長さ55m、幅3m、深さ0.7m(水田面下)の溝を掘り、底面に碎石を敷詰め、鉄筋入りコンクリートの土台をつくり、その上にL字形の擁壁ブロックを設置するものであった。溝の底面はすでに包含層に達していたため、土器片が多く出土した。それらを採集するとともに、一部分をスコップで掘り下げて遺構の存在を確認し、また壁面をきれいに削って土層の堆積状況を記録した。



第35図 立会調査区

削といった工事の性格上、必要以上には掘り下げていない。したがって掘削面はほとんどが包含層の途中までであり、弥生時代の遺構を平面的に確認することはできなかった。それでも用地の西端から11～17mに南北方向に灰色粘土層を覆土とした溝状遺構を検出した。弥生時代の包含層を削っていることから、中世以降の新しい時期の遺構と推定される。また用地の西端から約43m以東には灰色粘土層が現れており、弥生時代の包含層である黒色系土との境界線が明確に認められた。約43m以東においては灰色粘土層の下に弥生時代の包含層があることから、集落域から水田あるいは湿地へと移行する地点であると推定する。

中央部付近はやや基盤層が高くなっており、包含層は30 cm程と厚くはないが、多量の土器が出土した。部分的に掘り下げたところ、西側から17～20mと30～39mで幅広い溝や土坑が密集していることを確認した。またこの付近は土器が多いばかりでなく、炭や焼土片および木片なども多く、有機質の強い黒色土層が存在した。明らかに集落域の中である。

以上のように、用地全体は集落の中にある。ただし北東端は地形的にやや低くなっており、土器や焼土片も少なく有機質も弱くなっていることから、集落のはずれに当たる可能性が高い。

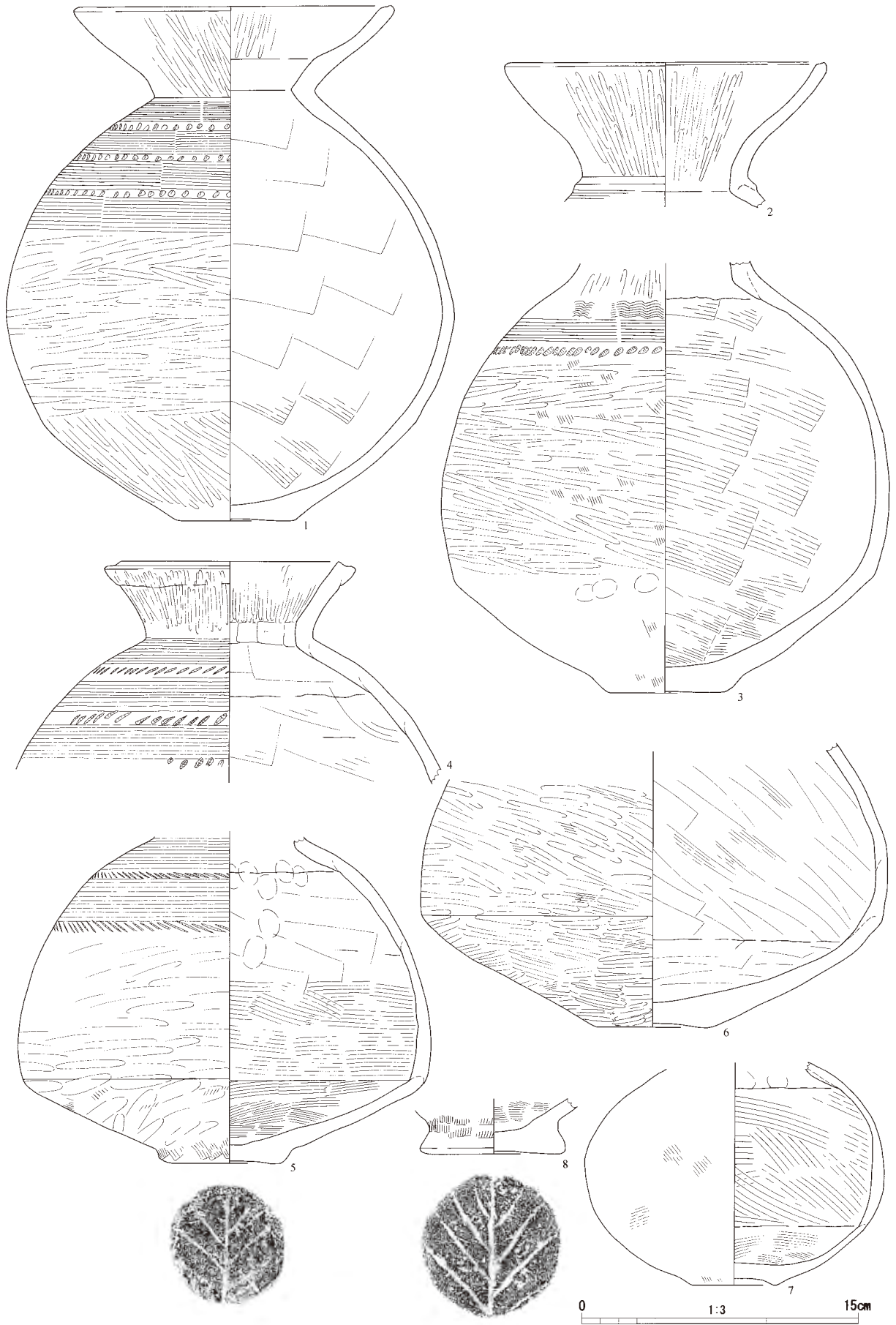
出土遺物(第36～38図) 幅の広い溝状遺構付近を中心として弥生時代後期前半～後半の土器が多量に出土した。それらは比較的大きな破片が多く、完形品に近いものもある。

1～13は広口壺で、1～8が天竜川西岸の土器型式である伊場・欠山様式に属するもの、9～13が天竜川東岸の土器型式である菊川様式に属するものである。天竜川近くの遺跡では、東岸からの影響を強く受けて、一定の割合で菊川様式の土器が混じっている。

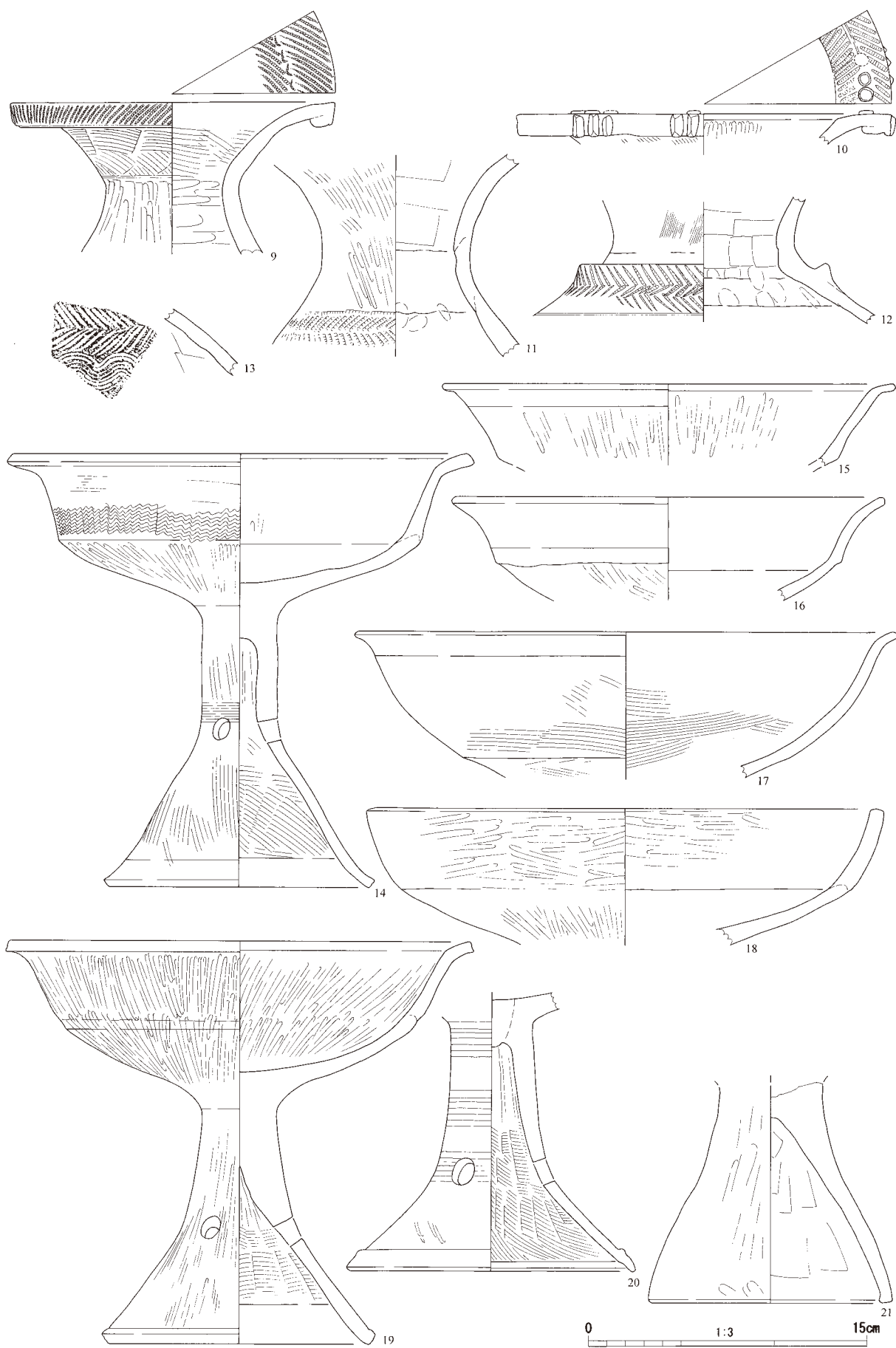
3の波状文や3、5、6の下胴部に稜をもつものは伊場様式(後期前半)の様相を示し、1、2の内湾する口縁部および1、7の球形の体部をもつものや1、4の横線文と櫛刺突文を交互に配置する文様は欠山様式(後期後半)の様相を示している。14～21は高坏で、すべて天竜川西岸の伊場・欠山様式に属するものと考えられる。14～16の坏の下部に稜をもつものや14、19、20の脚部がラッパ状に開くものは伊場様式の様相を示し、17の口唇部に丸みをもつものや21の内湾する脚部をもつものは欠山様式の様相を示している。22と23は鉢であり、24～26は伊場・欠山様式の埴である。27～33は台付甕であるが、伊場・欠山様式と菊川様式は器形が同じであることから、どちらに属するか判別できない。28～30の球形の体部をもつものや28の口唇部に丸みをもつものは欠山様式に下る。

(3) まとめ

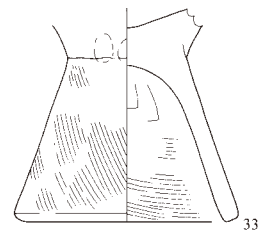
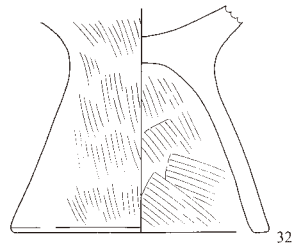
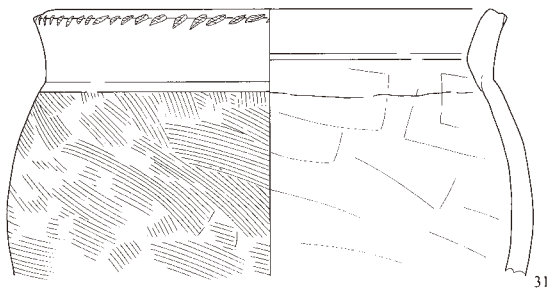
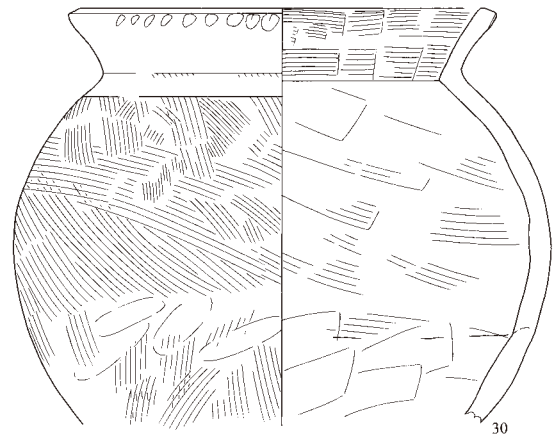
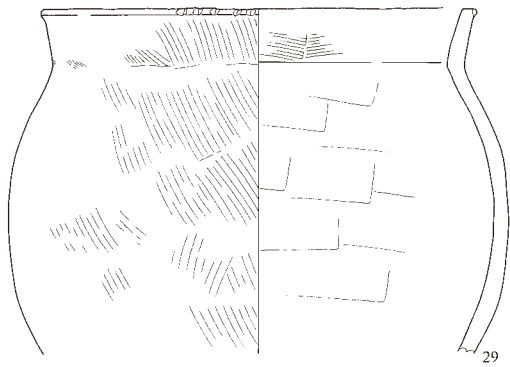
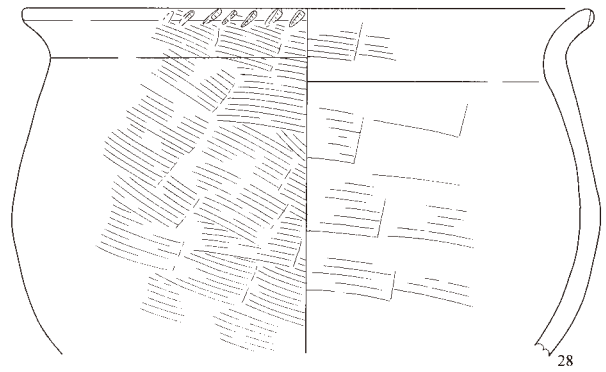
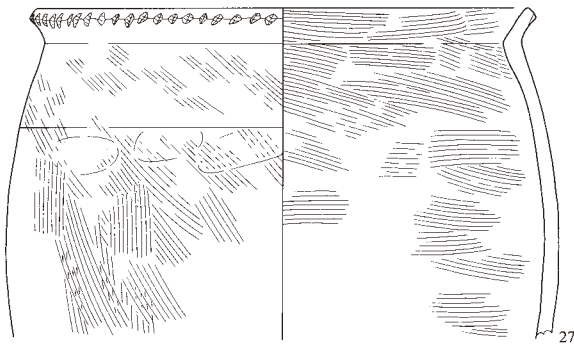
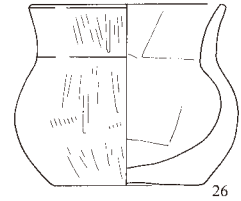
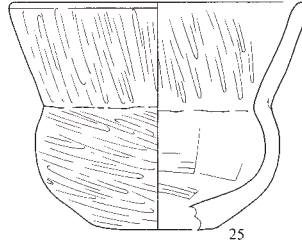
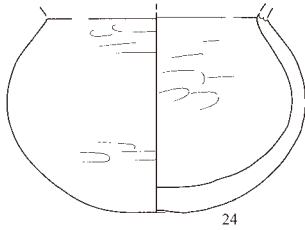
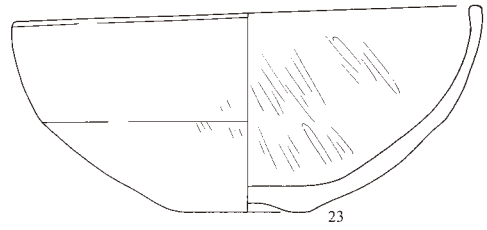
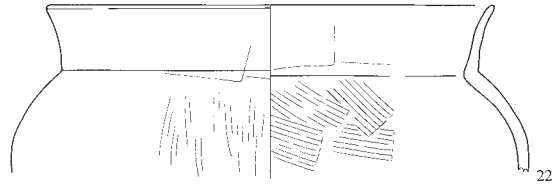
溝の性格 立会調査であるために断面形状を確認していないが、幅が広いこと、完形品に近い土器が大量に出土していること、南側の隣接地で行われた1次調査で環濠と思われる溝を検出していることから、この溝が環濠である可能性が高い。では集落の広がりほどの程度であろうか。2005年の5月、同年の6月、2007年の3地点の立会調査では、遺物と遺構は発見されなかった。したがって、これら3地点はいずれも集落のはずれに位置すると思われる。加えて今回の立会調査地の北東端が集落のはずれに当たるようである。以上から前記4地点の内側に集落が想定できる。残念ながら、田見合遺跡では本格的な発掘調査が行われていないが、出土した多量の土器から見て安定した集落が長い期間にわたって存続していたと思われる。今後の調査によって、集落の様子が明らかになっていくことを期待する。(大野勝美)



第 36 図 田見合遺跡出土遺物(1)



第 37 図 田見合遺跡出土遺物(2)



0 1:3 15cm

第 38 図 田見合遺跡出土遺物(3)



立会箇所
の状況



出土遺物(1)



出土遺物(2)

10. 天白遺跡 1 次調査

(1) 調査の概要

遺跡の立地 天白遺跡は、浜松市北区引佐町に広がる井伊谷盆地の西側に位置し、2003 年から 2007 年にかけて発掘調査が行われた北神宮寺遺跡に隣接する。また、西側の謂伊神社が鎮座する丘陵の頂には、古墳時代の祭祀遺跡である天白磐座遺跡が存在する。

調査経過 2008 年、天白遺跡の範囲内において個人住宅建設の計画があがった。そのため遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施した。試掘調査は、南北方向に幅 1.6m のトレンチを 2 本設定して実施した。その結果、溝や小穴等の遺構が確認でき、縄文時代から戦国時代の遺物が出土したことから、対象地の全域が遺跡の範囲内であることが明らかになった。

2009 年になり住宅建設が具体化し、建物の建設予定範囲について発掘調査を実施することになった。調査は 2009 年 12 月 14 日から 18 日にかけて実施した。調査面積は約 108 m²である。また、2010 年 8 月 16 日には、建設計画の一部変更により、工事立会を実施しており、この結果についても合わせて報告する。

基本層位 調査区の基本層位は隣接する北神宮寺遺跡とほぼ同様であり、全面に渡って畑耕作土である茶褐色砂質土が堆積し、その下には部分的に遺物包含層である黒褐色粘質土が確認できた。基盤層は円礫を含む黄褐色粘土である。遺構は黒褐色粘土層又は黄褐色粘土層を掘り込んで形成されている。遺構の埋土は黒色の粘質土である。

(2) 調査の詳細

概要 建設予定の建物の形状に合わせて調査区を設定し、遺構の検出作業を行った。また、敷地の北東側では排水設備の設置予定箇所をトレンチ状に掘削し、遺構の有無を確認した。調査区内は黄褐色の基盤層に対して遺構の埋土は黒色を呈し、遺構検出は容易であった。

検出遺構 試掘調査では、幅 2m 前後の溝が数条検出され、古墳時代前期の遺物が出土したことから方形周溝墓の周溝の可能性が考えられた。発掘調査の結果、想定どおり古墳時代前期の方形周溝墓の存在が明らかになった。方形周溝墓は周溝を共有して 2 基存在し、西側を SZ01、東側を SZ02 とした。SZ01 は墳丘と周溝の西辺が調査区外にあり、全体形を把握することはできなかった。規模と形状は検出できた部分から、一辺約 8.7m の正方形と推定される。周溝の幅は一定ではないが、最も広い部分で 3.5m、狭い部分で 1.5m であった。深さは検出面から、0.5m 程度であった。後世の耕作等により墳丘は削平を受けており、主体部は確認できなかった。周溝内からは土師器が比較的多く出土し、南側の周溝内からは完形の瓢壺が出土した。

SZ02 は南西側の一部を検出したのみで、全体の規模は明らかにできなかった。南側の周溝内からは土師器の壺等が出土している。また、SZ02 と重複して幅 1.1m、深さ 0.5m の溝を検出した。溝の規模や形状から、方形周溝墓の周溝の可能性が高いと考えられる。

その他の遺構としては、多数の小穴を検出した。小穴の多くは掘立柱建物の柱穴と考えられるが、並びから建物跡と認識できるものは無かった。小穴からの出土遺物は少なく帰属時期を明確にし難いが、大半は中世以降に掘削されたものと考えられる。

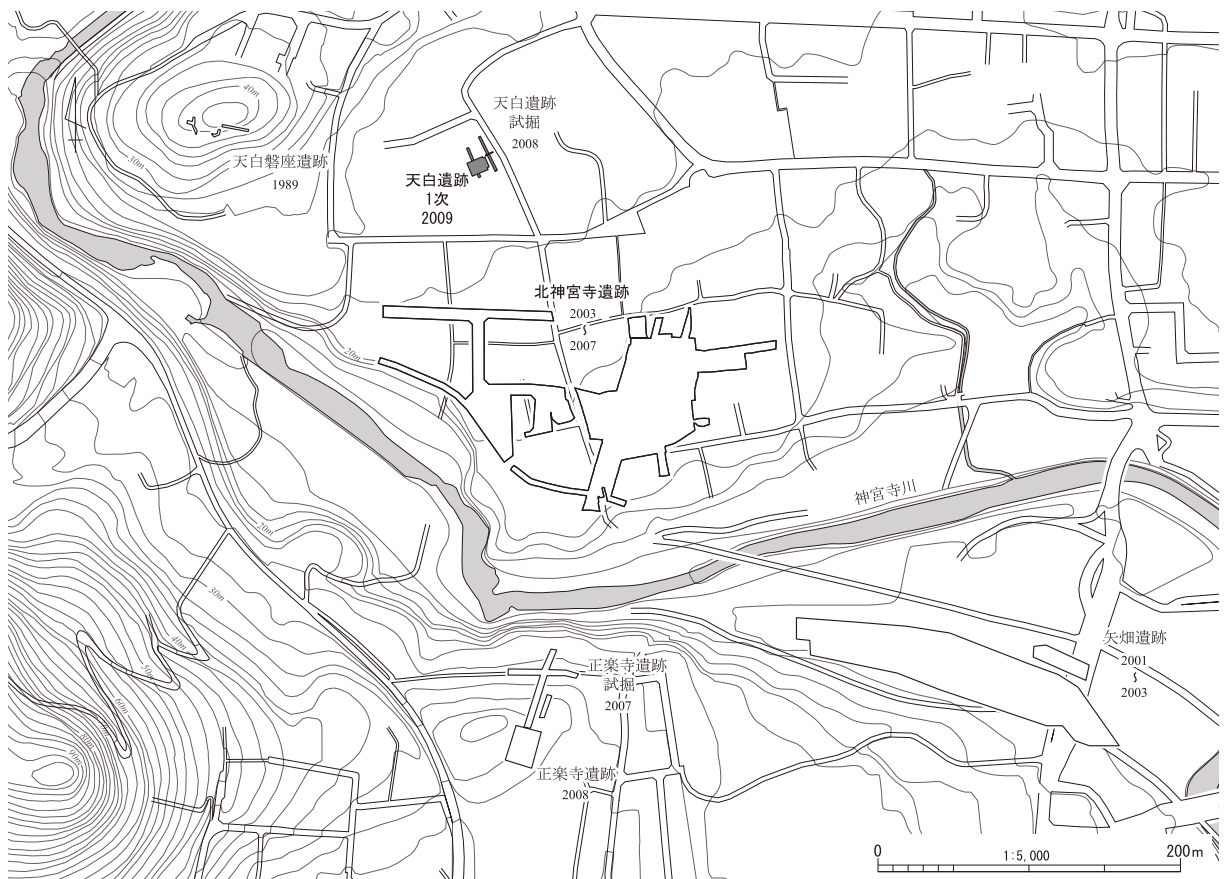
(3) 出土遺物

試掘調査および1次調査で出土した遺物を第42図に示した。1～7は試掘調査における出土遺物である。なお、出土遺物の遺構名称は原則、試掘調査時のものを用いている。1はSD03から出土した縄文土器の深鉢である。中期中葉の土器で、外面と口縁上端には、沈線文による文様が施されている。SD02からは2と3の土師器が、SD04からは4と5の土師器が出土した。SK01からは6のく字口縁内耳鍋が出土した。

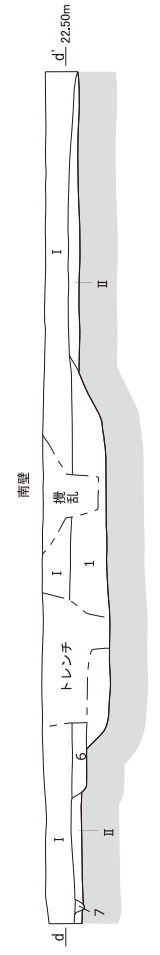
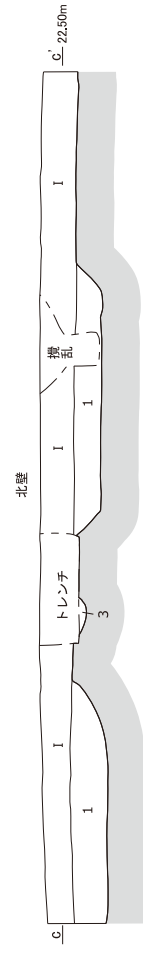
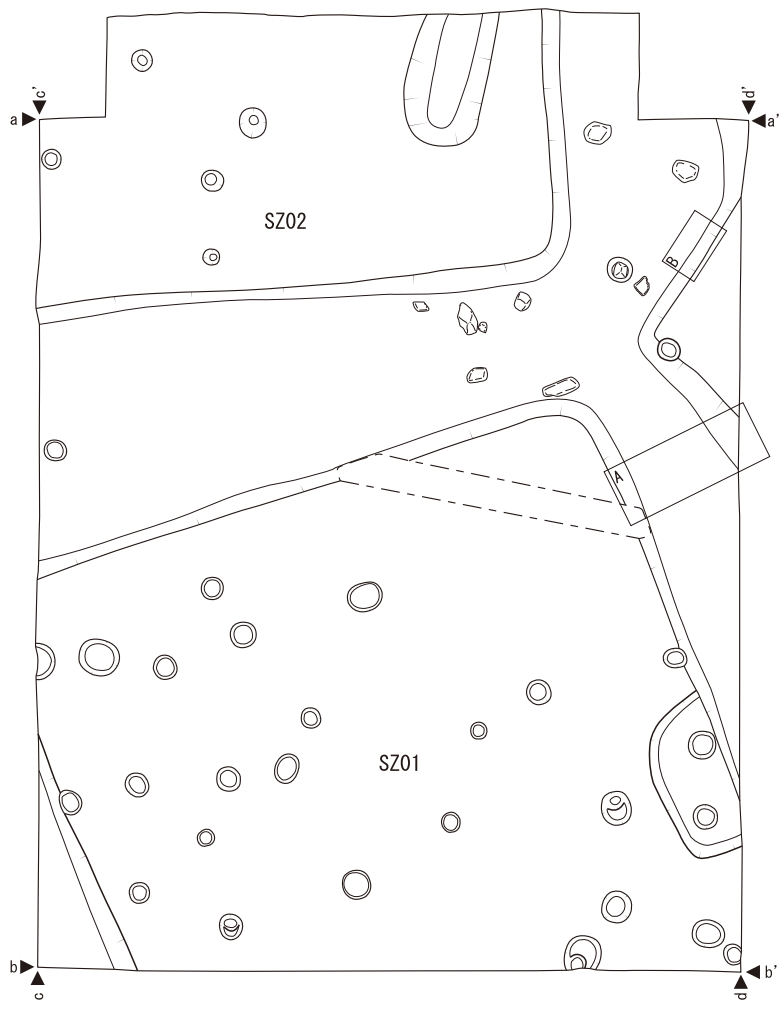
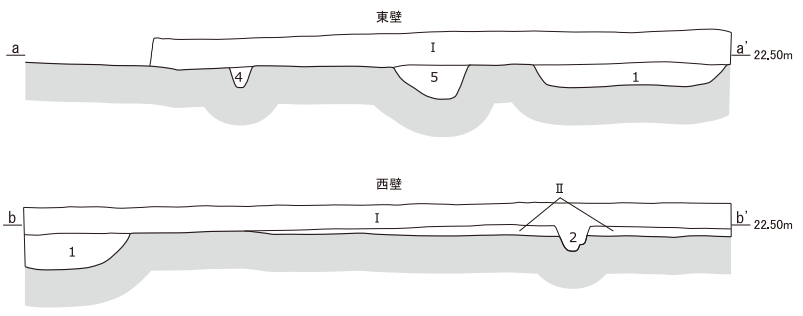
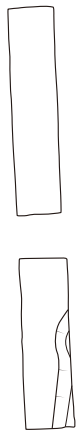
8～18には1次調査における出土遺物を示した。SZ01の周溝内からは8～17の土器が出土した。7は土師器の鉢ないし壺の口縁である。8は土師器の小型鉢である。口縁は内湾した形状で外面にはハケ調整が施されている。9は土師器の瓢壺である。外面は丹念にミガキ調整が施されている。10～13は土師器の壺の底部である。14～17には土師器の甕を示した。SZ02からは18の土師器壺が出土した。胴体下半が屈曲する形状の壺である。これらの土器は古墳時代前期の元屋敷式に位置づけられ、方形周溝墓の構築年代を示していると言える。

(4) まとめ

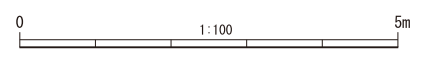
今回の発掘調査から、天白遺跡周辺に古墳時代前期の方形周溝墓群が埋没していることが明らかになった。同時期の方形周溝墓は北神宮寺遺跡の調査でも多数検出されており、立地状況や遺物の時期からみて、一連のものと考えられる。北神宮寺遺跡1次調査区と今回の調査区とは100mほど離れており、周辺に広大な墓域が広がっていることが明らかとなった。(井口智博)



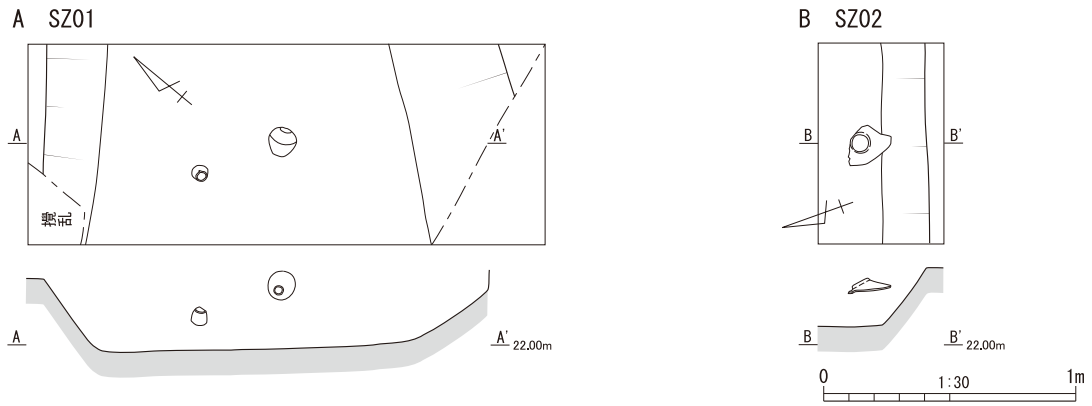
第39図 天白遺跡とその周辺の発掘調査地



- | | |
|-----------------|------------------|
| I 茶褐色砂質土 (耕作土) | 1 黒色粘質土 (SZ 埋土) |
| II 黒褐色粘質土 (包含層) | 2 暗褐色粘質土 (SP 埋土) |
| III 黄褐色粘土 (地山) | 3 黒褐色粘質土 (SP 埋土) |
| | 4 暗褐色粘質土 (SP 埋土) |
| | 5 黒褐色粘質土 (SP 埋土) |
| | 6 暗褐色粘質土 (SP 埋土) |
| | 7 黒色粘質土 (SP 埋土) |



第40図 天白遺跡1次調査区



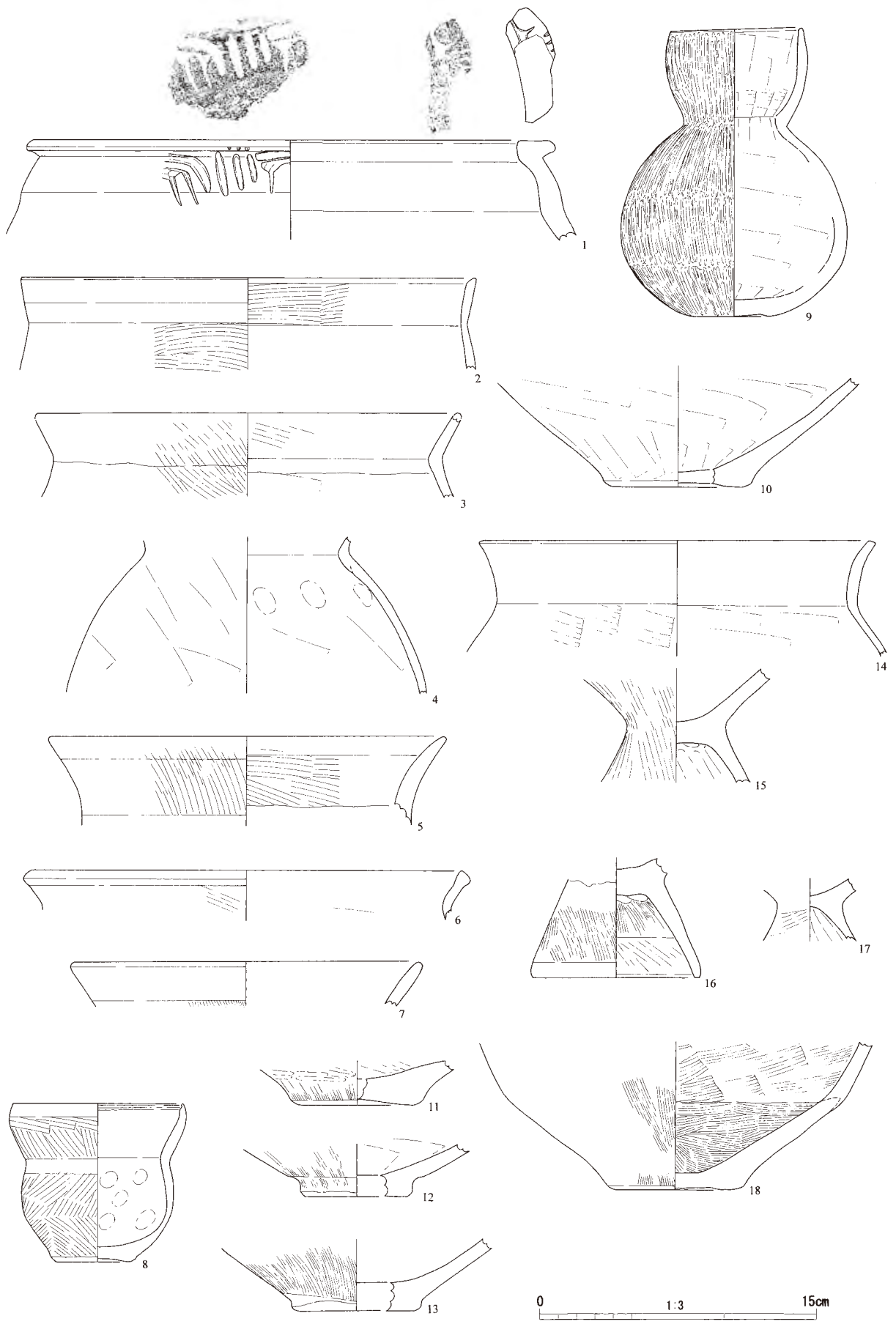
第 41 図 SZ01・SZ02 遺物出土状態



調査区全景



SZ01 検出状況



第 42 図 天白遺跡出土遺物

11. 楠木遺跡 1 次調査

(1) 調査の概要

遺跡の立地 遺跡は浜松市北区三ヶ日町岡本に所在し、釣橋川と宇利山川に挟まれた丘陵の南端に位置している。遺跡の周囲には古くからの神社が存在し、西側には伊勢神宮に神御衣を奉納していた初生衣神社、釣橋川を挟んで南東には浜名惣社神明宮がある。

調査経過 試掘調査地点およびその周辺では、従来から古代の瓦片が採集されていたため、寺院が存在する可能性が指摘されていた。そのため、土地所有者の同意を得て、遺跡の実態を把握する目的で 2010 年 2 月 16 日～23 日にかけて試掘調査を実施した。

基本層位 調査地内は畑地となっていたため、その全域が褐色粘質土の耕作土で覆われていた。その下層に礫を多量に含む暗褐色粘質土層が堆積している。この層は調査地内の西側に広がっており、中世以降の包含層である。さらに、その下層には小礫を多量に含む黒褐色粘質土層が調査地の南側でのみ確認できたが、遺物の出土はなかった。調査地内の基盤層は小礫を多量に含む黄褐色粘土層であり、部分的に、にぶい黄褐色粘土層や赤褐色粘土層となる。

(2) 調査の詳細

概要 試掘調査は調査地内に 4 箇所の特レンチを設定して行った。まず調査地内の南側に 1 トレンチ、北側に 2 トレンチをそれぞれ 2×40m の大きさで設定して遺構検出を行った。その結果、古代寺院に関わる遺構は検出できなかったが、特レンチの西側で大量の瓦が出土したため、調査地内の西側で特レンチを拡張し、1 トレンチと 2 トレンチの間に 3 トレンチを、2 トレンチの北側に 4 トレンチを設定して、遺構の検出に努めた。3 トレンチと 4 トレンチからも古代寺院に関わる遺構は検出できなかったが、大量の瓦が出土し、調査地内の西側に瓦の出土が集中することが判明した。

検出遺構 1 トレンチでは小穴と土坑を検出した。検出した小穴の内、SP01～06 は東西方向に並んでいることから、柱穴または柵の跡と考えられる。また、SP07 からは平瓦(第 52 図 70)、SP08 からは須恵器甕が出土した。2 トレンチでは基壇状の高まりを検出した。この遺構は特レンチ 3 や特レンチ 4 にまで広がっている。基壇状の高まりの上面から遺構は検出できなかったが、東側の一边に簡易な石積みが施されていた。3 トレンチでは小穴を検出した。検出した小穴の内、SP11～14 は東西方向に並んでおり、さらに 1 トレンチで検出した SP01～06 と並びが揃うことから、同時期の遺構と考えられる。これらの遺構の時期は、SP12 から天目茶碗(第 54 図 113)と土師質土器が出土したため、中世末以降の時期が考えられる。その他、SP11 からは土師質土器、SP14 からは土師器が出土した。4 トレンチでは土坑と溝を検出したが、遺構から遺物の出土はなかった。

(3) 出土遺物

今回の試掘調査では、膨大な量の瓦が出土したため未整理の資料が多く、ここでは現段階での途中経過を報告する。

軒丸瓦 瓦当文様に3種類を確認できる。また、瓦当と丸瓦の接合は、いずれも印籠つぎであり、丸瓦の先端は刻み目が付けられる。1は弁数不明の蓮華文軒丸瓦(I類)である。中房と花卉の一部しか残存していないため、形態など詳細は不明である。中房や花卉の表現は後述する単弁16葉蓮華文軒丸瓦(II類)と類似するが、焼成が堅緻であることや中房がひと回り小さく立体的に表現されるなどの違いが見られる。瓦当裏面は横方向のナデにより調整される。2~12は単弁16葉蓮華文軒丸瓦(II類)である。中房は大きく低平で蓮子の表現はない。花卉は16弁で低平な表現である。複弁8葉が崩れたものと考えられ、花卉の一部だけ複弁になる。内区の周囲には圏線が巡るが不明瞭である。周縁は内区とほとんど高低差がなく、雷文縁を飾る。出土したものはいずれも焼成が甘く、摩滅しているものも多いため、周縁の雷文を明瞭に残すものはほとんどない。また、瓦当側面は横方向にナデ調整され、瓦当裏面は不定方向のナデが見られる。丸瓦部は良好な資料がないため不明であるが、瓦当との接合部には刻み目が入れられる。このような瓦当文様は、愛知県豊川市の医王寺廃寺跡や弥勒寺跡で見られる。13~27は単弁12葉蓮華文軒丸瓦(III類)である。中房は小型で蓮子の表現は見られないが、26の中房には1+4の蓮子が表現されている可能性がある。また、花卉との間には沈線が巡り、中房と花卉の境界に范キズの可能性が考えられる盛り上がりが見られ、時計の5時方向に多く、一部、6時や7時方向のものも見られる。花卉は12弁で、肉厚な表現の幅の狭いものである。間弁は幅の狭い扇形や楕円形で、部分的に欠損する。周縁は内区よりも高く、連珠状に表現され内側に傾斜する。また、瓦当側面は横方向にナデ調整され、瓦当裏面はユビオサエと不定方向のナデが施される。丸瓦部の凸面は縄目叩き後に横方向のナデで叩きの痕跡が不完全に消され、凹面は無調整で布目痕が残る。側端部は凸面のみ縦方向のケズリで調整される。

軒平瓦 瓦当文様に4種類を確認できる。28~35は型押簾状文軒平瓦(I類)である。文様は2~4段のものがある。しかし、文様凹面の一単位がいずれもほぼ同規格であり、文様の段数は瓦当部の厚さに関係すると考えられるため、文様段数では分類を行わなかった。また、文様凸面の断面は丸みを帯びており、断面が角張るものは見られない。瓦当部は凹面の先端をケズリにより面取りし、顎は横方向にナデ調整される。平瓦部は、凹面が無調整で布目痕が残り、凸面は、瓦当部付近で横方向のナデが確認できるが、良好な資料がないため不明である。出土した簾状文軒平瓦は全体的に焼成が甘く摩滅しているものが多い。このような瓦当文様は、遠江国の古代寺院では見られず、三河国の古代寺院や三重県小山廃寺で見られる。36~41は型押小花文軒平瓦(II類)である。花文は単弁8葉で表現され、全体形が楕円形で上下に潰れている。中房は隅丸方形で圏線を巡らす。また、瓦当の顎と平瓦部凸面は縄目叩き後にナデ調整され、凹面は無調整で布目痕が残る。類似する瓦当文様は、医王寺廃寺跡で見られる。42は重弧文軒平瓦(III類)である。顎下部の資料で、2重か3重の重弧文になると考えられる。43・44は素文軒平瓦(IV類)である。いずれも顎下部の資料である。43は素文としたが、瓦当面と考えられる側に指頭圧痕や沈線状の痕跡が見られるため、素文以外の瓦当文様も可能性として考えられる。

丸瓦 凸面の調整により3種類に分類でき、いずれも行基丸瓦で玉縁丸瓦は出土していない。45~49は凸面を横方向のナデにより叩きの痕跡を完全に消すものである(I類)。凹面は無調整で布目痕が残り、糸切り痕を残すものも多い。側端部は凹面をケズリにより面取りするものとしもないものがある。焼成は須恵質で、自然釉がかかるものもある。さらに、重ね焼きの痕跡

を残す資料も出土している。また、47は分割界線が見られ、そこで割れているため、道具瓦の可能性もある。50～52は凸面を縄目叩き後に横方向のナデにより不完全に消すものである(Ⅱ類)。凹面は無調整で布目痕が残り、模骨痕を確認できる資料も存在する。側端部は凹面をケズリにより面取りするものとし、ないものがある。焼成は不良なものが多い。また、本遺跡出土の軒丸瓦Ⅲ類の丸瓦部は、凸面を縄目叩き後に不完全にナデ消すため、丸瓦Ⅱ類と対応すると考えられる。53は凸面を縦方向のナデにより叩きの痕跡を完全に消すものである(Ⅲ類)。凹面は無調整で布目痕が残り、広端部や側端部はナデにより調整し、薄く仕上げられる。

平瓦 凸面の調整により3種類に分類できる。54～69は凸面が格子叩きのものである(Ⅰ類)。54～61は凸面を格子叩きの後に横方向に板状の工具でナデ調整し、ほぼ完全に叩きの痕跡を消すものである(Ⅰa類)。凹面は無調整で布目痕が残り、糸切り痕を残すものも多い。凹面側端部は、ケズリにより面取りするものとし、ないものがある。また、製作技法は、粘土板を合わせた痕跡を確認できるものがあり、桶巻作りによるものと考えられる。62～69は凸面の調整が格子叩きのみ施されるものである(Ⅰb類)。凹面は無調整で布目痕が残り、糸切り痕を残すものも多い。凸凹面側端部はケズリにより面取りし、薄く仕上げられる。また、製作技法は粘土板を合わせた痕跡を確認できるものがあり、桶巻作りによるものと考えられる。70～82は凸面が縄目叩きのものである(Ⅱ類)。71～81は凸面を縄目叩きの後に横方向にナデ調整し、不完全に叩きの痕跡を消すものである(Ⅱa類)。凹面は無調整で布目痕を残すものと部分的に縦方向のナデを施すものがあり、模骨痕が見られる資料もある。側端部は、無調整のものや凹面をケズリにより面取りするもの、凸凹両面をケズリにより面取りするものなどがある。また、本遺跡出土の軒平瓦Ⅱ類は、凸面を縄目叩き後に不完全にナデ消すため、この種類の平瓦と対応すると考えられる。70・82は凸面の調整が縄目叩きのみ施されるものである(Ⅱb類)。凹面は無調整で布目痕が残り、模骨痕を確認できる資料もある。側端部は無調整のものと凹面をケズリにより面取りするものがある。83・84は凸面を縦方向のケズリにより叩きの痕跡を完全に消すものである(Ⅲ類)。凹面は無調整で布目痕が残り、凸凹面側端部はケズリにより面取りする。製作技法は、粘土板を合わせた痕跡を確認できるものがあり、桶巻作りによるものと考えられる。

道具瓦 確実なものは現状で1点だけ確認できた。85は平瓦を半分に分割した熨斗瓦である。調整は平瓦Ⅱa類と同じである。

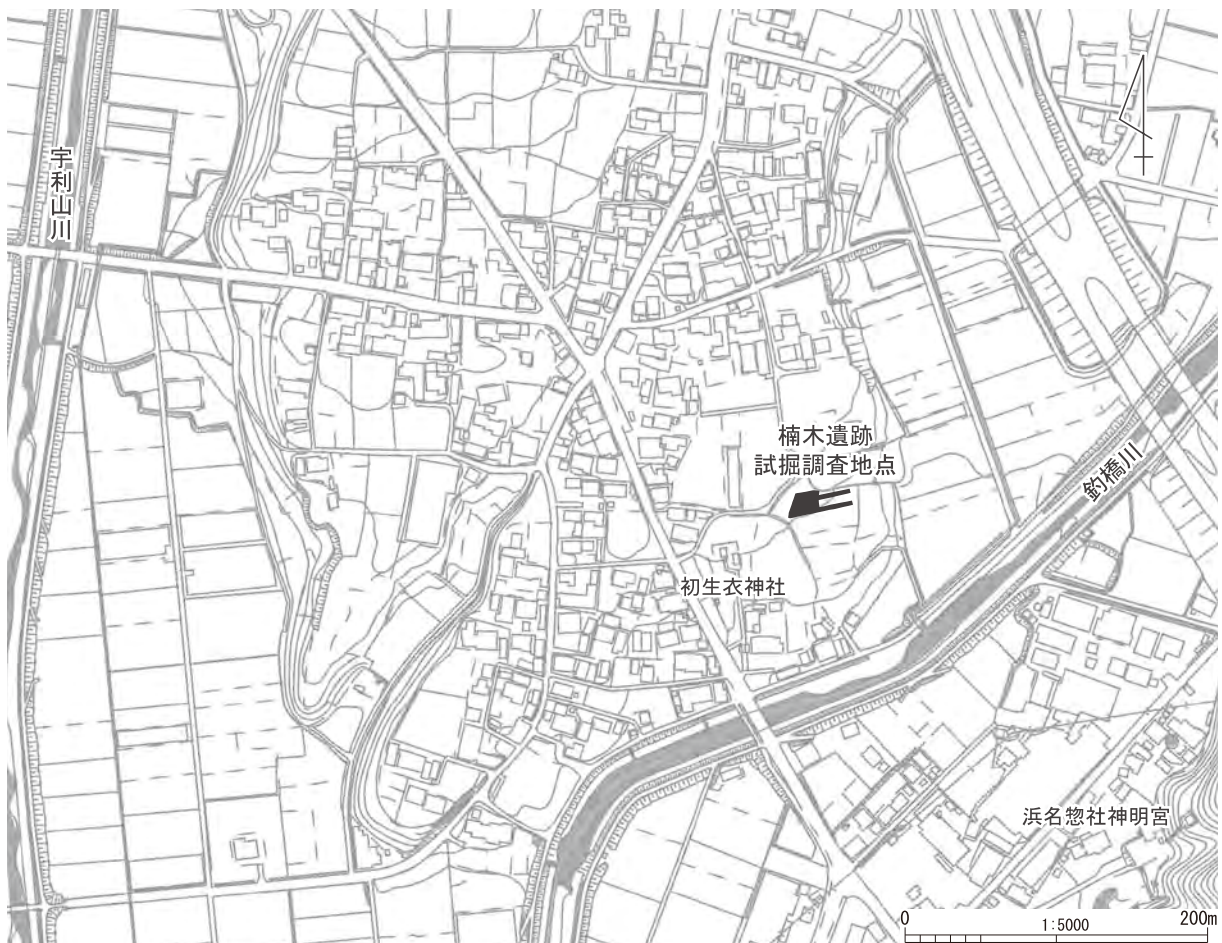
瓦の年代 出土した瓦の年代は、三河国の古代寺院や医王寺廃寺跡の瓦から、上限は8世紀を遡らないと考えられる。また、平瓦に一枚作りが採用されていないことから、下限は国分寺造営以前と考えられる。そのため、楠木遺跡の瓦の年代は、8世紀前半代が想定できる。

瓦以外の遺物 瓦に比べて土器や陶器の出土は少なかったが、縄文時代から戦国時代までの幅広い時期の遺物が出土した。86は縄文土器の鉢である。中期中葉の土器で、半裁竹管状の工具で文様が施されている。87は弥生土器の甕である。88は土師器台付き甕の脚部片である。89は土師器甌の把手である。90～95は須恵器である。90は坏蓋で、口縁部の折り返しは弱い。91は大型の蓋で、盤類の蓋と考えられる。92は高台坏である。底部は内側に向かって傾斜するが高台より下には出ない。93は盤である。口縁部は屈曲し口唇部に沈線を持つ。94・95は壺類の頸部と底部である。出土した須恵器の年代は、92が8世紀前半であり、90・91・93は8世紀後半～9世紀前半と考えられる。また、94・95は上記の須恵器よりも古い可能性がある。96～99

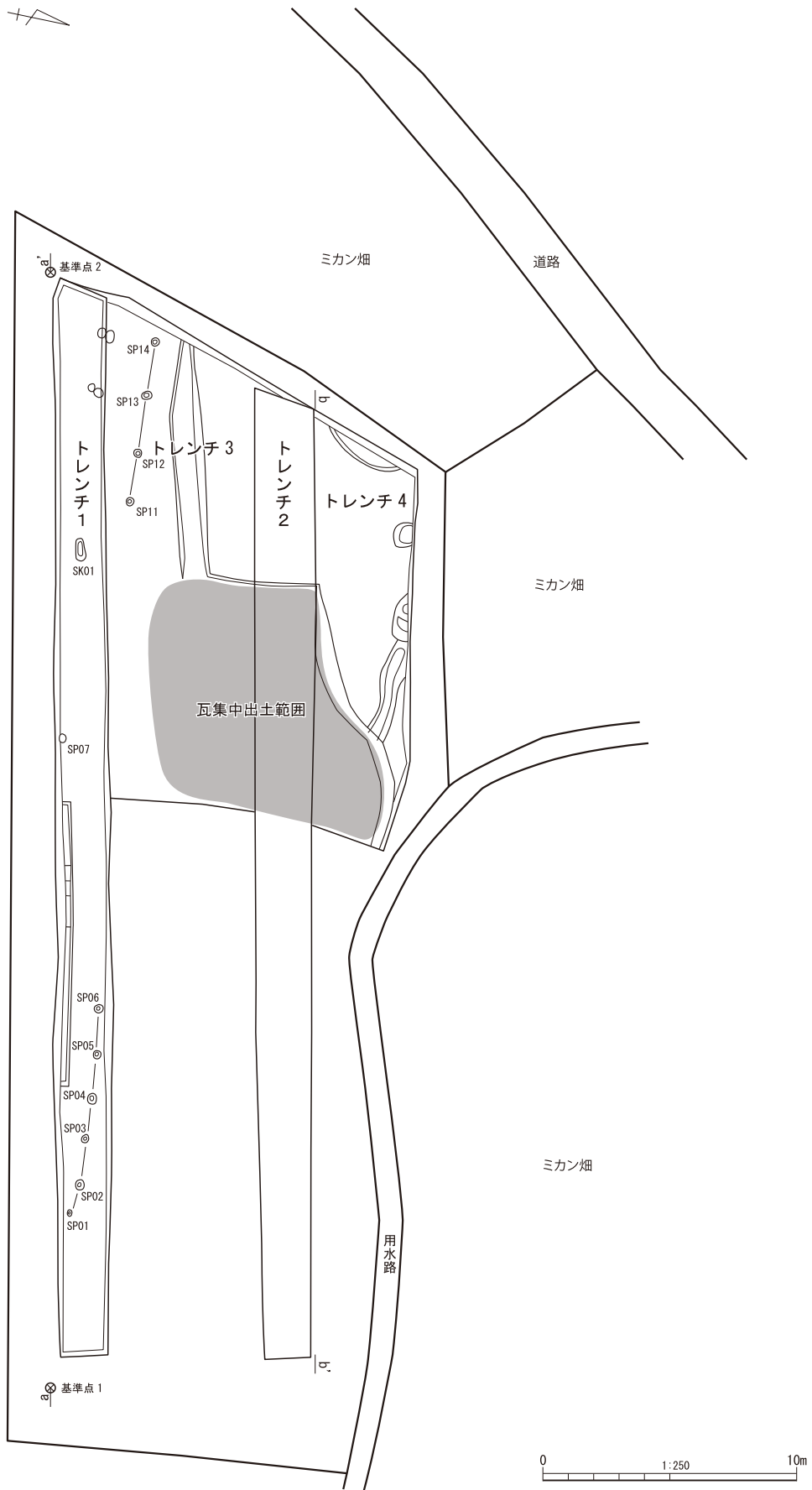
は灰釉陶器である。96は碗の口縁部であり、外反し肥厚した口縁部を持つ。口縁部から体部内外面には灰釉が施される。97～99は碗の底部である。97は高台が台形状で内面には灰釉がハケヌリされる。98は高台が三日月状で内面に灰釉が施される。99は高台が三角形のもので、吉名窯産と見られる。出土した灰釉陶器は、97が9世紀前半、96・98が9世紀後半～10世紀前半、99が10世紀と考えられる。100～108は山茶碗である。100は小皿である。101は碗の口縁部である。102～107は碗の底部である。108は鉢である。109～112は常滑焼である。111は壺、110・112は甕の口縁部である。これら中世陶器の年代は、100～104の山茶碗が12世紀後半、105～107の山茶碗が13世紀であり、常滑焼の110が13世紀後半、111・112が15世紀と考えられる。113は初山焼の天目茶碗である。内面から外面体部の上半まで茶褐色の鉄釉が施され、内外面は二次被熱を受けている。時期は16世紀末のものである。

(4)まとめ

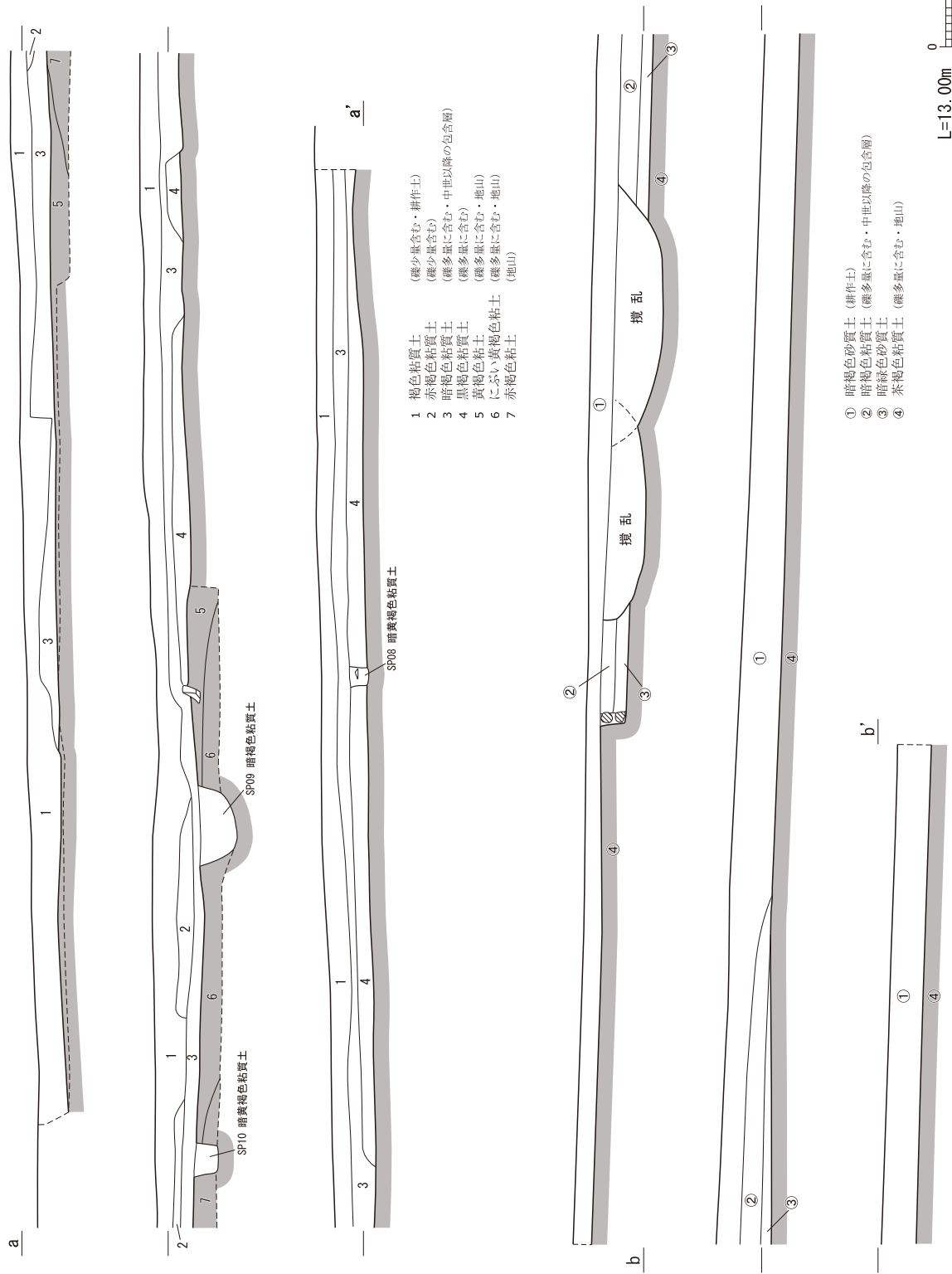
今回の試掘調査では、大量の古代の瓦が出土したが、寺院に関わる遺構が検出できなかったため、古代寺院跡と判断するまでには至らなかった。しかしながら、特筆されるのは出土した瓦に三河国の影響が見られることである。楠木遺跡で出土した軒先瓦の組み合わせは、遠江国内では見られず、三河国の古代寺院に類例が存在することから、瓦の系譜は三河国に求められる。また、遺跡周辺は初生衣神社や浜名惣社神明宮、宇志瓦塔、摩訶耶寺など宗教施設が集まる地域であり、宗教的拠点に遺跡が営まれていたことがうかがえる。(関根章義)



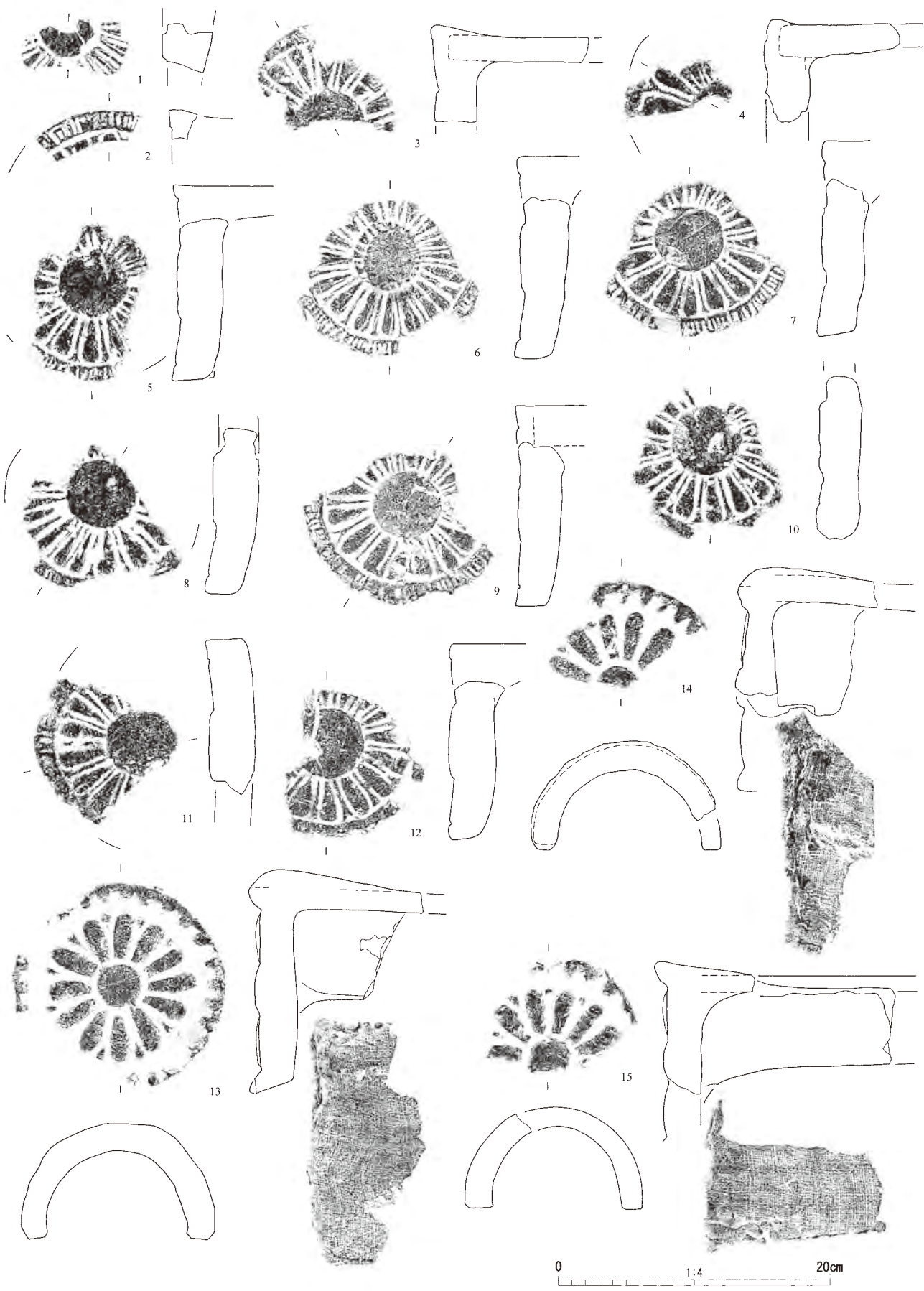
第43図 楠木遺跡の位置



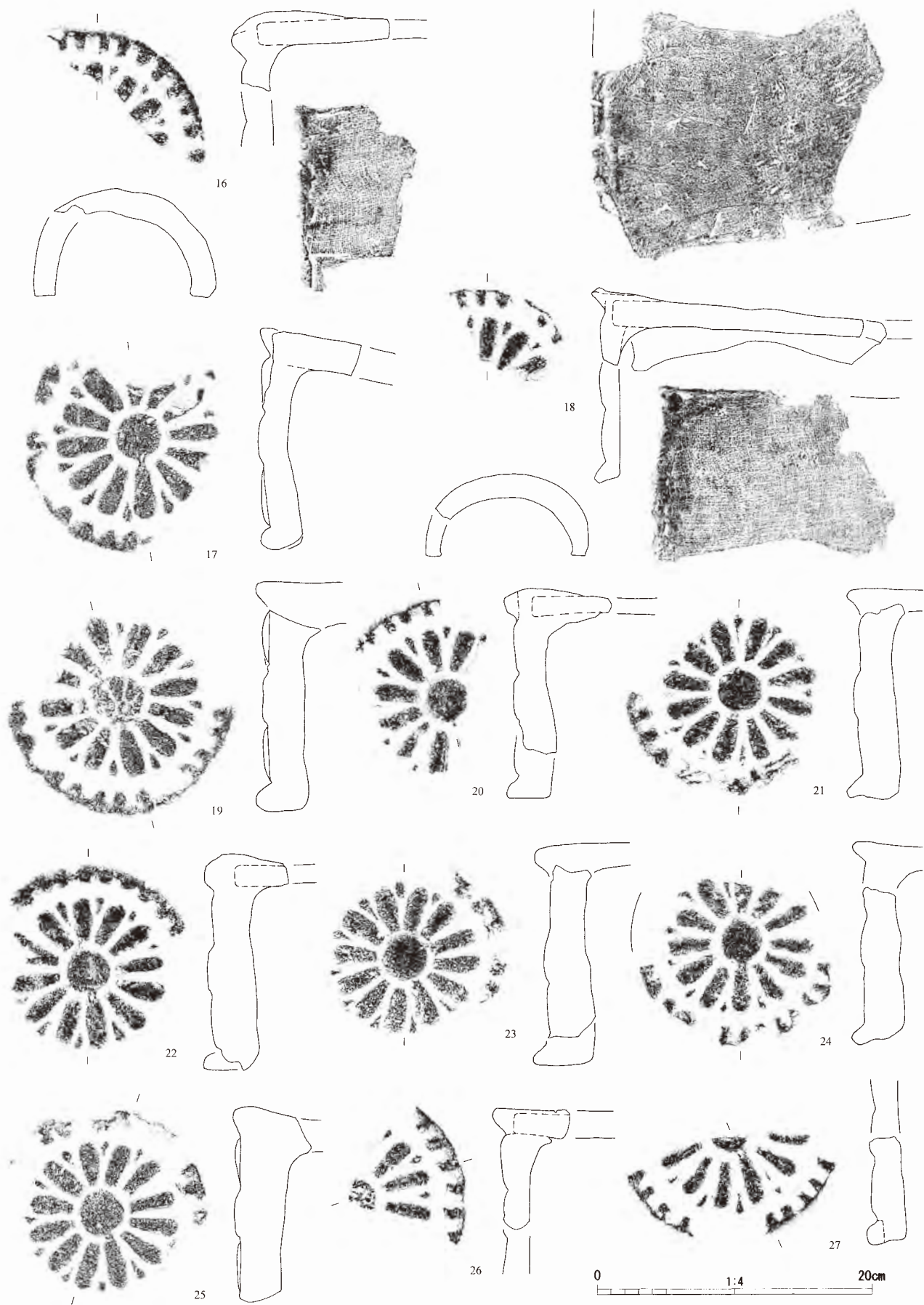
第 44 図 楠木遺跡試掘調査区



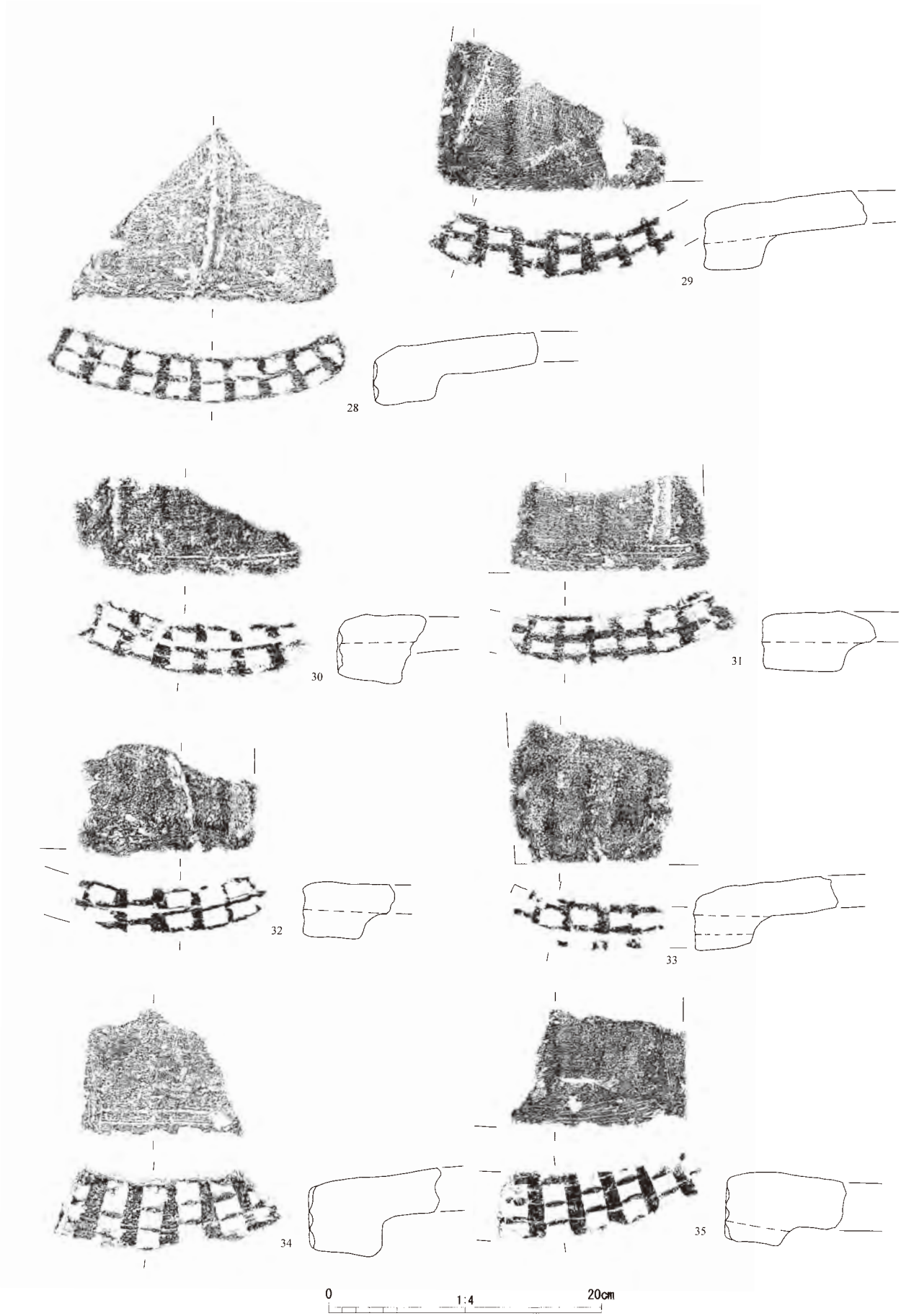
第 45 図 土層断面図



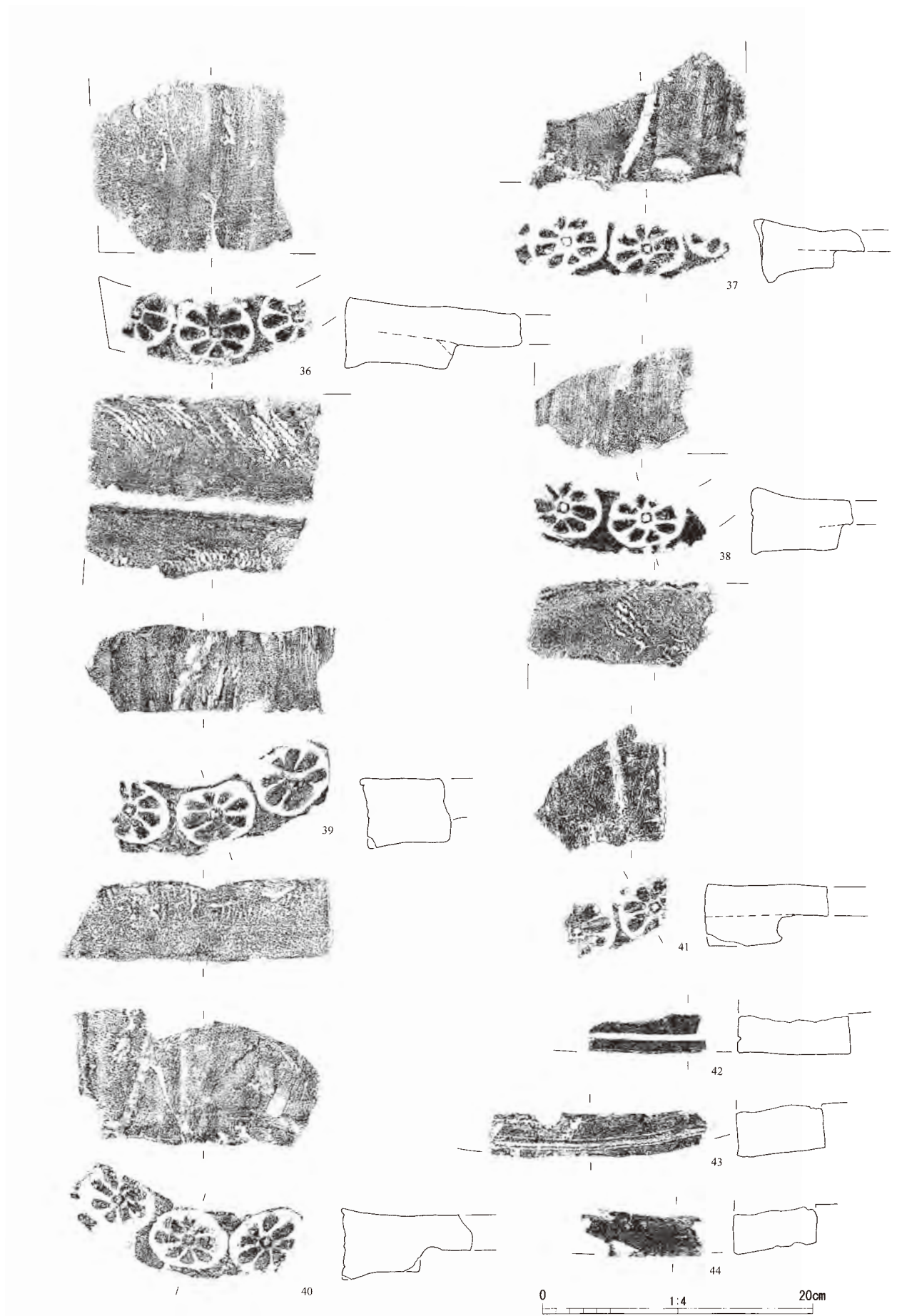
第46図 楠木遺跡出土遺物(1)



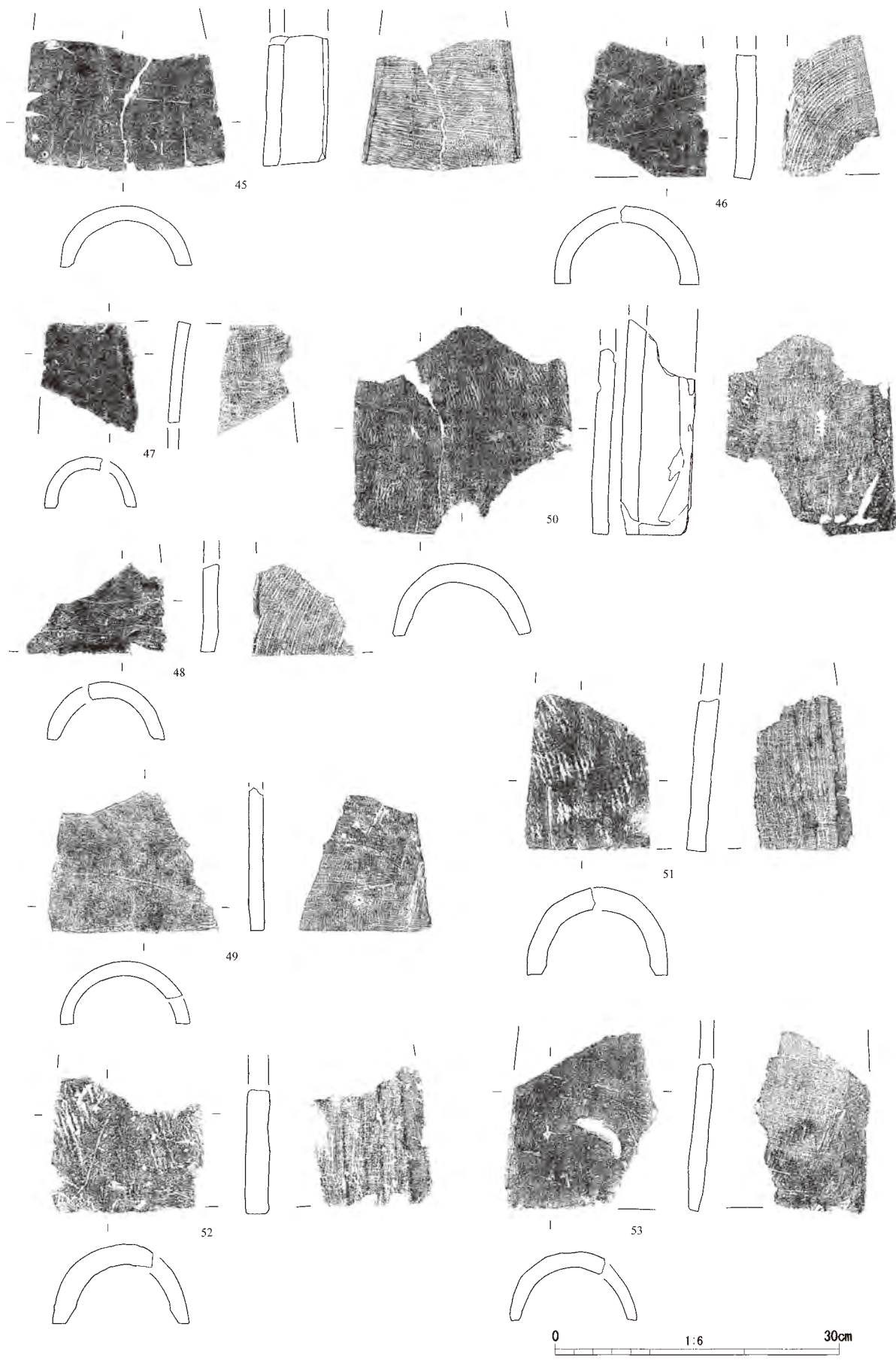
第47図 楠木遺跡出土遺物(2)



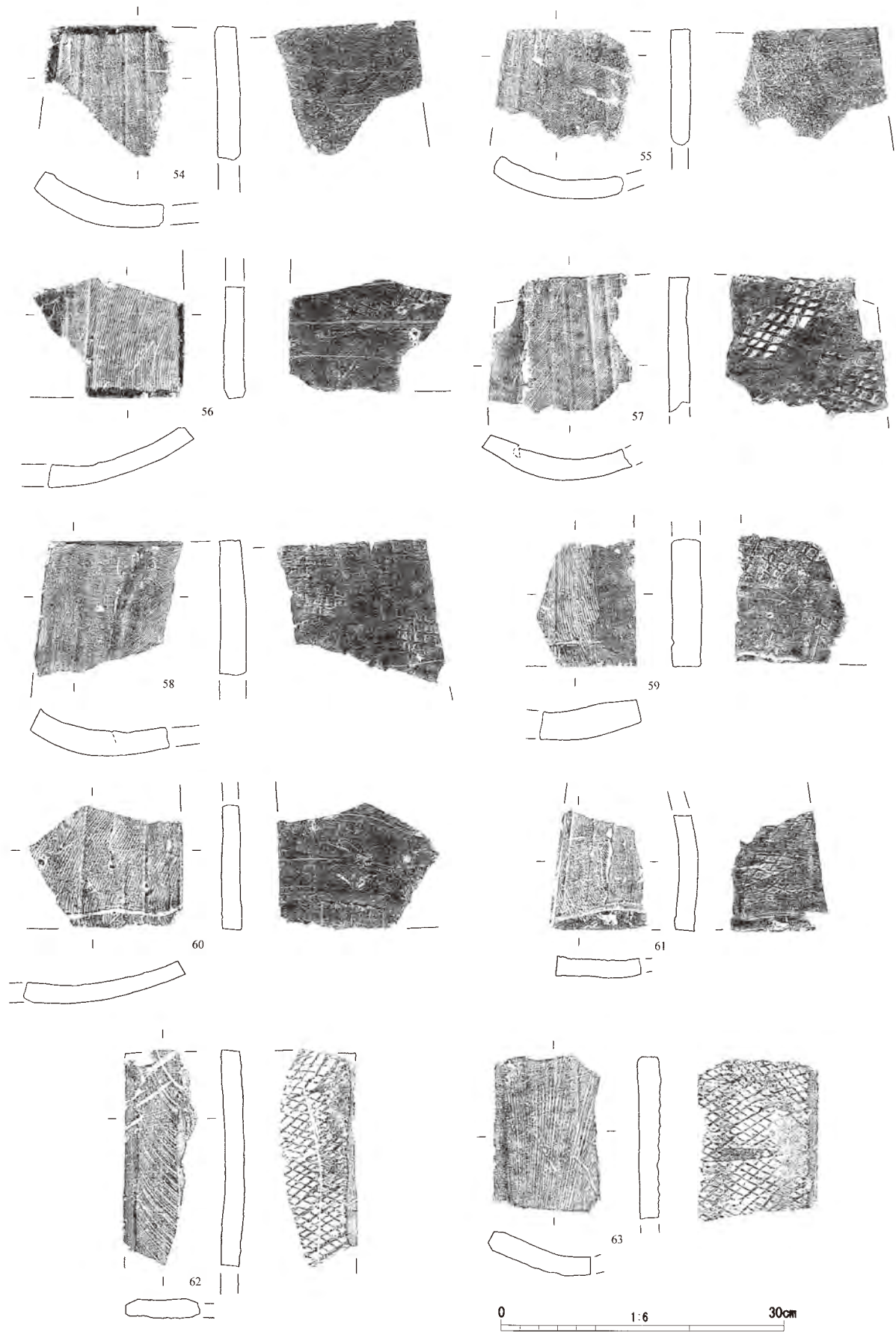
第 48 図 楠木遺跡出土遺物(3)



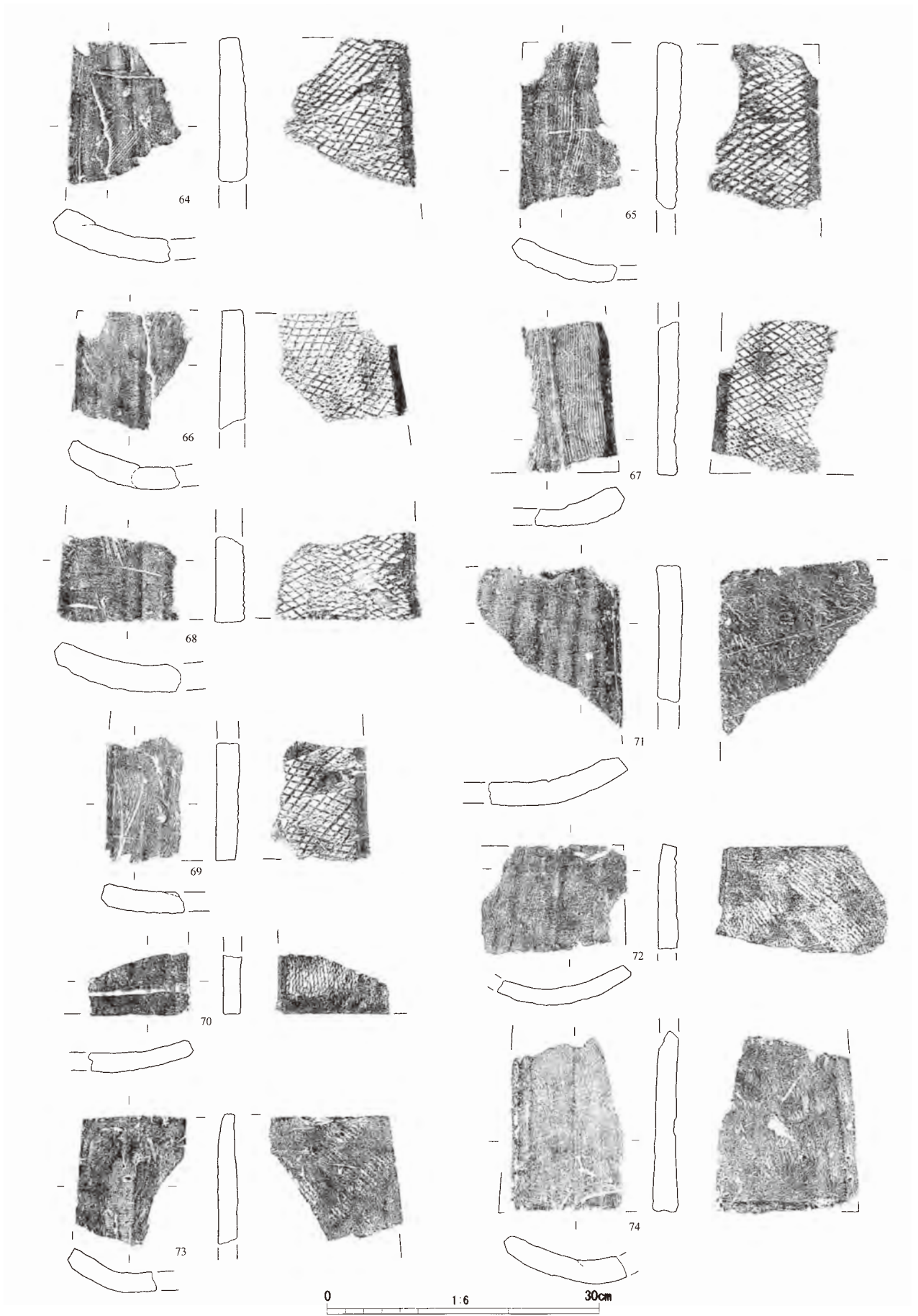
第49図 楠木遺跡出土遺物(4)



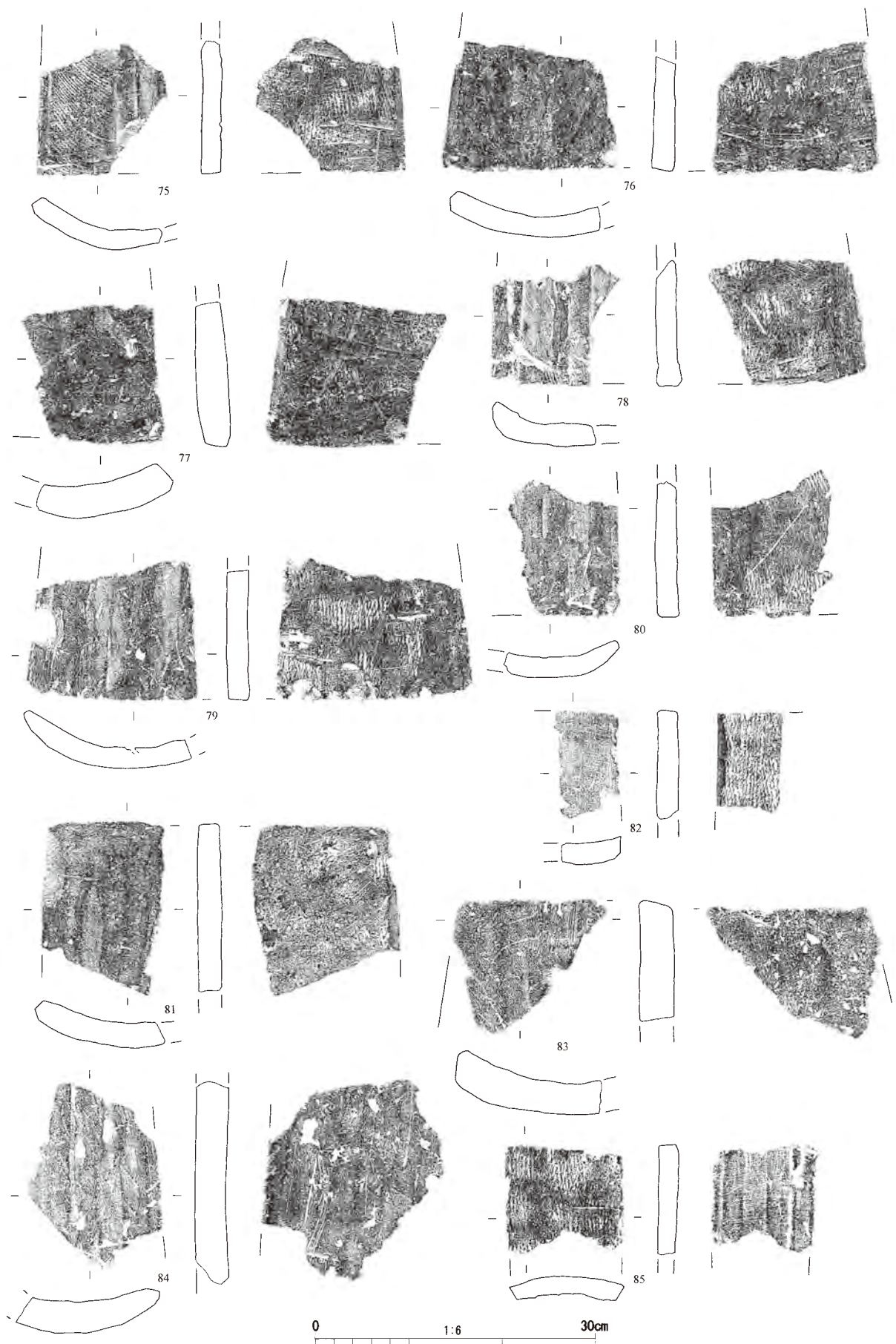
第50図 楠木遺跡出土遺物(5)



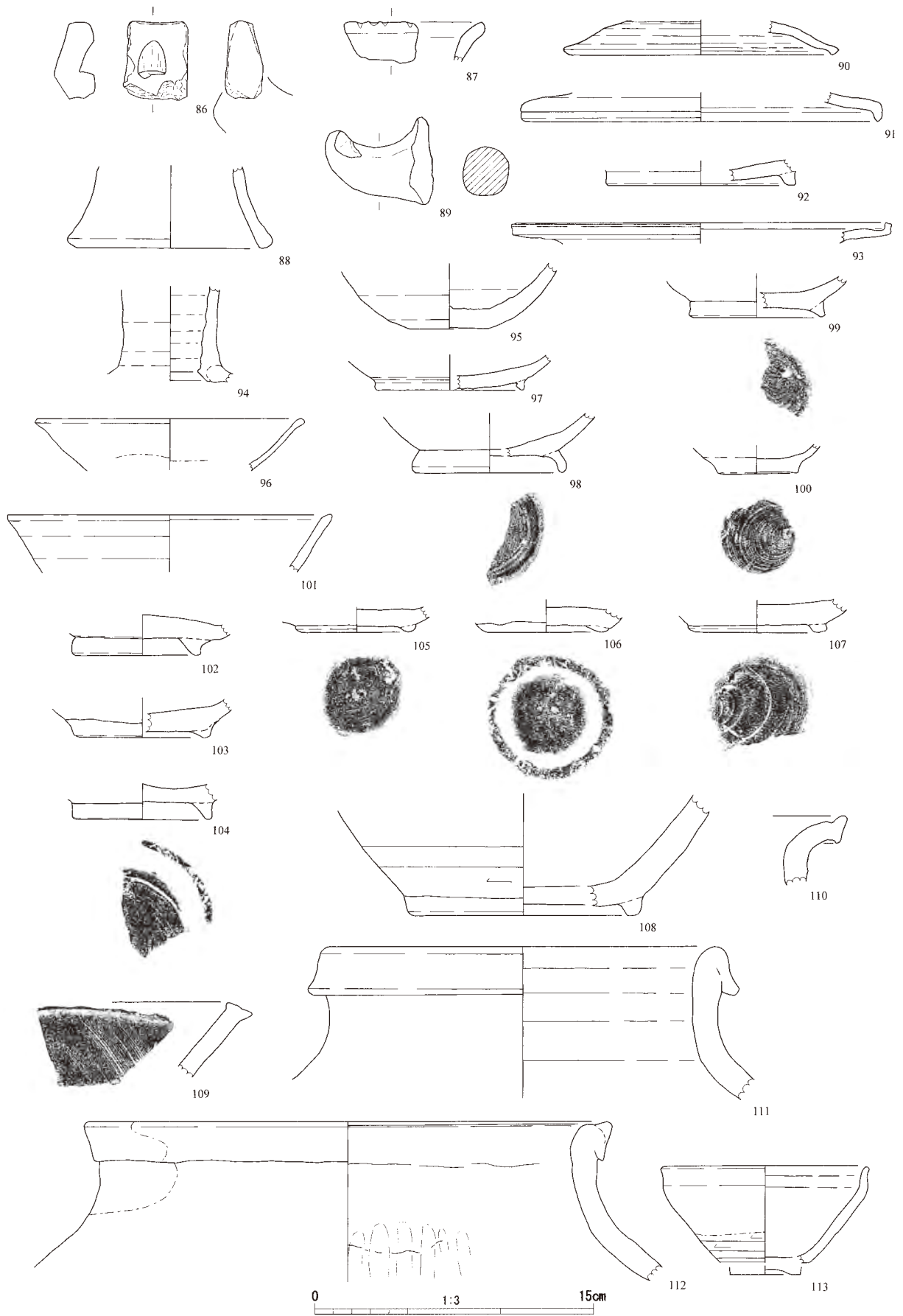
第 51 図 楠木遺跡出土遺物(6)



第52図 楠木遺跡出土遺物(7)



第53図 楠木遺跡出土遺物(8)



第 54 図 楠木遺跡出土遺物 (9)



1 トレンチ完掘状況



2～4 トレンチ完掘状況



3 トレンチ完掘状況



1 トレンチ土層断面



2 トレンチ石積み検出状況



2 トレンチ土層断面



单弁 16 葉蓮華文軒丸瓦



单弁 12 葉蓮華文軒丸瓦



型押簾状文軒平瓦



型押小花文軒平瓦



不明蓮華文軒丸瓦と
重弧文・素文軒平瓦



丸瓦、平瓦、熨斗瓦

第4部

文化財年報
(平成21年度)

文化財の新指定

浜松市では、12市町村合併後の平成17年7月1日から平成21年度末（平成22年3月31日）までの間に、新たに6件（国指定1件、県指定2件、市指定3件）、追加で1件（市指定1件）が文化財に指定された。ここでは新しく指定された文化財について紹介する。

I 新たに指定されたもの

【重要文化財（建造物）】

鈴木家住宅主屋・釜屋 2棟

指定年月日 平成19年6月18日

所在地 北区引佐町的場742

所有者 個人

構造及び形式 主屋 桁行8.2m、梁間7.4m、寄棟造、平入、茅葺

釜屋 桁行6.7m、梁間5.5m、寄棟造、妻入、茅葺

鈴木家住宅は、浜名湖の北側、愛知県との県境に近い中山間地の引佐町的場に所在する。この建物は、主屋の隣に釜屋が軒を接して建つ釜屋建形式の民家である。釜屋建民家は、静岡県西部の天竜川流域から愛知県東部の豊川流域にかけて分布していた分棟型民家の一で、成立は18世紀半ば頃と推定されている。釜屋建民家は、棟が丁字型となる屋根形状から撞木造とも呼ばれ、昭和30年代には数百棟の存在が確認されたが、現在はほとんど残っていない。



主屋は、桁行8.2m、梁間7.4m、寄棟造、平入、茅葺で、南面して建つ。釜屋は、桁行6.7m、梁間5.5m、寄棟造、妻入、茅葺で、主屋の東隣に建つ。主屋と釜屋の間は、幅2.1mの土間とし、正面に棧瓦葺の下屋を張り出す。釜屋は、文政4（1821）年頃の建築になり、主屋も同じ頃に建てられたとみられる。

建築後の天保10（1839）年に、当時既に広まっていた四間取型平面に改造され、その後は、天保改造時の軸組を踏襲しつつ居室の増設などが行われていたが、平成13年度に完了した保存修理において、現在のような当初形式に復原されている。

鈴木家住宅は、静岡県西部から愛知県東部にかけて分布していた釜屋建形式の、数少ない民家建築であり、わが国における分棟型民家の分布と発展を示す遺構として重要である。また、建築年代がほぼ明らかであるとともに、主屋平面が前広間型から四間取型へと推移した経緯も判明しており、当地における民家平面の発展経過を理解するうえで価値が高い。

【静岡県指定有形文化財（彫刻）】

木造金剛力士立像 2 軀

指定年月日 平成20年3月21日

所在地 北区三ヶ日町福長219 大福寺仁王門

所有者 宗教法人大福寺

大福寺の木造金剛力士立像は、阿形像と吽形像の2軀からなる。像高は、阿形像264.5cm、吽形像263.1cm。いずれの像も針葉樹材による寄木造。彫眼。基本的に頭部幹部を通して前後左右の四材矧ぎとし、内刳りののち割り首がなされている。平成5（1993）年に完了した修理により、現状では古色が施されているが、保存状態は良好である。

両像とも、頭と体のバランスがよくとれて誇張がなく、動きは自然で力強い。面貌から胸、腕、足の筋肉は逞しく、写實的で優れた造形表現であり、顔の造形などに慶派仏師の作風がうかがえる。

像容、造像技法から鎌倉時代後期の佳作といえるが、『大福寺諸堂造建記』（大福寺文書）に「一徳治二年 大歳／丁未十一月日、仁王造営之、仏師越中法眼・伊賀法橋、自京都請之、用途二十五貫文、未終綵色」との記述があり、徳治2（1307）年が制作年代である可能性がある。県内でも類例が少なく貴重である。



【静岡県指定名勝】

実相寺庭園

指定年月日 平成20年11月11日

所在地 北区引佐町金指1371-1

所有者 宗教法人実相寺

実相寺庭園は平成6年(1994)枯山水庭園の石組の発見に伴い修復され現在に至る。本堂東側、観音堂北側に位置し、南北約23m、東西約13m、約300㎡の面積を有する築山式枯山水庭園。



現在の庭園は、北側奥に展開する明快な3つの頂きを有し、築山中腹から裾にかけての枯滝石組と考えられる豪快な石組、法面上に点在するサツキツツジなどの低灌木による丸刈込を有する芝生の築山群と、庭園東側に展開する島(出島)状の石組群の大きく2つの部分から構成され、築山・出島の間は枯池を想起させる砂利敷きとなっている。

本庭園の構成上の特徴として、かつての金指領主である金指近藤家との関係がある。家祖である近藤季用夫妻の廟所(高さ9尺、周囲15、6間の土盛りの上に五輪塔などを配したものが2基あった)が、築山群の背後に配される構成となっており、本庭園が近藤季用夫妻の廟所を遥拝し、菩提を弔うための装置としての庭園であった可能性が示唆される。また更に背後には国指定史跡三岳城跡がある「三岳山」が遠望されることから「借景」の構成も取り入れている可能性が高く、庭園、廟所、三岳山という一連の景観が展開する独自の庭園構成である。

このような一連の庭園景観を望む地点としては、屋外(本堂と観音堂を結ぶ渡り廊下)のみとなっており、本堂東側の書院内(屋内)からは島(出島)状の石組み群が望まれる構成となるなど、鑑賞地点が屋内外の二か所に存在することとなる。本庭園の主景を鑑賞する地点が屋外にあることは、庭園構成、作庭経緯からも大きな意味がある。

庭園の作庭年代については、現在の本堂が延宝6年(1678)、観音堂が元禄15年(1702)に再建され、伽藍整備がなされていることを類推すると17世紀末頃と推測される。

静岡県の奥浜名湖の地域性を代表する秀逸した庭園文化遺産としての価値が高い。



【浜松市指定有形文化財（建造物）】

旧浜松銀行協会 1棟

指定年月日 平成21年3月2日

所在地 中区栄町3-1

所有者 浜松市

構造及び形式 RC（鉄筋コンクリート）造2階建、一部地下1階、延床面積566.47㎡（1階 303.47㎡、2階 250.18㎡、地下1階 12.82㎡）、

旧浜松銀行協会は、昭和5（1930）年に浜松銀行集会所として建てられた。設計は中村與資平が主宰する中村工務所、施工は大林組であった。

機能的には、手形交換等の事務所、集会所、及び銀行関係者の交流を目的としたクラブから構成され、これらを1階広間で分離する平面計画となっている。

立面は2階講堂の大きさにともない、左右非対称となっている。外観はスペイン風の意匠によってまとめられており、平滑な白い外壁のなかに、講堂の3連のアーチ窓、テラス上部の窓等が配され、屋上の立上りは東側がロンバルディアバンド、西側が緑釉のスペイン瓦となっている。

内部の材料、仕上は、外部から玄関、広間、階段と続くスクラッチタイル、玄関の床のモザイクタイル、各部ドアや講堂の腰壁の輸入木材等が、工業製品や輸入木材が多く流通し始めた時代を反映している。人造石研ぎ出しも多用され、ホールや階段の床、階段の手摺笠木や飾り穴等に用いられている。左官仕上では玄関と喫煙室に特殊な仕上が見られる。玄関のステンドグラス、球戯室内の仕切等には、アールデコ風の幾何学的なデザインが見られる。さらに、地下に残された暖房用のドイツ製ボイラーも近代化遺産のひとつである。家具類もまた、当初からと思われるものが存在する。内装は松坂屋家具部、家具は日本楽器（現ヤマハ）が担当した。

浜松銀行集会所は昭和21（1946）年から浜松銀行協会となり、74年間使われ続け、平成16（2004）年に浜松市の所有となった。この間に外観及び内装ともに何度かの変更を受けているものの、基本的には当初の状態を保存ないしは踏襲している。この建築は第二次世界大戦や高度成長期の更新をくぐり抜け、その存在は街の形成及び景観上も極めて重要である。旧浜松銀行協会は、内部の機能と相関しつつ市民に良好な景観を示してきた外観、および、建設当時の材料、仕上、建具等に見られる内部において顕著な特色がある建造物として貴重である。



【浜松市指定有形文化財（彫刻）】

木造阿弥陀如来坐像 1 軀

指定年月日 平成21年3月2日

所在地 西区入野町4702-14

所有者 宗教法人龍雲寺

法量像高60.0cm、総高144.0cm。

頭部肉髻を表し、頭髮は螺髮。肉髻珠、白毫相、三道を表す。耳朶環状。衲衣を偏袒右肩に着す。右足を外にして結跏趺坐し、両手胸前で拇指と薬師を捻る說法印を結ぶ。台座は上より蓮華座（蓮弁は五段魚鱗茸状）、上敷茄子（正面宝相華文透彫）、受座、二重框座、蕊、反花、二重框座（上段宝相華文透彫）、二重框座（上段宝相華文透彫）。光背は二重円相光の周囲に透彫の雲気文を表す舟形光背。頭光に八葉蓮華、光脚に蓮弁を表す。



頭・体幹部を通して前後二材矧ぎとする。頭・体部を割り矧ぎとする。両腰脇三角材、背板別材。膝前横一材、裳先は別材。両手肘先、手首先はそれぞれ別材。内面は材を薄く内刳りするが、体幹部と両腰脇三角材の正面側、膝前横一材の体幹部側は、底部まで彫り残す。背板上部左右一箇所、下部一箇所に柄穴、右上及び左下に柄が残存する。螺髮は材より彫出。彫眼。肉髻珠、白毫は木製。

表面の漆箔は後補。肉髻珠、白毫の水晶は後補。漆箔後補。台座、光背ともすべて後補。龍雲寺に伝来する木造阿弥陀如来坐像は、卵型の輪郭、切れ長の眼で優美な微笑をたたえる顔貌や、前後に薄い体部の肉取り、彫りの浅い衣褶表現など、平安時代後期における京の典型的な様式を示す。保存状態も比較的良好であり、浜松市内に現存する数少ない平安仏として貴重である。

本像が、京で制作されたものか、当地で制作されたものかは即断できないが、当時の京と当地の文化交流を示す文化財としても貴重である。



【浜松市指定史跡】

稲荷山古墳

指定年月日 平成22年3月30日

所在地 浜北区内野378-16ほか

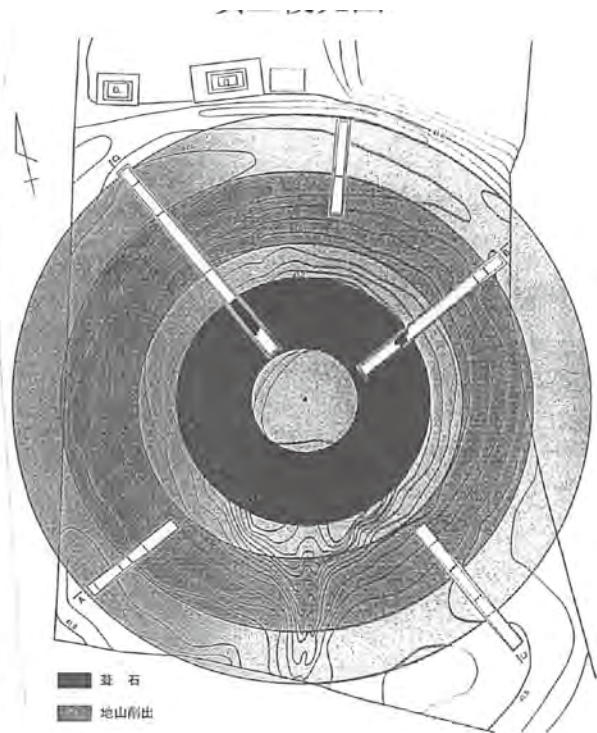
所有者 浜松市

稲荷山古墳は、古墳時代中期前半（5世紀前半）の築造された円墳で、規模は直径37m、高さ4.3mである。

平成20（2008）年に範囲確認・

試掘調査が行われ、墳丘は二段築成でその上段に葺石があり、周濠の幅は4～5mであることが確認された。ただし、埋葬施設は不明である。

三方原台地東縁部の内野古墳群には前期後半に築造された天竜川右岸最古の赤門上古墳（前方後円墳・静岡県指定史跡）がある。稲荷山古墳は、それに続く豪族層の墳墓と推定され、天竜川平野を基盤とする首長墓系列の古墳として、浜松市の古墳時代の歴史を語るには欠くことのできない有力古墳である。天竜川平野を最も良く眺望できる立地環境にあり、円墳ではあるが市内では千人塚古墳49m、入野古墳44mに次ぐ3位の大型円墳（県内では10位の規模）である。また、二段築成で葺石を伴う墳丘や周濠が良く残っており、今後の活用が期待できる古墳である。



Ⅱ 既に指定しているものの範囲を追加して指定するもの

浜松海岸のアカウミガメ及びその産卵地

指定年月日（当初指定） 平成2年3月10日

（追加指定） 平成21年3月2日

所在地（既指定地） 浜松市西区馬郡町字表浜5156番の4地先から浜松市南区白羽町字浜2834番の2地先に至る区間に接する堤防の南縁から波打ちぎわまで及び同堤防の南縁を馬込川右岸まで延長した直線から波打ちぎわまで

（追加指定地①） 浜松市西区舞阪町字舞阪2668番の1地先から浜松市西区馬郡町字表浜5156番の4地先に至る区間に接する堤防の南縁から波打ちぎわまでの海岸区域。

- ・今切口東側は、同堤防の南縁を延長した直線から波打ちぎわまでとする。
- ・今切口導流堤、浜表東駐車場の区域を除く。

（追加指定地②） 浜松市南区江之島町字浜多1723番の1地先から浜松市南区松島町字源太夫堀外2628番の1地先に至る区間に接する海岸防災林、自転車専用道及び堤防施設の南縁から波打ちぎわまでの海岸区域。

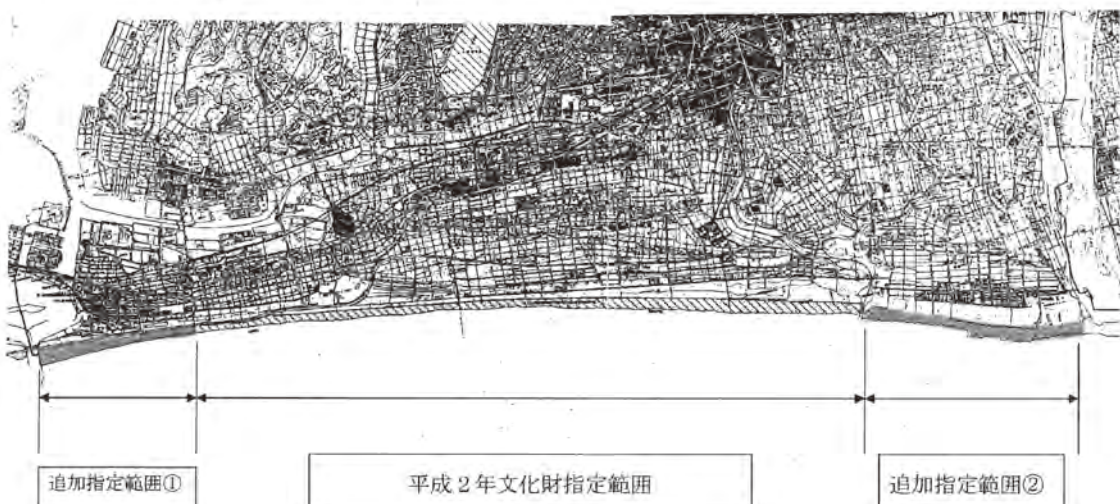
- ・馬込川左岸は、海岸防災林の南縁を延長した直線から波打ちぎわまでとする。
- ・馬込川導流堤、すでに設置されている離岸堤を除く。

所有者 国土交通省

管理者 静岡県（浜松土木事務所）

新たに市域に加わった旧舞阪町の海岸は、従来の指定範囲と同様の地形的特色・産卵実績を示している。また五島海岸（追加指定範囲②）を含む馬込川以東の砂浜においても恒常的に上陸・産卵が行われていることが前回指定以降の調査により明らかであることから、市域全体の海岸を指定し、包括的な文化財保護事業を推進することが適当である。

市指定天然記念物「浜松海岸のアカウミガメ及びその産卵地」



文化財を活用した事業の実施「第24回国民文化祭・しずおか2009」

「ふじのくに 高まる広がる 文化の波」のテーマのもと開催された「第24回国民文化祭・しずおか2009」では、文化財を活用した2事業を開催し、多くの出会いと感動を生み盛会のうちに幕を閉じた。あらためて浜松の歴史や文化が全国に発信され、その後の山城ブームや伝統文化活性化に大きく貢献した。

城跡フェスティバル

若き日の家康が築き天下取りの拠点とした浜松城や徳川・武田争奪の城と知られる二俣城など、浜松市は多くの城跡が残る全国有数の地域である。こうした城跡の歴史や文化を掘り起こして、浜松の豊かな歴史像、魅力を全国に発信するため、歴史同好会、城跡顕彰会、保存会、観光ボランティア、自治会などの関係者ととも、城に関連する4つのイベントを開催した。

野外イベントの「戦国の城を結ぶのろしリレーと城跡見学会」と「二俣一夜城と戦国時代絵巻」は、ともに天候に恵まれ、多くの人々が参加した。のろしリレーは、発煙筒によるものであったが、遠く離れた城跡で上がるのろしを確認できた喜びは大きく、参加者から報告会や反省会を行いたい、これからもまちおこしとして行いたいとの声が数多く寄せられた。城跡研究者のガイドによる城跡見学会も多くの参加者があった。「二俣一夜城」は、地元天竜区から多くの人々がボランティアとして参加するほか、企業からの支援もあった。口コミで評判を呼び、国文祭終了日まで大勢の見学者で賑わった。

展覧会「徳川・武田争奪の城」、「絵図でみる浜松城」及び「三方ヶ原合戦と浜松城」、「宮下英樹センゴク原画展」では、見学者から多くの質問が寄せられるなど、城跡に対する関心の高さがうかがわれた。

講演会「今よみがえる浜松の城」とシンポジウム「三方ヶ原合戦を語る」は、小和田哲男静岡大学名誉教授、三浦正幸広島大学大学院教授など日本を代表する研究者を講師に迎え、会場は定員一杯の大盛況となった。



10月24日（土）～11月8日（日）

- ・ 展覧会「徳川・武田争奪の城」
浜松まちづくりセンター
- ・ 展覧会「絵図でみる浜松城」
クリエート浜松
- ・ 展覧会「三方ヶ原合戦と浜松城」
浜松城天守閣
- ・ 宮下英樹「センゴク」原画展
浜松城天守閣
- ・ 二俣一夜城と戦国時代絵巻
城山公園（二俣城跡）



10月25日（日）

- ・ 戦国の城を結ぶのろしりレーと城跡見学会 市内各所（北区～天竜区）

11月7日（土）

- ・ 講演会「今よみがえる浜松の城」 クリエート浜松
- ・ 浜松城徹底見学会 浜松城

11月8日（日）

- ・ シンポジウム「三方ヶ原合戦を語る」 クリエート浜松



農村歌舞伎まつり

天竜川・浜名湖地域は江戸時代から農村歌舞伎が盛んに行われており、現在も地元の保存会によって伝承されている。郷土に根ざした歌舞伎芸能を全国に発信するとともに、歌舞伎とともに育まれた地域文化の交流空間となる祭典を目指した。

当日は、横尾歌舞伎少年団と少年少女三味線教室によるこども歌舞伎の上演が行われ、素朴さの中に伝統の技と美を織り込んだこども役者の熱演が見られた。

観客からは、役者の一挙手一投足に感嘆の声が上がるとともに大きな拍手が送られるなど、舞台と客席とが一体となって肩肘張らずに「伝統文化」を体感した。



11月1日（日）

- ・歌舞伎舞踊上演「寿式三番叟 宝の入船」
- ・歌舞伎ワークショップ「歌舞伎の基礎を学ぶ（所作と付け、三味線、義太夫）」
- ・歌舞伎上演「仮名手本忠臣蔵 七段目 祇園一力茶屋の場」



(戸田剛)

平成 21 年度 浜松市試掘調査概要

2011 年 3 月 10 日

編集 浜 松 市 文 化 財 課

発行 浜 松 市 教 育 委 員 会

印刷 株式会社 シバプリント